

奇譚クラス

新時代の風俗雑誌

切支丹迫害史



195210月号



奇譚

クラス

クラス

クラス

クラス

クラス

クラス

クラス

クラス

クラス

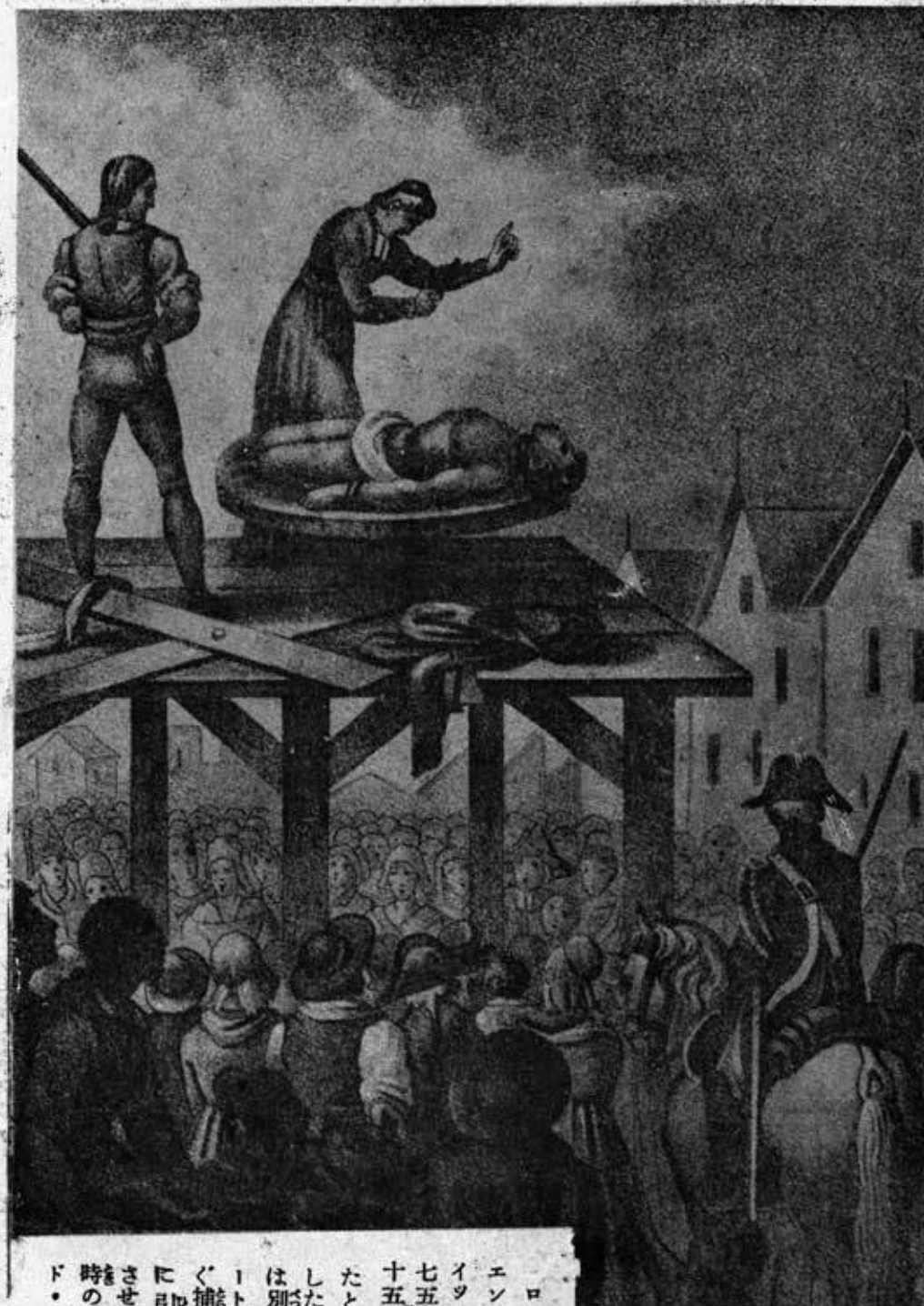
クラス



定價九拾円

地方売価九拾参円





ロバート・フランソワ・ダーミ
 エンは、前職人で熱心なるジェス
 イット教徒の一人であつたが、一
 七五七年時の王ルード・ウイッヒ
 十五世の暴政を怒つて王が外出し
 たところを現つて王をナイフで刺
 した。しかし傷が浅かつたので王
 は別に生命には事なかつた。ロバ
 ート・フランソワ・ダーミは直
 ぐ捕えられた。そしてパリの廣場
 に引き出され、車輪の上で刑死
 させられた。口絵の寫眞は、その
 時のことを書いた畫家アルケッ
 ド・クーピンのペン畫である。



縛られた女の写真

切支丹迫害史画集

有馬には八名火刑、慶長十八年十月レオ林田助右衛門の妻マルタ次男ヤコボを抱いて死す。



温泉嶽の硫黄責、寛永六年夏、男三十七人、女二十七人、計六十四人を、捕えこれを温泉嶽に送りて硫黄責にす。
鋸引の極刑
寛永七年春、信徒七名、始めは鉄鋸、後に竹鋸にて挽き切る。犠牲者に老人あり、若き女性あり。特にパウロ吉兵衛の豪胆は見る者をして驚嘆せしむ。



元和九年、仙台に於てトルフ嘉兵衛、妻マリア、裸にせられて晒しめられ、遂に火刑に処せられる。



奇譚クラブ

十月号 目次

切支丹迫害史

氷實めの断罪
遊女花菱の受難

江戸の刺青模様

マリヤ・マグダレナ

桂牧次郎

刺青師一代

断頭台(ギロチン)奇談

性欲の昇革

或る医師の告白

大衆文學に現れた「女の責場」

愛と苦痛の交錯

戀の烙印

女性談叢 (女性の側より見たる
二俣志津子様へ(裸体狂樂について))

少女の像

呻うなされる夢

男色の海

蛇責

あらたま村の奥にて
アフニストの記

へぼきうり

夫婦愛と緊縛の考察

世界艶笑文學紹介

アルチバーセフ作「サーニン」

宿命に哭く
夢性の美少年を讀みて

變態心理と潜在意識

悪女

江戸時代の墮胎醫

縛られた妻

☆口絵☆

責め場面挿繪集
切支丹迫害史圖集

「喜劇集」
縛られた女
「足の表情、手の表情」

猿轡五態

或る處女の遺書

小峰登美子

漆島迫平 (二五)
赤城芳年 (三三)
花山劍作 (三三)
潮マリ (三三)

的場通 (二五)
茂木芳久 (二五)
赤坂剛 (二五)
龜岡恭二 (二五)
高月大三 (二五)
鳥上源一 (二五)
松井繭子 (二五)

深瀬かず子 (二五)
栗村由美 (二五)
波多野新 (二五)
井口正憲 (二五)

谷純一 (二五)
二俣志津子 (二五)
鬼山絢策 (二五)
辻村隆 (二五)
戸森曉 (二五)
浅田正人 (二五)
仁比山等 (二五)

岡田咲子 (二五)
福森耕司 (二五)
早川新二郎 (二五)
喜多玲子・構成 (二五)
五井野弘・画 (二五)
辻村隆・構成 (二五)
喜多玲子・画 (二五)



仙台藩の迫害、
寛永元年冬、將軍家光の信徒迫害の方針に呼応、伊達正宗も領内の切支丹信徒を弾圧す。
武士、捕手等にて山間に潜む十二名を引立て老体の為、積雪の山路に歩行困難なる二人を斬りさいなむ。
肉片飛散、鮮血雪に染みて悲慘、犠牲者アレキミス幸右衛門、ドミニフ道斎、残余の十名は水責にて刑死す

慶長十九年十一月、越の津にて、奉行長谷川佐兵衛等信者を迫害、七十人刑す。五人つゝ籠^{かじ}の内に引き入れ裸体にて蹂躪り十字を額に焼き付け鼻耳を刺ぎ鮮血淋漓たる儘にて斬首すること十八人に及ぶ。



大村にて
元和七年十月、ベトロ荒杉の妻アガタ（十七年）懷姫の儘、母、妹、の三名斬首せられる。
特に礼服用を許さる。

五井野弘・画

責め場面挿画集

喜多玲子構成



「あんたは私の囚人よ。首かせをかけてやる」
 滝江は洋服かけを二つとると、それを良次の首に前後からあてがつて紐で結んだ。それまでにさんさんぶたれた体はづきづきと痛み出して、あぐらをかいていることさえたるかたが、手は後手に廻られ、首には洋服かけが、丁度囚人の首枷の様にくいこんで、身動きすることも出来ないのだ。
 それなのに滝江はまだそれでも満足しないのか、軍簡をあけたり、押入をあけたりして紐をさがしている。
 「さあ動けるものなら動いてごらんさい。」
 勝ちほこつた様に滝江が言つた時、良次はいつそ思の根をとめてもらいたい程、激しい羞恥と自己嫌悪に身もだえしなればならなかつた。まるでくもの巣に引つかゝつた虫に似て、身動きすればするほど紐は彼のからだをしめ付けた。滝江はいよゝ美しい麗女の本性を現わして、女郎蜘蛛の様に、網にかゝつた良次のたくましい身体から精気を吸い取ろうとするのだ。
 (二十六年・五月号本誌所載松井鎮子作・裸身の麗女より)

旅役者の三千代は一座を救う金の為に、舞台裏の補里のまゝ責められる姿を見せて欲しいと云う土地の富豪の家へ連れ込まれた。だがそれは背三千代をだました男の罠だつたのである。
 三千代は縛られたまゝ庭先に引きすえられた。
 「といて下さい繩をほどいて下さい、舞台の責め場を見たいと仰しやるから来たのです。あなたの……」
 「ことなんか知らないつて云うんだらう、えへへ、だか俺がお前の身体を知つてゐる証拠を見せようか。お前の右の乳の上にはほくらがあるよ、ほら」
 男は手をかけると三千代の胸をはだけた。
 「あつ!」拒もうとしても縛られている身のかなしさ、どうすることも出来ない。夜目にも白く浮き上る乳房は、男の欲望をあふり立てるのだ。
 「それから、ももに赤いあざがある」
 男は情容しやもなく、三千代の体から着衣を剥ぎ最後の、腰のものに手をかけた。
 (二十六年三月号本誌所載松井鎮子作恋責めより)





「これでもか！ これでもか！」峯村は頰から胸、腕と、ところらわずつねりまくった。

「ああッ！ ううッ！」澄枝は彼の二本指に責めさいなまれて、横倒しに倒れたまゝ荒い息をついた。引きちぎられたブラウスの袖から胸へ、紫色のあとが点々と残っていた。

「もうかんにんして。こんなにいじめて、まだ何かしようというの」「ふゝゝ。お前は俺を小説の上ではだかにした。だから俺はお前を今はだかにしてやるのだ。そして、そのみじめな姿を絵にしてやろう」峯村はバレットナイフで澄枝のブラウスを引きさき、スリッパの紐も切つてしまった。スカートを脱がされ、そして順ぐりに澄枝は一条まとい裸体にされてしまったのだ。そしてモデル台の上に縛り付けられた澄枝は、峯村の嗜虐的な指の動きに身をさらさなければならなかった。

(二十六年六月号本誌所載 松井鎮子作・女情師作家より)

怖しい拷問部屋の責め柱に、お美方は着衣を剥がれて縛りつけられていた。真紅の扱帯が、雪の肌いきり／＼喰い込んで、乱れた髪はジツトリと汗ばんだ肩を海藻のようにはい纏っている。

「よく見てお置き、此処が三河屋の蛇倉だよ、泣こうと、わめこうと、お前の勝手だが、あと半刻の女売りまで、色良い返事をしなかつたら、お前の白いからだは蛇の歯型で紫色になつてしまふんだよ」

「あつ！ 蛇！……」燈に照らされたお美方の眼が、部屋の片隅を睨めて呼吸を呑んだ。爛々と光る眼、炎の舌！ それが女の匂いを知つて、徐々にお美方に襲い掛かるのだ。

一匹、二匹、三匹、四匹——冷たい床の上をくねり這い廻りながら、揺らな長虫は美しい犠牲の裸身に慕い寄る。

(二十六年八月号本誌所載 早乙女晃作 明祭次郎吉彌子より)

「い、恰好ね、おねえさま。」貴子の哀れな姿を見下して夕起子はさも嬉しうに笑った。きらくと輝くばかりの、むち／＼した貴子の裸形は縁側にうつぶしたまま、産卵に身をもだえていた。貴子の夫俊吉をそのかし、にせの手紙までつくつて、貴子が姦通をしているように見せかけたのは、みんな夕起子の嫉妬からだだったが、何も知らない俊吉は日毎、夜毎、貴子を責めつけるのだった。其の日も責められた俊吉は、妻のからだをそのままにして、酒でも飲みについたのかもしれない。次第に夕起子の心には暗黒的な慾念が沸き上つてきた。まだうら若い瑞々しい貴子の肉体を思い切り辱ければ、今までの憤りも飛散するに違いない。

必死に哀願し、泣き、怒る貴子を夕起子は押倒して、俊吉のステッキで力任せに打ちつけるのだった。

白い大柄な貴子の裸身は、蛇の様に縁側の板敷にのたりつた。むつちりと豊満



な肉付きを見せている臀部は、打ち下されるステッキの為に見る／＼み／＼腫れが重なつてゆく。

(二十六年五月号 本誌所載 片矢製作・復讐ドラマより)

「誰！ いや／＼ッ！ 放して！ あたしをどうなさるの？ あなたは、あなたは気が狂つたの！」

「そうだ！ 俺は気が狂つたのさ。妻に裏切られて気が狂つてしまつたのだ！」

突然重造の眼に、陰惨な野獣の様な光があらわれて来た。そして今こそ憎悪に狂つた惨忍な悪魔の正体を現して雪子におそいかゝつて来るのだ。泣き叫び、哀願する

雪子の口に重造は狼藉をかませてしまつた、今はもう彼女は一条もまとわぬ素裸のまま、身動きも出さぬ足を開いた姿で椅子に縛りつけられ、羞恥と恐怖に打ち震えていた。

「ウフフ苦しめ！ もたえろ！ 俺の怒りはこんなことで消えやせんのだ。いゝか雪子！ 俺は今更この考えを變更する気はないのだ、誰が何んと言おうと実行する……俺の考えた筋書、その興味深い後編は静か君が来てから一緒に聞かせてやろう。」

何か叫ぼうとする雪子の口からは、狼藉に消された呻き声が洩れるばかりであつた。女盛りの豊かな裸心からは、ジリジリと脂汗が湧き出て、夫も乳房も、ビクビクと恐怖の為に震えおの／＼しているのだ。重造はそんな凄絶な雪子の姿を、ニヤリニヤリながめながら快い加減の興奮に浸つていた。

(二十六年十月号本誌所載津田文吉作・妖魔の最後より)



男は綾子の片手をとって後手にねじり上げた。
「あつー」と痛さに声をあげる。
「静かにしろ！」男は綾子を刃物で脅しながら、かゝえ
こむように綾子の両手を後に廻して、自分の片手の中に強い力
で握りこみ、片手で綾子の腰紐をほどいた。
「ああ、もうだめだ！」
綾子はへたへと座つてしまふのを、男は押さえつけるように
服ひもで後手に縛りあげた。放心したようにされるまゝになつて
いる綾子の指がとかれ、伊達巻を口のなかに押しこまれて
「ううッ！」とうめく口まわりをもう一と廻りそれでしめあ
げ狼ぐつわがかたくなはめられてしまつた。
伊達巻の下にはまた細い紐がしめてあるし、それをとけば、赤い
長襦袢にもう一本紐がまかれてゐる。女の和服は唐摺される道具
を揃えてゐるのだ。
二十六年四月号本誌所載・松井彌子作 女体燃ゆれどッより

葦水の裸身は庭の松の木に吊り下げられていた。
「お前進、よく見よきな、昨日までは全盛の葦水大夫が知らねえ
が腐から逃げ出そうとした目にや、こんな目に逢うんだ。他の女
の見せしめもある、今晚は少し音を上げさせろぜ」五郎藏は割竹
を握りしめると吊下つた葦水の臂のあたりを力任せに打ちすえた。
ビシビシッ、割竹は不気味な音を立て、葦水の肉体に火花
を散らした。身体はゆら／＼と揺れ、管は絶え間なく震つた。
「ううッ！」間断のない責め苦に、必死に堪える葦水の唇から呻
き声が洩れ始めた。いつの間にか腰巻はずり落ちて、割竹は白い
皮膚に直接当たるのだ、洩らすまいとして噛みしめる齒の間から悲
鳴が筒の様に洩れ、一打ちされる度に引き出しの扉は宙に舞つた。
「えい、強情な阿蘭奴ッ」憎々しげに云つた五郎藏の眼は言葉と
は逆にギラ／＼淫らな光りを帯びて葦水の裸身をながめていた。
二十六年三月本誌所載、片矢薫作、遊女葦水の最後より

なんと美味しそうなソーセージなこと？



新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

十 月 号

第六卷 第十号 通卷第四十八号



切支丹迫害史

漆 島 迫 平

天文年間、我が国に侵入して来た異国の宗門は、吉利支丹と呼ばれ、その教えの有難さに随喜の涙を流して礼拝した人達の多くは当時の貴族階級であつた。

織田信長の保護や、大友宗麟、有馬晴信、

大村純忠、高山右近、細川ガラシャ等は、その中にあつても最も名を残した信者であつた。此の階級制度の強い時代に、年と共に一般的に吉利支丹である天主教は、次第に拡まり武士町人は勿論の事、農漁民の間にも大きな勢力を持つようになつた。

そうした中に政權を握る者の上に次から次へと変遷が起つて、徳川の天下となるに及んで、彼の宗教は邪宗だと罵られ、果ては言語に絶する迫害の力がのび、流血の惨状は至る処に演じられるようになったのであるが、

一方では反動的に、イエス・キリストの為に生命を平気で捧げる人間さえ決して少くはなかつたのである。だが徳川幕府の方でも徒らに死罪や遠島に逢わせることを目的とはしていなかつた。

一度信仰の道に入つた者でも、吉利支丹の教えを捨てさせるよう、いろ／＼禁教の手段を考へたのであるが、宗教的な帰依心は根強いものがあつたので生やさしい手段では狂信者を改心させることは及びもつかなかつた。殊に肥前国長崎は、外国貿易を行行門港であり、吉利支丹に帰依した人達が多く、一時は十数ヶ所に大教会が建立されて、東洋のローマ本山の覬があつた位だから、その発達は非常な有様であつた。

そんな訳で、初めは信長の仏教圧迫の政治

的な含みもあつて嬉びに迎へられた宗教も、後には憎まれたばかりでなく、国家を危ふくするといふ考えで、極度に嫌悪され、文字も吉利支丹と書いたのを、切支丹と改められた程であつた。

刑罰の中で最も残虐で執拗なものは宗教上のそれである。宗教上の被拷問者は何れも信仰の塊りで、身に熱鉄の痛苦を受けるとき、彼等はひたすら神の御名を呼びに呼ぶ、極度の痛苦が彼等を恍惚状態に導いて、そこに神の御姿を幻に見るようになる。彼等は責めの中に一種マゾヒズム的快樂を感じる様になる。従つてあらゆる刑罰に対して頑強に対抗する拷問者は勢い千差万様の方法を発明せざるを得なくなる。かくて拷問刑罰の方法は層一層と残虐となつてゆくのである。そこには彼等

の醸し出す戦慄の美がある。

◇天主教伝来◇

天文二十年に耶蘇会ゼス・ユイトのポルトガル人神父パテレフランシスコ・ザベリヨが印度副王の信書を持つて朝廷から布教の公認を得るために来朝したのが、初めてだが、彼は来てみて失望した朝廷でも將軍でもそれどころの騒ぎではなく乱世時代の真最中で主権のありかさえ判つきりと定つていなかった。地方地方によつてその土地の領主の許可を得なくては駄目だといふことがわかつたので、京都を去り山口や九州の各地に赴き諸侯の遊説にとりかゝつた。

それから八年後の永祿二年、比叡山の一僧侶が仏僧徒の腐敗、墮落を救うには切支丹を迎えるに限ると考えて、その頃九州にある耶蘇会の神父トルレスにむけて宣教師の派遣方を求めた。さつそく神父ビレラが日本人の神弟シノロレンツを連れて京都を来たので、彼等を仏僧の如くよそわせ、仏門の一派として伝道試みさせた。市民は此の異国僧のまわりに珍しそくに寄り集り、最初は愚弄したものだがだん／＼尊敬にかわつて傾聴し、面白いことには相當な地位の仏僧が真先に洗礼を願ひ、これらの改宗者の力によつて將軍義輝よしひでに謁見

することが出来、説教を続けることを許された。また管領細川晴元を追払つて御相伴衆として權威をふるつた阿波の三好長慶が神父ビレラに保護を加え、また所司代松永久秀も彼を助け、將軍義輝の夫人の父たる近衛植家つねいえ等も度々彼のもとへ足を運んだ。

こうなると仏僧徒も慌てだし、芽生えのうちに刈りとつてしまへ、邪教たる十三ヶ条の弾劾書を松永所司代にさしむけた。吟味代をおほせつけられた清原頼賢よりたか、結城忠正が神弟ロレンツを取調べた結果「仏僧の讒訴したもので、切支丹はいかにも優越した宗門で我々も信じたきほどである」とあべこべになつた。仏僧徒の迫害が甚しいので堺に引きあげていた神父ビレラはこの判沢をきき、且つその吟味役二人の招きによつて、ひそかに入京し彼等に洗礼を施した。それが永祿七年である。

尙同じ日に三好長慶の祐筆である白井範秀のりひでも改宗し、受洗の翌日には飯盛城に神父ビレラを招き、長子と士分六十人、及び下士五百人をも改宗させ、僅かの間に約五千人の宗徒ができた。最も有力を信者を出したのは、摂津高槻の城主、高山友照で、彼は京都でロレンツの説教をきいて改宗しようと決心するや

神父ビレラを高槻城に招いた。

それは出来るだけ嚴肅に神父の手により受洗したいからで、夫人や長子高山右近も一緒に受けたが、この右近はのちに羽柴秀吉軍の先鋒となつて明智光秀の軍を山崎で打ち破つた一人である。その外高山友照の兄の伊賀の沢友政、同じく和田惟政、河内八尾の池田丹後守、丹波亀山の内藤忠後等が改宗するやその家臣達もぞく／＼と此れになつた。

短時日に何故これだけの成果を得たのであろうか、いろ／＼の理由を挙げられるであろうが、(一)日本人の特徴として何事にも新奇を喜び、外国のものであれば何んでも尊く思う傾向がある。(二)仏教徒の放縱不徳に對して切支丹の聖純な道德、清廉さが真面目な日本人の心を動かした。(三)当時のポルトガル商人が宣教師と切支丹宗門を如何に尊敬すべきものであるかを身を以つて示した事等が主な理由であらう。

◇織田信長の保護◇

翌永祿八年五月十九日、松永久秀は三好の党と組んで突然二条城を襲つて將軍義輝を弑し、その甥で三才の義榮を阿波から迎えて第十四代の將軍となして自分は京都の主権者と

なつたが、義輝の弟で奈良一乗院の門主義昭が寺を脱け出て、松永の兇刃をのがれて高山右近の叔父和田惟政の所領である近江の矢島城にかくれた。和田は明智光秀のすゝめによつて美濃岐阜の織田信長に義昭をたよらせた。当時三十六才の信長は好餌きたれりとして引受け、三好、松永の討伐に立ちあがつたのが永祿十一年である。

一方松永久秀は前面の強敵をひかえて、仏門の迫害者信長を憎む仏僧徒が「伴天連どもを京都から追払えば味方になつて力を貸す」と申し込んだので、俄かに切支丹の排斥者となつた。ところが織田信長が入洛すると、忽ち三好義継、松永久秀を降して義昭を十五代將軍とした。永祿十一年十月十八日だつた。所司代に任じられた和田惟政が堺にかくれていた神父フロイスを信長にひきあわせると、弱い者を助け強い者をくじく痛快さと、仏僧どもをやつつける道具に使えるところから、彼を優遇して京都で伝道することを許した。永祿三年以来、將軍義輝や、三好長慶などの保護があつたにも拘らず、仏僧徒の要請によつて神父ピレラを京都から放逐し給うた正親町天皇はこの信長の行為を不快に思わせられて勅使をつかわされた。勅使が、

「天皇の詔をもつて不可とされた宗門は恐懼して排すべきものであり、且つ日本の神仏よりも上に唯一の天主が存在することなどを説く異国の宗門は日本の伝統にそむくものだ、しかるに、その異国人を輦轂の下に放任されることについては深甚の御憂あらせられる」と達すれば

「予が日本を見守る以上、僅か一人や二人の異国人に国を奪われる様な心配は毛頭ござらぬまた異国人が四面みな敵に囲れてあるを見れば、いきほひ保護してやらざるを得ない、汝等よろしく勸諭をやすんじ奉るよう取りはかれよ」と答えたものだ。

織田信長が天正四年、安土に居城を構えたや、耶蘇会が数年前^{コレジヨ}学林のためにたてた建物を京都から安土へ移した。高山右近は千五百人の工人を寄進したが、この学林には諸侯の子弟二十五人が欧州の言葉と学問とを学んだ。天正十年、此の年、大村、有馬、大友の三切支丹大名は使を羅馬に派遣した。然し、この年の六月、切支丹の一大保護者であつた信長が本能寺に弑せられるという異変が起つた。これは切支丹宗にとつて第一の災難であつた。続いて天下を握つた豊臣秀吉は信長のように切支丹宗門にとつて絶対的な保護者というわけにはいかなかった。

◇豊臣秀吉の彈圧◇

豊臣秀吉は天正十五年三月一日に大阪を出発し島津征伐のため豊前について全軍を指揮したが島津を屈伏せしめるには大して手間がかゝらなかつた。かくて彼は筑前の太宰府に諸侯を集めて賞罰を行い、島津を薩摩、大隅及び日向の佐土原で満足せしめ、大友は豊後一國大村侯は旧領、有馬は島原と三重ということに割り当てられた。九州征伐の不安がなくなつたので当時二十万人の切支丹宗徒も胸をなで下し、将来の発展を期待されたのに意外な艱難に出くわした。第一は大村純忠と大友宗麟が病死したことで、第二は秀吉がまだ博多に滞在している時に起つたもので、六月十九日に日本全土から天王教を全部追放すべき命令が発せられたということだ。

秀吉は天主教追放に引続いて信仰の張本人と目せられる高山右近に遠島を申しつけた。小西行長が氣の毒に思つて自分の領地の湯ノ島にかくまつてやつた。秀吉は更に大村と有馬の両侯に対して教会堂をぶちこわせ、十字架を倒させた。そして大阪へ帰ると、大阪堺、京都にある教会堂、教会等を皆押収し

然し如何に太閤の命であつても、切支丹の信仰だけは禁令を恐れずどんどんひろがつてゆき、敢て身の危険を恐れぬようにさえ見えた。

此の年には所司代前田玄以の子二人、甥四人、その他一族の者悉くが改宗し、又秀吉が天下を取るために利用された信忠の遺子三法師の秀信が岐阜城にあつて受洗し、一家中の数名もこれにならい、岐阜に教会堂、病院、孤兒院等を建てその維持費を出した。尙備前岡山の宇喜多秀家の族である従弟の成正、義兄弟の明石掃部、甲府の浅野長政の長子幸長毛利輝元の重臣阿曾沼豊前守元直、阿波徳島の蜂須賀家政などが改宗し、更に面白いのは長崎奉行となつて大いに迫害した寺沢広高までが憎悪を賞讃に変え、あべこべに改宗したことだ。

慶長三年、不出世の英雄秀吉が朝鮮征伐うまくゆかず世継の秀頼はまだ幼く、われなきあとを心配しながら死亡する二年前、慶長元年長崎でイスパニヤ人のフランシスコ会士六人日本人の耶蘇会士三人、切支丹宗徒十七人合せて二十六人を磔刑に処せられたのが最初であり又秀吉治世の最後でもあつた。

関ヶ原の戦は天下分目の合戦であつたが切支丹宗門にとつても保護者である石田三成、

小西行長を初めとする文治派の勝ちに期するか、家康の勝ちに期するかは、宗門の将来に大きな影響を与える運命の境目でもあつた。

当時、日本全土の宗門は目覚ましい勢で拡がりつゝあつた。数多の宣教師たちは、秘かに元の伝道所に帰つていた、有馬や大友の領内には天主賞が再興され、各所に新しい信者の団体が出来た。秀吉の死後、徳川家康は漸次独裁的となつたが、混乱した状態は寧ろ宗門にとつては好都合で、天主堂は津々浦々に再興され信者は日を追うて増した。

しかし遂に天下分目の合戦は家康の勝利に期し、切支丹大名の石田三成、小西行長、明石掃部、等は捕えられて処刑され、僅かに幸いな事に有馬、大村の二大名が家康に味方した為に教会は助つた。

◇加藤清正の迫害◇

武断派の一方の旗頭、加藤清正は太閤恩顧の筆頭でありながら文治派である石田三成、小西行長等との軋轢のため関ヶ原の戦には家康に組し、肥後の領主たるばかりでなく、行長の旧領をも併せてより、法華宗の信仰者であつた彼は公然と天主教を敵とすることを発表した。

先ず如何なる宣教師も領内に在住することを禁じ、重臣や家臣に転び証文に署名することとを命じた。清正は性来甚だ苛酷で臣下が少

しの過ちを犯したといつて手討にした事も度々であつた。だから切支丹の断圧に際しても極端な痛い目に合せるか、食糧責にするか念の入つた残酷さで信徒の反抗をくじこうと決心した。引續いて信者には領内から出ること禁じ、その家族を人質としてとつた。同時に彼等の財産の全部を没収した。そして一般の人々に対しては、信者に家を貸すこと、食物を売る事、買う事、商取引をする事を重刑を以て厳禁したので、無一物になつた切支丹宗徒は家族と共に山野に逃げて藁小屋の中で寝た。

此の様な食糧責も熱狂的な信者達の潜行的な作動のため清正も遂に苛烈な報復方法を以て刑罰しなければならなくなつた。次の宣告文はそれを如実に物語つてゐる。「南五郎左エ門、武田五兵衛、此者共は、一度転び他宗を信すべき旨誓詞を出し乍ら、其誓を履行せず、依然切支丹たり、依て見せしめの為、主計の命により、各々其一族と共に斬首に処する者也、十一月七日発令」

追害の序曲

慶長十九年一月廿七日、諸侯は自国の領内に居住する切支丹宗徒は総て長島に送り、宗徒の出発後は悉く天主堂を破壊せよという禁令が京都で発せられた。命令は四方へ飛んだが、先ず地元では所司代の板倉勝重は市内の切支丹の名簿を作成し棄教を承諾しない者は皆追放したので冬の真最中、雪や氷の中を宗徒達は彷徨しなければならなかった。

婦人達は素裸にして町中をひき廻すと威嚇された。米俵に九人の婦人が詰め込まれ、二俵宛棒に吊して市中を引き廻し、その日の夕方、疲れきつた兵卒達は市外の畑の中の河岸に臨む刑場に彼女達を曝し物にした。

九州では信徒に同情を持つ大名も少くはなかったが、家康の忌避に触れることを恐れてその命に服して弾圧を始めた。豊前豊後の領主細川忠興も長い間切支丹に好意を示していたが、政治的な利害から遂に江戸から城代家老へ書面で断乎弾圧を実行せよと命じた。城下の小倉には夥しい切支丹がいたが、礼拝堂は焼かれ、女は遊廊へ売ると威喝され多数のキリシタンが転んだ。中には頑強に宗門に執著する者があつたが、その人達には酷い迫害

があつた。最初に吟味を受けたのは二組の夫婦と三人の子供であつた。皆着物を剥がれて丸裸にされ、町の中を引き廻された。次いで彼等は俵に詰められ、街道に沿うた矢来の囲中に積み重ねられた。そうしてそのまゝで一夜放つて置かれた。

有馬直純は前年八人の切支丹を処刑したところ、彼等を恐れさすどころか、却つて熱中させる結果となつた事を知り、愈々厳しく取締るよう命じ天主堂を全部破却し、強情を張る信徒の妻や娘を素裸にて往來を引廻すことによつて棄教させようと図つた。此の方法には如何に熱狂的な彼等も困り果て、婦女子を全部一軒の家に集めて火をつけようという途方もない事を考え出した若い宗徒もあつた。

弾圧に抗しかねて棄教を申出る者と、たとえ幽や爪を抜かれても、又生き乍ら火の中へ投げ込まれようとも堅く信仰を守ろうと誓う者とがあつた。奉行達は彼等の足の指を切るぞそれも全部一度にはない。一本ずつ、どの傷も癒るまで痛み通し、だん／＼痛みを増すのだぞと言つて威し如何なる威嚇も懐柔にも反抗し続ける切支丹に対しては、集団的に処分する方針の下に役所へ出頭せしめた。出頭した者の名前は書留められて、棄却された

天主堂の跡へ連れていかれた。

そこには一千人の兵士達によつて周囲が固められてあつた。中央には一束の縄を用意した二十人の兵卒がいた。切支丹達が入つてくると、鉄の鉤で髪の毛や耳を押えられ、引きずられ、毆打され、素裸にされ、足をくゞられ、挫かれ、泥まみれの草履で顔を履みつけられた。此の間中、彼等は声高らかに聖詩と祈禱を唱えていたので、兵卒達は怒つて頬を殴り、口の周囲を土足にかけて無理にやめさせ、それでも尙続けようとする者には口と唇を切られた。

翌朝、彼等一味七十人は、首に綱をつけられて引き廻され、三十四人は両足を板の間に挟まされて力一杯酷く締めつけられ、上から踏みつけられた。或る者はその為足の骨が砕けてしまい、堪え得ない者は信仰を棄てた女は丸裸にし、子供は踏みつぶすと威かされ彼等の棄教を求めるために総ゆる暴虐が行われた。最後に最も信仰の固い者十七人が惨殺された。首と胴体はバラ／＼に寸断されて別々に放棄されて残骸は山になつた。

ロノ津の受難

十一月二十日、七十人の切支丹は自ら進ん

で元の天主堂のあつた場所にある役所に出頭した。彼等の中の多数の者は自ら縛つて貰いたいと縄を用意していた。兵士が三列で固めていた。警護の者は近くの墓地に陣どつていた。そこには物凄く責道具が置いてあつた。

切支丹は五人宛墓地に呼出された。真中に来て各々が左右から二人の兵卒に捕れると、他の八人か十人の兵卒が飛びかゝつて毆打した。或る者は骨を折られ、或る者は半死半生の目にあつた。血は眼、鼻、耳からどくどくと流れた。更に彼等は裸にされ、泥だらけの草履で顔を踏まれた。そういった飽くなき乱暴行為の末、取調役人の前に引きづり出された。一二の者は胴中に大きな石を結えて頭を下にして足や手を上にして木に逆吊りにされた。

最初に拷問された男は大きな石を背負わされたまゝ二時間も逆さに吊られた。両眼は飛び出し全身は腫れ上つた。他の者は手足の指を束にして拇指から漸次他の指へと順々に切られた。大抵の者は真赤に焼いた十字型の烙印を額に押された。じりじりと黄色の煙を挙げて皮肉が焼け恐ろしい拷問であつた。信仰を棄てないことを判り告白した者は猿轡がはめられた。最後に彼等は段の下に連れてゆか

れて足の筋を抜かれた。数名の者は此の酷烈な拷問に耐ええず絶命した。

○橋本市左エ門(五十二才)石をつけて吊され指を切られ、十字型の極印を受け、脛の筋を抜かれ腋の下に杖を通して引立てゝゆかれた。そして其の夜息を引取つた。

○ヨハネ、奈良屋(五十一才)「私は手足を切られ、ずた／＼に切りさいなまれ、又大釜に入れて、とろ火でぐつ／＼煮られましようとも決して信仰は捨てぬ覚悟です」と云つた彼に対しては一層惨忍な拷問を加えられた。手足の指が不揃いに切られたのを見て、奉行は全部根本から切り直させた。人々が彼の足の筋を抜くと息が絶えた。彼の首は切られ、遺骸はずた／＼に寸断された。

◇京都の火炙◇

京都には天主町^{デウス}という名で知られた一つの街があつた。この街は市内の何処よりも信者が密集したので所司代は特に此処に厳令を施くことにした。住民の主なる者三十六人は召捕られ、長い綱をつけられて、役所に引立てゝゆかれた。

十月十七日夥しい犠牲者が十一台の大八車に積込まれた。男は先頭にその後には女や乳

飲児、最後の車には子供という順であつた。市外の伏見の広場に大きな十字架が立ち並び彼等は二人宛背中合せに縛られた。真中には子供を連れた母親もいた。五人の子の母は三人の子を脇に抱えて一つの柱に縛られ、残りの二人の子供は傍の十字架につけられていた。間もなく、この大きな台上に火の手が上り濛々たる焰が十字架に縛りつけられた一味を包んだ。只彼等の声高らかに唱える祈願の声が聞えるだけであつた「お母ちゃん、あたいもう眼が見えない」と叫べば母は子供の頭や顔を撫でゝ涙を拭つてやり、「イエズス様やマリヤ様にお願ひしなさい」と優しい母親は慰めるのであつた。

愛しさの余り抱き締めたので子供は母親にひつついて離れなかつた。火炙りの焰と煙ばとを巻いて次第に犠牲者の中へ浸潤していった。火熱は少しずつ体の髓や内臓をなめ、堪えられない苦痛が襲つたが、空を仰いで身動きもしないか、或は跪いて十字架に抱擁をしていた。煙にまかれて絶息した者の衣服はぶす／＼と燃え上り、焰に遠ざかつた者は恐しい長い苦痛の上、皆相次いで焼死した。

(未完)



水責めの断罪

赤城芳年

寛永元年といえ一六二四年、今から三百三十年程前の話である。北海道に発見せられた金山に働く鉱夫に対して福音を伝えたジダコ・カルワリヨは仙台に居を定めて大規模を伝道始めた。カルワリヨはポルトガル人で澳門、京都、大阪、安南、肥前の大村、津軽と風の吹くまゝに飄々乎として流れゝて其の行く先定めない伝道者であつた。

独眼龍伊達正宗は將軍の命にならい自らも切支丹を弾圧すべく決心して家老に対して切支丹宗徒を捕縛するよう厳命を發したので、下嵐江村のオロコの谷間に隠れ家を建てゝ住んでいた彼等一味に対しても次の様な恐しい迫害が待っていた。役人達は主だつた所を捜査した後、雪の中につけられた足跡を辿つて遂に彼等の隠れ家は発見した。隠れ家は忽ち役人の襲撃を受けジダコを初め一味六十人は

捕れた。役人達は争つて彼等の着物を剥ぎとつたから、一同は哀れにも裸に近い恰好となつてしまつた。

検挙の翌日、彼等一同は朝早くから水沢という所へ連れてゆかれることになつた。

皆手を縛られ、キリシタン人と書いた紙幟を背負わされ、村々の本道を通らされて恥をかゝされた。頃しも二月の九日、北国の空一面を掩つていた灰色の雲が吹雪に変つて、野と云わず、あやめも判らぬ晦冥、囚えられた邪宗の徒は幾度か倒れながら天地の雪の中を護送されて行くのであつた。

髪や着物へ叩きつけられた雪はそのまゝそこへへばりついて吐く息は片つ端から鬚を小さな氷柱で埋めた。アレキシス幸右エ門とミニコ道齋が殆んど同時にばたりと倒れたまゝ動かなくなつた。顔が真青に凍つていた。

護送の役人は走り寄つて暫く二人を見つめていた。倒れた二人の上には、もう雪が一寸も積つている。

「うむ」

眼で物を言つた役人は二人を抱き起した。がつくりと首を垂れて足を延ばしたまゝ雪の中に坐つてゐる二人の後で同時に血の煙が立つたかと思うと、二人の首が右と左に飛び、真紅の雪からは、かすかに湯気が立つた。

「ぜぜず、きりしと！」

囚人達は後手に縛られたまゝ立ち止つて頸で十字を切つた。殺された二人の死体はずたずたに切り刻まれて雪の中に捨てられた。

一行の目的水沢では、ボーロ金助、レオ権右エ門、マチャス喜藏の三人が足を木に挟まれ骨も砕けよとばかりに締めつけられた。此れは嘗て特高が共産黨員に対して行つた拷問

と同じ手段であつたが、此の方が大がかりで公然であつた。水沢では一人として彼等に家を提供しようという者はなかつた。一行は終日風に吹きさらされ、休なしに氷のような風を喰つた。

彼等一行は其処から仙台の奉行茂庭周防守の所へ送られた。この時には大雪の中を悲惨な死の行進が行われた。それは二月十日のことであつた。寒気と雪のために彼等はひどく苦しんだ。特に権右エ門は拷問のために脚は脱臼し傷いたが、屈せず歩き続けた。

仙台では別口の虐殺が行われていた。二月一日にはマルコ嘉兵衛とその妻マリアの二人は身をつんざく寒風の中を裸体で引廻された上、とろ火で火あぶりになり、ヨハネ浅井という七十余の老人と妻のアンナは、ジダゴ・カルワリヨを匿つた罪、邪宗門帰依の罪軽からずとあつて、氷水の中に三時間も漬けられた後、裸体で市中を引き廻わされ、辻々で冷水を注がれてカチカチに凍つて死んだ。二月五日、アンデレア掃部と其の子ボーロ佐五郎の兩人は火刑、ボーロ新茂は全身一寸刻み五分刻みになつた。奥州城山ではシモン彦右エ門及び妻モニカがその幼けない小児と共に、臼木野ではガスパル市右エ門が皆斬首の刑に

なつた。

ジダゴ一味は広瀬川の川岸に引き出されたそこには深さ四尺、広さ数十坪ばかりの穴が掘つてあつて極寒の川水が半分凍つて流れ込んでいた。そしてその中には杭が打つてあつて一同は着物を剥ぎとられて裸のままその杭に縛りつけられた。胸のあたり迄来ている水には、薄ら水が張つて身体一面雫をもむような痛みを感じた。群つた村民達が穴の底の氷漬けに向つてあらゆる悪口を投げかけた。

三時間の後、アイスキヤンデーのようになつた哀れな囚人達は引き上げられた。そうして更に氷の破片の混つた川岸の砂利の上に倒されて裸のまま引ずり廻された。ジダゴの家主マチャス伊兵衛とジュリアノ治右エ門がそこで死んだ。二人の死骸は首を切られ胴体は二十分の一位に小さく刻まれて河の中を別々になつて流れた。寛永元年旧大晦日の日だつた。

生残つた一味に対しては四日を置いた旧正月四日の二月二十二日、又もや川岸の穴の中で氷責めが行われた。胸や首に張りひろがつた氷はカチカチに厚くなつた。風の強い日で氷の上から出ている身体を剃刀のような寒風が切りとつて行くようだつた。レオ権右エ門

アントニオ佐左エ門、マチャス忠彌が氷の上でぐにやりとなつた。

「ぜぜず、きりしと！さんた、まりあ！」

ジダゴはマチャス忠彌と背中合せて彼の死んだのを知らなかつた。

「マチャス忠彌さん」

死んだとも知らぬジダゴが声をかけたが、何の答もなかつた。

「マチャス忠彌さん」

ジダゴは更に声をかけた。その時眼を閉じて死んでいるマチャスの口が動いてこう云つた。

「バテレン・ジダゴ・カルワリヨ、私はもう死んでおりまする」

「グロリア・デイ！」

マチャスの死後、間もなくアンデレア仁右エ門、アデオ孫兵衛、マチャス藤兵衛、が「ジダゴ様、左様なら、私は最期の予感がします」と云つた。「行けよ我が子、天主様の平安の中に」というダゴの答を聞くや、彼等は安らかに息を引ひつた。

御大のジダゴは氷漬けにあうこと実に十数時間、耐寒レコーを破つて夜半の十二時に玉つて死んだ。



遊女花菱の受難

花 山 劍 作

艶麗花のような踏絵の当日の丸山は群芳が研を競い、ヒヤカシ客が押し寄せて大騒ぎをした。遊女達は寺参りや紋日には美々しく着飾りをするのであつたが、この踏絵の時が一番扮粧に意を用いたのである。

当時の天鷲絨や緋縮緬の価は、とほうもない高価なものであつた。彼女達は阿蘭陀屋敷へ出入したり、唐人屋敷に招かれたりして馴染の異国人より貰う金モール、銀モール、フランネル、奥島、羅紗、更紗等をはじめ舶来物が多く、殊に柄襦の華やかさは眼も眩むほどであつた。丸山遊女の踏絵衣裳は、それは正月早々のことであるから、踏絵兼春衣の物であつたのである。

彼女達は踏絵当日になると、念入りに化粧して孔雀のように着飾り、店につましく並ぶと、役人達は遊女の源氏名を読みあげる。

本名ではなく源氏名を呼ぶのだから、踏絵の式が色つぼつかつた。一人一人、静かに柄襦姿で立ち上り、真白い艶めかしい足が、真鍮の聖像を踏むと、赤い縮緬が見届け彼の人達に艶かしく感じられる。次から次へと現世の菩薩が消えてゆく。

「筑後屋喜左エ門方抱花菱——」

宗門改めの役人が、尖つた声をして叫んだ。「花菱サン、お前の順番よ。ネ、しつかりして」

小声で囁やいたのは姉女郎の秀彌だつた。

秀彌は何もかも知つていた。人一倍根強い信仰に生きている切支丸宗徒の彼女が、心で詫びて神の像を踏んでくれ、ばい、がと思つていた。

花菱は僅かに頭を垂れた、秀彌に肯いてみせたが、蒼白い顔には覚悟の色が漂うている

のであつた。小紋散らしの薄色縮緬袷に、毛天鷲絨の阿蘭陀渡りを前帯に締め、黒髪には玳瑁の髪飾りを重たげにさしていた花菱は、静かに立ち上つた。彼女の撫肩より裾にかけしの美しい線には、誰もがウツトリとするのであつた。

芝生の上には一枚の墓座が敷いてあつた。

その上には安らげな御像を画いたサンタマリヤの像が浮いていた。一步く進む花菱は、俯向勝ちであつたが、墓座の前で佇んでいた

「花菱、切支丹の踏絵じや」

役人はせき立てた。

花菱の白い足は、小さく顫いを帯びているのが、立会検分役の後藤了順の目にとまつた。了順は切支丹目明役である。彼の大きな声が更に促した。

「踏まぬか……。踏め……。さては、切支丹

「じゃな」

凜として引きしまった花菱の口元には、嘲笑の動きがあつた。そうして、くずれるように華奢な姿を地上にうち伏すと、厳肅な言葉で答へ出した。

「お察しの通り、妾は切支丹の信者で御座います。貴き御姿をどうして踏めましょうか？ お仕置にして下さいませ……。嗚呼、サンタ・マリア様」

縁側に並んでいた地役人も、庭の隅に屯していた遊女達の間にも、異様な緊張した気分が渦巻いてしまつたのである。

「ころべ。転ばぬか」

「磔刑になるぞ」

下役人達は彼女を高手小手に縛りあげて叫んだ。この騒ぎをジツト見詰めていた一人に「順と同役の沢野忠庵があつた。」

彼忠庵が、桜町の牢舎をたずねたのは、その翌日の夕刻であつた。薄暗い牢格子の奥に花菱が静かに坐つていた。

「花菱——」

彼に答えた声は生々としていた

「フェレーナ様。妾は、あなた様に是非お話を申し上げねばなりません。……あなた様のお出下さつた訳は、よく分つて居ります。け

れど、改宗させようとなさつても、妾は駄目なので御座います。転ぶことは出来ません。

……將軍の御恩は今生限り、天主の愛は永劫尽きないもので御座います。そのお話は、妾の父があなた様からリガラメント（秘蹟）を授つた時承りました言葉で御座いました。昔のフェレーナ様は、徳の高い伴天連でした。それが何故、妾達信者を御苦しみになるのでしょうか？ あなた様の教えを守つた父は、立山で十字架にかゝつて殉教を致しました。亡き父の跡を追う事は、大きな喜びで御座います……」

伴天連のフイレイラであつた忠庵は、転ろばすべく花菱を訪うたのであるが、反つて彼女の言葉が、自分の過去と現在に背暗い、重苦しい苦悩を作つて倒れそうな気分になつてしまひ、説教する考えもなくなり、黙々と帰らねばならなかつた。

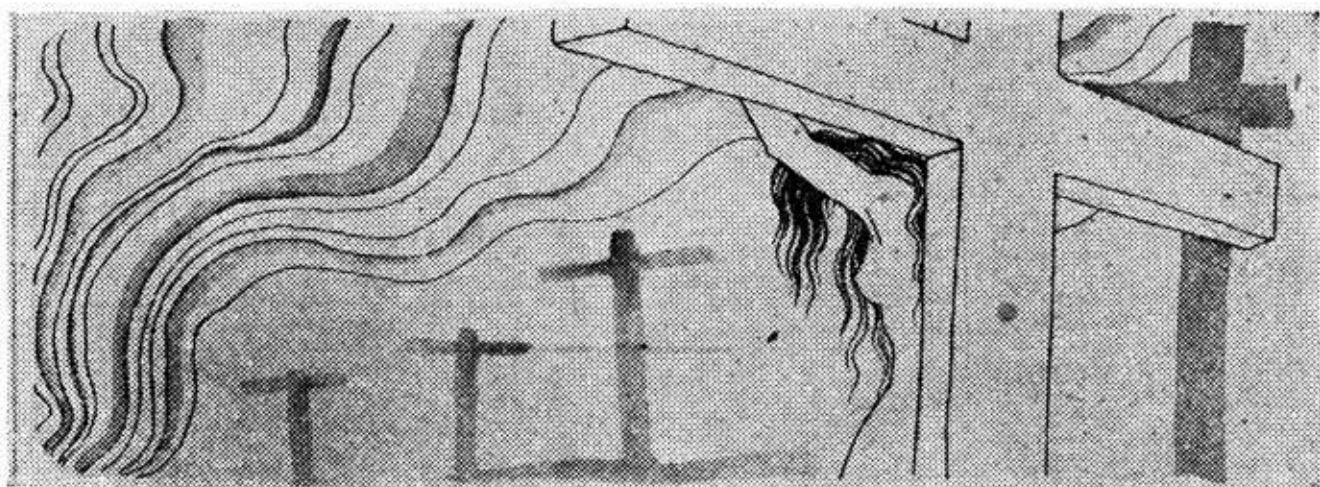
踏絵の日より数えて五日目の夕、花菱は、父が殺された場所と同じ立山の刑場で、刑卒に囲まれていた。彼女は澄みきつた声でラテン語の聖歌を唱つていた。遊女花菱の悲愴な処刑を見んものと多くの民衆達は刑場の周囲をとりまいていた。その中には姉女郎の秀彌の顔も花菱の水晶のような眼の中に映つた。彼

女はにつこりと微笑んで処刑台に上つた。目撃者の目には、地上の絞首台や十字架ではなく、絢爛たる結婚式や天国の祝宴に招かれてゐるように見えた。

「荊冠の聖像」と「磔刑の聖像」にうやうやしく接吻した彼女は荒々しく刑卒たちの手によつて十字架に縛られた。素足の足首が力いっぱい荒縄によつて縛りつけられたので、台上を離れて少しばかり踵が宙にういて拇指の爪先ばかりが僅かに板についていた。宙に浮いた他の足指がびく／＼と痙れんしているのが彼女の身体に生命の通つてゐるのを思わせた。しかしその若い生命も後数分で此の世を去つてしまふのである。

彼女はイエズスとマリアの御名を一心に唱えた。刑卒は槍を左腋目がけて突刺したが、初めは十分突き刺さらず彼女に非常な苦痛を与えた。この時彼女の頭巾がはずれて両眼を掩うと涙がじつ／＼と頭巾を透してしみ渡つた。今迄イエズスの御名を唱えていた彼女は叫んだ「天が見えませぬ」と、が忽ち槍は腋下を深くえぐつて彼女は絶命した。見物の宗徒たちは兵卒がいるのに、争つて布切や紙に血をしたし、着物にさへ血をふくませた。

マリヤ・マグダレナ



桂 牧 次 郎

何という美しさだ。わしは一目みた瞬間今までにない異常な興奮を覚えたのだ。マリヤ・マグダレナ、わしが悪いではない。お前の清楚な神々しいまでの初々しさ、ふくよかな其の肉体の神秘に罪があるのだ。でも、眺めたわしの眼にも半分の罪科があるのかも知れぬ。いや、それは一目ぼれした女の、水鳥のような羽ばたきの悲しい悲鳴であつたのかも知れぬ。

わしが、長崎奉行となつてから、本来の野獸性と残虐性を怎にすることが出来たのも、全く切支丹虐殺という又とない仕事で、公然としかも大々的に起きたからだ。わしは全国の領主に先がけて常に斬新で途方もない刑罪を巧みに案出して行つた。女たちを裸にして辻に曝す事にしたのもわしが始めた。有馬の女十人を氷漬にして辱めたのもわしだ。灼熱した鉄器で若い女の内股を焼いたのもわしの発案だ。磔、火烙、鋸引、穴吊し。箱張付。等々秘密の拷問にわしは全く現をぬかした。わしは娘たちを苦しめぬく時うずくような陶醉と刺激に浸るのだ。其為わしはわしの身分を忘れかけた事は何十度か知れぬ。しかも、わしが苛酷にすればする程將軍家からは重用せられ、全くわしは二重の幸福感を味つた。

わしも最初は切支丹宗徒だったが、宗門改めには一番にお転びへ註転宗のことと申した。わしは何もイエズス・キリストに帰依したのではない。只其信仰の玄義を日本語とポルトガル語で読んだに過ぎぬ。其れが娘たちを瞞着するのに便利だったからだ。あの頃はわしも若かった。だが、わしは出世した。わしが奉行になれたのも神を棄てた故だ。そもそもわしは「女を見て色情を起したるものは已

に姦淫した者だ」と云つて戒めるのが性に合はぬ。わしは生来のメタモルフオーゼな悪魔だ。^{デヴィル}伝え聞くネロ帝に劣らぬスールなサディストだ。わしは已に何百人の男女を虐殺して来たが、わしの頭は若妻や娘たちを処刑した事のみ印象の復活を求め得る。トマス源左衛門と妻を斬首した際、御法度にも拘らず多数の群衆が集つて来た。刑の執行後その遺骸を詣でに来た妙齡の女を其の場で太刀の錆にしたのを振りだしに、諸々の召捕に向つた。わしが一々名を連ねていると、八つになる可憐な女の子が筆と紙を持参して、「お役人ちやま、一番先にあたいの名、書いて頂戴。イエズス、キリスト様の為に一等先に死にたいの」。とぬかした時はいささか魂消した。忘れ得ぬのはデ、カストロ神父を匿つていたペテロ荒木の妻スザンナを拷問にかけた事だ。彼女は三つになる幼女を連れていたが、わしがスザンナを裸にしその上、髪で木に吊し、ついで二本の横木に磔にさせると、彼女の附添の丸顔の女中が「子供は私のものです」と云い張つた。その時「いいえ、あの子は妾の娘です。そう書き下さい」とスザンナが叫んだ。わしは激怒して、子供をズタ／＼に切りきざむと感した。^{オドロ}

「妾の腹にできたものは創造主様のお蔭です」彼女は呻いた。わしは容赦なく子供も素裸にして、母親の足許に縛らせた。子供は寒さの為に泣きだす。その時、スザンナが云つた言葉をわしは苦々しく思ひだす。^{ハイナル}

「武家の出であり、女である妾が、只切支丹だと云う一件で、此様な取扱いをなさる事を殿様方お恥じにならぬとは実に驚き入りました」わしは黙つて二刻余放置した後、首に鉄の環をはめて納屋に押

し込めた。半年後首をはねたが、要刀三撃に及んだ代物だつた。

ゾラ神父を匿つたヨハネ長井の妻モニカ、あれは勇ましい奴だつた。わしが裸にすると云うと、自分から帯を解き「恥辱がどんなに大きくとも妾はイエズス様を捨てますまい。着物だけでなく出来るなら皮膚まで剥がして頂きとうございます」と大みえを切つたが、わしが遊治郎に引き渡すとおどし、別室で特殊なベニタンスを与えると、悲鳴に近い声を出して悶えた。だが、どの切支丹達も申し合わせた様に、柔順に静かに刑に服した。これにはわしも感心が嫌になつて終に飽食した。^{イエス}

彼等は定まつて、「主よ、我を憐み給え。汝に我が霊を捧げ奉る」とか、「アベ・マリア」や「デ、デウス」を歌い、ロザリオを手に離さないで刑場に赴くのだが、わしはいつも耳をふさいでいたのだ。全くわしは暴虐の限りをした。

美しい女をみても抱いても、昔日の様な血は湧き立たぬ。もう一種の習慣と随性で、一日一日をあえいでいるわしであつたのだ。わしは根まけしそうになつていたのだ。

それなのにこれは一体どうしたと云うのだ。

それは一体どこから忍び寄つてきたものなのだ。わしはうろたえた。マリヤ・マグダレナ。

彼女が召し捕られてわしの前に引出されて来た時から、わしの胸は異様にときめいていた。

色白く、すつきりと澄んだ黒みがちの瞳。房々とした黒髪のみだれを一筋、唇の唇にきりつと噛んで、少しもわるびれずわしを見上げた時の首から頸へかけての曲線が、わしに満足を与えそして魅惑

するのだ。首にかけている十字架がチカ／＼と光る。その絹の着物を圧して盛り上るふくよかな胸のあたりへ、蛇の様にしめつけている捕縄が、情容赦なく白いしなやかな手を逆にとつて背中までねじ上げており、その左の袖口から鹿子絞の襦袢が少しのぞきかかつているのが色気を増して、わしは全身がぞくぞくとした。わしは今迄に何十人となく縛られた女たちをみてきた。わしには、女というものは縛つてみると美しくみえ、可愛さも分つてくる様な気がしてならぬ。わしの食指は大きく動いた。

「マリヤ・マグダレナとは其方であるか」

わしは威儀を正し充分の威厳を示して云つた。

「ジュ、ル・シイ」わしにはこの奇異なる話が分らなんだ。だが、それが異国語であることはわしにも分つていたから、

「左様か、其方は異国語を用いる程のぼせおるとみゆる。ここは日本のお白洲、少しづつしむがよからうぞ」

「はい」わしは素直にうなづく愛くるしい二重瞼に何か清純なものを感じた。

「年はいくつに相成るか」

「十八にござります」

「親兄弟いかが致し居るのか？」

「父者、母者、兄弟、みな殉教致しました」

「ではその方はみなしごなのか？」

「妾の父は天主デウス。精神の親はカルバツオ神父様でござります故、少しも悲しくはありません」

「其方、転ばねば、將軍家の名によつて火刑はまぬかれぬ所だ」

「妾は信仰の為に磔オロコーストにされるか、火刑にされるのでなければ生きて居たくございませぬ」

「いかにむごたらしい責苦に堪えて後の刑であるかは存じおろう。みれば花恥らう其方。立派な玉の輿にものれるべきものを——」

「お黙り下さりませ。貴族に対する唯一つの称号は殉教した人々の血でござります。信仰故殺された両親の血でござります」

「ならば其方、地獄の苦痛を生き乍ら望むと申すか」

「それは真の地獄の絵イマジと影オンブルにすぎないのでございましょう。御前様方の瀆神の罪を犯すお意見にお従い申すより、真の地獄のどんな苦痛ペニタメントでも受けたうござります」

わしは北叟笑んだ。こいつで当分、若返える事が出来ると思つたが、表面さも当惑した振りを装い、黙つて考え込む風をした。それを見て忠実な部下が、「頭が高い、控えろ」と声高に叫んでピシリと縄尻をならして、どんと背中を小突いた。マグダレナは膝をくずして前にのめつた。

「踏絵をふませて仕せ」

踏絵は元来、信者の真偽を確かめるためのものだが、高慢な信者には無理に神を潰させる俗にいう踏絵の刑のことに使用した。

わしの一声で道具が運ばれ、マグダレナは無理矢理に銅版のマリヤ像の上に、両足を縛つて立たされ、体は横木に繋がれてしまった。わしは側までいつて、その頸に手をかけてゲイと顔を引起した。まだ男を知らぬ体臭がわしの乾ききつた寒空のような神経にひびいて来た憂いげに眉をひそめているその様に、悩ましく雨に打たるる秋海裳を連想した。

「其方はマリヤを捨てたも同然ではないか」

「いえ、この様なこと、御前様が無理無体になされただけのお話で妾の意^{ボロンデー}志からではござりませぬ。相変らず妾は主を尊敬致し崇拝致してございます」

わしがマグダレナをみて鬱勃としたものに迫られたのは八年前の寛永三年八月、大村領で、折紙付の美人でカタリナという二十三の若い女が、半年監禁され一ヶ月間裸にして國中引廻されて遂に火刑にされる時に立合つた以来の興味と興奮であつた。カタリナも美しい艶やかな女であつたが、マグダレナは彼女の比ではない。

わしは其の夜、秘密の調べ室に入つた。そこにはマグダレナが裸のまゝ緋の扱帯^{しき}で縛り付けてあるのだ。わしは危く手燭を取落しかけた。ジーンとした快感と恍惚への期待が全身をエレキの様に流れた。光を浴びた彼女は眼をあげたが、急にわしの眼の色をよみ取つたか二三度小さく身ぶるいした。

「御前様一体何をなさるおつもりです」

恐怖と不安と、それ以外の何かへの期待とが、彼女の顔を渦巻いたのがわしに分つた。

「わしはお前を娘のまゝ死なせたくなひ」

「なりませぬ。妾には夫がございます。イエズス様です。私は夫に清らかな愛を捧げる事を誇りとしてるのでございます」

わしはもう何も聞かなかつた。烈しい情慾に狂つていたわしは、扱帯を柱から解くと、無茶苦茶に部屋中を引づり廻した。少女はやさしい木馬のように、又、緋鯉の尾に紐をつけて引つぱるるように、後さまにズルズルと悲しい肉塊となつて、ついて来た。力を入れて

引くたびに白い肉塊は凹み伸縮し、そして、消え入る様な鳴咽^{おえつ}が洩れて来た。わしは途中で抱き上げて次の間の夜具にころがし、弓の折で思うさま打ち据えていた。灯にすかしてみれば、緋の扱帯が身体全体にまきついてゐる錯覚を伴つた。赤い祈禱尼が白い獸となつて狂い始め、わしはもう夢中であつた。情痴の限りをつくして一夜の中に美しい花園を無残にふみにじつたのだ。わしが勝つか、キリストが勝つか、わしは必死で懸命だつた。狂つた感覚でわしは新鮮な果実の汁を吸う甘美さを長く味つた。わしはめまいがしそうであつた。きびしい試練にマグダレナはぐつたりと魂まで投げ出したかの様に眠つていた。

「どうじゃ、キリストとわしとどちらがいいか？」

女は答えなかつた。わしは勝つたのだと思つた。翌朝彼女はポツンと云つた。

「妾は生きながら寸断されれば本望です」

一ヶ月後にわしはバルムの刑を宣告した。マグダレナは晴れやかに笑つた。

「私の生涯中、一番幸福だつたのは、洗礼を受けた日と、捕えられた日と、死刑の判決を受けた三日です」

彼女は氣丈だつた。腕を吊された時、落ちそうに感じたので「もつきつくして下さい」

と云つたが、わしは聞えぬ振をしてみていた。落ちるまゝになつて彼女の腕の骨は脱れた。わしの命令で火で尖らし固くした葦が彼女の爪の中にさし込まれた。わしはあの桜貝のような爪が憎かつたのだ。

「おお御主様、御前様はどんなルビーで私の手をお飾り下すつたのでしょうか」

天の一角に向いそう云つてから、わしの方を向いて天主の贖罪の結果を失わぬよう願つた。わしは業腹だつた。いや彼女の肉体に未練があつたのかも知れぬ。わしは水責に遇わした。足の指で吊して大石を負わして地面に置いてもみた。最後に大桶の上に逆すりにしてその中に突込み、窒息すると再び始めるために引上げさせた。わしはその間、娘の白い豊満な筋肉の一つ一つの動きを細かに観察することが出来た。結局、殺しかねて再び牢舎につながせ、彼女の容色も心なしか、あせて来た頃、他の十人のビグタイムと共に穴の中で死ぬべく命じた。

裸馬にひき寄せられる彼女にわしは一抹の寂しさと愛憎を以て送つた。そして、道々村民に説教しカンテイクを歌う彼女にふと敵意を覚えた。わしはあの蕾の口に小石を詰め、手拭で厳しく猿轡を噛ますよう命じ、そしてそれをみていると、だしぬけにあの夜の事がじかに性慾にふれてきた。マグダレナの面は凄艶で悲痛な美に、妖しくなまめいてわしの最後の肉慾をそそつた。夕雲の中に切支丹の小旗を背につけられ刑場にひかれる一行の中に後に縛られたマグダレナの腕の十指がかたく握られたまゝになつてゐるのが、いつまでもわしの頭に残つてゐた。刑場で穴の近くに坐らされた彼女は口を自由にされると、「われ深く喜びて木蔭に坐れり、其の実は吾が口に甘かりき」と、唄つて、口中の小石を穴に吐いた。

他の十人のビグタイムはすぐ息絶えたが、マグダレナは体を半分穴の中に埋められたまゝ一切食をとらず、うめき声一つ立てず、主

が十字架上で云つたと同様、「喉が乾いた」と云つたのみで十三日半そのまゝでいた。

其の日わしは少しおくれ出て出むいた。わしはもう根まけしてゐたのだ。彼女は劊手を呼んで三つの小粒を与えた。此があゝ握られた掌の秘密であつたに相違ない。が、自由にして貧者のなす最高の行為で切支丹の鑑とされている。劊手が元氣ずけるものは何かと尋ねたのに、「若し妾がここで死ななくとも驚くことはなく妾の拝福する主は妾を守り支えて下さる。妾の顔にふれる御主の御手を感じる事が出来、其の為、妾の体は苦しまぬように負担を軽くなされております」と云つてあお向いて眼を瞑つた。わしは物蔭に隠れてみていた。劊手は彼女を穴より出し警戒しながら休ませた。彼女はかな声でロザリオを唄えていた。わしは飛出して劊手を呼んだ。劊手はやにわに、マグダレナを穴の中へ蹴り込んでおどろした眼をわしに向けた。雨の為半分水のたまつてゐた穴で遂に彼女は溺死した。銀の小粒を隠そうとして必死になつた劊手の顔と、泥にまみれになつて海老の様に曲つて冷たくなつてゐるマグダレナの死体とみくらべて、わしは嫌な氣持になつた。寂しい氣がした。マグダレナはもう一個の人形の役目しか果さない。物質としてわしの眼の前にその醜さをさらしている。だが、彼女を引上げて死顔をみた時わしはうろたえた。神々しく美しく映えて一種の崇高さが漂つてわしは笑えなかつた。わしはマグダレナに勝てただろうか？わしは犯し切れない美しい或るものに打たれた。部下が機械的に茶毘に付す準備に影絵の様に立ち働いてゐるのも遠い国の出来事の氣がし、わしはマグダレナの死体を抱いたまゝ痴呆の様に立つてゐた。

—完—

○ 世界各国で多種多様の刺青が行われているが、我が国江戸時代に於ける刺青は名実ともに世界中で最も精巧な美麗なものといわれている。

刺青は江戸時代に始まり、天正天和の頃にはまだ行われていなかったが延宝、天和の頃になり、江戸は神田の釣鐘彌左衛門という人が最も有名になり以後流行したものである。

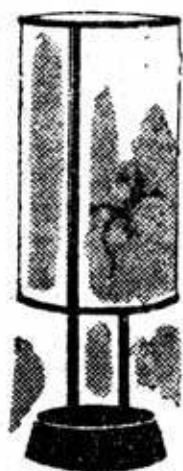
これは四代脇軍家綱の時代で十一代將軍家斉の時代に最も盛んで寛政享和を経て文化年間は絶頂に達し伊達者、駕籠舁、鳶人足、バクチ打ち、左官、大工、土方、盗賊、女賊などは刺青をしないと恥とさえされたのである。

御存知の様に、弁天小僧、石川五衛門、国定忠治、野狐三次、鼠小僧、女にしても鬼神のお松、稲妻お玉、八百屋お七、姐妃のお百生首お仙といったところ、実に見事なものである。

これをみても江戸における刺青がなんのために行われたか、それは言をまたずして、盗賊、バクチ打ち等の場合は、已の貫録を示す外のなにものでもなかったのである。双肌ぬいでたんかを切る女賊の凄惨さ。職人などはこれに比べると、おしやれ気も手伝って、その威勢のよさをしめし、遊女などになると、これはいやが上にも妖艶さを増すために行われたものとみられるのである。

刺青には勿論、絵と文字の二つがあつて龍

江戸の刺青模様



潮

マ

リ

大蛇、まむし、いなずま、花札、サイコロ、骸骨、鯉などが一番多かった様で、異論は種々あるであろうが弁天小僧はいなずまと蜘蛛だといわれ鼠小僧は蝙蝠だという。此の外藝とか、猿、虎、ぼたん、蝶、猫、桜の花、紅葉、誠に数多いのである。

文字となると風神とか、雷神、御意見無用女体一代、誰々のちといったこれこそ種々雑多で、又遊女が役者の名をほつたもの、あだし男の名を股間にほつた芸者などもあつたこの文字彫りで知られているのは名にしおう死に次第の権九郎、その名の通り、背中一面に「死次第なり、いのち不入」と刺青したのである。

こういつた図柄字柄も一つは縁起意味をかついだもので俠客連や博徒の刺青、まむしはその執拗さをしめし、花札は勝負師の芽の出を、蝙蝠はその無気味さと共に夜でも目が見える所から盗賊に使われたのである。

竹を割つた様な氣質を示すため職人が棧に竹、威勢のよい所から鯉の滝のぼり、商売繁昌を願つて遊女の腰に松茸を食わえこんでいる蛤の図などという卑猥なものもあつた。そうかと思うと、大股にかま首を持ちあげたまむし、蜘蛛が糸を引いて、その糸に小判のか

ゝつた図、蟹を陰部近くにはつたもの（男性器をはさむ意味、くわえこんだら容易にはなさない。だからなじみの客が出来る）

この様に刺青はあまりにも盛んにあらゆる階級に行われたので、幕府では刺青禁止の命を下した事もある。

だが一時はそのため下火になつたものの、再び流行し天保に全盛となつてしまつたのである。当時浮世絵で名をなしていた歌川国芳なども下絵をかいいたので一層その人気をあはつたのである。

こうみてくると江戸における刺青模様というものは明和を境として前期と後期に分けられるのである。

即ち前期の刺青というものは、起請彫、信念表明、紋所、装飾の四種類にすぎなかつたが後期になると益々その精細を發揮し、願望性的象徴、悪感付与、好奇的娯楽、景色描写演劇描写など、ここで簡単に説明してみると所謂起請彫というのは男が女に加える刺青で多くは「誰々命」と左腕上膊、或は肩などにほられ、信念表明の刺青は俠客、馬子、船子などが題目、六字名号などを彫るものであり紋所は肩先に定紋を彫り、溺死した場合などにすぐわかる様にしたもの、装飾彫は、初め簡単

な渦巻などを表したが後期に入つては唐草、雷、稲妻などを表し、文化頃からは、羅城門景情、鏝引などの勇ましいもの、凄烈の名檜舞台などを彫つたのである。悪感付与になると先にものべた様に生首幽霊骸骨などを選んで恐怖させるために彫られたものである。

性的象徴というのには多く陰莖、陰門などが選ばれ好奇的娯楽には文政頃から天保頃までにその品評会が行われて、その美を各々きそいあつたのである。

まずこれらが江戸の刺青模様の形体と云えるのであるが、さてそれでは江戸の刺青の方法はどんなに行われたかとしらべてみると、大体三つの方法があつたのである。

第一は刀や針を用いずたゞ皮膚にぬりつけ或はすりこみをして色素を皮膚内部に侵入させるもの、

第二は針、魚骨など鋭いもので皮膚を刺しそれから色素を侵入させる方法、これが最も多く行われていたのであるが

第三としては皮膚に切疵をつくり、それから色素を侵入させる方法である。

なんと言つても江戸においては第二の方法が最も多く針ももつばら鉄針が使われていたのである。

その刺青師によつて大分方法も違つたであろうが常道としては、縫針を束にしてそれを木製の簪にはさみ、その上から鉄又は銅の細い針金を巻いたものである。

針は大中小の三種に別れ小針は縫針四五本を二列にまき、中針は七八本を大針は十二、三本を三列にまとめた。細い線を刺青する場合は小針を用い太い線の時は中針、大針は、ボカシの時に用いられたのである。

又刺青の色、即ち色素は多く唐墨と朱とを使い、これらを目分量で水にとかしておいて皿の上で思う通りの濃さに作り、筆は毛筆の大小様々のものを用意して、色素に従つて異なつたものを使用したのである。

その方法は臨画というものを刺青師は皆持つて客の希望に従い、下画をかいてその上に刺青をしたもので大体左手の拇指と人指指とで皮膚をつまみ右手に筆を握つて筆の様にし人さし指をのばして針をさし、これをはねあげて針をぬいたのである。これを筋ぼりと言つたものである。筋彫が終わると今度は色素をそゝぎこむのであつて、筆に希望の色をつけ左手の中指と小指との上に横たえてその上から薬指を曲げて引つけかけ支えたのである。針を刺込する時には色素がよくつく様に針を

なめてつばを入れる事になつていた。

そして刺青はどんな刺青師でも一日に三寸四方を限度としてそれ以上行わず、次の日は三日位間をおいたものである。

だからごく簡単なものは五六回で容易にすんだのであるが、こつたものになると二年間もかゝつたそうである。

この様に行われていたのであるが、刺青なるものはそもそも刑罰の一種として発達したものであつて、当時犯罪人にはやはりこの刺青が行われたのである。

犯罪者の手とか足とか、あるいは顔に特定の記号をきざみつけて、犯罪人であることを何人にも一目でわかる様にして他の者に用心させると共に彼に一種の恥辱を加えたものである。

幕府では初めはごく軽い盗犯人でさえ斬刑

【読者通信】

僕は貴誌の読者通信を読んでいるのでありますが、どうでしょう、一つ読者の中の趣味を同じくする者が集つて座談会のようなものを開くような機会を作つて下さつては

如何でしょうか。きつと他の方にもそういった希望を持つていられる向が多いだろうと思います、そういった催しが若し実施されます際は必ず御案内賜るようお願い致します。

(箕島貴郎)

貴誌益々御隆昌奉慶賀候
扱て小生事常に貴誌により若返りの妙薬を得て暑中愈々墨鏢として活躍仕候、ついては九月号の倒錯の告白を拝見致し小生も禿筆をはせ過去の

経験を御送りしき所存に候へば其の節は宜敷く御判読の程願上候、尙先日御送付下されし写真集殊の外の出来にて欣快至極に存じ候、続篇御送付被下度此段御願申上候

(宇治山田市K生)

に処していた。これが八代將軍吉宗の時に至り(享保五年)刺青刑とあらためるとともに、当人の危険性というものを万人に知らしめたのである。

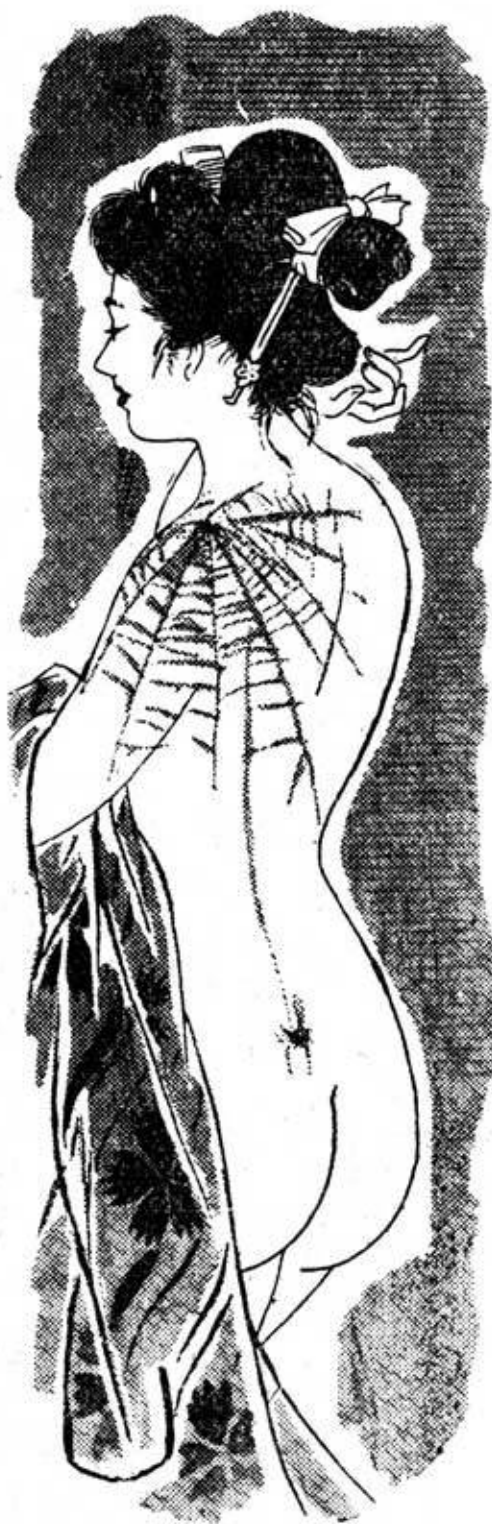
(だがこの刑罰のしるしであるべき烙印がかえつて、江戸においては彼等にはばをきかせ、益々いゝ顔にさせ、町民を恐怖に引き入れる結果となつてしまつたのであるが――)

この刺青の形、図柄、場所は諸藩各々によ

つて異つて、顔面の最も目立つ所にあるもの腕に輪をきざまれたもの(一番にこれが多かった様であるが)故にこの犯罪人はその図柄場所によつて、どの犯罪人かとはつきりしたのである。

無宿人にはこの刺青は行わず追放するだけであつて、累犯人は刺青が次第に多きぎざまられていつたのである――

(終)



○ 「日本は彫物の芸術国だ」と云われている。生きた人間の皮膚に彫られた刺青が芸術品として珍重せられ、怪奇な文身者の写真や、或はその剥皮が猟奇趣味家の外人が争つて手に入れようとするので、可成高価に取引されているとの事である。

日本女性で文身はりものをしているものゝ写真を熱心に蒐集するつもりで「文身婦人」を求めている人もある。男はと

にかく、若い脂肪豊かな肌理きりのこまやかな白瑛瑛ほうほうのような肌を燦爛たる色彩で刺繡しているのは、エロとグロとのカクテルで変態心理

の猟奇愛好家の血汐を躍らすのに十分であらう。

外国では電気仕掛で刺青をする方法があるそうだが、欧米人の文身は図柄は単調で、日本のような美術的なものは到底彼等に真似が出来ない。云う迄もなく天保が日本に於ける刺青の全盛時代で、その下絵には、名のある浮世絵師が競つて筆をとつた。大蘇芳年の「美勇水滸伝」等は今でも刺青師達の金科玉条

刺青

師一代

的 場

とされている。
文身師はりものしはさすがに東京が本場であつて明治時代には、彫字之、下駄亀、屋根熊、彫金、等という名人がいた。大正末期迄大阪の千日前の近くに彫安という刺青師が住んでいた。彼は関西切つての名人と呼ばれた男で、もう刺青師として後を継ぐ男もない時代なので文字通り関西に於ける最後の名人といつてもよかつた。表面は娘二人に女髪結をさせて、彼

の秘密の仕事は二階の密室でやつていた。

朝つばらから四五人の客が順番を待ちながら、彫りかけの文身はりものを見せて、がまんの話や博奕の話に耽つている中で彫安は五十に手の届きそうな青い顔をしかめて墨汁をたつぷりふくませた筆を左手の指の間に挟み、右手には数多くの刺繡針を尖端に結びつけた竹をとつて、黙々として寝ころんでいる男の腕へ、大蛇丸だとか、弁天小僧だとかの筋彫やぼか

しを入れていた。皮膚の上は血が墨や朱と混つて赤黒く変色していた。
彼は何故、法律で禁止されている刺青師等になつたのであろうか。肌脱ぎとなつた彼の背には見るからに醜悪に近い拙劣な文身が弛んだ皮膚の上を彩っている。とりわけ、乳の傍に彫つてある二寸四方ばかりの女の生首はなんだか陰惨な感じを与えた。

彼の故郷は大和の御所町で、飲む、打つ、

通

買う、文字通り三拍子揃つた悪癖が募つて、故郷にもいたゝまらず飛び出してきたのが大阪——。こうして遂にどん底のやくざ生活に堕ちたのである。そして

文身で身を立てようと思ひ立つたのが二十歳の時だつたそう。結局彼が刺青師となつた動機は放蕩無頼のためだという事になる「俺は子供の時分から、がまんが好きで、二十銭も小使いが貯まると、直ぐ文身師の家へ飛んでいつて突つゝいて貰いました」

それほど彼は文身狂だつた。だから文身師として立身出世しようと決心したのも、あながち無鉄砲な事でもなかつた。

やくざと云えば、大抵博奕打である。安さんもばくちだけは止められなかつた。文身の施術は春から秋迄で、冬は稼業を休んで博奕にのみ耽つた。細君も女ながら、此の道ではしたゝか者であつた。

然し此の彫安も一人前の文身師として世に立つ迄には並大抵の努力ではなかつた。持つて生れた器用が手伝つて、見様見真似でやり出した仕事であるが、容易なことでは墨や朱がうまく表皮と真皮の間に入らない。ましてやそれが誰に見せても恥しくない程の絵や模様として皮膚面に浮かび上る迄には、生やさしい苦心ではなかつた。今でも細君の左腕に残つてゐる桜の刺青は、その頃彼女の肌を犠牲にして試験台として彫つたものである。

こうして安さんの苦心が少しずつ酬いられてきて、大阪でも相当に名が知れるようになった時、もう一奮発して文身修業に東京へ行こうと決意した。東京は昔から文身の本場である。彫字之、下駄亀の英名は大阪にも普く知られてゐた。だから彼は何んとか名人の門を叩いてその極意を我がものにして帰りたいと思つた。勿論文身師にもそれぞれ秘伝とか口伝とかいうものがあつて、門外不出で容易に同業者には伝授しない不文律があつた。そ

れを安さんは盗もうという覚悟であつた。彼は黒紋附の羽織で威儀を整え出発した。ところがこれがそもぐの失敗を招く原因であつたとは神ならぬ身の安さんは知るよしもなかつた。

東京へ着くと、多少の知辺をたよりに、葎町の或る待合の女将を訪れて、客を紹介して貰いたいと頼み込んだけれども、毎日宿屋飯を食つて客の来るのを待つていても、猫の子一匹註文にやつて来ない。かてゝ加えて懷中はだんぐ淋しくなつてくる。彼は気が気でなく、とにかく目的の八丁堀の下駄亀をひそかに訪ねて極意を獲得してやろうと思つてゐた。新論自分が文身師だということは極秘にしてゐた。

さて下駄亀に對面すると、意外な一喝が彼の唇から迸つた。

「おいッ、お前は大阪千日前の彫安だろう」
慧敏な下駄亀は早くも彼の素性を喝破したのだつた。安さんは不意を打たれて動揺した失敗つたと後悔したが後の祭である。

「すみません。申訳ございません」
後は平あやまりにあやまるより方法がなかつた。こう素直に謝罪されてみると、いくら下駄亀でも、まさか戸外へつまみ出すわけに

はゆかない。そうこうする中に次第に機嫌を直してきた。やがて安さんの堂々たる風采をじろりと冷笑しながら見渡して言つた。

「彫安お前そんなちよんがれ節語りのような風をして東京へやつて来たつて、誰も相手にするものはねえぜ、上方贅六を相手にするんならそれもよからうが、東京の文身師てえやつは、昔から突掛草履に半纏の着流し、豆絞りの手拭でも肩にかけて、彌造を極めこむてえのがお定りだ、だから見な、お前がいくら頼んだつて、客の来つこはねえよ。なあんだあのちよんがれ節語りのような風をしやがつて、あんな奴にろくな腕はありやしねえと誰だつて言つてゐるにちげえねえ」

言われてみると、大きにそうだつた。そこに気がつかなくなつたのは不覚の至りだつた。安さんは下駄亀の言葉にギヤフンと参つてしまった。

「ほんまにあの時は、さすがの俺も穴へ入りとうなりました」

と述懐した。そうしてほうぐの体で大阪へ舞い戻つてきたが、しかし、最早や当時の東京の文身師仲間でも安さんの名が知られてゐた点から推察すると相当腕のいい文身師になつてゐたに違いない。

断^{ギロ}頭^チ台^ン奇^キ談^{ダン}

茂 木 芳 久

一、ギロチンの起源

死刑執行の方法は国により必ずしも同じではないが我国では一般に知られて居るが如く絞首である。而して刑の執行は非公開で刑務所内で行われる。一般人が死刑の場合絞首にされる事は刑法第十一条第一項に明かにされて居る所である。

英国に於いても此の方法が採用されて居る判決の言渡しの際にはつきりと裁判長が云つて居る。死刑の宣告の時「汝はそれより刑場に趣き、咽喉部を汝が死に至るまで縊られるべし」というような言葉が必ず謳^{うた}われて居る。米国に於いては各州それぞれ方法があるらしいが電気椅子に載せる方法があるのは既に読者の知つて居られる所だろう。米国の本などを讀むと「椅子に行く」というような言葉が出て来ることがあるが無論之は電気椅子にのせられる事を意味するのである。

ところで仏国であるが此の国では今でも首切りが行われている。有名なギロチンという恐ろしい首切機械にかけられるわけなのだ。

どの方法を採用するにせよ、第一の目的は少くも現今では罪人の苦痛を少しでも減少させるために最良の方法としてえらばれて居るわけである。私はこゝにフランスに於ける死刑に就いて聊か述べて見たい。

一七九二年三月二十日發布された法令により、一般の死刑はギロチンで行われる事に定つた。

ギロチンを発明した人は、ドクトル・ギロチンであつて而も彼がその機械の最初の犠牲者である、とは一般に伝えられている所だけれ共、実は之は誤りである。

国民議會でドクトル・ギロチンが、此の機械採用の提議をしたのは事実である。彼は、首切りのような事は人の手でやらず、機械に行わせるのが人道的であるという論旨からこ

の提議をした。

「諸君、この機械によつて、私は諸君の首を一瞬の間に飛ばせる事が出来るのである。而し諸君はその時、痛いとも痒いとも感じてゐるひまはないのである」

此のユーモラスな発言に対して、全議員が思わず失笑した。而してギロチンの名が歴史に不朽のものとなつたのであつた。

ドクトル・ギロチンがその当時の首切り法の代りに用いようとした首切機械は実は十五世紀頃からヨーロッパでは知られて居たのである。

一五〇七年五月十三日にジェノアで死刑を執行されたデメトリ・エスチニヤンという人間を美事に死に至らしめた機械は丁度ギロチンのようなものである事が記録されているし又一六〇〇年にベアトリス・ツエンチという人間の首をはねたのも同じようなものであつたスコットランドでは少女と呼ばれる同じような道具があり、一六五一年と一六八五年にアーデル侯及びその息子の首を切つてゐるところでドクトル・ギロチンの提議が採用され、こゝに愈々この道具が用いられる事になつたがその第一のプランを立てたのはラキアントという男で代つたのはトビヤス・シユ

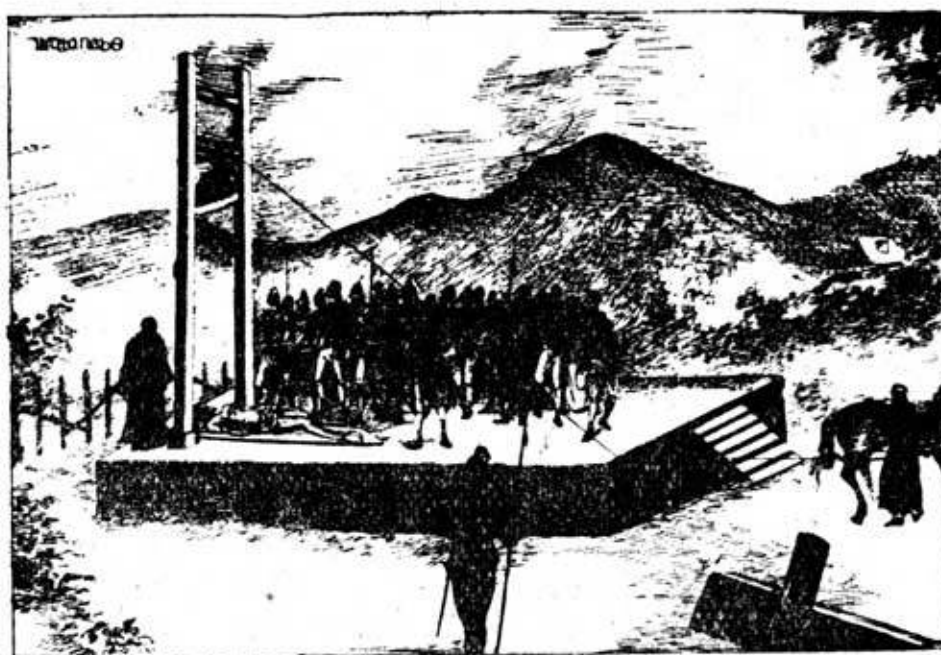
ミッツという男だった。
トビヤスは当時ピアノ製作者だったというから、彼は芸術品を作るつもりでこの首切り機械を作ったかも知れない。

此のギロチンの刃が内側に向つてまづ頸部をとばす前に、それをしつかりと囲むように出来たのであつた。ところが、多少機械の知識をもつていたルイ十六世は、この代りに下向きにとがつた三角形の刃を用いさせた。

ルイ十六世のこのギロチン改良の命令は実に彼の最後の命令だった。というのは、彼は一七九三年一月二十一日にまず自身その改良機械にかけられなければならなかつたからである。

皮肉にも、この時の切れ味はまさに彼の機械改良家としての頭のよさを証明したという事である。

現在フランスで用いられているのは、之に更に改良を加えた形のもので一八七五年に採



用されたのである。

二、ギロチンの用いられる時

フランスの法律によれば、死刑は公開の場所で行われる事になつてゐる。勿論この死刑公開という事に対しては賛否の議論が中々あるがともかく公開という事になつてゐる。ただし真昼間やるわけではない。大体晩に行われるのだ。

死刑執行の日には、まず裁判官、公議権の代表者たる検事総長或はその代理人、書記、それから教誨師、及び被告人の弁護人が檻房にゐる。

教誨師が被告人に対していよく死の時が来た事をつけ、さんげを云わしめ又彼の云い遣したい事を聞いてやる。但しこの場合被告人に勇気をつけてやる事を忘れない。勇気とはつまり殺される勇気である。この最後の被告人の言説中にもし裁決を動かすに足る事

実を認めた時は直に裁判官はその執行を見合せるのである。囚人が女であつた場合は妊娠の意識ありや否やを確め、もしそうらしい時は一時執行を見合せて医師に診察させる。

次に約二十分間、囚人は教誨師とさし向いになれる。無論さんげをする為である。それから、被告人に最後の食事又はシガレットが与えられる。被告人が最後に望むものは与えられるのが原則だけれども薬などは勿論与えられない。

次に愈々執行人がはいつて来て、まづ被告人のシャツを切る。之は頸部をはだかにする為、つゞいて綱をもつて手足を縛るが之はいりまでもなくいざという場合に被告人が死者狂いになつてさわがぬ為である。但し足は歩ける程度にしておく。

それから憲兵の一隊に囲まれて被告人はギロチンの建てられてゐる刑場に行くのである。無論或る一定のスペースは兵隊に守られて法官その他の係り官以外の者はその中に入られぬ。

かくして用意とゝのえは被告人は板の上にねかされ首を刃の下におかなければならない。執行人がボタンを押す。刃が落下する。首が飛んで鎌を入れた前面の籠の中におちる。

かくて正義は保たれたり。刑は終る、という次第なので、手つづきはいたつて簡単。ドクトル・ギロチンが議会で述べた通り、事は一瞬にして決してしまふのである。

刑が執行されると直に白木で出来た柩が運ばれ、素早く死体が収容される。抑向けにね

かし、首はひろげた両脚の間におく。それから車に載せられて埋葬墓地に運ばれ、最後に牧師の祈りがあつてここに人生一代が完全に終をつける事になる。

此の祈りが埋葬の唯一の儀式であるが大げさには出来ない。若し被告人の親戚が特に乞

う場合には死体はそれらの人々に渡されるが但し儀式を用いざる事を要す、というがフランス刑法第十四条にちやんと記されて居る。又もし親戚達がこの要求をしない時は通常、死体は解剖に附せられ学術上の資料に供される。

終



性 欲 の 昇 華

赤 坂

剛

(一)

「昇華」とは元來化学上の用語で熱を受けた固体が液体とならずに直ちに気体に変化することを云うのである。然るに精神分析法の創唱者たるフロイドは、此の化学上の用語をば人間の性的本能の変形作用に襲用し、元來は性的であつた慾望が性的ならざる他の方面に

転向して、之に新しい興味を持つようになる働きを昇華作用と名づけた。それは恰も物質界に於けるエネルギーの変形保存と同じであつて、即ち一のエネルギーが他のエネルギーに変ずるが如くに、性的本能もまた他の方面の事柄に変じて、而も間接に其の慾望を満足することが即ちこゝに謂う所の昇華作用である。

抑々性慾の代償或は等価として純肉体的なる性的行為の代りに、詩歌、美術、宗教等の如き精神的創作物の現わるゝことに就いては夙にイワン・ブロッホの論じた処で、同氏は此等の想像的所産物をば性的行為の等価といふ、人間の想像的生活は性慾の自然的実行が減少した際に於て、性的等価を供給するものであると云つた。然る

に、フロイドは性慾が他の方面の事項目的に振り向けられて、それに新しい興味を持つようになつた無意識の転向変形に対して「昇華」なる名称を附したのである。併しその根本的事実に於ては、ブロッホの所謂性慾等価の説と左程の巡廻も無く、唯之に対する説明を新たに附加した迄である。

性慾の昇華は、先づ職業の選択に於て之を証明することが出来る生來「サジスムス」(虐待性淫乱症)の傾向を有する者が屠殺者或は外科医等となり、或は「エキスピチオン」(陰部暴露)の傾向を有する者が、年長じて後、俳優或は競技

家等となつて無意識にその慾望を満足するが如きは、変態性慾の職業的昇華と称すべきものであるが、併しまた他の一面に於て正當の性慾も之が満足せられざる場合には、異性を愛する代りに、人間或は社会全体を愛するが如き利他的活動に変化するに至ることがある。例えば慈善、看護事業に一身を捧ぐるが如き、国家に対して熱愛忠誠の至情を尽すが如き、即ち此の類である。英国有名の政治家家ビットが独身生活を以て世を終りながら、国家を以て自己の妻なりと言明し、専心国政に尽瘁したるが如き、実に此の好例の一である。また愛すべき子なく愛さるべき夫も無き老嬢寡婦が、猫、犬の如き小動物を愛する傾向のあるのは、異性に対する愛情が動物に振り向けられた結果であつて、歐洲に於て動物の生体解剖に反対する婦人の多くは大抵此種の女性である。

(一)

性慾はまた宗教信仰の方面にも転向することの多いものである。之を古今の事実に徴するに、青春の身にして塵世を見限り、身を寺院に投じて僧となり、尼となるの動機には、失恋に基づくことが尠く無い。是れ畢竟生有の性的本能に基づく感情を宗教信仰の方面に振り向け、現実に熱愛者を失つた代償として、擬人的なる「ゴット」仏陀基督等に愛着し、燃ゆるが如き熱情を之に捧げているのである。歐洲に於ては神に対する愛を天上の愛といふ、男女間の愛情を地上の愛と云い、両者の間には愛の対象に一身を委して熱烈無限の愛情を捧げる点に於て共通性を持つてゐるから、所謂地上の愛が天上の愛に転向するのも決して異とするに足らない。我國に於ても、昔から「法悦」と云つて、僧尼が仏を専念し三昧の境に入る時には、性的感覚と同様な快感に襲われると云うことであるが、エリスの説に依るも、熱烈に敬虔に神に奉

仕している時、遺精する僧侶があり、また神の礼拝中、情熱に苦しむ婦人もある。思うに禁慾生活をなした僧尼の中にも、所謂法悦の三昧に入つて肉慾の代償を得ている者が隠分多いかも知れない。熱烈敬虔なるキリスト教信者として世に知られたツインツェンドルフ（十七世紀時代の人）の生活は、性慾の衝動及び感情が全く宗教の方面に転向せられた顕著の実例の一である。彼は少年時代より燃ゆるが如き同性的愛情を抱き、キリストを以て自己の精神上の新郎といふ、また「サジスムス」的傾向があつて、キリストの創傷を腦中に想像することによつて最高の快感を覚えた。彼が行つた宗教的儀式、即ち同胞間の接吻、寝ず番、愛の馳走等は、いずれもキリストをば彼の性的生活の対象とする情熱の要求から起つたものに外ならない。これと揆を同うするのは、女性としては、ゴットフリード・ケルケルの作「ドロテアの

花籠」に描かれた「ドロテア」である。彼女は一時テオフィルスという男を愛していたが、併しその恋の到底成就することが出来ないのを悟つた時、その燃ゆるが如き愛をばキリストに転じた。其の後テオフィルスが再び彼女に近づいた時には、最早や彼女は此の男に露微塵の愛情をも有せず、唯天にある新郎のキリストが、如何に不死の美しさを以て彼女の来るのを待ちつゝあるか、いかに彼女に無窮の生命の薔薇を与うべく準備しつゝあるかを語るのみであつた。

(三)

さりながら詩歌、芸術等の精神的創作物が、性慾の昇華或は等価として現わるゝと云う所説に就いては、多少の異論がある。之に關して少し許り私見を披瀝したい。抑々詩歌、芸術が性慾、愛情を根柢とし、或は之によつて助成せらるゝことは固より疑いなき処でクラフト・エビングも「性慾の基

礎なくして、芸術詩歌のあるべき筈は無い。芸術詩歌は愛情に於て空想の温熱を得るもので、これ無くては真の芸術の創作は不可能である。また詩と芸術とは色情の火に於て、その焰と熱とを得るのである。是れ詩人芸術家の好色なる所以である」と云い、メチニコフも「芸術家の才能と性的生活との間に密接関係あることは真である。詩人歌人はその感ずる愛情によつて其の芸術に結びつけられる」といふ、メビウスも「性慾は精神的生活に必要なもので、これ無くしては学才も技能も発達しない第一流の芸術家の創作が、多くは性慾の旺盛なる壮年時代に出来上つたことは周知の事実である。固より老年に至つても、其の技能、知識、経験は依然として留存し、従つて創作に従ふことは出来るにしても、併し神彩に欠けている。学者は愛のために研究を妨げられることあるも、芸術家に於ては却つて創造力が鼓舞せらるゝもの

である」といつた。

審美思想が思春期に至つて始めて完全に発現することや、愛情が青年の感情思想を刺戟鼓舞して詩的空想に耽らしむることや、また多くの芸術家詩人の生活に於て、愛が其の創作に有力なる刺戟を与えることは、明白なる事実であつてゲーテの傑作なる「ファウスト」や「ウエルテル」等が、彼の恋愛生活に於ける出来事と一定の關係を持つてゐることは固より疑うの余地が無い。また他の一面より觀察するに、これ迄世に知られた去勢者の中には、卓越した芸術家は一人も無く、唯詩人としてはアベラルド一人のみである。それとも四十才に至つて去勢したので、爾来その詩作を廢止したのであつた。

(四)

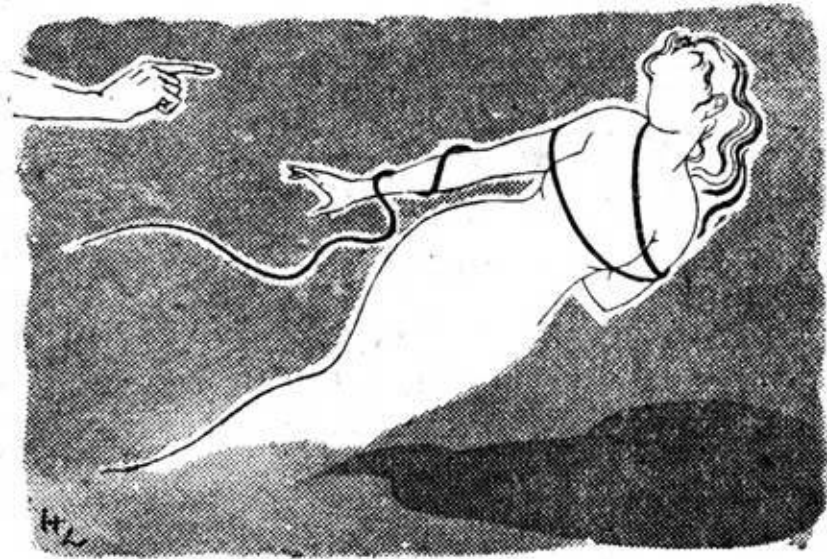
さりながら、イワン・ブロッホの述べた如くに、詩歌芸術を以て性慾の代償等価と看做すのは詩人

芸術家の天才を無視し、また其の優越なる創作の価値を傷つけるものである。蓋しレーウエンフェルドも説いたように、天才の創造力は必ずしも性的衝動に由来するもので無い。唯性慾なり愛情なりが詩人芸術家の創造力を鼓舞することとは疑いなき事実としても、而も其の創作の内容に対しては必ずしも影響を及ぼすもので無く、時としては却つて創造力を銷磨することがある。それは恋愛の不幸に終つた場合で、此の如き詩人に創造力の永続したような事實は殆ど無い。女流詩人アンネット・フォン・ドロスト・フルスホッフは、其の愛したレウイン・シュッキン

グがルイゼ・フォン・ガルと婚約を結んだ後は、其の詩作力を全く失つて了つた。美術家に於てもまた此の如き事實が認められる。巨匠ミケランゼロは其の熱愛したヴィクトリア・コロンナの永眠した後、彼は彫刻に用ゆる槌は猶お之を握り能うも、独り「美」を作

るべき「天の槌」——創作力——は全く消え失せ、彼は恰も火の消えた炭のようになったと短詩に詠じたことがある。

詩人芸術家が其の愛する対象を嘆美するがために創作することは固より明かなる事実で、例えばベトラルカの短詩篇、セクスピアの「ロメオ、ジュリー」、シルレルの「ドン、カルロス」、ゲーテの「ウエルテル」「ファウスト」等の如きは、其の恋愛生活の所産物と目すべきものであつても、併し單に愛情や、性慾のみでは此等の創作は出来ない。如何に愛情濃く、性慾強き者であつても、芸術的素質なく或は其の發育せざる者ならば、到底それが芸術的産物として現われる筈は無い。天才には創造の衝動がある。其の源泉は必ずしも性慾で無い。唯それが創造力を刺戟鼓舞するに過ぎないのである。



恋

の

烙

印

松井 籟子

画・まつ の けんじ

一

梅田へくると雨になった。

「あゝ、とうとう降り出した」

まるでそれを待つていたよう

に多摩子はつぶやいた。

朝からあまり晴れすぎていた。秋の空ばかりではない、四季を通じて、空は人の心のように変りやすい。

「変りやすいのぢやないわ、天の邪鬼なのね」

多摩子はひとり言をいいながらも御影へ行くことにきめていた。御影には木崎がいる。

「もう会うまい」と心にきめれば会いたくてたまらなくなるし「そんならいつそ会いたい時には自分を押さえずに会おう」と決めれば会うだけでは済みそうもなくなる。多摩子の心も空のように天の邪鬼だった。

木崎は夫の榎直人の友人で、夫と同じように画家だった。去年の

夏、一緒に写生旅行に行つた時、星空の下で、ふと木崎の多摩子に対する好意を知つた。そして、その時輝いていた星の一つがすうつと流れて、多摩子の胸にポツト灯がついた様に彼に魅せられてしまつたのだ。それから時々一緒に芝居をみにいつたり、音楽をききに行つたりした。

会うことが重なつてくると同時に「会わない」と約束することが多くなつてきた。

木崎も自分を押さえている。多摩子も自分を押さえている。それが苦しくなると「もう会うのやめましよう」という約束になるのだつた。

どつちがその約束を破るのか、清い恋のまま、もう一年つづいていた。

「今度こそ本当に、当分会わないでいきましょう」

一週間前にそう約束したばかりだった。

「今度こそ本当に……」

いつもは二、三日で破れる約束が一週間とつづいたのは、今度会

つたら、もう最後のつゝしみをお互に忘れてしまいそうだったからだ。

けれど、雨が多摩子の心のブレーキをはづしてしまった。

駅から遠い多摩子の家へ濡れて帰えるよりは御影でおりて、だらだらと浜の方へ少し下ればいい、木崎の家の方が濡れずにすむという。僅かな口実が多摩子の慕情をかり立てた。

駅の前には傘を持っていながら、雨足を見て出役つている人で一杯だった。それ程激しい雨になっていた。

多摩子はナイロンの風呂敷を頭からかぶつて雨の中へ走り出した。地面をたたきつける雨ははねかえつて、まるで土の中から反対に雨をふき上げているようだった。肩に当つて痛い程の雨にナイロンの風呂敷もずれ落ち、絹のドレスはビタツと体にくっついてしまった。走る度に乳房がゆれて、乳首が冷たい絹とふれ合つて、体中に稲妻が走るようだった。

木崎の家の門はすでにとざされていた。

庭の垣根のかいづかの少しまばらな所を押しわけて、多摩子は中へ入った。夜更けて、篠つくような雨の中に、そんな泥棒のような仕草を見とがめる人もない。枝のさきで腕をひつかいた。血が出たようだった。雨が雨に洗われてしまった。

木崎のアトリエだけ別棟になっていた。その灯のもれている窓を

「トントントン」

と多摩子はたたいた。

「木崎さん、ねえ、先生、あけて……」

声で多摩子とわかつたのか、答よりさきに窓があいた。

「どうしたの、そんな所から……？」 今、玄関あけるから向うへま

わりたまえ」

と言うのに

「いいの、びしよぬれだから、ここからあがる。いいでしょう？」

「そりやあかまわれないが……」

「先生、向うむいていて」

多摩子は肌にビタツとついてしまったドレスをはがすようにぬぐと、しばつて窓の手すりへおいた。次はスリッパ、そしてズボースまで……。

多摩子は素裸になると、シャワーを浴びるようにもう一度雨の中へ出ていったが、体からしづくをたらしめて窓辺へあがつた。

「先生、タオルかして」

裸のまゝ手をのばすのに、木崎は無言でタオルを手わたした。

多摩子はそれでも体中を丹念にふくと、やつと部屋の中に入つた。そして茫然としている木崎の胸へ、いきなり全裸のまゝとびついてきた。

「見ちやいや！ 恥しい。先生、見ないで……」

まるで自分の体を彼の体の中へはめこんで彼の目から見えなくなるように、裸の体をこすりつけた。

なるほど、びたつと体をよせつけられれば、木崎の目に多摩子の裸体は見えなくなる。

しかし、彼の体中の見えない目が彼女の体を感じとつた。

「先生、私……。会いたかつたの」

多摩子は上半身を少しはなして、見上げるように彼の顔を見た。その桜色に光っている胸に、赤いルビーが細い金の鎖で一つだけ輝いていた。そして、そのルビーの下の谷間をつくる二つの隆起に

木崎の目がいつた時

「先生」

多摩子は彼の唇に自分の唇を近づけてきた。

再び彼は多摩子の体を見られなくされてしまった。ただ、彼の手が彼女の体をすべっていく。きめの細い、果物のような彼女の体を彼の手が、彼の指のさき目に目があるように、二つの眼はかたくとじられているのにかかわらず、指が多摩子の体をくまなく見た。

すると

「寒い！」

多摩子が言った。

まだ暑さの残っている秋のはじめとはいふものの、冷たい雨に打たれてきたあとで、風邪を引かないものでもない。

「寒いわ」

多摩子にもう一度言つて、そこに敷いてある彼の寝床に目をやつた。

「お行儀が悪すぎるかしら？でも、寒い……。あとでたんとあやまるわ」

そういうと、裸のまま、まきつけるように布団をかけて、彼の寝床に身を横たえてしまった。

二

「とうとう駄目だった」

多摩子は木崎の胸の中でつぶやいた。

「私が悪かった？」

「ああ」

木崎が笑いながら言う。

「そうよ、私が悪いのよ、先生が折角自制して下さるのに、押しかけ女房みたい……」

「本当にはだかの花嫁さまだ。僕の女房になるかい？」

それが出来る位なら最初から「もう会わない」などという心の垣根はつくらなかつただろう。

姦通罪というものがなくなつても、妻を愛し、妻を信じている一人の男を裏切ることが、罪でないといえるだろうか。

夫は多摩子を愛してくれていた。しかし彼女の方から夫に対して心を燃したことはなかつた。女の幸福は愛することよりも、愛されることにあるのかもしれない。結婚生活はその方が多摩子にとつて安泰だつた。

しかし、木崎に会つてからというものの、今まで思い及ばなかつた恋心を知つたのだ。愛されるのではなく、ひたすらに自分からはたきかける愛情だつた。

夜の寝床で夫から唇と唇を合わせる接吻ではない、男の体を讃美するくちづけを求められても、多摩子にはどうしてもそれが出来なかつた。

しかし、それを昨夜、自分から木崎にしてしまったのだ。

木崎の愛撫の手の中で、するつと身がかめると、彼の男の証撫をしづかに口の中にふくんでしまったのだ。

「多摩子さん」

木崎は彼女を抱きしめて、彼女の体中が心地よいさざなみを立てつづける程、指を彼女の肌にすべらせながら「もう駄目だ。僕はもう溺れてしまふ。いいんだね。こうなると思つたから僕は我慢して

いたんだ。もう君を離さないよ、いゝね」

きれぎれにそう言いかけるのに

「いいわ、いいのよ、私も離れない……」

そうきれぎれに答えて、一夜をあかしてしまつたのだ。

「直人さんに僕から話そうか僕ははつきり君を僕のものにしたい」
朝になつて、真剣にそういう木崎に、意外にも多摩子は言つた。

「私、先生と結婚するのいやなの」

「何故？」

木崎には多摩子の心はかりかねるらしかつた。

「何故つて……愛しすぎているから……」

「だから僕だつて本氣になつていゝんだ。他の女なら浮気で済む。

君とは浮気で済まないのだ。それがこわいから、むしろ君からはなれようとしたんだが、こうなつたらもう駄目だ。僕はもう君に溺れても悔いしないつもりだ」



「私はもうこれ以上溺れるの恐ろしくなつたの。それがわかつていたのにここまでできてしまつて……。私が悪いの、でもここでふみとどまらなければ……。結婚するの、こわい……」

「何が恐いんだ。あとは君の境遇を事務的にどう処置するかというだけぢやないか」

「あのね、こんな氣持、男の人にわかつてもらえないかもしれないけど……。ねえ先生、私があの絵を破いちやつたら、先生怒るでしょう？」

多摩子はアトリエにかかげてある木崎の画いた裸婦を目でさした

「それからあの絵も……」

青いドレスの女の絵……。

「それから、あれ」

扇を持つた女の横顔……。

それ等を目で追いながら、多摩子は言つた。

「私は直人が、どんなモデルを使つて、どんな絵を画こうと一寸も心がさわがなかつたの。それなのに、先生を愛し出して、先生の絵の一つ一つに心がさわぐの。誰をモデルにしても、そのモデルに愛情をもたなくても、画家の目でそのモデルの美しさを引き出すのが画家の仕事なのだと知つていゝの。それなのに、先生の目がモデルをみつめ、その美しさを引き出すのかと思うと、胸がきゆうと痛くなるの。これ嫉妬なのね。私は私がこんなにも嫉妬深いとは思わなかつた。先生の仕事にまで嫉妬したら、先生、仕事が出来なくなるわ。私は本当に人を愛したら、その人の全部を自分のものにしたくなるらしいわ。そんなせまい愛情でがんじがらめにされたら、先生の芸術はめちやくになつてしまふ。それが恐いの。ねえ、やつ



ばりもう会わない方がいいわ。先生との恋は、花火のような夢で終らせた方がいいと思うの」

「どうでもいいようにしたまえ」

木崎は怒ったように言つた。

「つまり君は僕とは浮気がしたかつたんだらう。愛するとかなんとか、言わなければいいんだ。僕が本気になつたので急に逃げ出したくなつたんだらう。それもいい、どうせ、君は楨直人夫人なんだから……」

「違うこんなに先生を愛しているのに……」

多摩子はもう一度そう叫んで、木崎の胸にすがりたかつた。

しかし、多摩子の知性がそれを押しとどめた。

多摩子の中には野性と知性が同じ大ききで座を占めている。昨日は野性が勝利の声をあげた。今日は知性が悲しい勝ちを奏したのだ。彼女は木崎の瞳を見ずにいとまをつけて帰えつて来てしまつた。

三

「おかえり」

夫の直人は何の屈托もない顔で多摩子の帰えりを迎えてくれた。

「昨夜はよく降つたね、どこかで雨やどりしていて、終電車をはずしちやつたんだらうと思つていた。どこにいたんだ？」

一つもそれをとがめていないやさしい語調だつた。

「木崎さんの所へ泊めてもらつたの」

多摩子はむしろざりと痛い所を切開するように言つた。

しかし、直人は氣にもとめず

「そうか、木崎の所とは氣がつかかなかつたな。あそこなら駅から近いからね、僕も今度利用してやろう」

と笑いながら言うのだつた。

多摩子はそんな夫に、心がしめつけられる程済まなく思つた。

いつそ、人妻が独身の男の家へ泊るなどということはもつての他だと責めてくれれば、貝殻が身を守る為にかたく口をとぎすように……、自分の秘密をにぎりしめてしまふのに……。

「あなた、やきもちつてやけないの？」

みすみす危険な淵へ自分をおいやり、夫をつれこむことになると思ひながら、夫の冷然とした顔に言つてみたくなつた。これも多摩子の夫の邪鬼のさせるわざかもしれない。

「やきもち？ ばかだな。お前みたいな人妻と火遊びの危険をおかさなくても、木崎には若い女がいくらでもいるよ」

ふつと多摩子の心にわけのわからない蔭が走つた。

「でも、もし私が木崎さん好きだつたら？」

「俺もあいつは好きだ。いい奴だよ」

多摩子はいらいらしてきた。直人はどこまで人がいいのだろう。自分を愛し、自分を信じていてくれる夫の情の前に、よけいに自分が小さく、みじめになつてくる。

多摩子は寛大な夫に敗北しそうだつた。同じ敗れるなら、もつと他の力の前に敗北したかつた。人間の大きさの前に頭を下げたら、それつきり一生自分の頭は下つたきりになりそうだつた。多摩子の

強情は直人に対してその敗北をころよしとしなかった。

「私、木崎さんを愛しているのよ、昨夜、私、木崎さんと……」

「え？」

「木崎さんと……一諸に……寝てきたの」

「ばか！」

いきなり直人の手が多摩子の頬でなつた。

「いいかげんにしろ。お前の悪い癖だ。俺に愛していると言わせたために、おかしいな技巧を使う。俺がお前を信じ、愛していることはわかつているぢやないか」

多摩子はジーンと熱くしびれている頬に手をやってだまつていたそう。暴力の前なら負けてもいい。男と女の戦いで、暴力の前に女が負ける時、負けていながら女には救いの道がある。暴力で女を敗かせた男には救いはないのだ。

多摩子は直人の、神に近い心の前に素直に平伏する程、直人を愛してはいなかった。

そしてそれよりも、直人にぶたれて、蹴られて、めちやくにされたら、自分の木崎に対する意志も、同じようにめちやくにふみにじられて、再び燃えずにすむと思つた。

多摩子はわざと夫の憤りがわき立つように叫んだ。

「私が木崎さんと関係したつて、あなたが悪いんだわ、あなたが私をつかまえていてくれないから……」

「なに？」

直人の手がもう一度多摩子の頬にとぼろとするのを、彼女は本能的に両手で顔をおほつた。

直人はその手をぎゅうとつかむと

「こいつ！」

片手で多摩子の手をとつて、引きよせるようにして、片手で頬をなぐつた。

両方の頬がボーッとふくれたような感じがして、歯で頬の肉をかんだのが、口の中に酸いような血の味がひろがつた。

——木崎さん——

多摩子は思わず心の中で叫んだ。まるで子供がいじめられて親を呼ぶように、木崎の名が唇からとび出しそうだった。

多摩子はそうした自分の心に反抗した。

自分から「もう会わない」と決めてきたのに、何という心弱さだろう。もつと、もつと直人にひどい目に合わされなければ……。

そして、木崎を本当に忘れ去らなければいけない……。

多摩子はわざと夫の方に冷たい目をむけると、

「ふん、気がすんだ」

わざとふてくされた微笑を夫になげた。

直人は再びかつとした。

「此方へこい！」

多摩子の手をとると、ひきつるように浴室までつれていった。

「裸になれ」

多摩子は言われたとおり裸になった。

昨夜木崎との愛撫の間に、いつつけられたのか、乳の上に赤いあざのような痕が残っていた。

思わず両手でその上をかくすと

「手をはなしてみろ」

直人が言つた。

彼女はそう言われて、むしろしつかりと、その赤いバラの花びらのような痕を手でおほった。それは木崎との思い出に咲いたバラの花だ。今、それは夫の手で無慙に散らされる。そして再び咲くことはない。咲かせてはいけないのだ。それを再び咲かせない為にこそ今、夫に責めて責めて、責めぬかれてしまいたいのだ。

「はなさないな」

直人は言う、強い力で多摩子の手を後手にねじりあげた。そして、両手をつにして、風呂場にかゝつていた手拭でかたく結んでしまった。

「これは何だ？」

直人は乳の上の赤い痕をみると、多摩子が今まで見たことのない光で目をきらきらさせながら

「では本当だったんだな、本当に木崎と……」

夫の体から青い焰がメラメラと燃えあがつたように思った。

「こいつ！」

多摩子を押し倒して、いきなり乳の上に足をのせると、その赤い痕をふみつぶすように、ぎしぎしとふんだ。

「ううっ！」

多摩子は痛さに思わず呻った。

二度、三度、直人は足の裏いつばいに乳房をつかみこむようにして、ふみつぶしたが、今度はその足で多摩子の体を蹴った。彼女は後手に縛られたまゝ、風呂場のタイルの上へ転がされた。

「洗つてやる。そのけがれた体も心も洗つてやる」



直人は多摩子が無理やり、からの風呂桶へ入れると、上から押さえつけて、水道の蛇口の下へ多摩子の顔を持つていった。チャア！チャア！と激しく落ちる水に、目も鼻も口もたたきつけられて「苦しい！」

呻めく声が声にならずに、水にむせんだ。

昔の仕置の絵に頂度こんなのがあつた。

罪人の女を、土の上に横たえた梯子に手も足も縛りつけて、両側に置いた二つの手桶からかわるがわる柄杓で水を女の顔にかけるのだ。鞭や竹で打つのと違って、罪人の体に痕は残らない。しかしその苦しさは息つく間のない苦しさだった。

今、直人はそれと同じことをしようとしたのだろう。

しかし、その時、玄関に誰か来たのか、ベルが鳴った。

直人は多摩子を風呂桶へ入れたまゝ、首をはさんで両がわから、風呂のふたをしめると、あり合わせた盥をどかつと上に置き、水を

満たした。

「少しの間そうしていろ。そして、よく自分のしたことを考えてみる」

そう言いすてると、風呂場の戸に外から襖をして、去つていつてしまつた。

四

どの位の時が立つたろう。

それは随分長い時間のように多摩子は思つたが、僅かな時間だつたのかもしれない。

体中が羽をむしられた鳥の様にそうけだつて、直人が無言で手拭をとぎ、体をふいて、毛布にくるんでくれたが、齒の音が合わない程ふるえた。

「寝ろ」

邪険に直人がいうのに反抗する気力もなく、寝間に入ると、直人が敷いてくれたのか、寝床がとつてあつた。

その中へもぐりこむと、多摩子はしのび泣き出した。

「お前は信じていた人間に裏切られることが、どんなに大きい打撃であるか想像出来るかい？、俺は神の心でお前を愛し、信じていた本当に神なら何をされようと同じ心を持つているだろう。俺は人間だ。悲しいかな人間だ。お前は俺を悪魔に売つたのだ。いゝか、俺は楨直人ではない、悪魔になつたのだ」

あくる朝、そういう直人の顔がたつた一日で深いかげを作つてしまつてゐるのを多摩子は心に痛く感じた。

直人を愛してはいないとはいえ、あまりに自分勝手なふるまいだつた。

た何かに憑かれていたのだと思つた。直人が神の心で自分を許してくれるよりは、むしろ悪魔になつて責めさいなんでもくれる方が、自分の気持もすむかもしれないと思われた。

「今日から俺はお前を一生かかつていじめてやるんだ。いいね」と直人が言うのに、多摩子はだまつてうなづいた。

木崎を慕い、木崎を愛した想いは、一夜の花火のような美しさで自分に報いられたのだ。恋はかなつたのだ。自分の激しい愛情で木崎をがんじがらめにするかわりに、直人の憎悪に縛られよう。それが本崎を愛する道なのだ。

「私を縛つて、身動き出来ない程縛つて！」

多摩子は直人に言つた。

「私の中にも悪魔がいるの。私の悪魔をたたき出して！」

「よし、縛つてやる」

直人は押入から細引を出してくると、多摩子の手を後手にくくつた。

「もつと、きつく！ 動けないほど……」

直人は多摩子の両足を一つにして、その紐のさきを首から、腕から、ももから、順ぐりに体中を荷物を縛るように締めあげていつた

「ああっ！」

多摩子は思わず呻く。

そして、上の空で

「もつと、もつと！」

と、叫ぶのだつた。

肉体の苦痛が激しくなれば、心の苦しさは軽くなつた。

直人はそれに気がついたのか

「こんなことでお前が許されるものと思つたら間違いだ。これはまだ悪魔のすることではない……。しばらくそうしてろ」

そういうと、多摩子を柱にしばりつけて、外へ出て行つてしまつた。

多摩子は体中が痛さを通りこして苦しく、かつかつと火のように熱かつた。自分の憑かさをどう泣いてみても、肌にくい入つた紐はとけなかつた。

「痛い！ 痛い！」

と、声に出して肩で大きく息をしながら呻めきつゞけていた。

そのうち直人が一人の女を連れて帰つてきた。

唇を真赤に、はみ出すようにぬつた女は一見して娼婦のようだった。

パツとついた灯の下に、芋虫のようにころがされた多摩子を見ると、驚きもしないで、「ああ、これがそのあんたの不貞の奥さん、フン、いい恰好ね」

と、女は酒くさい息で笑うのだつた。

「お上品ぶつた顔をして、何だ、あたい達より悪いぢやないか、フン、でも、女の縛られた恰好つてはじめてみた。痛いかい？」

女は足の先で多摩子の体にさわりながら

「随分ややこしい縄のかけかたしたもんだね」

と、右に左に多摩子の体を動かした。その女の足の下で、多摩子はただ声をおしころして呻いた。

「多摩子、お前は俺にかくれて操を破つたが、俺は堂々とお前の目の前で、俺の貞操を破つてみせてやる」

直人はそういつて、多摩子の目の前に寢床をしいた。

「ねえ、おじさん、女つてものは目の前に見せられたつて興奮しやしないよ、男と違うんだから……。ねえ、一寸この奥さん、興奮させてやる方が面白いぢやないか」

女が言つた。

「ぢやあ、どうするんだ」

直人が言う。

「そうね」

女はまるでたのしいことをするように多摩子の胸をひろげて、乳房を出した。胸にまわされた細引でくびれて、乳房はひょうたんの様にゆがんでいた。その乳首のさきを、女はほうづきの実でもいじるようにいじつた。

「あたいも変態だね、一寸、まあいいや、それをおじさんに見こまれたから……。ねえ、おじさん、あたいが右側うけもつから、おじさん左側いじつてごらん。それから片手で足の裏をくすぐるんだよほら、奥さんの顔がゆがんできた」

多摩子は泣くような笑うよらかな声を出して身をもだえた。

「悪魔になる……」

と、直人は言つた。

それはまさしく悪魔のあそびだつた。

多摩子は目の前で夫が他の女と悦楽の声をあげるのを見せられた。そうしては直人と女は多摩子をなぶり者にした。

彼女の体にささなみが立つても、大波小波となつて打ちよせる岸もなく

「打つて、私を打つて！」

と、叫び出さなければならなかった。

肉体に受ける激しい苦痛が、彼女の心をしびらせて、何もかも忘れさせてくれた。

そして麻薬に酔うように、直人の暴虐の下で身をもだえることが不思議な陶酔になつて、多摩子を魅惑するのだつた。

多摩子の白い体は縄目の痕や鞭の痕で、いたいたしく変つていった。

直人は今、「直人」という焼判をつくらせている。それが出来上つたら、彼女の体には永久に消えない焼痕がのこることだろう。そ

古来、女の責め場は歌舞伎狂言や草紙本等にずいぶん使われて来たもので、昔も今も変りのない大衆が、たゞ単なる世話物や、決りきつた濡れ場の筋書きのみでは満足しない様な場合、その筋書や物語りに一つの興味的な山を盛り上げる為に、または人間性の底に流れる嗜虐的な感情を満足させる為に、一種の色彩的な効果としてねらつたものと考えられる。

現実では、それほど美しいものとも思えない責め場が、ひとたび舞台や文章の上に移されると、それはもう夢幻の妖しさ、美しさとなつて観衆を、読者を魅了するのであるが、特に近時においてはその「責め場」を描写した映画や小説が盛んに巷間を賑わしている。元来「責め場」そのものは、舞台面に現れた

してそれは花火のように消えた木崎との、恋の烙印であるのかもしれなかつた。

(おわり)

もの、絵草紙等に現れたもの、映画、小説等に現れたもの等と一つ一つ例挙すると、おそらく許されたスペースのみでは読者に紹介し切れない恨みがあるので、今の場合は表題の通り小説に現われた女の責め場の代表的と思われるもの二、三を並べて見ることにしたい

○
今では古本屋の棚の中にもあまり見られな

くなつたが、筆者が往時よく好んで読んだものゝ中に前田曙山がある。この人の作品のうちには責め場が出てくる「肉の犠牲」「燃ゆる渦巻」等だつたと憶えているが、同じ頃の「くじやくの光」と云う幕末ものゝ終末の方に年増の女が、京都の三条大橋だつたかの橋詰

で真昼中、丸裸にむかれてさらし責めにあうところがある。あの頃とすれば随分思い切つた描写であつた様に思われるが、とにかくキの字に組んだ丸太の上に両股を開いた姿で、身に一糸もまとわずさらされている女の、陽にてらされて羞恥と苦悩に全身からじり／＼と脂汗を流し出す様が描かれてあつたことを思い出す。直木三十五の「殺生関白行状記」や「斎藤道三行状記」の中にも女の責め場があつた。

女を責める場合には、たいてい、弓の折れで叩くか、吊し上げる様である。其の他松葉いぶしや蛇責め、海老責め、算盤責めと種々様々な責め方がその場所、人物等の配合よろしく出て来るのである。

吊し責めの変つた一例として三上於菟吉の

「淀君」の一部分にはこんな場面が出てくる

どのような思いつきを実行しようとするのかは知らず、淀君の言いつけ通り、二つ三つ又は組み上げられその上に一本の横木の丸太が渡されました。

「ほ、それでよろしい——」

と淀君は、ます／＼冷たい笑いをうかべて「その十人の女子は、いづれも黒々とした美しい髪ぢやの。その先端をひとつに結び合わして見や——中略——

思いもかけぬ悪運のとりことなつた女たちは、恐るべき拷問に付せられぬ以前に、すでに失心しているように、たゞなされるまゝになつてゐるほかはありませんでした。

それがかえつて淀君の色眼鏡をかけた目には押が太い女たちの集りのように見えたのでしよう——切れ長の眼尻が、キリ／＼と釣り上りました。

「ホ、ホ、物好きな女子たちが、髪の毛でめい／＼のからだの重みを測つて見たいそうない／＼」

大衆文学に現れた “女の責め場”



高 月 大 三

——ソレ、釣り上げい！——

非常いましめの強力の女たちは、力を合せて十人の犠牲のからだをさしあげ、横木を心に五人づつ、左右に釣り下げました。

髪の毛で、めい／＼のからだを釣り上げられて、今まで死んだようになつていた女たちの意識が、言い難い苦痛のために一どきによりみがえりました。

ウ、ウ、ウ、ウ！
ア、ア、ア、ア！

血死期のうめきより、より凄惨なうめきがすべての女たちの口から洩れ、目は逆吊り口

は歪み、齒はむき出され、手足、胴体は異様に揉みねじれました。すると、この苦悶がからだに——その重味を加えてめい／＼の小鬚の毛はすでにポリ／＼と抜けはじめ、やがてそのあたりの毛穴から、ポツ／＼と血がにじみ出し、見る／＼その血のしづくが紙よりも蒼白い、頬のあたりへ流れしたゝるのです。

——以下略——

吊し責めにもこの様に髪の毛で釣り下げるのもあるが、好色的なものは逆吊りであろう。実際にはとても好色的などと云うものではない。かろうが、小説になると好色的になるから文章の力と云うものは妙なものである。その一例は寿々喜多呂九平の「左平次物語」の中で悪目明しがお銀と云う女を男の眼の前で責めるところがある。此の場合一応裸にするのだが腰巻はわざととらない、そして足首を縛つて（勿論両手も縛つてあるのだが）天井の環にその縄を通し、白状しなければこうだと云う訳で徐々に引き上げる。この人のものには途中で救いが出て来ない様である、少しづつ足が上ると腰のものがまぐれて来ると云う寸法であるから、これは女の苦痛よりも羞恥心をねらつた責めであろうか。

角田喜久雄の「神変八咫鳥」にも白屋、女が松の木に吊されるところがある。其の他の場面にもよく責めが使われるようである。

横溝正史の「神変稲妻車」には、これは女ではないが、少年が松の木に吊り上げられて責められる章がある。女の責め場の紹介ではあるが、此の場面は相手が美少年であるから一応御参考までに。

(見よ、開けはなつた広縁のかなた、寒月皐々たる庭の松の木に、殆んど裸体に近い恰好で宙にブラ下げられているのは、哀れ美少年白鷺弦之丞ではないか。)

「どうじやな。まだみすゞの笛の所在を白状いたしませぬか」

ほんのりと酔いをはいた珊瑚の頬はまたとなく美しい。玉虫色の唇の、妖しいまでのあでやかさ、珊瑚の盃をおくと、ふと庭のほうに向つてそう云つた。

「はい、もうどうにも洩太い奴でございますわい。これだけ折檻しても、中々白状しようとは致しませぬ」——中略——

ほゝゝとばかり、艶然と笑うと白魚のような手に取り上げたのは、節くれ立つた青竹である。腹ごなしにやる方はそれでよいかも知

れぬがやられる方ではとんだ災難だ。繩荒の結び目に、ぐいと青竹を捻じ込んで、こいつをぐびりぐびりとこね廻したから耐まらない。

「ウーム！」

苦痛の呻き声が喰いしばつた齒の間より洩れる。

「苦しいかえ、これ弦之丞、苦しかろうの。しかし、これはまだほんの小手調べ、妾や雁阿彌のように手加減はせぬ故、そう思うておくれ」

一旦、縄目へさし込んだ青竹を、ぐいと抜くとビシヤリ、割竹が物凄く鳴つて、そのとたん、弦之丞の背から腰へかけて、ツーツと痛々しい紫色の蚯蚓脹れが走るのだ。

「無念！」

松の枝から虚空にブラ下げられた弦之丞、睨も決せんばかり、唇きつと噛みしめて首をふれば、髻ブツツリ切れてさんばら髪、その物凄じばかり美しい痛々しさに、珊瑚の血はいよゝ逆上して来たのだ。

「ほゝゝゝゝは、無念かえ、苦しいかえ。おゝおゝ、無念であらう、苦しいであらう。しかし汝が苦しければ苦しがるは、妾の胸はスーッとする。もつと苦しんでおくれ、もつと

口惜しがつておくれ」

無惨、肌をつんざく寒風の中に、青竹が間断なく鳴つて、弦之丞の肌は忽ち縦横無尽の蚯蚓脹れで彩られていく。

あゝ、珊瑚が笛の詮議と云うのは口実にすぎないのだ。この美しい若侍の、地獄の咎に呻吟するのを見て妖婦の体内に流れている悪血は、世にも快くうづき、沸り立つのだ。「えゝゝゝ、これでもか、これでもまだ口を割らぬかえ」

青竹を握つた珊瑚はさながら狂気のように、やがて弦之丞の肌が破れ、タラ／＼と血が、白い背を、胸を染める。——以下略——吊し責めは野村胡堂のものにもふんだんに出てくる。富田常雄の「猿飛佐助」には、玉垣と云う女の忍者が室賀信賢に山の中と、船の上で二度も吊し責めにされるくだりがある。

山伏に身をやつした室賀信賢は藤蔓の鞭を片手に、べうべうと吹き渡る山の夜風のなかに突つ立つていた。

彼の前には、樹をもれる星明りに、女の裸像がほの白く浮んでいた。

琴鳴山の山頂に近く、樵夫小屋になぞらえ

て作つた、伊賀者の密会所の小屋外にある松の木に、おかめ（玉垣のこと）は両手をしばられ、上半身を裸にされた姿で吊り下げられていた。

と云う書き出しで、玉垣は真田幸村が描いていた要塞の絵図面のことを、白状しろと肌を刺す山気の中で責められるのであるが、此の場合も、他の作家の作品の大部分の責め場と同じ様に女は白状しない。責め場の女は、たいていの場合、白状しないか云うことを聞かないことになつてゐるのが一つのおきまりなのである。責められて白状する、または相手の云いなりになる、と云うのではあまりにあつけない結果になつてしまふのであつて、必死に耐えながら、責め手の思い通りにならないところがあらゆる責め場のミソなのである。

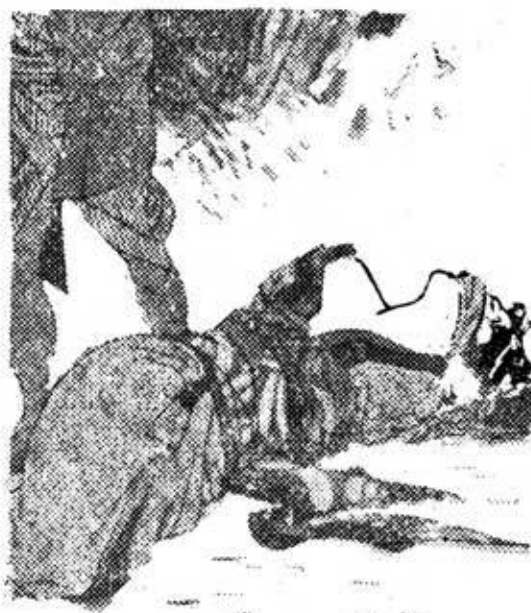
さて、次は玉垣が船中で責められる場面である。

篝火が焚かれていた。

太い樁柱には上半身を露わに剝がれたおかめが後手に縛られて吊り下げられていた。

黒髪が背に垂れ、船の動揺につれて乳房が樁に触れては離れ、押し潰されては離れた。

おかめは苦痛と羞恥に両眼を閉ぢていた――



と云うところから、おかめ（玉垣）が愛人猿飛佐助の眼前で全裸にされて責められるのであるが、此の場合責め場は、玉垣そのものに白状をしている訳ではなく、佐助の口を開かせべく、愛人玉垣を虐げているのである。天野屋利兵衛の拷問場で、その子供を火責めにするのと云つて白状を迫る処があるが丁度あの筆法と同じものだ。だから次に出て来る様な会話のくだりになる。

「待て。室賀信賢、おかめ殿を打つてなんとする」

佐助は絶叫した。

「不憫か。佐助」
と、信賢は少年の様に赤い唇をゆがめて冷笑した。

「信賢、汝は鬼だ」

「はゝはゝ、ほざけ、ほざけ、この女が不憫ではないか、佐助、汝を慕う可愛い女であらうがな。背の肉は破れて血が流れたぞ。これからは全身を裸にして、女の恥を晒らしてやるのだ」

「云うなッ、悪鬼」

「不憫であらうがな、猿飛。助けてやりたくば真田一門の在所を云え。幸村は船でいづれへ逃散したぞ。伴大助、又幸村の妻女は何処に居る。云えば玉垣を許してやろうぞ」

佐助は答えなかつた。――以下略――

そして玉垣は気を失うまで責められる、とか云うことになるのだが、さてあまり吊し責めばりを例挙していると他のものが書けなくなるので次にうつることにする。

○

渡辺黙禪の「小松嵐」馬子のお時の水責めは有名である。東家楽燕の得意の読みものとして――殺さば殺せと、馬子の時――の名調子となつたものである。これは幕末の水戸藩中におこつた物語りで、市川之左衛門と云う佐幕派の侍が、勤王派小松龍三の妻、滋子を奪わんとして責折檻する。龍三は幕吏に追わ

れて北海道に落ちのびるが、あの夜旅宿で馬子お時の危難を救う、このお時こそ彼の命の恩人であつたというのがその筋書であるが、おそらく読者は先刻御承知のことゝ思うので文章を書き抜くことは割愛しておく。

水責めも数え挙げれば多くあるが、火責めもよく書かれている、小島政二郎の時代物、「乳房祭」には雪江と云う美女が蠟燭責めにありところがある、この作家の小説にはところどころ責め場とまでは行かないが女を虐める場面があるが、必ずこれからと云う時に救いがあるのがおきまりのようだ。

陣出達郎は刺青ものばかり書いていたが、痛みを受けると云う点では嗜虐的な意味でちよつと「責め」と相通じるものがあることはいなめない。まして作中の刺青をされる女は必ず、ぼつてりむつちり色白のぬめ肌と云うのだからちよつと刺激的だ。

(……熱い湯が針の痕に沁みこむのである、さすがにその痛さに堪えかねて、さつきから、ひいひい悲鳴をあげて泣いているのを藤次郎は、何かこゝろ愉しい歌声でも聞いているようにきゝ流しながら、梟のような眼を見据えて、お才の縋の白肌へ十八本たばねの彫針を運んでいた。

「痛えかね。弁天藤次郎の針は八寒地獄の氷の針に刺さるよりも痛えというので評判だが、その代りあつしの彫つた刺青は七十八十の白髪になつても、筋一つたるまねえという保証つきなんだ。」

「うゝゝゝ、うゝゝゝ。」

「だが、お前さんは存外の我慢もんよ。勝氣に見せていても、お園さんは百針くれえで音を上げてしまつたが、お前さんは二百針でもまだ驅ひとつ、くねらさぬから大したもんよ。」

「風呂場から洩れてくるお園の悲鳴と、お才の歯を喰ひ縛つての呻き声とが妖しく纏れ、それを縫つて藤次郎が、お才の肌をチクチクと針で突き刎ねる音が入り交つて、まるで阿鼻地獄の亡者の苦悶を聞いている様な無気味な雰囲気部屋の中に漂わせていた。

——以下略——

この様な刺青の場面は此の作者のものには至る所に見られるものであるが「責め」ではなくて「責め」の雰囲気が出ていたのでちよつと書き抜いて見た次第である。

同じ陣出達郎の作品「艶魚肌」の中に擽り責めの場面がある。

「お前は瑠璃美に似ているが、強情なところ

も相当なものらしい、ふつふゝゝゝ。だが、わしは、じゃじゃ馬であればあるほど乗心地の良さを覚えるのぢや。うんと暴れるがよい。わしが馴らしてやるからな。」

そろそろと、右手が腰のあたりから這りおりののを、女は

「何を！何をなさいます！放して！放して！！」

権右衛門の緒ら顔を両手で押しのけ、必死の抵抗。それがまた権右衛門には、たまらない魅力……よろこび。

抱き締めたまゝ片手で女の扱帯、帯を、素早く解き、着物を剥ぎ、緋の長じゆばん一枚にすると、激しく打ち振る女の両手をうしろへ縛りつけ、傍の木馬の上へ押し上げ、またがらせ、

「じゃじゃ馬を馴らすには、これに限る。うつふゝゝゝ、馬が木馬に乗るや夏の月、か、これで音を上げなければ、お前も大した女だが。」

木馬は直径二尺、長さ三尺五寸の丸太に四本足をつけ、前に簡単な馬頭を形どつたもので、責め道具としてはなかなか効果のあるものだった。

緋の長じゆばん一枚の女が、うしろ手に縛

られたまゝ、こゝろ粗野なつくりの木馬に打ち跨がった姿は色つぽかつた。権右衛門は椅子に腰をおろすと、洋盃に酒を注ぎ、一杯ぐつと呻ると、机上の孫の手をとりあげ、女の足の裏をそれで軽く軽くすぐつた。このくすぐり責めの方法は、外見にはいとも優しく眺められるが、足の裏をくすぐられる当人にとつては、これほど、どうにもならない惨酷な思いは他になかつた。女は白い柔らかい足の裏を、そよ風の触手のように柔らかに撫でられると、くすぐつたさに、全身を海草のようにくねらせて顔をしかめた。しかし、どうにもそれを防ぐ方法はなかつた。うしろ手に縛られているのであるから、下手に抵抗すれば、木馬から逆さに落ちてしまふのだ。

「うゝうゝつ。」

女は肩で、軀のじり落ちるのを梶とりながら腰を左右へ揉んで、その激しくすぐつたさを堪えるのだが、そのたび毎に緋の長じゅばんの前身が乱れ、その下から女の艶やかな脛が覗き、それが段々に展開がつてゆく。

「どうだ、この辺で、うんと云つて見るか？ わしは、女を無理にどうするという事は、嫌いなのだ。女がその気になつて、負けましたと音を上げるまで、こゝろして馴らすのがわし

の好みなのじゃ。」

「いやです。死んだつて！」

と、権右衛門を睨みつけながら、女は更に肩でもがいた。長じゅばんの肩のところがじりおちて女の白い肌が覗いた。権右衛門はそれを見ると以前の瑠璃美の剛情な姿を憶い出し、

「あいつも木馬の上で音を上げなかつた。よしお前にも痛い針の御馳走をしてやろう。」

立ち上つて、女の長じゅばんを引きめくつて、女の背を覗きこんだ。女の背は白樺に鉤をかけた様に、艶々した純白だつた。権右衛門は手のひらで女の背を撫で乍ら、

「いゝ純肌だ。よしよし、待っているこんどこそは音を上げさせてやるからな。」

部屋隅の下つている鳴子の綱を引いて要



藏を呼ぶと、いつかの刺青師を直ぐに連れて来るように命じた。——(以下略)——

この文中に出てくる木馬は、「木馬責め」の木馬とは少し違う様である。おそらくこれは作者が操り責めの為に創作した木馬であろう。下村悦夫の初期の作品にも縛り責めがあつた様に思う、木馬の上に縛り付けて操つたものもあつたし、転がしたまゝで足の裏を操るものもあつた。たゞし操りに使う道具は孫の手ではなく鷹の羽根であるところが面白い。

泉鏡花の初期の作品にも美しい責めの場面が使われている。あの夢幻的な筆の運びは、責めの持つ陰惨さを打消して昔の絵草紙に見る様な妖しい雰囲気に取り入れるのである。乱菊と呼ぶ美しい腰元が、奥方の嫉妬からありもせぬ濡衣を着せられて、庭前に引き出され打ち叩かれて責められたあげく、庭の石燈籠に縛り付けられ、終に着物を剥がれて松の木に吊るされるのである。

文章の美しさと云えば、その一人に邦枝完二を挙げることが出来る、次に紹介するのは同氏の「歌麿」の一部分であるが、これほどちらかと言えば、女のマゾヒズムの方が男の

サジズムより強く現われている一例であろう
「おきた。おまへもう一度、いまのことをい
つて見な」

「あれ若旦那、何度いつても同じこと。おき
たは背中や腰に、この紫の痣を染めあげて貰
つてから、あの歌さんが……」

颯と煙管が庄三郎の手の上に撓^{しな}つて、いき
なりおきたの腰のあたりを畳へ滑つた。

「そ、そいつを、おれに、聞かせることか—

—さ、この腕にも力はある、痣の染上げな
ら、歌麿に頼むまでもないことだ。立派にお
れが務めてやる。」

「若旦那。おまえさん本当に。わたしをぶつ
てぶつて、ぶち抜ける気。」

「ぶてなくてどうするか。今更あんな面相描
に、見かへられちやア男がたゝない」

吸口から羅字にかけて、小さい波が起つた
と見る間もなく、ぴしッという音が鋭く聞え
た。

「あッ——」

「これでもか」

「若旦那——」

きゅつと歯を喰い縛つたおきたは、櫛巻か
ら解けた髪が頬のあたりへかゝつたのも忘れ
て、丁度芋虫のように青畳の上をひとりねり

うねつたが、さりとて逃げる気配など少しも
なく、なかば苦痛のうちに押へきれない喜
悦が、足の指先にまで滲み出ていた。

ぴしッと云う音がまた響いた。

「あッ——」

「どうだ」

三度、煙管の鞭は鋭かつた。

「若旦那——」

「これでもか」

「あゝ、たまらない、もつと、もつと、力
一杯」

庄三郎の眼は据つた。

「あゝ嬉しい、嬉しいござんす。命までも
と思ひこんだ若旦那の手で、ぶたれるんなら
どんな辛抱でもしましょうよ——さ、歌さ
んを思い直したあたしが、氣にいらないと仰
しやるんなら、どこなと好き勝手なことを、
ぶつたり蹴るなりしたがい、——あゝもう
あたしやどうしよう。若旦那、手加減なんか
いりやアしない。あたしが憎いと思つたら、
もつともつと骨の碎けるまでぶつてぶつて、
ぶち抜いておくんなさい——」

絛地に一刷毛、颯と引いた虹を見るように
おきたの身体には一つぶたれゝばぶたれる度
に、一文字の色が鮮かに残されていった。

肩から胸、胸から腰と、次第に剝がれてゆ
く浴衣の下から、寧ろ怖ろしいまでに蠢動し
ている肉塊の現われるのを見ると、庄三郎は
まつたく夢中であつた。煙管が撓えれば撓うほ
ど、おきたは苦痛とも喜悦ともつかない微笑
を頬に湛えて、部屋の中を転げ輪つた。——

(以下略)

以上抜き書きしたもののが必ずしも大衆小説
に現れた「責め」の全部ではない、おそらく
これはその一部分に過ぎないのだが、すでに
その一部分で予定の枚数がつきてしまったの
で、読者には誠に申訳ないと思つてゐる。

戦後、田村泰二郎の「肉体の門」を始めと
して、最近に致つては「責め」の内容をもつ
大衆小説が盛んに書かれる様になり、それと
共に挿絵にも戦前には見られなかつた、思い
きつたものが描かれる様になつた。「挿絵」
については、いづれ項を新にして書いて見た
いと思つてゐるが、戦前筆者が蒐めた「責め
の挿絵」を、他の写真絵画等と共に戦災で失
つてしまつたことは、今更ながら惜しまれて
ならない。

本文中に挙げた作家の氏名に対して、文章
の都合と繁雑さを避ける為に敬称を略したけ
れどもその点よろしく諒とされたい。こゝに
改めて敬意を表してこの項を終ることにする

(完)

「夢性の美少年」を讀みて

宿 命 に 哭 く

浅 田 正 人

拝啓

私は貴社発行の奇譚クラブを多大なる驚きと喜びを抱いて拝見している一人です。そして私の様な者にはとても云い現わす事は出来ませんが世の中に突に驚く程異様な心理に苦しむ人達の事を何んにか心強く思つた事でしょう。私は今迄そう云う人達の多い存在は余り信じませんでした、私一人だけの異常心理だと思つていたので。然し現在では全く信じざるを得なくなりました。そしてこゝにお便りをする大きな勇氣を持つ事が出来ました。

私は現在三十六才に成る一労働者です、妻と子供二人の家庭にて表平面穩に暮しているのですが精神的には物心ついてより一日だつて安らかな日はありませんでしたそれは私一人がこんな感情に苦しんでいるのだと思うからでした、自分自身でも何故こう成つたか分かりません。先天的と云いましうが自分の肉体を意識してより現在

まで何うしてよいやら判らない悩みに日夜責められ苦しんでいるのです、然し私にこれ以上の勇氣はありません。(進んで他の人達と交わる様な)今やつと思ひ切つてペンを取りまして貴社に私の苦しみ語り度いと思う次第です、若し差支えなかつたらお読み下さい。

私は思春期より現在迄女性に關心を持つた事は一度もありません。幼少より継母に育てられ継母を憎み反抗しつづけた事から次第に女に対して嫌惡の感情を抱く様に成つたのかも知れません。樂しかる可き青春時代も、暗い淋しい毎日の連続でした。唯一人の語る友なく、そして唯なんとなく紅顔の青年、男性的なる肉体の人に心を奪われるのでした、然しそれは只淡い憧れに似たものに過ぎなかつたのです。それ以上の方法も何も知らず唯悶々と自分の肉体を弄ぶだけだつたのです。(手淫は十七才に成つて勤務先にて無理に指

導を受けました)自分の肉体を弄び僅かにそれを思う人の肉体に想像して楽しむ極めて儂いものでした。

見渡したところ世の中には如何に好男子や男性的な同性が多い事でしょうが私は道行く人を見ても息詰るようなやり場の無い悩みに悶えました。

私のこの苦しみは解決を与えてくれる人は私の前に唯一人現れる事もなく皆その人達は女性との感情を楽しんでいるのです、そして私にはかねてから恐れていた軍隊生活がやつてきました。私は憧れの同性達との集團生活に対して自分の感情を恐れしました。

男ばかりの生活、そこには息苦しいばかりの男の体臭が満ちているのです。私は初めの内は何も頭に入らず唯自分の感情を鎮める事に努力するばかりでした。然し幸か不幸か私の居た軍隊にはその様な感情を持つ者は一人も存在しませんでした。だから私のこの感情

は私一人の胸に秘かにしまわれていたのです。この時支那事変が初まりました。私は勇躍しました。それは忠義心でも名誉心でもなかったのです。若し此のまゝ私が戦死してしまつたら、私の異情心理は誰にも知られずにすんだでしょう。この苦しみ多い人生に最後の解決を与える機会が来たのです。私はその意味にて死を決して出征しました。再びこの悩み多い人生に生き永える事のない事を大いに喜びつゝ――。

然し現実には余りにも予想に反した事ばかりでした。私は再三危機に身を挺しましたが微傷さえも負いませんでした。

そしてこの時初めて戦地にて春婦に接しました。(それは私が一度も春婦に接しないので古兵達が無理に連行したのです)然し私は童貞でした。女の肌に接しても何の感情も興味も湧かなかつたのです。

私の心は冷く嫌悪の情を増して

ゆくばかりでした。無理に連れて行かれ乍らそこに一縷の望みを抱いていたのに。私は其れ以来いよいよ自分の肉体と感情に絶望しました。他の戦友達が僅な暇を見つけて慰安を求めて走るのを悲しく眺めているばかりでした。決死隊に志願して私は負傷しました。然し生命は全うしました。死のうとして死ねなかつた私にあゝ又運命は逆転しました。病院生活一年有半、私は軍隊に別れを告げる人間となりました。傷心の身の置き所なく現地除隊をして満洲に職を得ました。満洲の生活こそ私の心に一筋の光明を与えるものがあり今迄苦しんできた私の胸に初めて幸福が来たのでした。実に偶然な機会に私の感情に共鳴する人に巡り会いました。その人は中年過ぎの生活力の溢れた人でした、私は夢中でその人に全身を捧げました。

こんなにも喜びがあるものだろうかと苦しくなる程男の肌を、今迄求めて求め得られなかつた男の肌を抱きしめました、そして今こそ初めて私の永い間の苦しみ、悶え悩みを一掃出来たのだと、駆け出した程の喜びをおさえ切れませんでした。

然しこの喜びに夢中になつたのも束の間やがて悲しい別離の時がやつて参りました。

その人は現地召集されて征つてしまつたのです。同時に私にも内地に帰る可き運命が待つていました。家庭の事情にて止むなく故国に帰る事に成つたのです。懐しい筈の故郷も私には冷たい無情な郷土です、然しそれ以上私の身に苛酷な運命が待つていました。結婚、結婚が待つていたのです。樂しかる可き人生最大の行事も私には何と悲しく惨めな事だつたでしょうか。

私は遂に来る可きものが来たと観念しました。今日迄何気なくそれを避けて来た苦勞も何にもならず、そうかと云つて事実を語り断るだけの勇氣もなく絶望のまゝ成

り行きに任せるより方法がありませんでした。私の焦燥を他所に事情は可速度をもつて進展して行きました、いよく絶対絶命の時です。あの大きな天の試練がやつてきました。あの古今未曾有の関西大風水害です。何と云う運命か私の相手の一家は逆流する暴風雨に押し潰され地上から消え去つてしまつたのです。私は呆然としてしまいました、然し私の心の中では此の大異変に感謝する矛盾がありました。そして私は再び一人の生活に入りました。数年後現在の地に来て、そして海軍の某地に整備の職を得ました。

戦局はいよく一日と重大化して行きつゝある頃でした。私には再び結婚の問題が始まりました。外面から見れば温順にして健康、何一つ云い分のない様な私が二十八才の現在迄独身でいるのは不都合に見えるのでしよう。私の下宿先にて連日の様に結婚の話に責められ断りようのない破目にな

つてしまいました。そう云う時、私は或る一つの試練をして見ようと思ひ決めました。それは一度誰でも好いから簡単に結婚して見よう、そして破綻の来るのは火を見るよりも明かなのだから直ぐ解消してしまふだろう。そして以後は何とか世間に対して欺かれるかも知れないと、そう決めて遂に二十八才の年の暮に相手をも大して見極めずに結婚してしまいました。

周囲の喜びの言葉の中に私は無表情にて時を過しました。そして初夜、私は矢張り、不安でした。二十八才の今日迄、童貞で然も女性を意識した事さえない身が今始めて女性と二人で夜を過すことの実に苦しく焦々しい、云いようのない気持でした。初夜は恐ろしくさえありました。妻と名付く女が傍に接した時、私の全身、水をかいた様な感情が走り過ぎました。一睡もしませんでした。お互いに、私は女の体に手さえふれませ

んでした。勿論女に接する快感なんか全然湧きません。唯朝になるのを祈る様にして待ただけでした。そんな一夜が明けて赤くなつた眼を冷水で洗い、言葉さえ交す術を知らずに顔を見合すさへ苦しく成る様な気持にて新婚第二日を迎えました。その夜が来るのがどんなに苦しく嫌わしく思つた事でしょう。

でも夜が来ました。もうどうする事も出来ません。妻の顔には明らかに妻としての愛撫を求める感情が表われていました。私は思ひ切つて床の中にて無惨な言葉を告白しました。その方がお互の上に苦しみを少く出来ると思つたからです。

私が語るのを妻は涙して聞いていました。可哀想な女、何も知らずに私の様な者の所に嫁いで来た女、私は今は深い憐れみさえ感じいつしか今迄味わつた事のない変な感情にと變つて行くのを知りました。

それは愛情でしようか、自分にも判りませんでした。とても女が愛しくさえなりました。戦地にて春婦の体に接した時とは全然違つた感情だつたのです。妻も今は恥じらいを捨て、私にすがりついて来ました。私は暫くして体の異状を知りました。初めて異性に対しての発情、そうです、私はその瞬間、一切を忘れて女の肉体を求めました。夢中のまゝの行動、然しそれは私には少しも歡喜を与えてはくれませんでした。唯終つてしまつただけでした。

女の肉体、世の男性が、あれ程狂喜する女の肉体、あゝそれは私に取つては何の快感も抱く事のな一瞬だつたのです、と同時に私はかつての男性の素晴らしい肉体を想ひ出し忘れていた感情が急に烈しく湧き起りました。私の求めるものは男性の肉体だつたのだと切実にそう思ひました。

それからの妻との生活は唯、何の感情もない空白なものでした。

然し運命の悪戯か翌年長男が出生しました。

私は苦しみに疲れ果てました。最初の目的では結婚も一時的なものと思つていましたが、事實はそうならず形だけでも夫婦として一緒に生活しなければならなくなり日と共に年と共に苦しみはつて来るばかりにて私は笑を忘れた、言葉を忘れた哀れむ可き人間となつてしまいました。そうした時終戦がやつて来りました。

終戦後しばらくして第二子が出生しました。二子の父親でありながら自分の人生に絶望を感じている私は、子供に対してさえ愛情を抱く事の出来ない哀れな人間に成り下つていました。自分のこの感情を憎み生存を呪ひ、為に他の人々の幸を、幸福な結婚生活をしてゐるのを羨ましい様な妬ましい様な気持で眺めて又、世に出て来た若者達が皆異性を求めるのを、たまらない気持で見つめているばかりでした。そして妻との交渉も嫌

わしくなり、妻も苦しみ、私も苦しみつゝ家庭は惨な状態となつて行くばかりでした。そうする内に世は自由となり種々の雑誌が街に溢れ、あの禁色までが出版されたのでした。私は禁色を読み、その世界を想像して狂喜せんばかりでした。私にもあんな生活が訪れたらどんなに生甲斐のある人生となつていた事でしょう。でもその生活に入るだけの勇氣はありません。それにもう今年になつては今更、の感じですし、若い時でさえ、交る人の無かつた自分、今の様な身になつてどうして、交りをつとめようと云う人が有るでしょう。今からの半生を、唯苦しみ、苦しんで終るだけの運命と諦めています。せめてこの私の通つて来た道でも、誰にも語る事の無かつたこの苦しみを貴誌の理解ある人々にでも読んで頂ければ、本望です。

奇譚クラブの「夢性の美少年」は実に好いと思いました。私の心

理と似ていて大変共鳴しました。けれど、私には到底その人と交る資格はありません。私は美少年でもなく、若くもなく、異性的でもないのですから、唯あんな人も居るのだと思つてこれからの苦しみを多き世の中、人生に、私に一つの力を与えてくれるものと思つて大いに心の中にて希望を感じて居ります。

実に下らない事を永々と書きまして、それに大へんな悪筆にて恐れ入りますが、文才のない私。思う事を充分書き表わす事が出来ません。最後に奇譚クラブに心から感謝致します。

そして稿を呈されました三村幾夫さん始め多くの人達に機会がありましたら私の様な生き方をして居る者も居る事をお伝え下さい。では皆様の御健康を祈りまして終ります。

失礼しました。

敬具

○ 読者通信 ○

貴誌益々御発展の段御喜び申し上げます。私は毎号貴誌の発刊されるのを首を長くして待つて居るマゾヒストの一人です。何卒次号には身も心もとろける様なマゾヒズム(男性の)小説をお載せ頂けます様伏してお願ひ申し上げます。それも内容の徹底したリヤリズムの長篇を是非お願い致します。美しい婦人の奴僕として宿命づけられた哀れなマゾヒストの男が幼少の頃ある高貴な家庭に拾ひ上げられ十二三才の物心ついた頃よりその家庭の一粒種の美しい令嬢の完全な奴隷として彼女に一生を捧げ、彼女は又典型的なサディストで彼をあらゆる方法で虐待し弄び惨酷な目に合はし彼の一生を自分の附属品として犬の様に奉仕させようという。この様な筋の小説を御載せ下さいますよう伏して御願ひ申し上げます。

(重症のマゾヒストOP生)

奇譚クラブは他の雑誌にみられない面白い記事があり、一度読み出したらやめられないのです。八月号の男性的女子の記は大胆な告白であればほんとうなのでしょう。奇譚クラブの愛読者の皆様どうぞお便り下さい。

(新潟県 宮下輝)

九月号の倒錯の告白ほど身につまされて読んだものはありませんでしたわ、他のどの雑誌に探しても見当らなかつた記事です。特に狂い咲くカンナの花の耽美的なのは大好きでした。わたしも一度でもいゝからあんな生活をしてみたいと思つております。生命をすり減らしてもいい、とさえ考えています。でも中々それもかなえられそうにもありませんわ。せめて誌上にだけでもどしどしあゝいつたもののをのせて下さいませ。

(安部ふみ子)

あらたま村の奥にて



二 俣志津子

ような後味の悪さが残っている。大蛇が娘に化けて恋する男とちぎりを結んだ。などと言う話はいくらかも聞いていたし古いが……どうも、あの部落は——。

私は急に水浴をしたくなつた。陽はまだ高い。私は四方に眼をくぼり、嗅覚を働かせた。清水の匂いがする——。私は敏捷な獣のように藪を越え、岩を跳んで、清水を求めた。細い糸のような流れと、掌ほどの池、と言ふより水溜りがある。岸には柔い苔が生え底は見えるが案外深そうである。

私は掌に水を掬つてほんの少し唇を濡してみよう。水質を調べる時の私の癖である。腹をこわしたり、肌を荒したりしてからではおそ

—— 駅からここまで来るには

歩きつづけてたつぷり

半日はかかります——

いのだ。匂いでも大体はわかるのだが……

水質はよい。よいとなれば話は別である。

解禁前でまだハンターも猟犬も入っていない山は平和そのものである。私は気兼ねなしに服を脱ぐ。私は一日身体を洗わないと気持ち悪いのであるが、あの部落で丸二日お風呂にも入れなかつたし、ぬらぬらしたような奇妙なトラブルに巻込まれて、耐え性もなく、切れるように冷めたい清水に身を沈める。快い気分である。足の爪まで見える清さの中に光りが私の身体を透る。屈折する。眼を閉じると、私の肢体は秋そのものようである。乳房が締る。身顫いする。女は、裸になることが楽しいのかもしれない……と、幻影のように、私は想い出した。

二

私は、その山峡の部落に夕方着いた。宿屋はある筈がない。そして、どの人も人ずき合

私は旅行が好きである。私は半ズボン開襟シャツ登山帽、小さなリュックサック一つと言ふ軽装で、山を峯から峯へ歩く、そして今I高原が右方眼下に海のようにひろがりかすんで見える山のいただきの松の根に腰を下している。今朝出て来た部落はとりに見えな

いが悪そうな顔をして私を避けている様子である。直感的に何かありそうだな、と思うのであるが、いちいち気にしていたら野宿しなければならぬ。祠でもあればいいのであるが、この辺りは猪が出るのを私は見てきている。山路、山畑にその跡がある、小学校の分校、辻堂でもいいが……と、もうどこにも泊めてもらえないような心になっていた。

とに角、私のような服装の若い女はめずらしいものか、他の村人よりも、遠くから私をじろじろと見る。子供達がそろそろとついてくる、そのうちに家もまばらになつて、峠が眼前に立はだかつている。陽は落ちていたがまだ明るい。えい、先の村まで歩いてしまえと、峠を登りかけたが、子供達はまだついてくる。私は振返つた。すると子供達は恐ろしいもののようにたじたじした。

「この先、まだ村あるの?」

と、私は子供達に呼びかけた。彼等は黙つて顔を見合せているだけである。私の気分はすっかり腐つてしまった。

「この村には、お宮もないのね。」

「お宮さんならあるよ。」

と、一人の鼻垂れが口をとがらした。

「ふーん、どこに?。ちつとも見えなかつた

じやないの?。」

「あるさ、なア。」

鼻垂れは仲間同意を求める。仲間達は私の顔を見ながら同意し兼ねている。

「あるさ、なア、峠の上に。」

「峠の上?。」

私は思わず振返つた。何もありません。と、「お狐様のお宮じゃア。」と、一人が怒鳴つた。それと同時に、わーつ、と、子供達はくもの子を散らしたように逃げて行つた。小さな足ののろい子は泣きながら一生懸命に走っている。

(馬鹿々々しい。)

私は次の村まで歩く決心をした。私は朝鮮の女の人のように腰を振つて身体全体で峠をのぼり始めた。疲れない私の歩き方である。

峠を登り切ると、山肌に刻んだように別な道があつて、山の松林の奥に人の気配がする。

それも、一人ではない。陰にこもつた声がある。私は目的のない気楽さから、興味のひかれるまゝに、峠道から外れて、崖の松の幹につかまり山に、登り始めた。刻まれた道を歩かない。樹の幹から樹の幹へ蹠音をしのばせる。何が出て来るかわからないからである。何時だつたか、賭博場へ引ずり込まれた

ことがあつてひどい目にあつた。去年の秋にはもつとひどかつた。いきなり猟銃でおどかされた。まだ肩に傷が残っている。後で知つたのであるが、好色な男達が、輪姦にもあきて、雄の猟犬を女にかゝらせてたのしんでいたとのことである。女の身体に布を巻き傷の付かないようにして……。

私は幹の蔭から蔭を歩く。と、陰気な堂が見えた。堂は高い、縁の下を腰を曲げて歩けそうである。階段の前に五、六人の男女がかしこまつている。古めかしい狐格子の前の縁に、場所に不似合いな、白い上着に緋の袴をはいた巫女が坐っている。格子の前に三十三の女がつくばり平伏している。私は足音を忍んで近付いた。

と、突然、若い女の声が流れてきた。

「がまのたゝりじや。」

平伏している女は全身をふるわせて恐れおののいた。階下に居る男女は溜息と共に囁き合つた。女の声が再び、確かにそれは格子の内からである。

「今日より毎夜十二時、がまの淵に肉をさげよ。」

「は。」

「お前の夫がいつもがまをとらえていた処に

だぞ。」

「は、で、病人の方は、」

「つぎ、」

「あの、病人は、」

「つぎ、」

巫女が伏せている女の肩を抱いて起した。

女は泣いていた。

「あの、何の肉を捧げれば。……」

しかし、もう次の者が階段をのぼつてきていた。

女はよろよろと堂を後にして峠道の方へ歩いて行つた。私は素早く女に先廻りして峠道へ降りた。もうすつかり暮れていた。その暗さの中にも女の顔色の青さが眼についた。

私は彼女を呼び止めた。

「どうしたのですか、あのお堂は一体何ですか?。」

「しーッ、聞えます。」

私は可笑くしなつた。何が聞えると言うのだらう。迷信にも程がある。迷信は、馬鹿にする益々頑固に迷信する。私は遂に、如何にも恐ろしいように小声で以て聞いた。

「あの御堂は一体何です?。」

「お狐様です。」

「お狐様?。」

「はア、あの御堂の内には白い大きなお狐様が居て、お告げをするのです。」

私は、はアんと、思つた。ありふれた迷信にすぎない。人をだますのだから狐にはちがいないだらう。或いは、あの巫女は腹話術を知っているかもしれない。それから、催眠術位は。私は先の村へ行きそびれた事がいよく自分ながら腹立たしくなつた。

そして、まあ仕方がない、この女の家泊めてもらうように話込もうと思つた。

「で、がまのたゝりとは何です?。」

「はア、実は宅はがま取りを商売に致しております。この辺にはがまが多く居りますで。

——それが、四、五日前からどつと床についたきりで、何の病氣やら、町から医者様にも来てもらいましたが、さつぱりわかりません私が代りにがま取りをやつてきていますけれども、どうも性に合いませんし……。」

私はがま取りの女をつくづくと見た。思つたよりも若く容色も豊かで、愚鈍でもなさうである。

「まだずーつとお悪いので?。」

「はア。」

「私、少し医者のこと知っていますのよ、それによいお薬も持っていますワ、あなたの御

主人の御容態を大体見せて下さいませんか?。」

私は、少しの薬を持っていたし、その薬の利用法も少し知っていた。例えば、外傷につけるヨードチンキをコップ一杯の水に一、二滴落して飲むと、大抵の風邪は治つてしまふのである。——が、女は相変らず鉛のように重い表情である。

私達はがま取りの小さな家に入つた。ランプの芯を細くして、一人の男が薄いふとんにくるまつて寝ていたが、私達が入つて行く、と、ギロツと眼をむいて私達を眺めてから向うへ向いてしまつた。

女はその男の耳に何事か囁いてから、財布の錢を数え、カンテラを持つて暗い戸外へ出て行つた。

私は、全く病人と二人切りになると、どうしていいのか見当がつかなくなつてしまつた。男は苦しそくに呻き出した。私は覚悟して男に近付いた、病症がわからなければどの薬を与えていいのかわからない。まさか齒磨粉をのませるわけにもいかないだらうし……

男はいきなり病人らしくもなく振返つて私の手を掴み、力強く私を引寄せた。はッ、と防ぐ間もない。私は男の胸の上に倒れた。男は私の首を抱いた。私も幾分柔道は知つてい

る。柔道と言つても講道館流でなく、渋川流の流れで、伝える者も今は後を絶っている。まあ柔道の話は別として、この男の私の首の抱き方も亦一種特別なことが胸に來た。何か獸を締殺す時のような、手馴れた素早やさである。他はすきだらけなのである。私は男の部厚い胸の上で身体的位置を定め、男が締めて來たら当身でいこうと思ひを決めた。

男は締めもゆるめもせずに、熱い息を私の耳に吐きかけた。

「申訳ございません。若い娘さんにこんな手荒なことをして、……それに、お前さんは旅の方らしいが、わしは、悪いことはしやせん。だが、わしの言うことを聞いてもらいたいです。ただ……。」

「まあ、離して下さつてもいいでしょう」

「いや、人に聞える。いやあの雌狐に、」

「雌狐?。」

私はこの部落へ入つてからひそひそと村人が雌狐と云う言葉を幾度も聞いた。勿論、あの御堂に關係あることに違ひない。

「……この近郷で、峠のお狐様と言へば知らない者はない。隣村の地主の家の学士様があの巫女が腹話術を使つてゐるのだ。と言いなさつた。それが聞えて、学士様はある夜

白狐につかまつたそりな。それからうわ言のように白狐々々と言つては夜になると山をほつつき歩き、毎日毎夜瘦せ細つて死になすつた。わしは、その学士様が死ぬ少し前、がま取りに行つて幽霊のよになつた学士様にお合ひしました。学士様がわしを呼止めた時は背すじがぞつと寒くなつたが、わしも男だ。学士様と並んで岩に腰を下した。だ。」

私は男の手が次第にねばりつくく締めてくるのに気がついた。それに、この男の目は、確かに慾情に燃えている。胸が鳴つてゐる。

「……学士様が言うには、白狐は居る。それは、けものではなくて、人間の女だ。素晴しい女で精力にあふれてゐる。僕のとつつかれたのはけものではなくて、堂の中に住んでゐる多淫な女だよ。僕は毎晩情交を強いられるのだ。氣を失うまで精力を吸取られてやつと許されるのだ。これを他人に喋つたら、その日のうちに、喋つたあなたも、聞いた者も皆な殺す。と、言うのだ。あなたは巖丈でなかなか殺されそうもないから言うが、あの御堂の中に若い女が住んで居る。村の地主や村長の御新造や、性に飢え、退屈し切つてゐる者は、あの御堂の中で、あの女と醜惡な戯れをやつてゐる。今日は誰、明日は誰、と決

つてゐる。男も入れる。僕も幾度か入れられた。狐格子の内から外がよく見えるように出來てゐる。巫女は男です。多分あの女と夫婦でしょう。恐ろしい夫婦だ。信者をあの堂の椽の上で凌辱するのだよ。巫女を男と知つていて來る後家さんや若い女もいる。それが格子の中からはつきり見える。緋の袴は前が裂けていて、その下は全くの裸だ。いとなみが御堂の中からはつきりと見える。(巫女に抱かれよ。その病氣はたちどころに治るであらう。)僕もそう言つたことがある。堂の内

で女と抱き合ひながら……浅ましい限りだ。全く何も知らずに、ケイケンな心から抱かれる処女も居る。あつ、と、驚いた時はもう遅いのだ。いくら驚き、助けを求め、呻き、泣いても、階下の信者達は、たとえ母親であらうとも助けに來ない。僕は見たよ。女は時々堂内から居なくなる、そして、地主の娘が入つていて出たらめを言うこともある。僕が巫女になつたこともある。(巫女に抱かれよ)と声が出した時、僕は六十三の老婆を抱いてしまつたよ、恥かしい。女が居ない時、村長の奥さんと、堂の内で情交したこともある。あの御堂は毀さなければならぬ。……」

男の一方の手がそろそろ私の腰を巻き始

める。私の半ズボンのバンドはゴムで、革のように簡単に知らない者には解けないのだ。彼はひそかに私のバンドをさぐり始めた。

「……学士様はその夜、松林の中で死んでいた。わしはとんでもないことを聞いてしまった。と、思った。が、学士様の話が耳について離れない。わしは、遠廻りに遠廻りし、要心に要心して御堂の裏へ廻った。一回目は恐くてどうにも近付かなかつたが、確かに地主様の娘が裏から入るのを見ただよ。次の日、わしは勇気を出した。何も魔力のある白狐ではないのだ。たかが人間ではないか……と。信者達は相変らず大勢居るし、わしは、巧く御堂に近付いたのだ。戸が少しばかり開いていた。わしは、堂の内をのぞいた。からっぽで、巫女が……確かに腹話術を使つて喋つた、と、思つたとたんに、背後から口をおさえられた。強い薬品の臭いがつんとして気が遠くなつてしまつた。

気が付くと、わしは素裸さ、わしの胸の上には、これも素裸の女があぐらをかいて坐つていて、(そのものは東の方の高いところにある)、と言つた。その声が身体に耐えるほどにひびいた。全身がしびれている。女は、わしが意識を回復したと知ると、わしを見下

して笑いよつた、いい女だ。全然見掛けたことがない女だ。うむ、見たことがない。

女はわしの男のものを弄び始めた。(どう?)と、言うように時々につこり見下す。それをやりながらお告げをする。いつまでもいつまでもだ。わしはふるえた。どれほど絞られたか知りやせん、わしは学士様を思い出した。女を抱くことも出来ずにこのように絞られつづけたら……わしはまた気を失つた。気が付くとわしの家の中に、そう、こゝに寝ていて、もう四日も起きられない。その女は素晴らしい肉体を持つていた。うむ、豊かな乳房、うむ、美しい肌、……素晴らしい、まるで見たこともない……お前さんそつくりだ。」

男はがばとはね起きて私を押し倒した。私は彼の手の裡からすり抜けて起上つた。男は野獣のように飛びかゝつてきた、私は身を沈めて当身をくれた。

私は男を元のようにふとんの中に寝かせてやれやれ、と思つた。少しは男と格闘をしてみてもいいが、私は何だか疲れることを本能的に恐れていたのである。

堂の中に人間が居ることは間違いない。その女が私と似ている。と、云う山奥のがま

取り男の創作は創作としては見事だ。しかし人間の首を締めるのが下手で助かつた。

私は之からどうしようか。と、思つた。こんな部落にも家にも一刻に居たくなかつた。そこへがま取りの内儀が帰つてきた。「ちよいと、申訳ありませんけれど、うちの人を見て下さいませんか、私……」

内儀は肉をどこかへ買つてきたらしい。やがてそゝくさと出て行つた。私は彼女に悟られぬように尾行して行つた。カンテラが闇の中にちらちらしている。カンテラが山へ登る。沼のような池が光つて見え始めた。と、巫女の影が内儀の後を追ひ始めた。どこから出てきたのか私にはさつぱりわからなかつた。内儀は池の岸まで来ると、持つていた包を解いて肉を土器に乗せた。巫女は木蔭から内儀に呼掛けた。

「何んの肉じや。」

「は、はい。ぶ、豚の肉で……」

「馬鹿者。」

「は、はい。」

「手を洗え。」

内儀は手を洗つた。

「まだ足らぬ。裸になつてみそぎをせよ、けがらわしい。」

「は、はい。」

内儀は、おどおどし、夜目にもしろじろと素裸になつて……流石に、池に入ることのためらつていた。こゝで彼女と彼女の夫は、がまを捉え、水の中でその肚を裂き、皮を剥ぎ、藏物を取去つていたのを、彼女は思い出したのである。

「なぜにみそぎをせぬ。」

「は、はい、お許しを。」

「亭主が死んでもよいのか、」

「お許しを」

女はうつ伏した。

「ならぬ」

木の蔭から、裸の男が風のように、丸やかに伏せておののき泣いている女の上に蔽いかぶさつていつた。

「あッ、」

「肉と云うのは、そなたの肉じや。」

「あッ、お許しを」

二つの肉体はからみ合い揉み合つた。私は息を引いて、女が征服される過程を見入つていたが、ふと気付いて、巫女がかくれていた木蔭へまで行つた。そこに、男の体臭のする巫女の衣服が脱ぎ捨てゝあつた。私は、それを抱えると、最早やばつたりと一つになつた。

男女の裸形を残してその場を立去つた。

三

翌朝、がま取りの男は、家の玄関のところに全裸で仰向けに転つて死んでいた。体中に大きな蛙の足あとが泥でべたべたついていてみぞ落から股へかけて真直に、松の枝でも引掻いたような赤い傷がついていた。それは全く私の知つたことではない。

村の人々はがまのたゞりだ。と、囁き合つた。が、更に人々をふるえ上らせる事が発見された。と言うのは、がま取りの内儀ががまの淵の岸に、同じようにまる裸で仰向けに、半ば首を水中に落して死んでいたのである。夫と同じように、その乳房の上、太股、腹、等々に蛙の泥足がついていて、みぞ落から股へかけて、血の滲んだ傷がついているのだ。

私はひそかに身顫つた。白狐の正体を知つた者は殺されるとしたら私も殺されるであろう。と言う恐れのためではない。あの堂を根城とする淫獣共の残忍さ、非情さに怒りよりも深い憎しみを覚えたのである。村の有力者の家族の者がひそかに堂に出入りをしているのであれば、すべては泣寝入りとなるであろう。

——おそろしいことだ。

——お狐様と言う通り、がまのたゞりだ。

——がまのたゞりだ。

御堂にはいつもより信者達が集まつた。

夜、私はがま取りの男のように遠廻りをし、御堂の裏へ廻つた。生憎月のある晩である巫女は居なかつた。御堂の中もひっそりとしていた。そして、信者達だけがわや／＼と騒いでいた。巫女の衣服はそっくり私の背のリツクの中にある。私は、今夜一晩歩いてこの部落から少しでも遠くへ去ろう。と、峠を越した。

私はやがて、人を呼ぶ声を聞いた。振り返ると、見覚えのあるがま取りの内儀が私の後を追掛けてくる。私はぞつとした。私はがまの淵の岸辺のしろじろと横わつてゐる男とからみあつてゐる内儀の肢体を想い浮べた。

内儀は近付いて来た。草履の音がぱた／＼と聞えるところまで来て、私は、女が内儀でないことに気付いた。私は、しまった。これは白狐の真似をしている堂の中の女に違いない。と、直感した。

私は逃げた。走ることなら負けないつもりであつた。屋根のごつ／＼とした道へ私は駆け上つて走つた。草履の音が消えた。跣足にな

つたのであろう。と、振返ると、女は走りながら帯を解いて捨て、着物を谷へ抛り投げ、全くの裸形になつて、距離はぐんぐんちぢめられた。私はリュックを捨てるわけにはいかない。私は踵を返して、道に立ちはだかつた女は勢いずいた身体を危く踏止どめた。

「巫女の着物を返して下さい。」

「知りませんわ、何のことだか。」

「白らばつてくれないで下さい、あなたは巫女の着物をがまの淵で取りました。」

「何のことですか、さつぱり。」

「いえ、あなたは知っています。がまの淵で私の夫が……」

「がまとりの内儀を殺したのでしよう。」

「やつぱり……もう、あなたを生かしておけません。あなたは町の警察へ行くにきまつている。」

女は牝豹のようにおどろかへつてきた。私は女の肉体を受け耐えた。私はこのような裸の人間と取組むのは初めてであつた。襟でも袖でも掴めたら、大抵の男にも負けをとらないつもりであるのだが……女はべつたりと寄りつめてきて私の足業を巧みに避けている。意外にねばり強い力がある。私は背後に注意しながら、女の腕を掴んで退る。女は距離を

開けまいとする。くねくねとして、妙に技がかゝらない。巖石落して谷へ……と、思うのだが、それにはリュックがぢやまになる。

と、女が、ぐつと私の胸に肩を入れて背負い投げに來た。私は身をそらして、腹で女の腰を衝いた。女は私を背にしたまゝ、よろめいて体勢が崩れた。その隙に私は立つたまゝ裸絞めに女の首を絞めた。十秒、十五秒、女は悶えて私の腕から脱けようとする。二十秒女の指が首と私の腕の間に入ろうと努力する指を入れさせたら絞めが利かなくなる。女は蛇のように身をくねらせる。二十五秒。三十秒。私は裸締を解いた。女は私の足元に崩れ落ちた。私は薦で女の四肢を縛つて活を入れ峠へ引返して行つた。

私は途中で巫女の衣服に着替えた。信者達はまだそこに居て、一人一人椽に上つて行つていた。裏から堂の内をのぞくと、女の着物を着た男が坐つてお告げをしていた。昨夜、がま取りの内儀を凌辱した男に違いなかつた。私は、そつと堂内に入つて、いきなり男に当身をくれた。男はあつけなく倒れてしまつた。私は帯を解いて男を縛りあげた。

私は之からどうしようかと思つた。いきなり狐格子をあけて逃げてしまおうか……

そこへ若い女が入つて來た。女は縛られている男を見ても無感動に私にすり寄り、両手で私の乳房を掴んだ。

「巫女さん、今日は内ね。」

女はそう囁いて、ふふ、と、笑つた。

信者が何かぶつぶつ言っている。と、女が突然お告げをして、腹をよぢつて、くつくと笑つた。笑いながら、女の手が私の緋の袴の前を掻き分ける。

「ねエ、今夜はどうしたの、あなたも、ねエねエ。」

女の手がつ、と奥にすべり込んできて、私は思わず声をあげるところであつた。

「ねエ、あなたも」

女の胸が喘いでいる、片手でせわしく自分の帯を解いている。と見るまに、皮を脱ぐようにするつと肩から胸を露らわにじ、身をよじつて巧みに脱ぎ捨てた。私は、女を突飛ばして、がたがたと狐格子をゆすぶり開けた。信者達は驚いて、悲鳴をあげながら逃げ散つて行つた。私は男と女を御堂から引ずり出して、御堂に火をつけた。女は私に手を合せて拜んだ。もう私の知つたことではないのだ。私は燃え始めた御堂を後に一散に逃げ出した。

もう東の方が明るくなつていた。私は走りながら、白狐の女のように巫女の着物を脱いで谷に投げすてた。私が白狐になつたような錯覚のまゝに走つた。朝の風が全身を快く吹いている。しかし私は白狐でもなければ妖精でもない。何時までもそうしているわけにはいかない。私は旅装をととのえて、朝日が流れてきた尾根の道を急いだ。

私と組討ちをした女は、元のまゝで居た。私が近寄ると自嘲の笑いを浮べた。私は、その女の顔があまりにも私に似ているので、息が止まる程に驚いてしまった。がま取り男の言葉がふいつと思ひ出された。

女は手足が自由になつてもそのまゝの姿勢で動こうともしなかつた。まるで、そこに石にでもなつてしまつたように――。
(似ているわ。)
私はふと目をあけて清水に沈んでいる私の肢体を眺めた。

「ごめんなさい。」

變態心理と潜在意識

仁比山 等

一、変態心理学の定義

変態心理学は云うまでも無く変態心理を研究する心理学中の一学科である。こう云つてしまえば頗る簡単であるが、実はその定義は容易でないのである。何故かというに、第一心理学そのものゝ定義が頗る曖昧であるし、その上、変態心理と常態心理とを区別することとは甚だ困難だからである。厳密に言えば心理作用を常態と変態とに明瞭に区別することは容易でない。けれども大体に於て区別を着

けることは出来る。そこで変態心理とは何かと云うに一と口に言えば、普通の心理状態を逸脱したあらゆる異常な若くは特殊な心理か作用を総括した名称である。

変態心理と云えば何でも多少キジルシ的傾向の有る精神病とかヒステリーとか、或はまた神祕不可思議な透視とか念写とか千里眼とかばかりを指していると思うのは早合点である。勿論こういう精神病や千里眼なども変態心理の一部ではあるが、そればかりではない。変態というのは必ずしも病的な健全なものばかりを意味するので

はなくして、常態以上に優れたものをも意味するのである。白痴低能児、犯罪者、精神病者等の心理も変態であるが、それと同時に天才、英雄、偉人の心理も場合によつては変態に属することを注意せねばならぬ。

それでは具体的に云つて変態心理とは如何なるものであるかといふに、我々の日常生活中にも随分これに属するものが有る。最も多いのは知覚上の変態で、錯覚とか幻覚とか呼ばれるのはこれである。枯尾花を見て化物と思うのは錯覚の例で、暗闇の中に大入道の姿を見たり、何も無い室で幽霊を見たりするのは幻覚の例である。記憶上の変態としては健忘症や記憶過度がある。また思考上の変態としては回想奔逸、意想奔逸、強迫観念、妄想などが有る。その他感情の方面にも意志の方面にもそれぞれ種々の変態作用が有るのである。かくの如く心理作用には各方面に亘つて種々の変態が有るのであるが、今日の変態心理学で主として研究の対象としているのは所謂潜在意識である。夢の現象、催眠現象、自動現象、夢遊現象、憑靈現象は皆悉くこの潜在意識の活動に基くものである。それでこの潜在意識の研究が今日の変態心理学の最も重要な問題となつてゐる。それ故、変態心理学を定義して、潜在意識の活動に基くあらゆる心理現象を研究する学問であると云つても大過無いのである。

二、潜在意識の研究

(イ) 潜在意識とは何か

風間どうしても解けなかつた数学の問題を夜眠つてから夢の中で見事に解くという様なことは学生時代に我々の屢々経験する所である。風間覚醒時にどうしても解くことの出来なかつたのは普通の意

識の作用であるが、夜眠つてから夢の中でその問題を解いたのは普通の意識とは異なつた別の意識の作用であつて、この作用は平常は表面に現れて来ないのである。これを潜在意識と呼ぶのである。

即ち潜在意識とは、我々の心の奥底の方に我々が平常意識してゐない或る心が潜在しているということを仮定して、この「潜在している或る心」に名づけられた名称である。解り易く云えば、つまり「隠れたる心の働き」という意味に他ならぬのである。これに対して、吾々の日常の普通の意識を主意識または顕在意識と呼ぶのである。

我々の意識が果して實際右に述べた様に顕在意識と潜在意識とに分れてゐるか否かに就いては古来多くの哲学者や心理学者の間に少なからず論争の花が咲いたのであつて、中には、全然潜在意識なるものゝ存在を認めないで、一見潜在意識の作用の様に思われる現象は実に皆単なる機械的な生理作用に過ぎないと主張する学者も有つた。併しもはや今日では、普通の意識以外に、別に潜在意識又は分裂したる一種の精神活動が有つて、普通の意識とは殆ど相関係すること無く独立に活動するものであるということが、全ての学者によつて一般に承認されてゐるのである。若しこの潜在意識説を承認しなければ、前に挙げた夢の現象、催眠現象、自動現象等の重要な変態心理現象をどうしても説明することが出来なくなるのである。

次に二三の興味ある実例を挙げて説明して見よう。読者諸君先刻御存知の狐狗狸さんや、ブランシエツトや、大露道の自動運動などは何れも潜在意識の作用に依るものであるが、その中で著しい一例を挙げると、自働書記に呼ぶ現象がある。これは、手にペンを持つて暫く虚心状態になつてゐると、その手が自然に動き出して種々の

ものを書き出すという一種の変態心理現象である。それが只単に無意味な線とか断片的な文字とかをポツ／＼と書いている間は、別に潜在意識などという難しいことを持ち出さないでも、純然たる生理作用として説明が出来ない訳でもないがそれが立派に意味の有る文章や絵画をどし／＼、書く様になつて来て、而も本人自身は手の動いている間その事を少しも知らず、手の動くのが止んでから始めて自分の書いた画や字を見て驚くという様なことになつて来ると、単なる機械的な生理現象としてはどうしても説明が出来なくなる。こういう現象は日本にも実例が少くない。中村古峽氏の実見報告によれば或る婦人の如きは文字にも絵画にも巧みな自働書記者で、何か問題を提出すると即座に絵画と文字とを以てこれに答える。それが実に敏速で且つ仲々機智に富んでいる。意識的の書記と雖もこうまで迅速には行くまいと思われた程である。

例えば「戦争」という題を与えると即座に飛行機の上から爆弾を投下する図を描き出す。「豊年」という題を出すと直ぐに権兵衛種蒔の図を描き出す。殊に揮つてゐるのは「生存競争」という題に対して、大きな蜘蛛が蝶々を網に引かけて喰おうとしてゐるところを書き表したことであつた。而も本人自身も後で自分の書いたものを見て驚いてゐるのであつた。この様な現象はどうしても機械的生理的作用としては説明出来ないのである。これは運動の方の例であるが感覚の方にも潜在意識の作用が有るのである。例えば今私は、時計のカチ／＼／＼という音を聞きながら原稿紙に向つて字を書いている。所が段々書いている中に、いつの間にか書く方に氣を取られて時計の音は聞えなくなる。然らば實際時計は聞えない程遠くに離れたかというに、やはり元の通り直ぐ眼の前に置いてあるのである。

それでは私の耳が急に悪くなつたのかというに、無論そんな事はない。即ち私の耳は相変らずカチ／＼の音を聞いているのであるが、私の心（顕在意識）が書く方ばかり熱中してゐてカチ／＼の音を受け付けないのである。それでは心が全然音を受け付けていないのかというにそうでもない、受け付けられないのは顕在意識だけであつて実は潜在意識がそれを受け付けてゐるのである。これは、私を催眠状態に陥らせて潜在意識を呼び出して見れば、カチ／＼の音を聞いたことを白状するから明瞭である。

潜在意識の存在を証明する今一つの適例は夢の現象である。最初に述べた夢中で数学の問題を解くことなどもその例であるが、夢の実例を今一つだけこゝに挙げよう。

フランスのモーリという心理学者の話である。彼は或る日、ミュシユダンという言葉が絶えず頭に浮んで来たけれどもそれが何の意味か解らなかつた。所がその夜眠つてから夢の中で或る見知らぬ女がやつて来て、ミュシユダンとはドルドヌ州の首府の名であると告げた。目が覚めてからモーリは不思議に思つて、地理辞典を繰つて見た所が、果してその通りであつたということである。これはモーリが、以前にミュシユダンはドルドヌ州の首府であることを知つてゐて、而もそれをその日忘れていたので、その潜在意識の記憶が夢の中で活動したのである。この様な面白い例は甚だ多いのであるが、それを一々挙げてゐるは際限が無いから、実例は此の位にして止めて置くことにしよう。

(ロ) 潜在意識の分類

潜在意識とはどんなものであるかということは以上でその大体を述べたつもりである。学者によつては潜在意識のことを副意識と呼

んだりする人もある。名称が区々である通りにその考え方も種々であつて、或はミュンステルベルヒの様に全然その存在を否定してしまふ者も有れば、また一方には、フロイドやアイヤーズなどの様にこれを非常に重大視して単に心理現象のみならず、宇宙意識にまで潜在意識の作用を以て論及する者もあるという次第である。かく學者によつてその見解がさまざまであるが、こゝには比較的穩当と思われるモルトン・プリンスの説に従つて潜在意識を次の四種に分類しよう。

(第一) 或る一定の瞬間に於ては、吾々の注意の焦外に在つて、従つて吾々の意識の上に表れてないが、併しその注意の焦点さえその方面に移動して行く時には、いつでも有意的に容易に意識の上に表れ得べきもの。

(第二) 第一の様に何時でも容易に意識に表すという訳には行かぬが或る機会に自然と意識に表れて来るか、又は或る人為的方法によつて容易に意識の上に表わし得るもの。

(第三) ヒステリー性の感覚脱失者の触覚に於けるが如き孤立した知覚や、又は熟練せる自働書記者の自働書記に於けるが如く、意識の主流から分裂して主意識と同時に活動するもの。

(第四) 夢遊病者の夢遊状態に於ける活動、及び二重人格者に於ける第二人格又は第三人格の活動の如く、全然その主意識の自覚を欠いているもの。

プリンスは以上の四種の中、前二種を「アンコンシヤス無意識」と呼び、後の二種を「コンシヤス共在意識」と呼んでいる。

(ハ) 潜在意識と病氣

さて以上の如き潜在意識は吾々の普通の主意識(顕在意識、また

人格意識とも云う)に種々の重大な影響は、先ず普通には自働現象という名で総括せられる。それには、運動性感覚性、觀念性、情緒性、生理性等の種類が有るが、これらを一々詳述するのは見合せることにして、こゝには潜在意識の病的影響に就いて次に少しく述べて見たいと思う。

或る觀念の複合体が潜在意識になつてゐる場合に或る経験がこの複合体の何れかの一要素に触れるとこの複合体全体が、或は顕在的に、或は潜在的に爆発的活動を起し、種々の自働現象を生じ、その人の人格意識を病的に攪亂し現實的活動に障礙を与えるのである。即ちその人を病氣にし又は癡狂せしめるのである。これらの例は夥しく有るが、先ず最初に觀念の複合体が顕在的に働いてゐる場合の例を挙げよう。

徳川末期に、或る同心が、自分で捕縛した竊盜犯の臨月に近い孕み女が、どす黒い血を吐いて斬首されるのを見た日、歸りに料理屋へ寄つて吸物の牡蠣を偶然食べた、するとその牡蠣の色や柔かみはその日の斬首の光景をあり／＼と彼の眼の連想させて、非常な不快を感じた。それから、その光景が彼の心に固定してしまつて晝も夜も夢の中でも絶えずその光景を見る様になり、最後に、或る朝膳に着いた所が、偶然汁の中から牡蠣が箸の先に附いて上つて来て、それを眺める瞬間、又もや斬首の光景が激しく眼前にチラついて来たので、彼はその汁の入つてゐる碗を給仕してゐる妻の顔にたゞきつけた。すると、呆れて自分の顔を見詰めてゐる妻の顔が、死刑になる時、自分を睨んだかの孕み女に次第に似て見えて来たので、「まだ俺に祟りやがるな!」と叫び乍ら、妻を一刀の下に斬り殺してしまい、自分も狂亂して自殺したという話がある。

またミュンテルベルヒの取扱つた或る患者は、或る時、僅か数時間前に一緒に元氣よく会食した女が突然自殺したという報告を受けて、非常に驚愕し、それ以来、自殺とか死とかいう言葉や、食物、スープ、肉などという言葉を聞くと、自殺したその女の毒藥を飲む姿が眼に浮んで来る様になり、遂には新聞などで、これらの文字を見たゞけでさえも、その幻のために放心状態になるに至つたということである。

以上の二つの实例は、病的状態の原因（観念の複合体）が明瞭に解つていて、それが顕在的に作用している場合であるが、次の例はそれが全く潜在的に活動している場合である。

プリンスの取扱つた或る婦人は教会の鐘の音を聞いたり、鐘樓の様な高い塔を見たりすると理由無しに煩悶を感じ身体にも異常が起るのが常であつた。その理由は彼女自身にも全く不明であつたが、プリンスは、これは何か過去の観念の複合体が潜在意識になつていてそれが原因になつていたのであらうと考えて、催眠術や自働書記などをその女に試みた結果、彼女が以前瀕死の母親の看護をしながら教会に行つて熱心に神に祈つていた時、教会の鐘がしきりに鳴りその鐘の鳴り続けている間に母親が絶命したという事実が漸く解つた。即ち鐘の音や鐘樓は彼女の昔の苦しい体験の観念の複合体に触れて、そこで煩悶を感じしめるのであるということが明かになつた。

またミュンステルベルヒの治療した或る婦人患者は些細な物音にも非常に驚き易く、殊に雷鳴に対して甚だしく、何となく泣きたくなり、涙が出て苦悶するのであつた。そこで、やはり或る複合体が原因となつているのだらうと考えて、ミュンステルベルヒは彼女を

催眠させて彼女の人格を七才の幼時まで還元し見ると、その頃、この女が教室で他の子供と戯れた時に先生が非常な苛責を起して、激しく怒鳴りつけ、この女は自分が悪くないことを弁解しようとしたが、その弁解をもさせずに鞭で激しく打たれ、それからヒステリイが始まつたということが解つた。

此の例などで見ると、小学校の先生などは大いに注意しなければならぬことが解る。少年時代は刺戟に感じ易いから、一度強い印象や感動を与えられると、それが深く心に残り勝ちなのである。

以上は何れも或る観念の複合体が意識の底にこびりついていて、それが何時しか潜在意識の中に没入し、これに触れるものが有ると忽ち爆発して病的状態を誘致するのである。

この観念の複合体は普通には固定観念と呼ばれる。強迫観念というのもこれの一種である。この固定観念の原因は種々有るが先づ大体は願望と恐怖とが最も著しい原因である。フロイドなどは性慾的願望だけが唯一の原因であると主張しているけれど、これは勿論狭過ぎる見解と思う。

（二）潜在意識の発見法

さて、この様な、心の表面に現われていない、本人自身も気がつかない潜在意識を如何にして発見するか、それには種々の方法があるが、最も著名なのは催眠術で催眠状態に入れて潜在意識を呼び出すのである。

次には夢である。夢とは実に主として潜在意識が象徴化されて現われたものなのである。

次には自働書記である。これに就いては前に詳しく述べて置いた。

なお此の他、連想法とか、虚心状態、誘眠的幻覚、透明体幻影などに依る方法とか、種々有るが、余りくたくしくなるから此処には略することにする。

(木) 精神治療法

最後に、前々節で述べた潜在意識の活動に基く精神病の治療法を略述しよう。この治療法は臨機応変であつて種々の様式が有るが、要するに、病氣の原因になつてゐる觀念の複合体即ち固定觀念をさえ除き去つてしまへばいいのである。その方法の大要を述べれば次の通りである。

○境遇転化法。これは原因になつてゐる固定觀念が病的に働き出す外部の原因を除く方法である。即ち願望が固定觀念になつてゐるのならその願望満足させてやり、恐怖が固定觀念になつてゐるのならその原因に近ずかぬ様にしてやるのである。例えば借金が苦になつて病氣になつた人なら、金をどつさり持たせてやればいいし、前の例の鐘樓を見て恐怖を感じる人なら、鐘樓に近いづかせな様にしてやればいいのである。併しこの方法は実行不可能の場合が少くない。

○催眠暗示法、これは患者を催眠状態に導いて置いて、病因になつてゐる固定觀念を放逐する様な適当な暗示を与えるので、可成り有効な方法である。

以上二つは、先づ潜在的複合体即ち病因となつてゐる固定觀念を探り出した上で用いる方法であるが、これを探知せずして用いる方法に側線法というのがある。これは例えば、雷鳴を恐怖する人に雷体というものは宇宙の絶大なる壮嚴美の一つであつて実に壮快極まるものではないか、恐怖すべきものではなく却つてその美を讃嘆す

べきであると説くが如き方法である。即ち、その人の心を恐怖よの讚美という方向へ転ぜしめるのである。

併し以上の方法は何れも皆一時的の姑息手段に過ぎない、もつと根本的な根絶法を用いなければならぬ場合もある。この根絶法はフロイドの主張する浄下法であつて、普通煙筒掃除法なども呼ばれてゐる。これは、抑圧され鬱積された潜在意識を、思ひ様、厭になる程、飽き足りるまで発表させる。即ち語らせたり書記させたりするので、これを厭になる程繰り返し発表させると、最後には氣持が非常に楽になつて病氣が根治するのである。

この他新しい方法としては説得法というのがある。これは、患者に向つて、其の病氣は潜在意識作用の結果に過ぎないということを權威を以て種々の例証を示して納得の行く様に説き聴かせるのである。これも有効な方法の一つである。

潜在意識のことは詳しく述べれば際限が無いが、変態心理学に於ける潜在意識の問題は、以上で大略を網羅したから、こゝらで筆を止める事にする。

◎次号予告◎ 十一月号 乞御期待

續変態艷書

岡田 咲子

夢性の美少年

三村 幾夫

切支丹迫害史

漆島 迫平

次号では御求めにより甘美なロマンの醸し出す妖酒を余すところなく発表する筈であります。



江戸時代の墮胎醫

—中 條 流—

福 森 耕 司

伊勢の長者の茶の木の下で、
七つ小女郎が八つ子を生んで、
生むにや生まれず、おろすにやおりず、
向う通るはお医者じやないか、

医者には医者でも薬箱もたぬ、
薬御用なら袂に御座る、

これを一服煎じて飲めば、
虫もおりるし其の子もおりる……

東都界隈の婦女子によつて、明治の上半期
に至るまでも何気なしに節おもしろく女の子
に謡われていた此の手まり歌は、無論江戸時
代からの伝来であつて、いかに墮胎専門医が
流行していたかを偲ばせる。

江戸時代では第三代將軍家光の治世の末期
までは墮胎を行つても差支えなく、従つて之
に対する刑罰も無かつたが、漸くその末期の
正保年代に至つて始めて「子をおろす術を禁

ず」という布令を出だすようになった。それ
は墮胎の悪習があまりに甚だしくなつて、流
石の当局者も之を放任することが出来なくな
つたからであらう。

しかし、年を逐うて益々修養淫蕩に移りゆ
く時代の風潮は、此の一片の禁令を全く空文
にして「子をおろす術」を益々都下に普及せ
しめ、墮胎を業とする女医が年と共に殖えて
来た。所謂「中条流」（一に「仲条流」と
云うのが即ちこれである）。

抑々中条流とは豊臣時代に産科と外科とを
兼ねた名医中条帯刀の流派であつて、産科を
専門としたものであるが、寛永の頃から墮胎
専門の女医が其の中から出て其の業が次第に
盛んに行われたがため、後には中条流といえ
ば墮胎を行う女医の代名詞のようになつて了
つた。

彼等は名を通経にかりて「月水早流し」「
朔日丸」という墮胎薬を売り、また機械的手
術をも行つた。その中には「元祖中条流の婦
人療治、驗なくば札を請けず」など、公然看
板を掲げ、またそれを弘く広告して、淫蕩乱
倫の婦女子を顧客とした。川柳に「仲条の引
札おろし値段なり」といふ、また「よしあし
草」に「前の堀に墮胎薬の引札剝がしても
〴〵何時来て張ることやら、人目をかすめる
商売」とあるが如く、彼等墮胎医は自己の業
務を公然世俗に広告して何等意に介しなかつ
たようであるが、併し流石良心に咎める処も
あつたと見え、世間に気兼ねをして、我が家の
門前に水をうつ時にも、あからさまに顔を出
さずに、暖簾の下から手だけを出して水をう
つたような者もあつたらしい。それは「中条
は手ばかり出して水をうち」という川柳があ
るのを見ても分る。

墮胎専門の女医を一般に中条流と呼ぶよう
になつたのは、宝暦以来のことであるが、之
よりずっと以前の延宝時代に「市中女医者と
唱え候者有之、血の道療治正しく致し候得ば
不苦候えども、其の中には妊娠の者の頼みに
応じ、預りて墮胎致させ候、類も有之哉に相

聞え不届の至りに候。向後、右様の儀相聞ゆるに於ては、頼み人までも逐一穿鑿急度処分可申付候間、かねて此旨存すべく候。」という触れ書を出したのを見ると、既に延宝頃から「女医者」と称する者が墮胎を業としたことが明かである。

而して彼等の配剤たる墮胎薬の中、「月水早流し」のことは、元禄版の「男女御土産調法記」の中に見えているから、元禄時代の頃には既に公然墮胎薬が発売されたことが分る。茲に墮胎薬の広告の一を示して見よう。



是等の墮胎薬が大いに世に行われ、中条流の益々繁昌したのは享保年代以来であつて、宝暦に至つては中条流の称呼が墮胎専門医の代名詞になるまでに隆盛を極めた。享保版の「名物鹿の子」の中に描写した図書を見ると中条流の家には白地に枳形を染め出した暖簾を下げてあるが、これは蓋し彼等の家標とし

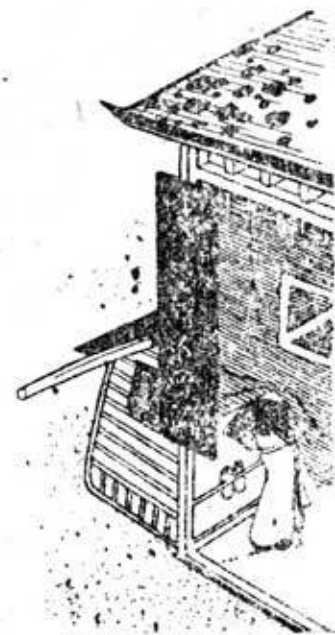
て、特に世人の眼に立つようにしたものであろう。暖簾を下ろした処に、普通の医家の表構えと違っているのが面白い。

「月水早流し」「朔日丸」という墮胎薬の成分は明白でないが、水銀剤が墮胎用に供されていたことは、明和版の「小夜時雨」に「朔日丸、水銀の類を服して一生子をもたぬものは罪深し。」とあるに徴しても知られ、また麝香が墮胎に用いられたことは、柳里恭の「独り寝」の中の記事によつても分かる。

また機械的墮胎法をも行つたことは「仲条へ行くに湯巻きを下女ねだり」「仲条は厚み女の股をさき」という川柳が証明している。そしてその墮ろした胎児は水子と種えて、本所回向院の墓地に葬つたもので、それを水子塚と云つた。

女医が妊婦を宅に預つて墮胎させ、その子を寺に送り届けた上にも、女を常の体の本復させる迄、その費用として壺両三分を請求し、また寺に水子を送るに二百目或は一朱を添えたことなどは「春情指人形」や「医事小言」の記事に徴して明かである。

此の如き非倫残忍なる女医が益々都下に流行して、風俗を害すること年を逐うと共に甚



だしくなつた結果、江戸幕府は天保年代に至つて、延宝時代に於ける同様の禁令を發布したけれども、殆ど何等の効果もなかつた。

中条の暖簾をくぐつた者は、大抵野合私通の結果妊娠した者であつて、「仲条おろすが内証の子」とあるように、後家、御殿女中、芸妓、下女、娘等が彼等女医の顧客であつた。「仲条でたびくおろす蔭間の子」という川柳は、後家や、御殿女中に男娼を買つて妊娠した者の如何に多かつたかを暗示している。

されば、中条は都下に於ける淫靡の風の盛んであつたために流行したので、「仲条行くより外のことぞ無き」「面白いあと仲条で待つてゐる」という川柳に徴しても、其の一斑を推知し得られよう。貧窮のために産児の制限を余儀なくせられるような細民は、仲条の常客では無かつた。



縛られた妻

早川 新二郎

喜多 玲子 画

「後手に縛られて仰向けたり、足を開かせたり、三人でさんざん私をなぶりものにして、しまいにはお腰までとられて、つねられたり、噛まれたり……」

「えっ」一瞬私の後頭部から背筋にかけて異様な感覚がジンと走った。

ゴクンと唾を飲みこんで

「それから……どうしられたんだッ」

「嫌ねえ、何故そんなに聞くの……恥をかかすつもり、

私もう昔のことはすっかり忘れて生れ変っているのに」

「いいんだよ、一寸したお話のつもりで、自分のことと思わずに、もう少しくわしくいつてくれよ」ところが妻はもうこれ以上は絶対に言わないと固く口をつむつてしまったのです。

妻の幸子にいくら過去のこととはいえこんなことをいわそうとするのは余りに残酷すぎるかも知れません。しかもあえてこれを強要する私の心理は、一体どうした事なのでしょう。しかし湧きたつてきた私の慾望は、もうそんなこ

とにかまつてはおりません。

私は、大きな期待に息をはずませながら、さらにはげしく妻を追及しました。

ここで一寸私達夫婦のことについて、お話致します。

実は恥を申すようですが、妻の幸子は、私と結婚する前、約五ヶ月許り、京都の祇園に近いある遊廓で、酌婦をしていたのです。勿論それには悲惨な事情があつたのですが、それは又別の機会にお話しするとして、私はここで始めて幸子を識つたのです。

私は、最初は結婚するなど夢にも考えず、ただ何とか助けて、以前の生活に戻してやりたい、という気持で、随分苦勞してその社会からひき出し、就職も世話したのでした。ところが、さてそれじゃ左様なら、という訳にもゆかず、だんだん交際を繰けるうちに二人の愛情は予想外に発展して、とうとうこの三月、周囲の反対をおしきつて、結婚にゴールインした、という次第です。

今迄、結婚については随分より好みしていた私が、こと



もあろうに酌婦と結婚するなんて、誰が聞いても不思議がつたものでしたが、それだけに幸子にたいする愛情が、よくもこれだけ大きくなつたもの、と自分ながら驚いている始末です。だから幸子も本当に真心をこめて私に尽してくれます。

私達は世界のどの夫婦よりも幸福であると信じています特に性生活の面では、お互に色々な経験もあるだけに、他の誰よりも豊富で充実していると、実は秘かにうぬぼれている位です。

それだけなら何も今とりたてて何にもいうこともないのですが、実は最近、何と申しますか、それはもう骨もとけるような快美な刺戟を発見したのです。というのは幸子は御存知のように過去の泥沼時代には五ヶ月の間、当然夜毎見も知らぬ男共の自由にされてきたのですが、その間には、もう聞くに耐えぬような惨虐なめにもあつております。それを私が幸子の口から聞き出すことにより、幸子はその虐待にじつと耐えている場面を想像しますと、私は妻の肉体のけがれを悲しんで目をおおうどころか、かえつて、もう何ともいえぬ、まるで電氣にうたれたような感じを受けるのです。そしてそれによつて、幸子への愛情が、さらに倍加することを発見したのです。

もつともこんなことは、長い夫婦の性生活の、一時的な現象だとも思つております。しかし私は、子供の頃から、多分にサド的性質があり、女の責められている小説や絵に不思議な魅力を感じていたもので、本屋に入つても、それ

ばかり探したものですから。(もつとも今でもその通りです)他人が私の妻を責めたてている惨虐な場面を、しかも嘘でなく現実に妻の口から聞くことにより、私のサド的性格は、この上もなく慰やされるのだ、と思つております。まあ私の心理分析はこの位にして話を戻しましょう。

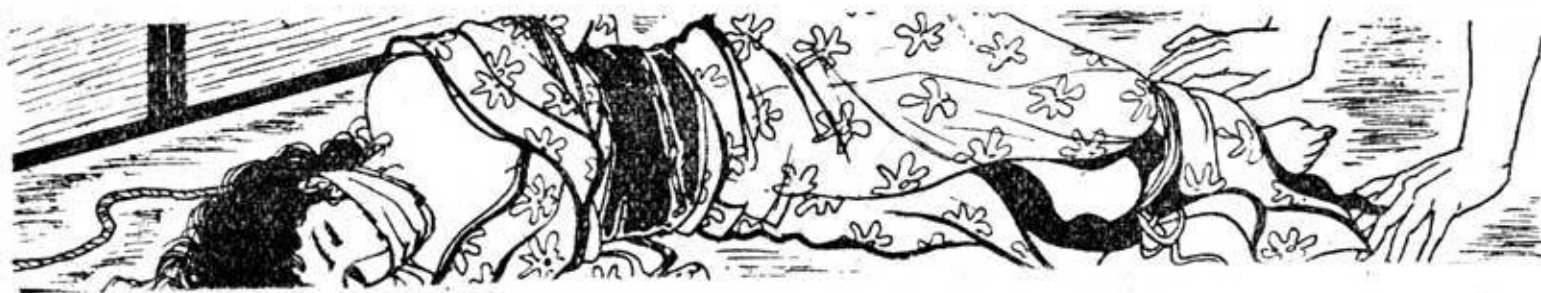
今日、このようにして、はからずも今迄にない異様な妻の体験の一端を聞き出したのです。

三人の変質者のわなにかけられた、あわれな犠牲、しかもそれが私の妻だつたとはこの事件の内容は余りにも私の好みと、びつたり一致しています。もう私は夢中になつて妻を追及致しました。

しかし事件の内容が余りひどい為か、妻は容易なことでは口を開きません。とうとう私は、妻をお仕置(私達の秘戯の一つです)にかけました。そしてやつと、その全貌を知ることが出来たのです。私はその時、まるで天にも昇るような気持になりました。そして、その後、二人の身体が、どのようなにげしく燃えたかは、皆様の御想像におまかせ致します。

これからお話するのは、こうして聞き出した妻の異様な体験談です。以下妻が私に話したそのままの形成でお伝え致します。文中私、とあるのは勿論妻のことです。

○ 今日是不思議に誰もいない。お客と一緒に出ていつたり京極の青空楽団を聞きにいつて、今頃は一生懸命流行歌を覚えてるのだらう。お部屋はガランとしている。



私は一人鏡台の前に坐つて、じつと自分の顔を眺めた。僅か一ヶ月で、まるで他人の顔のような気がする。平和に暮していた頃が、まるで遠い夢のようだ。

そう、今鏡に写っているのは別の幸子、今迄の幸子は、もう一ヶ月も前に死んでいるのだつた。今ここにいるのは娼婦の千鶴（幸子の源氏名）。今にでもお花がかかれれば、もう前をはだけて男のオモチャにならねばならない哀れな千鶴……

身を締めつけるような切なさ、私は、誰もいないお部屋の中で、ただ一人坐つて、じつと涙ぐんでいた。

「まあ千鶴さん、いやにしてくてるのね」

突然朱実が飛び込んできてそういつた。

「ううん、一寸彼氏のこと考えてんの」私も負けずに応酬した。

「あのねえ、今日あんたにいい人紹介したげる。私の彼氏の友達。そりやいい人よ。もう二時間程したら二人で来るつていつてたわ。それにお花は、二日通しよ。まあこれから、お風呂にでもいつて、せいぜい美しくして楽しんで待つてて頂戴」

それから朱実は、さんざん彼氏のおろけをいいながら窓もあけはなしたまま、さつさと裸になつて、着換えをして出ていつた。

実をいうと、朱実は、このやかたの中で私の一番虫のすかぬ人である。

忘れもしない、私が始めてこのやかたに連れて来られた

時「ここのしきたりで、始めての人は病気の検査をするこ
とになつてゐるのよ」といつて、何もわからず、オドオドし
ている私を、おとうさん（やかたの主人のこと）と一緒に
なつて、二階の部屋に連れ込み、仰向けに寝かせて、さん
さんなぶりものにした上、最後にとりとう私がおとうさん
に、ナニされるところまで、平気でじつと見ていた人……

「でもいいわ、一晚の泊りだけで、二日の通しなんて、そ
うざらには転がつていないもの」私は朱実と一緒に一寸
気も進まなかつたが、商売気を出して気をはげました。

まさか、これが私に仕掛けられた恐ろしいワナで、もう
数時間後には朱実らの変態性慾を充たしてやる為に、この
私が、よつてたかつてなぶりものにされ、死ぬ程もだえ、
苦しまねばならぬ、とは夢にも知らずに……

午後五時頃、梅月というまだ聞いたこともない旅館から
私に名指しの電話がかかつてきた。

私は、こまよりのお座敷着に着換え、梅月の場所を聞い
て、急いで出かけていつた。

梅月の客間には、もう朱実が来ているらしい。男の声に
まじつて、朱実のはしやいだ声が聞えている。

「今晚は」

私は氣をとりなおして、何時ものように入口に坐つて挨拶した。

二人共三十五、六才、派手な背広を着て、一寸映画関係
の人のような感じ。

「いよう、いらつしやい。成る程美しいなあ、何処かの若



奥さん、といったところだねえ」二人の男の無遠慮な視線に、どきまぎした私は、それでも、この二人の様子なら病気の心配はないだろう、と一寸安心した気持ちで中に入つていった。

「遠慮せずに、さあこつちへ来た来た」とうとうと抱くようにして二人の間に坐らされてしまつた。

色の黒い、一寸目のきつい人が大槻といつて朱実の彼氏らしい。もう一人の近藤という人は細顔で色白、しかしどちらにも何故か余りいい感じはしない。

酒も大分まわつているらしい。私も馴れぬ手つきでお酌をした。

「まだ新らしいんだつてね。どう？もう馴れたかい。しかしそのウブな所がいいんだよ。この朱実のようになつちやもうお仕舞さ」

「まあ御挨拶ね、いいわ、今にうんといじめてやるから」その時、チラッと私をにらんだ朱実の顔の怖しかったこと。

「まあそろそろ怒るな、さあ一杯いこう」

私にも盃がさし出された。

「私、頂けませんの」と逃げて、三回に一度は受けねばならない。二、三杯の酒で、もう私の胸はドキドキして顔がカーツとほてってくる。

朱実は大槻の膝の上につて、しきりにふざけている。私は、見てはならないものを見ているような気がして、顔をそむけていた。

そのうち、近藤の手がチリチリと私の膝の間に入つてきた。

「いやらしい」と思つても払いのけることも出来ない。それをいいことにして、男の脂ぎつた指先は、ますます大胆に私の太腿を、ねつとりとはいのぼつてゆく。

「いやあ……」私は相手を怒らせぬ程度に、やつとそれだけいつて、男の手を軽くおさえた。ところが近藤はかえつて、それで油をそそがれたのか、今度は片手で私をだき込んで、チリチリと腿のつけねの方にまで手をのぼしてゆく。

逃げ出すわけにもゆかない、どうせ金で買われた身体、こうなれば一銭でも多くとつた方がいい。私は半ばやけ気味になつて、思いきつてぐつと近藤にもたれかかつていつた。

「さあぼちぼち部屋に行くか」

大槻は朱実と目くばせすると、そういつて立ち上つた。

近藤もやつと私を離して立ち上つた。

今夜は他の客はないのか、長い廊下は、シイント静まりかえつてゐる。不思議に旅館の女中は一度も顔を見せない。

「あ千鶴さん、忘れてたけど、今夜お部屋一緒よ。いいでしょう」振りかえつた朱実がおしかぶせるようにそらいつた。

「ええ、いいわ」さり気なくそうは答えたものの、私はびつくりした。そしてその時、始めてチラッと不安な気持ちが



頭をかすめた。

私達の部屋は廊下のつきあたりを右に折れ、渡り廊下の向うにある広い日本座敷だった。

前からわかつていたのか、部屋にはすでに、二組の床がのべてあつた。

部屋に入るとすぐ男達は寝間着に、私達は長襦袢一枚になつて、くつろいでお茶を飲み始めた。

そして一しきり雑談が終ると

「ねえ千鶴さん、折いつてお話があるんだけど」と朱実が殊勝な顔つきで話しかけた。

「今日は、あなたが主役なのよ……この人達がね、今夜ゆつくりあなたの身体が見たいのだつて……そら私達の前でそんなことするのいやだらうけど、でもどうせこんな社会に働きに来てるんでしょ。……同じことじゃないの。お花も二倍もつけてもらつたんだし、ねえ、いいでしょう」

思いもよらぬことに、私はしばらく言葉も出なかつた。

「じゃ大槻さん、近藤さん、御ゆつくり、私ここで拝見させて頂くわ」

「じゃ最初一寸裸になつてくれ」

近藤はそういうと、もう私の腰紐に手をかけている。

私は頭がカーツとなつて、前後のみさかいもなくなり、近藤の手を払いのけると、さつと立ち上つた。そして部屋の入口で二人の男を相手に必死になつてもみ合つた。

しかし女の力では、どうすることも出来ない。ズルズル

と部屋の真中に引き戻され、両手を後にねじ上げられて、押えつけられた時には、もう眼も見えず、息がきれそうで、ただハアハアとせわしくあえいでいた。

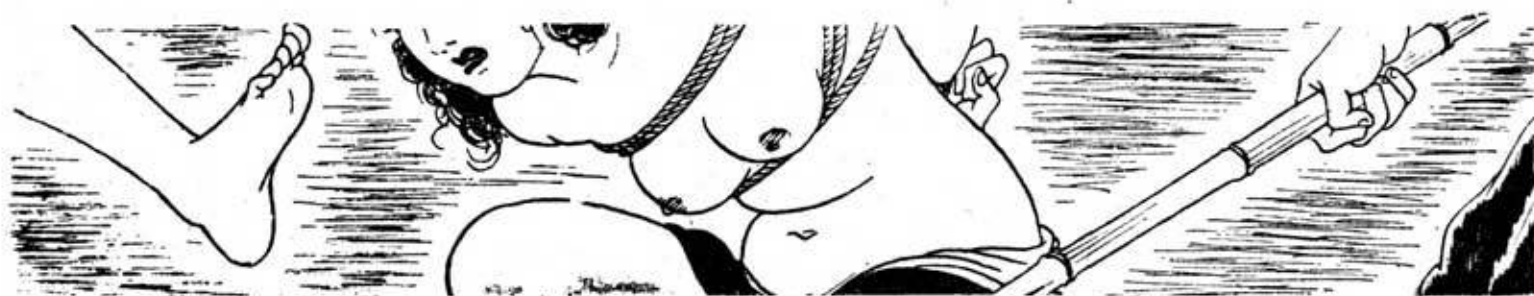
何時のまにに取り出したのか、細い縄が、ねじ上げられた両腕に、きびしく巻きついてゆく。お乳の上にも二筋、三筋。

誰かが、背中をつかんで起き上らせようとした。私は、固く身を縮めて、最後の力をふりしぼつて抵抗した。

ピシツ、鈍い音がして、突然背中に、臀部に、焼けつくような痛みを感じた。それから息をつく暇もない、鞭が所きらわず、私の肉に喰い込んでゆく。私は思わず呻き、もだえた。

「どう、もうおとなしくするわね。いくら強情張つても、あんたは今日は私達のトリコなのよ。ここを何処だと思てんの、普通のお茶屋さんじゃないのよ。いくら騒いでも今夜のお客さんは私達だけ、ここのおかみさんが私達の為にちゃんと準備してくれてんのよ。わかつたわね、別に殺す訳でもないんだし、これから何をされても、おとなしくしてんのよ、いいわね。」

私はもう何をいわれても、答える力もない。何か怖いものに魅いられて、ぐるぐる締めつけられて暗い谷間にひきこまれてゆくような気がして、混乱した頭の中でただ絶望だけを感じていた。そして、怒りも、悲しみも、羞恥心すら失つて、ぐつたりと身を投げ出してしまった。ただ涙がポタリ、ポタリと畳の上に落ちていた。



私の観念したらしい様子を、じつと見ていた彼等は、しばらくして、私を仰向きに寝かせた。

誰かが私の足を開かせたり、まげたりしては、襦袢や腰布の開き加減をかえている。その度に太腿や、時には下腹部にまでヒヤリと外の空気がじかに感じられた。

私は、もう何をされようと、どんな辱かしい恰好で下半身が、むき出しにされていようと、何だか遠い夢のような気がして、ものを考える気力もなく、ただ後に縛られた両腕の痛みに、僅かに身をよじらせて、ちつと目をつぶっているだけだった。

やがて私は、両腕をつかまれて抱きおこされた。急いで縄が解かれたので、ほつとしたのも束の間、今度は続に腰紐までとられて、長襦袢が無残にはぎとられた。

うすい腰布一枚になつた私は、再び両手を後にねじ廻された。

もうすつかりあきらめた私は、おとなしく前かがみになつて、両手を後に廻したまま、彼等の縛り終るのを待つていた。

縄は乳の間で菱形に交叉され、前より嚴重に縛り上げられた。

それから彼等は、私の膝をひろげたり、立てたり、横にずらせたり、腰布を腿のつけねの所からばらりとめくつたり、ありとあらゆるはずかしい姿態をとらせた。

うすい私の腰布は、もうほんの形ばかり、私の腰にまといつてにすぎなかった。

彼等はそんな私の姿を、前から後から、はては頭を畳にすりつけて下からのぞいたりしていた。

私は、好色的な、獣のような眼をギリギリさせている、気狂のような彼等の姿を見ても、もう何の感じもおこらなかった。

私は、素膚に喰い込む縄目の痛さを、じつとこらえていた。

それが終ると、私は、縄尻をとられて、奴隸のようにして部屋の隅に引つ立てられ、その柱を背にして、立つたままゆわえつけられた。

腰布は全くゆるみきつて、左の下半身は殆んど露出され、今にもずり落ちそうになつていた。私は腰をかがめて僅かにそれをささえていた。

「おい、もう腰のものをとつちまえよ」

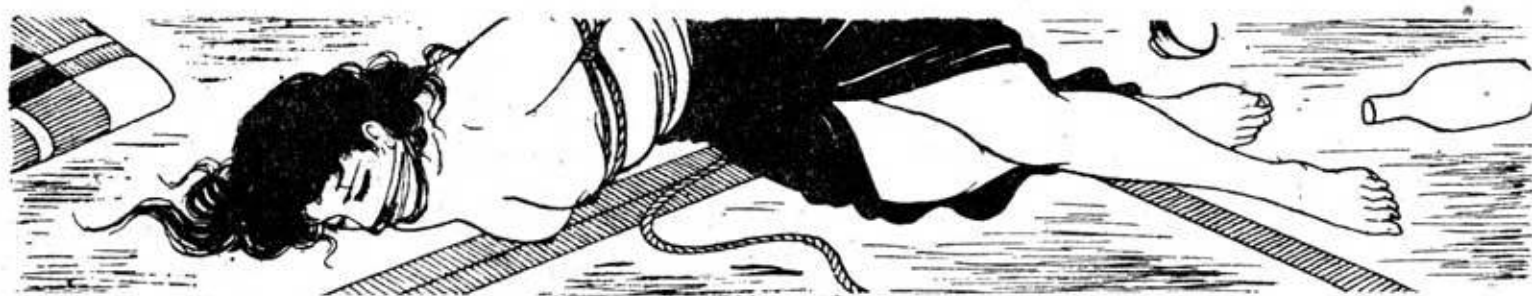
「それだけは堪忍して」というのも言葉にならなかった。

たつた一枚、僅かに腰のあたりに止つていた最後の布は、無雑作に、パツとはぎされてしまった。

一瞬彼等は、ハツと息をのんだ。私の身体は最早一寸の隠すところもなく、明るい電灯の下にさらけ出されてしまった。

長い間私の裸体鑑賞が続けられた。彼等は煙草をすい、お茶を飲んで、ゆつくり、なめるようにして私を見続けた。

全裸で後手に縛られたままの私は、再び部屋の中央に引つたてられ、そのまま転がされて私の身体のあらゆる器官



が、耳、鼻、乳は勿論、腿、腹から臀部に至るまでが、なでたり、つまんだりしながら綿密に調べられ、寸法がはかられた。

こうして後手に縛りつけられて全裸の隅々までを、嗜虐的な彼等の前に、長い間さらけ出しているうちに、私は、だんだん大胆になつていった。そして自棄と悲哀の感情の裏に、私の自体を締めつけている縄目の痛さと共に何だか甘い、みだらなような感情が、自然にジーンと湧き出ているのを、身体の何処かで感じ出していた。

やがて十字架や丸太棒、梯子のようなものや回転椅子など、色々なものが部屋の中に運ばれてきた。運んできた女中は、私のこの浅間しい、哀れな姿をチラツと見て、あわてて逃げるようにして出ていった。

今運ばれてきたこの道具類は、いずれ私をもて遊ぶ為の道具なのであろう。

しかしそれなのに私は、これらの道具類を見ても、何の怖しさも感じなかつた。かえつて次の、私に加えられるであらう新しい責めに対して、ほのかな期待すら感じていた。

私は、すぐ十字架にかけられた。大の字に縛りつけられた私は、さらに腿のつけね、腹、胸を別々の縄でぎりぎり締めつけられた。

その頃には、彼等の嗜虐的欲望は、もう最高潮に達していた。殆んど裸体に近い姿になつている彼等はハアハアあえぎながら、全裸で縛りつけられ、抵抗も出来ない私に、

まるで狂人のように躍りかかり、つめる、噛む、叩くの惨虐を加えた。

或る時には椅子の上に下腹部を高くつき出して、海老のようにそり返つたまゝ縛りつけられている私の、顔の上にまたがつて狂気のように暴れた。

こうして彼等は色々な道具を、次々と取り替えては私を責めさいなんだ。

最後に、殆んど失神せんばかりになつていた私は、台の上に上げられ、足を大きくひらいて立てたまゝ、丁度婦人科にいつた時の恰好でかたく縛りつけられた。

私は、おし拡げられた部分に、痛いような三人の視線を感じて、今迄になく息苦しくなつてきた。

どれだけ時間がたつたろうか、足許でうなるような、低い朱実の声を聞いたまゝ、私は、燃え上ろうとする、女の弱い生理としばらく必死に斗つていたが、何時しか、縛られたまま深い深い、七色の虹の谷間に、吸い込まれるようにおちこんでいった。

初夏の夜は、もうその頃白々と明けそめていた。

以上が妻から無理に聞き出した告白のそのまゝです。私は妻に此の様な経験があるからこそ堪えられない魅力が妻の身体に感じるのでしょうか。次には私達夫婦生活の事を書いてみたいと思います。



△深い性慾の秘▽

ブランドンはある夫人の事を記載しているが、その夫人は「良人から半ば強いられる事が好きである」と告白したそうである。

又更に別の婦人の事を書いて、彼女は出来るだけ良人の性的衝動に対して抵抗する。そうして最後は矢張り征服されるのであるが、

こうして只簡単に服従

してしまふよりは「少

し許り面倒でも抵抗す

る」方が彼女の愛人に

取りては一層愉快を与

えると云つてゐる。こ

れは簡単な事のように

あるが、実は性愛の秘

奥である。此処に最も

深い性慾の秘密がある

のである。これは人間

ばかりでなくあらゆる

動物の間にも見られ

る。

哺乳動物のあるもの

は、猛烈な性慾の衝動

を感じた場合、吐は叱



叱を追跡してそれを捕えて虐げる。然し一旦叱が従順になれば吐は忽ち優しい良人と化して自分の収獲で妻を養い、且つ雛鳥の養育を助ける。

これ等の風習は人類に於ても世界各国到る所の民族に行われている事でアラビヤ夜話の中でも新嫁が周囲の人達によつて裸体にされて新嫁の寢床の中へ無理に連れようとされる

愛と苦痛の交錯

鳥上源一

とわざ／＼反抗してそれをいやがるようにすることが書かれて居る。

△ロシアの諺の持つ真理▽

又ロシアには「妻を打つ程よい」と云う俚言があるが、ロシアの女はその良人に打たれる時何より幸福であり且つ嬉しくあると云う。よくロシア文学の中では下層階級細君達

が「そんなに前さんは良人に撲られたのかい」とか「亭主は昨夜私を随分打つたんだよ」とか云つて、それは決して見つともない事ではなしに、非常に嬉しい事柄でもあるかのように話しあつて話しているのを見る。そしてロシアに於てはそうするのが愛の重要な一つの証拠であると云う。これはある程度迄我々にも肯づける事である。

これは只今に於ても
そうである事をクラフ
トエビングなども認め
ハンガリー等に於ても
農婦の妻はその良人に
平手で打たれない以上
は愛されていると思わ
ないとの事である。

ロシアの諺を今一つ

二つ記して置けば「妻を命のように愛し、又外套のように叩け」「可愛い人、人に擲られた傷は長くはない」とある。面白い言葉ではないか。然し同時にロシアに於ては女が男に虐げられて喜ぶばかりでなく、又反対に男が女にいちめられて喜ぶ人達も非常に多い事を忘れてはならない。

イタリヤのアモリスタでは妻を擲らない男

は馬鹿者の如く思われ、妻は良人に虐待されている時、最も優しく愛されているのを感じる。

ロンドンの東部に於てもそうである。そしてその地方の婦人達は血塗れになる迄虐待されて病院に入る事が多いと云う。

ある若いオーストリアの婦人が、その良人から鞭打たれた時の事を記し、最後に「夜になつて着物を脱ごうとした時、非常に傷つきやすい私の柔かな白い肩や、腕に沢山の斑痕があつて黒くなつていゝのを見出しました。」と然し私に取つてはそれは幸福な日でした」と述べているのは意味深い章句ではないか。

△愛と苦痛の交錯▽

エリスが挙げている「彼女は十才の時月経が初まつたけれどもそれからと云うものは愛に關する事ばかり空想し、又それに伴う強性的感情を経験した。そしてそれ等のうちでは快樂に対する慾求は常に苦痛に対する慾求を伴い、常に何物かを噛んだり、何物かを破壊したりして、時には彼女自身をも破壊させようとした。彼女は「恋の理想」のあとで大なる慰安を味つた。そしてもしその冥想が時として男性に対する漠然たる要求が彼女を

愛している男に対する一層確然たる要求になつて表われる事もあつた。そして時として二人若しくは三人の愛人と連続的に秘密關係を結んだが家族の爲に発見され、結局は自殺未遂を招来させたのであつた。然ながら愛と苦痛との結合は彼女の孤独の空想のうちに発出して、幾人かの愛人と實際的關係を継続した。そしてたゞその人は私を苦しめたり殺してしまふ事さえ出来すもの」

ドチエーンは性的感情中に於ける恍惚の表情と苦痛の表情、及び残忍の表情は同じものである事を指摘しているがこれは意味深いものである。

此の愛と苦しみに關する不思議な心理の中には又「噛む接吻」と云う事が入れられている。

これは単に人間ばかりでなく、広く動物の間にも見られる。多くの哺乳動物はその交尾に先だつて牝の頸の辺りを噛む。驢馬も馬も噛む。又牝馬が交尾を肯ぜない時は牡馬は牝馬を草原などへ連れて行つて牝馬を噛んだり一所に遊んだりして牝馬を興奮させると云う事をアラビア人は信じている。これはひとり馬のみならず、動物に於ては犬などがよくその飼主等を桑かく噛んで親愛の情などを現わ

す事は誰しも知つてゐる事であらう。又子供はよく噛む事を好むものである。尤も噛む事に於ては男よりも女に於て頻繁であると云と事を附け足して置く必要がある。よく女は性的興奮の絶頂に於てその相手を噛む事は屢々普通であり、多くありがちな事である。

△シシリ農婦の愛情▽

「私は貴方を噛みたいと思いますが、私も亦貴郎に噛まれたと思います」とある女は云つた。「彼女は私は生きながら食いたいと云つた」と又ある男は云つてゐる。「彼女は私の着物を引裂き、噛み私の肉に食いつきたいと云つてゐた」但し女でも男でも、相手を噛んでしまふような場合には大抵無意識であり噛んで負傷せしめてから後になつてから、自分がこんな事をしてしまつたかと云つて驚くのが普通である

シ、リイ島でも農婦は子供に愛情を現す爲に子供の腕や、頸を接吻したり締めたりして泣き叫ばしめる迄にする。そうしてお前は本當においしいよ、私はお前を噛んでやる、身体中噛んでやる」と云うそうである。

あるポルトガルの不幸な尼僧は「永久に私を愛して下さい、そしてそれ以上に私を苦し

めて下さい」と書いてある又一人の夫人は書いてある。「私は苦痛の想念が喜ばしいものであるとその事には双手を挙げて賛成いたします。私は力と強さを感じるのが好きです」ニイチエは「人の苦しみの中には、又その苦の理由の中には、多くの数え切れない快樂がある」と云っている。

△女子の服従の要求▽

ある苦痛を男子は加えて喜び、女子が又それを忍んで悦ぶと云う傾向は一見甚だ奇異であり、且つ不可解なものに思われる。又極めて温順な且つ自尊心の高い婦人が自分に精神的肉体的に凌辱を加えようとする男に熱烈な愛を持ち、又知識のある理性のある深切な男が自分の愛する女に此の凌辱を加えようとする事は誠に不思議なように思われる。

然しこれはある程度迄である事が必要である。余りにひどい苦痛はもとより女に快感を起し得ない事云う迄もない。

或る女は書いている「自分の愛する女に屈従を要求する男は、不断の生活に於て極めて決断的な強い性格の持主です。又不断の生活には非常に強い見識ある婦人が男に縋るようにして暮しているのを見るのは一つの驚異で

す。全く強い女ほどより多く男には屈従的なものです」

此の愛するものに虐げられて喜ぶと云うのはすべての人間の通則であり、特に女子の顯著なる通有性であるが、これが甚しく度を越すと病的なものになる。エリスの挙げている例などは顯著なものである。要点を迷べて見よう。

十八才になつて恐ろしく彼女はヒステリカルになつた。医師達のすゝめに依り二十才の時に結婚した。そしてそのヒステリカルになつた原因は余りに屢々自瀆し過ぎた為であると本人は信じていた。医師も此の習慣を推測して早く結婚してそれから救われるようにすゝめたのである。

彼女は犬の喧嘩を見るのが非常に好きであつた。そしてその喧嘩が猛烈で血を見る時などは殊に興味深く、そうでなくても彼女は色慾の昂進を経験したのである。彼女は弱い犬が強い犬に圧倒されて散々な目に遇わされるのを目撃する事によつて性的に興奮させられた。彼女は無理矢理に屈服されてしまう場合を考えると非常に快よかつたのである。

これは既に変態的特徴を帯びている。此の女子の虐げられて喜ぶ一般的傾向と、更に病的

的になつた苦痛に依る快感は如何に区劃すべきか。

△性学者の誤解▽

多くの性学者はこれを同一に考えている。エリスさえそう考えている。又中にはすべての人間は誰でも多少変態的傾向を有するものである故に虐げられる事を喜ぶのであると説明する人もあるけれども、これは確然として区別されなければならない。

何となれば、此の一般普遍的法則の方にあつてはその根底に於て愛されていると云う、仮定がなければならぬ。だから無暗に人から暴虐を加えられるのを喜ぶものではない。所が此の病的な変態性慾者は、やゝ趣きを異にして誰でもかまわずその異性に打たれ、快感を感じると云うのである。勿論愛人に打つて貰えば尙いゝのである事は云う迄もないがそれでなかつた場合には単なる男或は女であつてもいゝのである。

即ち一方は異性に依つて与えられる苦痛を、れ自身が快樂であり、一例を挙げればその良人との性交中は何等の快感を感じず、その良人に依つて打たれ、或は更に甚だしいのになると刃物を以つて切られる時でないと快感を

感じないと云う者等が変態的な病的なのであつて、これらの人々はその虐待されていたり、虐待されていると想像している時に激しい性的興奮を感じるものである。

然し一方の普遍的に誰にでもある方は女決してそんな病的なものではなしに、良人或は男が自分を愛し、自分を真に占有しているからこそ打つのであると云う風に、苦痛それ自身が快感なのではなしにただ、自分に親しい

からこそ打つのであると云う推理が必要なものである。故にその感情は直接的なものであつて、推理的なものであり、従つて理性的なものである。故にこれ等の推理を伴わないものはいぢめられ、或は打たれても喜びを感じるわけにはゆかない。

然し打たれて快感を感じるというようなのは少く、大抵は心理的にいぢめられる位が限度である。又男の愛情に伴う心理として

蛇責の例話

文献の語る所によると昔の刑罰には残酷極まるものが多かつた。蛇責の如きもその一例である。蛇責とは罪人を生きながら桶等に入れて之れに穴をあけ蛇を投げ入れて責めたもので刑罰と云うよりは時の権力者などが一時の私憤を晴すために用いた私刑的方法と見なすべきものかも知れない。然しながら事実の有無は兎も角として蛇責を行つた話は伝説稗史に散見する所で、元和九年八月天徳院夫人の侍女が蛇責にあつたことが「三壺記」に載せてある。

「天徳院様御つぼね、常々御前様へ対して不忠之儀有之。山々里々へ被仰付、くちなわを

も、少しばかり困らせるとか意地悪くするか、云う事は自然的発露であつて、何人に依つても経験される所である。これ等のものを女は喜ぶのである。

然し同時に変態性慾であるのではなしに、又一般の女性に、良人に打たれ、或はいぢめられて泣くと云う事の快感をも見遁す事は出来ない。彼女等は泣くと云う事の中に非常な快感を見出すものである。

生ながらふくべに入れ持参す。まむし、からす蛇・山かげなどと云う毒蛇ども第一と取上げる。其中に尾有るくちなわもあり、両頭の蛇もあり、二尾のへみも有之由取沙汰せり。其期に望んでつぼねをはだかになし桶に入れ、桶のくれに数百ばかり穴をくり、四尺四方ばかりの箱の中へ桶を入れ、釘にて閉じ、箱の角に四寸廻りばかりの穴をすみちがえに二所あけにけり。元和九年八月下旬の事なるに、ある山陰にひそかに役人被仰付彼箱を埋み、箱の穴より毒蛇どもを取込み、其中へ高岡酒二樽流し、入口を板にて釘付にふさぎ、其のまゝ土中に埋て帰りけり。」とある。妙齡の侍女を素裸にして風呂桶の中へ毒蛇と一緒に同居させたというのだから、聞いただけ



でもぞツとする話である。

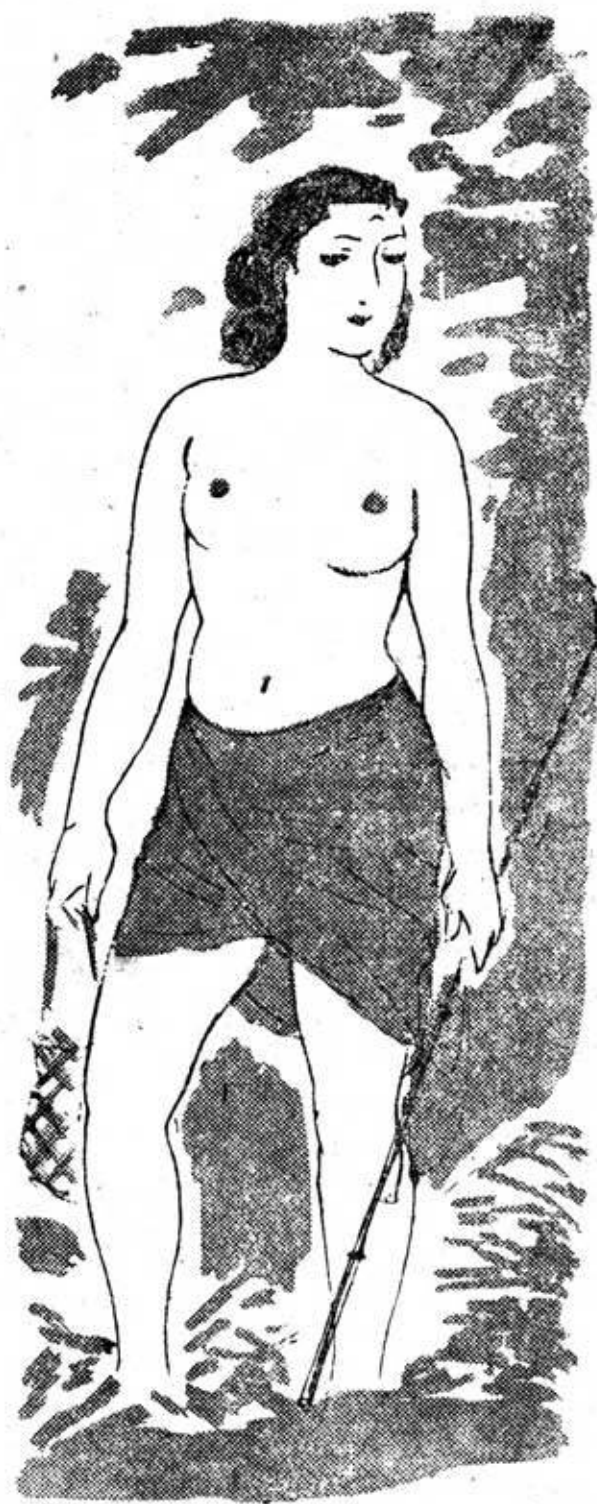
「雪窓夜話」巻五に嫉妬心の強かつた良正院が常々何の落度もない家人を殺したが、或時大きな桶に数多の蛇を入れて自分が妬んでゐる女房を裸で押込んで生きながら蓋をして責め殺したので遂に亡霊崇となつて報いた話がある。広島県沼隈郡にもこの話を伝えている。天正の末石井又兵衛という者がその妾阿良が松林院と云う修験者と密通したのを怒つて二人を大きな桶に入れ其中へ百足毒蛇むかでを入れ酒を注いだので毒虫は酒氣に乗じて彼等に巻きつき或は腋の下や股の間に蠢いたので二人は恐怖に狂い死んでしまった。その後亡霊は火玉となつて頭れ石井の家を劫し、座敷一面を鮮血に染めたり、煙火を発せしめて家人を驚す等遂に石井は狂者となつてしまった。

信州松代町殿町の邸宅の一隅にお菊大明神という小祠がある。この祭神に就いても同様の物語が伝えられている。天正廿一年九月のこと真田家の臣小幡上総介が日頃寵愛している侍女お菊にかしつかれて朝食の膳に向つた処、將に箸を把らんとした上総介は飯中にピカと光るものを認めた。それは一本の針でかねてお菊を妬ましく思つていた奥方の悪計のなす所だつた。暗愚な上総介は之れを見破るの明なく一図にお菊の所業と思込みその忘恩の行為を責めて白状を強いた。けれどもお菊は身に覚えなきことゝて百万弁解の言葉を尽している所へ、ばた／＼と奥方が現れ出てこの女は元来性根の腐つた強情者、とても尋常では白状しますまい、よい考えが御座います、あの蛇責になさいましたら自白致すで御座いますと焚きつけたので上総介は二もなく彼女を裸にして風呂桶の中へ入れ蓋をして、早速幾十匹の蛇を捕えさせて桶の蓋の隙間から投入させた。かくて盛んに責めたてたが更に白状もしないので奥方は家来に風呂桶に火を焚き付けさせた。湯が沸きたつにつれて蛇共は苦しまぎれにあばれ出す。やがて――。

お菊の身体は外へ垂れて来たがやがてのと罪なき身を責殺す憎みは末に迄祟るとの怨言をのべて憤死してしまつた。その後間もなく奥方は病臥し折々お菊の亡霊に呻なされ遂に苦しみ抜いて絶命した。又お菊の部屋から毎晩幽霊が出現するので家来共は怖気づいて暇を乞う者が日々に多くなつた。やがて小幡は城を引揚げて松代へ移ることとなり、日数を重ねて松代の町へ着いた処供の駕籠が一挺余分に來て居り賃金を請求に及んだので合点が行かずどんな者が乗つて來たのか？と尋ねた処年の頃は廿一二の大変やつれた女とのことでお菊の亡霊と分り小幡一同は顫え上つたかくてつき來つた怨霊は尙も一家一族に祟つたので遂に前記の祠を立て、祀ることゝなつた。

其祭後から一匹の黒蛇がお宮の附近に棲む様になつて明治の初年まで居つたがその頃或男が耕作中誤つてその蛇を鍬にかけて殺して終つたのでその男は間もなく死んでしまつた。併しこの話があるにも不拘今も尙もお宮にはお菊の蛇がいると噂されている。

此の外にも各地に伝えられた蛇責の例話は相当ある筈であるが、注目すべき事は刑に処せられるのが殆んど婦人に限られている事である。そしてその女の名前にお菊と称せられる者の多いことである。我が国に於ける悲劇的運命にもてあそばれた女にこの名前の多いことは有名な皿屋敷のお菊のみにとどまらない。蛇責の例話は、の位にしておいて次の機会には改めてその原因等について書いてみたい。



少女の像

栗村由美

「四国山脉の中に大野ヶ原という高原があるんだがね、僕は今年の夏も此処へ行こうと思うんだ。見渡す限りの草原で中国の秋^{あきよしだい}吉^{きち}台^{たい}のようなカルスト地帯なんだ。白樺^{しらかほ}の林や撫^{ぶな}の森林もある。得能氏の古戦場と云われているが、こんな所をたつた一人で歩き廻るのも何とも云えん趣があるよ——。だが、それよ

りも僕が此の高原へ行くということには、もう一つの目的があるんだが……」
私立の美校出の画家、戸田は短くなつた煙草を灰皿の中に揉みつぶし乍らにやりと笑つた。
「何んだい、そのもう一つの目的というのは？」

宮部はすかさず、からみつく様に反問した。

「うん、実は一昨年四国へ渡つた時の事なんだが、それ昨年の秋の僕の傑作『少女』が出来たのにはそもそもの由来があるんだよ。」
そう言つて戸田はその癖である口のあたりをもぐぐと動かし乍ら話し出した。

○
戸田が予讃線の伊予大洲という駅から省線バスに乗り込んだのは昭和二十五年七月の十九日であつた。乗客の吐く息とガソリンエンジンの熱気が籠つた狭い車内は室^{むろ}のような暑さである。黄色の車体の色褪せたバスはほこりっぽい道をガタ／＼と大きな振動に喘ぎつゝ走つていった。

細長い町を抜けて二十分ばかり走ると左右の山が迫り、山と山の間を流れる清流は激しく岩を噛んでいた。戸田は窓ガラスに額をくつゝけて移りゆく景色をぼんやり眺めていた。銀箔せぶちまいたような急流や濃紺の水を渺漫とたゞえたる深淵、どんな所でも明かに底の石ころを数えることの出来る清い水は、道に沿つて長々と続いていた。

車体が大きく揺れる、何時の間にか川べりの道路は右に左に峻しく折れる。

でこぼこの多い道を車は遠慮なしに突つ走るので、クツションの悪い坐席にどすくたつきつけられるのはかなりの苦痛であつた。火がついたように泣き出す赤子にうつら／＼していた中年の百姓の女房があわ／＼胸をはだけ、たるんだどす黒い乳首を押しつける。

誰を見ても一様に日向の朝顔の花のようになつて、頭を車の震動と共に左右へごろ／＼うち振つてゐる。

二時間の後、戸田は鹿野という川沿いの停留場で車を降りた。地図によれば此処から分れる枝流である谷川に沿つて林道を西に徒歩で行くのが目的地である大野ヶ原に着く一番近いコースである。

リュックと絵具箱を待合小屋のベンチの上にはより出すと煙草に火をつけた。甘いもやりとしたものが軽く胸を突くと蘇るような壮快な気分が全身を駆け廻つた。ポケットからしわくちやになつた五万分の一の地図を出して目的地までの正確な距離を計つた。二十八軒、小半日を汽車とバスの中に消した今日一日の行程としてはどうみても、無理なコースである。けれどそんなことはいささかも彼の躊躇を引起さなかつた。何事にもこたわらな

い彼の性質は、ジプシイの野生的な我儘さがあり、メカニテイには想像も出来ない人生に於ける和やかな空間があつた。食い残しの弁当で早飯をすますと、荷物を担いで待合小屋を出た。

ごつ／＼尖つた岩角が重なり合つてゐる谷川沿いの林道にかゝると、両側の高い山が急に落込んで深い谷間を刻んでゐる。大小の奇岩に激突する溪流はごろ／＼と谷に木霊し、銀の飛沫は岩の間から噴き上り次の岩へ粉々に叩きつけられる。何百分の一秒かのめま／＼、しい瞬間美であり、自然の活力に溢れた営みである。谷川から五十米は優にある此の山腹の林道へも、日中別世界のようなひびや／＼とした冷氣が霞のように這い登つてくる。十五度程のなだらかな勾配をえがいた坂道を戸田は、自然の悠大な懐にはぐくまれながら黙々と歩いた。ふと、激流の響の何処をどうくざり抜けてきたか、河鹿の小鈴を振鳴らすような鳴声が忍びやかに聞えてくる。時々こんもりと繁つた杉林の中を抜けると、冬以外は聞けないとばかり思つていたひよの針の様に鋭い鳴声が、此処では全く人間の季節はずれだという感じを無視して、むしろ聞く者をして遠い冬の世界へ無条件に引きずり込んでゆ

くばかりの強い力で、杉の老樹にかん／＼と弾ね返りながら飛礫の様な黒い塊と共に、梢をかすめて一直線に谷底の方へ落ちて行つた。何時か谷川の幅が次第に狭くなつてゐた。人家が全く絶えてもう二時間あまりになる。体力にまかせて休みなく歩き続けて来たせい、か、一度立止ると急に全身の力がどん／＼抜けて行くばかりの疲労を覚えた。シャツは汗でびつたりと体にへばりつき、顔を撫るとざら／＼とした感触で汗の結晶が掌の上に白く残つた。彼の経験からしてももう十二、三軒は十分歩いてゐる筈である。陽は大分西に傾きかけてきた。

それから、どの位歩いたか彼自身にさえわからなかつた。

そこから程遠くない谷川の岩の上に戸田の眼はぎり／＼と食い下つてゐた。山に閉ざれた此の谷間にはもうかすかな紫の霞が流れ始めていた。

それはまぎれもない人間である。それだけならば、唯単に人間というだけならば何もそう彼を驚かすには足りなかつたかも知れない。けれどその激流の中に突出した岩の上にいるのは、一人の裸体の少女なのである。人里を遠くはなれた此の深山の溪谷には凡そ非

現実的なことであつた。〃これより奥には人は住まない〃と教えた木樵の年寄りに会つてからでも、もうずいぶん長い時間が過ぎ去つていた。

重吹を浴びて、てか〃と光る黒い岩と、小麦色をした少女の肌は見事な浮彫のようにあざやかな対象であつた。ふつさりとした長い髪が肩のあたりに大きく乱れかゝり、かゝめた両膝の間にじつと支えられた俯向きがちの upper body は丸くはち切れるように脹れ上つていた。無造作に腰の廻りに巻きつけた布がごろ〃となる悠大な自然の懷の中に、僅かに人間味を表していた。あくまでも破れることのない均衡を保ちながら自然と人間が渾然と一体に融合つている。之れは動中静の調和美であり、画家である戸田の美的感能を完全に陶醉させるのに十分なものであつた。

過去にはかつて出食わなかつて強烈な美的体験であつた。現在の彼にとつては、アトリエに於けるモデル等の様々な姿態、自己のほろまんな肉體から少しでも美しさを発散させようとしてあせる彼女等の狂態、之れらすべて人工ででつち上げた泥人形であつた。

少女のよくのびた腕が頭の上で大きく弧をえがくと、今まで氣のつかかなかつた銀色の細

い竿がきらりと光つた、そして又もとの姿態にもどると、見動き一つしないでじつと泡立つ流れを見つめている。

極くわずかの間ではあつたけれども少女が動いたことは戸田をふと、われに返らせた動機であつた。彼は少女に呼びかけてみたくなつた。人間にはもう会えないと諦めていた時、偶然出会つた人間に對しては理屈なしに親み以上の氣持を持つものである。その時にはもう戸田は、美を客観する画家でなく少女との間に何の隔りもない旅人となつていた。「おーい。」

ぐわーんと谷と谷に弾き返りながら落ちていつた。けれど少女にはすぐにそれが人間の声であることが理解出来なかつた。それ程谷川の流れは激しく、それよりも林道から自分を見下している人間があるというようなことは彼女の頭には想像のかけらの一片なりと浮ぶ何ものをもなかつたからである。

戸田は少女に聞えないことを確めると、叢の中にある谷へおりる小道をずる〃と下りて行つた。

痛い足のうらを氣にしながらぬるりとする岩角を踏みしめて、やつと少女の後にたどりついても少女は石のように動かなかつた。碎

けて霧になつた水煙がひやりと体を包む。戸田はその平たい岩に這上ると、

「何釣つてるんだい。」

とやさしく尋ねた。

少女の全身の筋肉が針をさしたようにびく、りと痙攣し、長い髪がざわりと大きく揺れて戸田の方を振向いた。くわつと開いた眼は驚きで凍結していた。

「――驚かしてごめんね。何釣つてるの。」

戸田は出来るだけやわらかい微笑を投げかけて、詫びるようにして少女の側に腰を下した。少女も戸田の人なつこい微笑を素朴な山の娘らしい敏感な感受性で察知すると、やつと安心の色を浮べて、

「あめ、の、お、を釣るよるん。」

とひくくぽつりと言つた。

「あめ、の、お、？どんな魚」

「――い、だ、にちよつと似とる魚。」

「ふーん、釣れたの？」

「ええ。」

少女が岩陰の竹で編んだ細長い籠を指差した。籠の中には三寸ぐらいないだを少し平くしたような、青い斑点のある魚が四、五匹重なり合つてごよ〃動いていた。

「あんた此の近くに住んでるの。」

「ええ。」

ちらつと瞳を上げて戸田を見た。そして戸田の視線にぶつかると思いで眼を水の上に落しながら、彼の視線が自分の全身にじり／＼注がれているのを始めて意識したのであるうか、ぼつと頬に血の色が流れ、そして仄かな紅が水煙でじつとりと湿った小麦色の肌へ流れ出していった。

きゅつと締めつけたような細い腹部から急に広がる臀部へかけてのなだらかな曲線、つんと伸びた脚線の尖端には濡れた脣円形の爪先が白く光っている。

話かときれると白々しい雲間が二人の間を流れた。

「何処へ行きよるん?。」

沈黙を破つて少女が、長い間迷っていた事をやつと云つたと考えられるような調子で、力をこめて云つたが、すぐ不自然に響いた自分の声に気が付いたのか、戸田に向けていた睫毛の長い黒曜石のような瞳を伏せてしまった。

「うん、俺かい。大野ヶ原まで行くんだよ。」

——此処からまだどのくらいあるの?——

戸田は少女の気持を富すると軽く受けた。

「さあ——、二里ぐらい。今日中にはもう行

かれせん。」

「そうだなあ、このぶんじゃあとても駄目だなあ。」

二人は山と山の間にある細長い空を見上げた。藍色になつた空にはまだ何処か白い光の名残があるが谷間はもう夜の訪れである。「今夜うち所へ泊つて明日行かしたらええのよ。」

少女が戸田の瞳を動かずにみつめた。

「——そう出来るか僕も助かるんだがねえ、……知らない人なんかつれて帰ると家の人にあんた叱られるよ。」

「そがいな、怒る人なんか居らへん、うち姉ちゃんと二人じゃのに——。」

「……あんた方二人だけなの?。」

「ええ、泊つていたらあな、泊つていたらあ何ちや、うちとこはかまへんのに——。」

「うーん。」

戸田は微かにうなつた。けれど彼の心はすでにきまつていた。小さい携帯天幕にくるまるよりか、どんな所でも軒の下に寝られるということは大きな喜びであつた。

「じゃあ、……すまないけど一晩泊めてもらおうか。」

「うん、そうがええ——さあ帰ろう。」

少女ははずんだ声で云うと、もう岩の上を身軽く飛越えてゆると立上つた戸田をせきたてゝいた。

林道に出てそれから二丁程行くと、

「早よ。」

少女が夜眼にも白く見える丸い歯をつと出して戸田に笑いかけた。

「いやに遠いんだね。」

「もう、そこ。」

少女が荒い息をはいた。胸の尖つた二つの隆起がその度に大きく波に揺り上げられている。林道をきれて山道をしばらく登り杉林の真暗な中を抜けると、木の葉越しに赤い火影がちら／＼見えだした。

「姉ちゃん、今もんだ(帰つた)。」

家の前に来ると少女は大きな声を出した。黒々と背の低い雑木に囲まれた彼女の家は、家というより小屋と言つた感じであつた。

ドロをこねた荒壁と、削りかけてない柱との間は何処も二、三分ずつ隙が出来ていて、そこから赤い燈がちらりと洩れていた。戸口には切れかゝつた藁がぶら下つている。

「どしたんぞ、おそろなつて——」

重い女の声、少女は藁を押して中へ入ると「大野ヶ原へ行きよる人が日が暮れて困つと

「つたあんなつれてもんだぞ」

「なに——いい、どがいな人？」

「若い男の人」

「ほつ」

戸田は外で姉妹の土地訛の会話を変な気持ちで聞き入っていた。話がきれると少女が庭の間から丸い顔を出した。

「はいんなはい」

と言った。戸田は静かに庭を押した。

「夜分に恐れ入ります。行き暮れて困っていましたところ妹さんに御親切に言つて頂きましたので……」

「ええ、ええ、きたない所じやが、かまんようならゆつくり休んでいてやんなはい」

二十七、八のでつぷりした女が囲爐裏の中へ薪を投げ込みながら眼を細めた。

戸田は囲爐裏端に上り込むと、足を投げ出して自在釣にぶら下つた真黒な鍋から出る白い湯気をぼんやり眺めていた。少女は土間でさつきから、ごとく飯の支度をしている。

「何処から来なはつたんです？」

女が太い瓶からこぼくとつくり酒をうつしながらきいた。地造り特有のつんと鼻の奥を刺戟する臭が戸田の所まで流れてきた。

「東京からです」

「へーえー」

女には想像も出来ない遠い所である。

「大野ヶ原へ何しに行きなはる？」

「何といつて別に当があるわけじゃありませんがね。唯遊びに来たゞけですよ」

「ほーほ。」

何もかも戸田の言う事が女には理解出来ない様子だつた。

「まあ、一つ。」

灰の中にうめたとつくりを引き出すと、女は戸田に大きな茶碗を渡した。

側で少女が黙つて粟粥をざぶくすゝつて

いる。

疲労と空腹のうえに、ぐわつときた強い地酒の勢いでしばらくすると、戸田は前後不覚に落ち入ってしまった。

泥沼の底、足にからみつく藻草はぐいぐ戸田の体を深く沈めてゆく。息がつまる！体が動かない！

はつ、と眼を開く、夢だ、霞の向うに赤いランプが、ぼんやり死んだように静まり返っている。——そして、耳もとに鳴る荒い息に気付くと戸田は頭を上げた。あつ！彼は充血



した眼を釣り上げて声を飲んだ。そこには一糸まとわぬ全裸の女が、脂で脹上れた肉体をべつたりと彼の体にへばりつけているではないか。戸田の火のような咽喉を生唾の塊が、ぐくりと落ちていった。次の瞬間長い腕が、ねりと動く戸田の首筋へぎりりと巻き着いていた。

二つの物体が動かなくなると、水底のような黒い静けさが此の小さな山小屋を包んだ。戸田は次第にたろんでゆく女の肉体を投げ出すと激しい咽喉の渴きを覚えた。ごぼくする薬ブツの上の上に立上った。あの時の狂態をそのままに残した女の寝姿は、落ち潰れたずく柿に似ていた。満足にゆがめた厚い唇から流れだした涎が一筋ランプの淡い光の中にきらりと光った。

囲炉裏のある土間に出ると燃え残ったほど木の側に少女が、ちびこまつて眠っていた。戸田はよろめく足を踏みしめ踏みしめして外に出ようとした。古い板張はぎち／＼ときしんだ。その音に眼を醒したのであろう。少女はむつくりと起上った。そしてふらりと外へ出ようとする戸田を見咎めると

「どこいくだ」

と言つて寄つてきた。

「水ないか——」

「水？水はもうのうなつた。」

「少しもないのか。」

「うん、その杉谷までいたらあらい。」

「そうか、じゃあすまないがそこまでつれて行つてくれないか。」

「うん。」

二人は小屋の外へ出た。山の上に半分くらいなつきがくつきりと浮んでいた。

少女はすた／＼と坂道を下りてゆく。

「おい、……まつてくれよ……」

小道を踏み外そうとばかりに右に左によりめきながら戸田は少女に呼びかけた。

「しようがないな、うちの肩につかまれよ」

少女は立止つて戸田の方に小さな肩を出した。

「大丈夫か。つぶれないかい。」

「うん、かまへん。」

戸田は少女の肩に腕をかけた。戸田の胸の中にすつぽり入つてしまふような狭い肩幅、けれど強く彼の体を支えている。肩にかゝつているざら／＼した荒い髪が腕の柔い筋肉をくすぶる。

「あんたは……親切だな」

「……………」

「なんていう名だい——」

「……—うち？つゆ」

「ふーん、つゆちゃんか」

「年はいくつだ」

「十八」

杉林の暗闇を出ると、熊笹の中を歩いた。しーんと静まり返つた真夜中の山に二人の踏み笹の葉ずれが妙に耳に高かつた。

山の中を走る水音がする。熊笹の間を流れる清水に顔をくつつけて戸田は何時までも咽喉を鳴らしていた。腸にしみ通るような冷い感触である。

青白い月の光を浴びて少女の肌はぬめ／＼と光っている。

戸田は少女に近寄つて行つた。少女は小さい肩を彼の前に出した。その小さい肩を、戸田は後からぎゅつと抱きしめていた。りんごの切口みたいに甘酸っぱい体臭が鼻につんときた。

「つゆちゃん——……………」

柔い乳房に力のこもつた腕がぎり／＼食い込んでいった。

「あーっ……………」

少女がひくい叫びとも呻吟ともつかない声をあげた。

二人は一塊となつて熊笹の中に倒れた。

そして、何時までも夜霧に濡れる熊笹の茂みの中に伏していた。山の端にかつた月が雲の中にかくれて、あたりは急に暗くなった。

次の日も、次の日も、地酒の強烈な芳香と乱れ狂う肉林の中に、戸田はすべてを忘れて泥酔していた。

脂切つた年増女の情慾の炎と、十八の少女のはち切れるばかりな本能の躍動は、疲れ果てた戸田の官能を刺戟する強い対象であつた。五日の後戸田はリュックと絵具箱をぶらさげて小屋を下りた。頬に当てた手のひらはは今迄のように脂肪がなかつた。

何処までも続くぶなの原始林、戸田のうしろから少女は何時までもついて歩いた。じつとりした褐色の落葉を踏む少女の足音がひたひた淋しく鳴つていた。

「ね、もうお帰りよ。何処まで行つても同じことじゃあないか。姉ちやんが心配するよ」

戸田は振返つた。この間会つた時と同じく腰に布を巻いただけの裸体である。少女は歩みを止めて戸田の顔をじつと見つめた。

「……………」

「ねえ、はや一里以上じゃあないか。送つてくれるのはもうたくさんだからお帰りよ。」

ね

少女の黒眼がちの大きな瞳が急にゆらりと揺れた

「いや！……………」

さつと顔を振ると涙の玉がきらりと飛び散つた。そして、わつと声を出して戸田の胸にぶつかつてきた。少女は彼の胸に顔を埋めて肩を大きく動かしている。

戸田の頭の中に複雑な感情がふつ／＼と湧上つてきた。自分のあの激しい生命力を此の少女は肉体の中にじつと秘めている。そう思うと彼は少女がたまらなく可愛くなつてくるのだつた。戸田は少女を引きよせると熱い接吻を何処となく与えた。

「ね、解つただろう。大人しく言う事をきくのだよ。え、解つたね」

少女は戸田の胸の中で微かにうなずいた。彼は少女を胸からはなした。涙にぬれた睫毛が長く固まつていた

「じゃあ此の線からこちらに来たらだめだよ」

●戸田は枯枝をひろりと道を横切つて一本の線を引いた。

「さようなら」

戸田が明るく笑つた。

「さいなら——」

無理に作つた少女の笑顔が忽ち崩れると涙が頬をぼろ／＼転り落ちた。

戸田はすべてを振捨てて思いでどん／＼歩いた。顧ろうとする未練をぐつと押えつけたまま……

たつた一度山道の曲りに近づいた所で振返つた。あの枯枝で道に線を引いたと思われるあたりの道端にあるぶなの大木に、少女は体をびつたりと食つつけて泣いているのだつた。立並ぶぶなの大木、少女の姿は消えゆくように小さく見えた。

戸田は幾本目の煙草を吸いつけながら「此の様な事があつたので俺は又四国へ行つてみたくなつたのさ——そう、あの少女も今年はもう二十になつてゐるなあ」

戸田は紫の煙を大きくはきながら、何時の間にか降り出した雨の音に聞き入つていた。

「なるほど、いゝ話を聞かしてもらつた。君は女のそんな美しさを知つていたのか。俺なんか一生そんなことは無さそうだよ。じゃあ今度は君の力作『少女』を見せてもらふことにするかな」

宮部が深い声を出して言つた。

(終)



|| 女性の側より見たる裸体狂崇に就て ||

女 性 談 叢

深瀬 かず子

二保志津子様

奇譚クラブ八月号の表記の一文、とてもユカイに拝見致しました。

貴女の裸体狂崇説、大いに共感、感服でしたワ。とりわけ、おなじ女性の立場から、男性の肉体をとりあげられたところ。私ねえ小説にはもつともつと男の肉体が書かれていてもいゝと思うノ。そのくせ、男色なそのアブノーマルな世界は私、あまり興味ないけれど。私の性慾がいたつてノーマルのせいでしょうか。

私、貴女のこの一文に対して、私の側より見た男性の肉体を書

いてみることにします。

貴女もおつしやるように、男性の肉体はベニスだけに限定されますワ。女性の肉体ならしなやかにのびた孤線、ゆたかな肉体の起伏へ寄せるあこがれを讚美、女の裸体は立派な芸術品だと泌々おもいますの、もつともそんなゲイジツ品は、銭湯あたりではなかなかみつかりませんけど。

私、風呂屋の娘で、十七、八才頃まで番台に坐つてましたから、男や女の裸体について語る資格は充分持っていますのよ。それこそものごゝろついた頃より娘時代まで、男や女が裸になるところを見て成長したのですもの。小さな銭

湯で、両親と交替で番台に坐り、小学校、女学校時代は番台で宿題してましたワ。

私、自分が女であるせいか、子供の頃から、女の裸体より、男の裸体を見るほうが好きでしたワ。前にタラリとたれさがつて、ブランブランしてるの見るのが、とても好きでしたワ。

極く子供のじぶん、脱衣場で遊びながら、近所の小父さんのをつかんで、「オヂチャン、棒みたいかい」つて、口のなかへあんぐり入れたことがあるんですつてそんな逸話がありますのよ。

結婚の目標は、何といつても種族の保存にあり、慾情が基本とな

っているのですから見合をするのなら銭湯ですべきだと思いますワ。顔より生殖器の美醜が大切ですワ。ほんとにいろんなカタチ、千差万別ですワ。これは女もそう。陰毛にもいろ／＼あつて。私もう顔見ただけで、そこまで想像出来ますのよ。顔と生殖器は密接な関係があります。顔こそ生殖器の象徴だとも云えます。

私、風呂屋の娘ですから、番台からはもとより、カマ場のものぞき窓からだつて、しよつちゆう男湯や女湯見ていましたから、何でも書けるのですけれど、でもいまはべつな方面から、男のベニスについて語ることにします。

二

私は銭湯の一人娘で、ゆくゆくはカマ場のタキツケをやっている松どんをでも養子にとつて三百年もつづいた「やなぎ湯」を継ぐ運命だったのですのに、わがまゝな一人娘で、ちよつと学校の方がよく出来たばかりに、親の反対を押しきつて、上野の美術学校へ行つてしまつたんです。

女学校を出ると、どうしても生イキになり銭湯のおかみさんなどになるのが馬鹿らしくて、まして教養もない、たゞ馬車馬みたいに働くことだけより知らぬ松どんごとき男と結婚するなんて、オカシクツテ、どうしても画家になりたいつて、さんざん駄々をこね、やつと親を説き伏せて東京へ遊学させてもらつたんです。風呂屋風情の娘が、画家になるなんて、ちよつと信じられないでしょうが。そんなわけで学校を出ると私は画家になつて、それも人物画専門で裸体画習作のモデル女を扱う

ようになつたんです。私と裸体は、切つても切れぬエンらしいワモデル女の裸体はそりや銭湯の芋の子を洗うような裸体とちがつて、ダンゼン選ばれた肉体ですワ。百人に一人か二人ほどの均勢がよくとれて、豊満な肉体で……でも自分の氣に入つたモデル女はなか／＼みつかりませんけれど。両親が亡くなつて、銭湯は人手に渡してしまつたんですが、売れない絵を書いて、こんな貧乏暮らしをしていると、やはり親の云うこと聞いて、風呂屋の跡を継いだほうがよかつたかなあと後悔しますワ。そうしたら、こんな不自由な思いをしなくたつて、番台にチンと坐つておりさえすれば、男の人がきものを脱いで真裸になるところ、毎日あかず見られるのに。

でもやはり私は画家、裸体を讚美し表現することが唯一の生甲斐、番台などに坐つてなぞいられませんワ。

三

こゝで私が今住んでいる町をちよつと紹介致しますわネ、それは京都の真ん中で、いわゆるゴパンの町すじで、しもたやの旧家の多いもつとも古い京都なんです。格子のある家の前には誰かしら、その家の者が外へ出ていても晴れがましい町。喫茶店というものはぜんぜんなく、共同便所もなく、このへんでちよつと用を足すにも、足す場所がないという、小綺麗な町なんです。電柱はありますけれど、土塀とか、石垣とか、立小便をするような小暗いところ、ぜんぜんないのですワ。夜は別として敗戦日本の立小便に尻まくりは有名なのに、私まだこのあたりで男の立小便をみたことありませんの。

私はある画家の離れ屋を借りて下宿しているんですが、その家は小綺麗なこのへんのしもたやのなかで、滅多に見られない破れた板塀の家で、私の離れ屋の生垣は破れていますのよ。

私は展覧会の製作もしていますけれど、何しろ喰えないので、ポスター描きはもとより春画まで描かねばならぬありさまで、毎日泥絵具を塗らねばならないのですけれど、そんなことそつちのけにして、机の前の小窓をそつと開き、かたちばかりの植込みを透して、ちよつと破れた生垣に眼をそゝいでいることのほうが多いのですワ。

いましも生垣に、一人の男が立小便していきましたのよ。生垣の破れ目から、男のすがたがよく見えます。ズボンをはいて、会社員風でしたワ。その男は脚をひらいてから、ゆつくりボタンをはづしつまみ出しましたワ。男は私にむいて、長い長い小便をしていきました。あんなところまで指でさゝえて。そして用を終えると、よほどキチョウメンな性質と見え、何度も腰をふりていねいにシツクを切つて、さて大切そうにしまひこみましたのよ。とてもエロチックだつたわ。

この小綺麗な町で、いつからともなく、私の離れ屋の破れた生垣が、行きずりの男どものWCみたいになつてゐるんですワ……。ほんとうにこの辺では、此処よりほか、立小便する場所はちよつと見つからないのですもの。私は朝から晩まで、机にむかつて絵を描くのがシヨウバイで、生垣のあたりに眼をそそぎながら、つまみ出された用便中のベニスにしたいに興味をもつようになりましたの。おもしろいワ。さながら獲物をねらうごとく、コシタンタンとしてますのよ。窃視慾というのでしよろね。

獲物は日に少くとも七、八件ありますノ。夜はもつと多く、女まで尻まくりしていきますわよ。

立小便していくのは、人夫、工場労働者、商店員、サラリーマン学生の順ですが、このへん、わりあいインテリが多くて、私もインテリがたのしみですワ。

銭湯で男の裸体を見るより、用

便中の肉体の一部分を見るほうがずつとコーファンしますのよ。私もいちどあんなふうにしてオシッコしてみたいワ。しやがんでするよりも、立つてするほうがだいいち氣持がいいでしようし、便所なぞでやるより、ひろびろしたい、景色のところ、泌々と放尿をやつてみたいワ。

オシッコするの、大好きですワとてもいゝ氣持。子供の頃、開店前の風呂に、親子三人温泉気分とシヤレこんで、よく入浴しましたワ。そのとき必ず、「カアチャンオシッコ」と云つて、片隅でしみこみましたワ。

「カアチャン、オシッコするのイイ氣持ネ、カアチャンは？」と云うと、カアチャンはトウチャンと湯舟に浸りながら、肉体をゆすぶるような甲高い笑い声をたてていましたワ。

「ネエ、カアチャンは？」とオシッコしながら云うと、

「カアチャンもとてもいゝ氣持だ

つて」トウチャンが答えてくれましたワ。

四

この破れた生垣に、ずいぶんいろんな男たちが立小便していきましたワ。お蔭で臭くて、強烈な男性ホルモンの匂いは生垣のあたりから立ちこめ、独身の女さかりの私には、チト刺激が強すぎますのでも私、男の立小便を見るの好きですワ。このときほど、コーファンすることありませんモノ。

生垣は破れているので、外からも内部はうかがえますけれど、植込みは陽が射さず暗くて、それに家の中も薄暗いので、そつと小窓の隙から女がのぞいていることなぞ、とうていわかりつこありませんワ。私がのぞいていることなぞ知らず、男の人つたら、放尿したあと、つるりと撫でたり、可愛いがつたりしていく人もありますのよ。

男の人の放尿のしかたにもいろいろありますわネ。拇指と食指で

持つのや食指と中指ではさむのや五本の指で握るのや、両手を使うのやら、またせんぜん指を使用しないのもありますけれど。

放尿する人つて、必ず用便中の彼をぢつと眺めながらするものですワ。その顔、とてもかなしいわ。ときにひよいと、あらぬ方を眺めている顔もありますけれど、その顔、一眼見ても、ああ、小便している顔だなあつて、すぐわかりますワ。だつて安心していきますもの。

和服より、ズボンからするほうが、エロチックですワ。ズボンのボタンに手をかけながら、さてもむろにつまみ出す。そして、あたりをひと撫ですると、それが合図となつて、一条の清冽な液体が弧線を描く。男の方の放尿は長いですワ。女ならもつと早く、シヤアと出ちやうのに。

この生垣で用便する彼は、やわらかく、しなびたのが多いですけど、なかには仁王だちになつて

いるのもありますよ。

そりや、仁王だちのほうがいゝわ。男の人でも、棒みたいなのが、しなびたときより、用が足しやすいんじゃないかしら。

私、いまゝでずい分、男の立小便姿見て来たんですけれど、みんなうしろむきでしたワ。道を歩きながら、一度見たい、見たいと思しながら、まさか傍らまで行つて見るわけにはいかないでしょう。ここへ下宿して、はじめて男の立小便を真正面から見る絶好の機会

を得たわけですよ。

その絶好の機会の一つに、二三日、進駐軍さんがこの生垣で立小便していききました。外人は立小便なぞしないものと思つていたのですが、このひと、よほどしたかつたのですワ。生憎この辺にはW・Cはなく、それに外人でもの、ちよつと民家のW・Cを拝借というわけにもいきませんものね

その進駐軍さんよほど貯つていたらしく、この生垣に立ちはだかりなりシャアシャアつて、馬みたい

な放尿でしたワ。そして私このときはじめ、皮膚の色を異にしたベニスを見たんですけど。

それは淡紅色の綺麗に磨かれていましたわ。

その方、根本を持ちながら放尿していらつしやつたのですが、途中で糞の灰を落すためちよつと手をお離しになりました。すると手のところに綺麗な水色のリボンが蝶結びにされているのが、窃視中の私の眼に入りましたの。ちよつと、陰毛に忘忽草を飾つたりする

ようにね。ロマンチックでしたワ

そのとき、ブロードの毛もチラと見えましてわ。でもそれも束の間くわえ糞の灰を、ボンと落とすままたすつぱりと隠れたのです。

現在、日本人の子宮に、どれぐらいアメリカの血が流れているか、進駐軍と交際したバンバンは多いでしょうが、進駐軍が用便をするところを、こんなに身近く、真正面から見た女は、バンバン多しといえども、日本人では私一人ぢやないかしら。

奇譚クラブ最近号 主要目次

○ 六月号 戦争と性慾特集 ○

口絵 戦争と性慾画集、ハレムの美妃

「責められる女の美」写真集

好色秘本 バルカン戦争

貞操特攻隊の悲劇……………杉山 清詩

モスコウの妖花……………藤田 盛治

ナポレオンの兵隊……………松谷 茂

成吉思汗の性慾戦術……………中沢 公平

テルマ病院の点描……………花本 史郎

人間便所の妄想狂……………二宮 忠一

男子同性愛雑考……………浅倉 文朗

陸軍特設第七天国……………真鍋 吟吾

港々の女たち……………下山 雄

南方特殊慰安施設こぼれ話……………三嶋 彰太

太平洋戦争塵漁色余話……………島原 順三

今は昔戦線エロ落穂集……………下出 章一

中国兵の妻となつた女……………田島由美子

戦争と娼婦……………田森 浩志

特選小説

魔性私刑……………街 啓介

小説・京マチ子……………夏目 千代

淫蕩歌舞伎図絵……………緑 猛比古

男子同性愛者からの書信……………南里 文彦

女性陰毛の生理……………田中 芳生

女体哨戒線突破……………速浪 三郎

○ 七月号 女天下時代特集 ○

口絵 縛られた裸女十態……………喜多 玲子

緊縛裸婦写真集「美しき苦悶」

戦争とエロ

女天下時代

女天下時代(マゾの男達)画集
 女の奴隷、マゾヒスト群像……高取 辰治
 女体の下に蠢めく男たち……阿久津 猛

淫乱婦女伝……花木 実

疾患の鶏……藤安 節子

或る変態夫婦の死……藤崎 洋美

お座敷ストリップ色勇伝……鬼山 絢策

女剣劇王健在なり……富士 芳孝

国際文通好色噺……二俣志津子

上海の売笑婦 野鶏族……野中 愛三

変態 艶書……岡田 咲子

世男奴隷艶情史……野溝 草兵

少年好色奇譚……松谷 茂

維新志士漁色競べ……花山 剣作

性交なき遂情行為……鳥上 源一

性愛と残酷……仁比山 等

恥毛と腋毛……田中 芳住

女の足の蠱惑……赤坂 剛

夢性の美少年……三村 幾夫

張形の謎……緑 猛比古

倫落の岐路……壬生すみ子

都々逸に現われた性愛感情……安部 雨紅

性愛談義
 獸類にも恋愛はあるか……絹島 増夫
 張型を用いた性愛の技巧……白川 朝子

〇 八月号 責めと男色特大号 〇

口絵 浴場と浴室のエロチシズム

惨虐の芸術(合巻に現れた殺し)

男色天国繁昌記画集

女体相撲艶色史……増田 志郎

変態コレクトマニヤ……庄司 浩平

男の天国・女工哀史……早崎 穂穂

ソドミーとレスボスの愛……染田 玄

夢性の美少年……三村 幾夫

【変態心理】自虐淫楽……三富 浩生

日本性見世物変遷史……潮 マリ

乳房を失った女……竹谷 十三

男色殺人事件……井口 正憲

男性的女子の記……藤安 節子

特選 変化中条流……緑 猛比古

青い濁流……竹内 節夫

MとS……岡田 咲子

温泉ホテルの母娘……矢代 文世

不貞の倫理……貴崎 郷子

姦淫私刑考……丹波 太郎

悦虐の記録……喜多 玲子

拇指反った素足の美……的場 通

王朝好色本 音なし草紙……宮内早次郎

◎喜多玲子習作集「縛られたる女の十五態」

◎折込口絵写真 「緊縛美の断片」
 神戸暗黒街探訪記……久木田 堅
 光源氏の性的生活……畑村 連治

〇 九月号 特集 倒錯の告白 〇

口絵 倒錯の告白画集……竹中英二郎

玲子習作二十態……喜多 玲子

縛られた女の写真集……美の 緊縛

狂い咲くカンナ……羽村 京子

白い腋窩の幻想……三富 浩生

僕という男……中野安太郎

妖しい花びら……寺尾 修治

弱者の醍醐味……村井 健司

憂鬱症の転機……園 守

サデイストの悲哀……天野 一郎

足部憧憬の悲願……山本 貞輔

鎖夏怪異漫語……嵯峨あきら

変態心理を衝く……波多野 新

彫刻と性について……池長 味

記 録 係……岡田 咲子

中国艶話 夜譚随録……皆田 仁

邪恋の焰……松井 籟子

サド候爵と殺生関白秀次……高取 辰治

処女性の神秘……的場 通

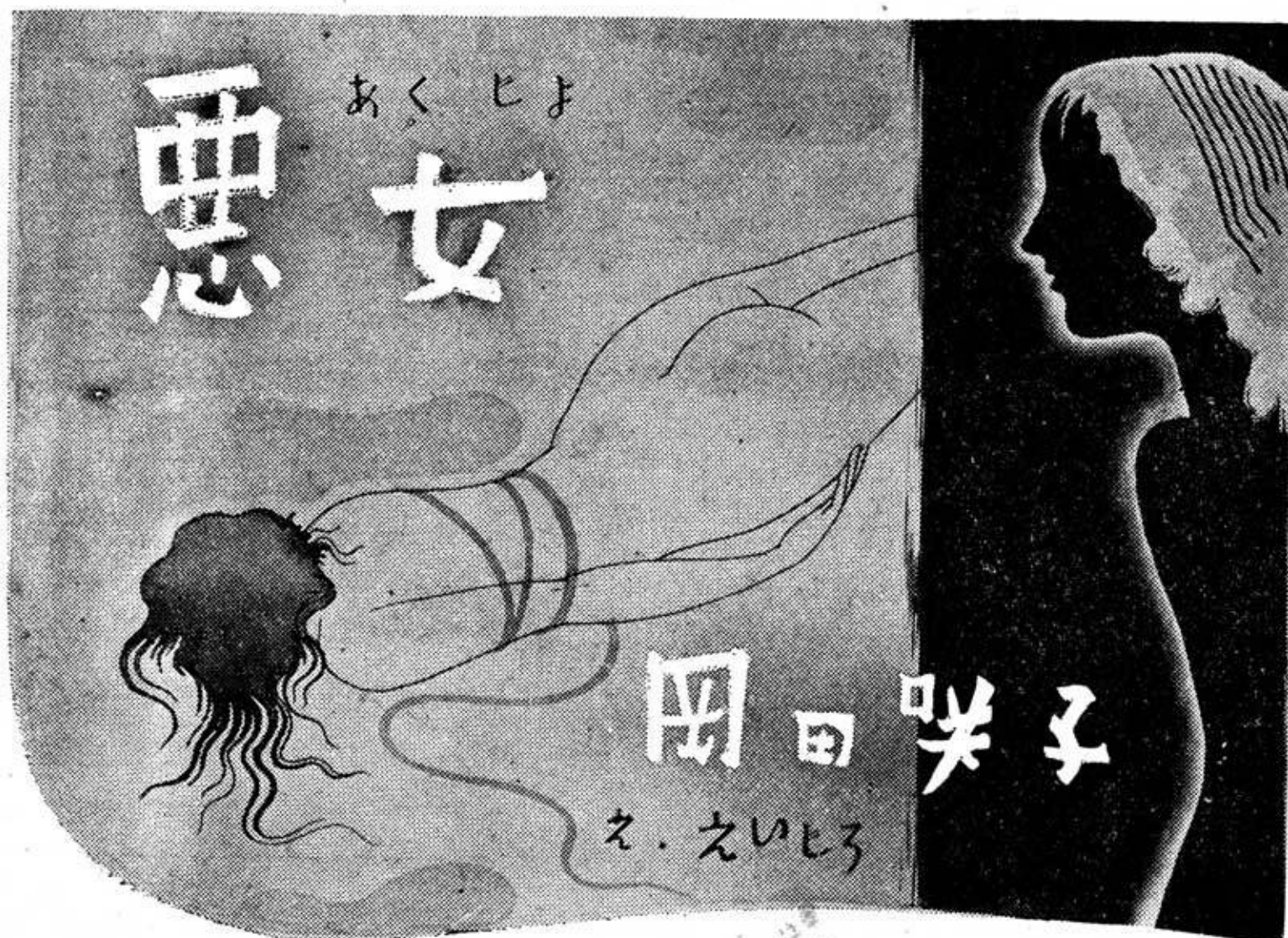
洋パンを囲む座談会……辻村 隆

加虐淫虐症の種々相……仁比山 等

吉原の淫虐囃……緑 猛比古

陸軍御用達千一夜……松本 公恵

ケンプエル江戸参府紀行……伊吹慶太郎
 平城夜話 俠盜犬磨……庄司 浩平
 桜姫全伝 曙草紙……山東 京印



1

本当に私は悪い女です。面白半分の好奇心に冗談の積りでしたことが、若い娘の生涯を目茶目茶にしてしまったのですもの。私さえ馬鹿なことを言い出しさえしなかつたら、こんな結果にも終わらずにすんだのです。

私が阿津子を知ったのは、私が体をこわして、私の一人息子の秋夫を連れて日本海に面した海水浴場へ療養かたがた、夏の暑さしのにぎに行つて居る時に、村の人の世話で女中兼秋夫の遊び対手に来て呉れた、新制中学二年生の娘が阿津子でした。

口数の少い、細長い体で目ばかりが全体の調和をこわしている程に大きくて、何時もなにかを求めて居る様にうるんで、顔でも急に見られると、ドキツとなることが有りましたが水仕事でも洗濯でも不平一ツ言はずに良くやつて呉れましたし、とりわけ秋夫の世話は親の私でも出来ない位の可愛がり様で、秋夫も阿津子には良くなつて居りました。お陰で私はのんびり養生することが出来たのです。これで留守居している夫が、来て居て呉れたならばこんな話もせずすみ、阿津子も学校を卒業して都会へ働らきにも行つていたことでしょう。私さえあんなことを阿津子に話さなければ良かつたのです。

八月もあと十日で終ると言う、都会の浴客もほとんど帰つた、急にさみしくなつた村に始めて、もう秋がすぐに来ることを感じると自分でも不思議なほど旅愁が胸にこたえて、去つて行く汽車を見送りながら全てのことを忘れてボンヤリ青空に消えて行く汽車の煙を見て、去り行く汽車に都会の想像を乗せて行く時が、私の胸のさみしさが一時的にでも散つて居る、少女の様な感傷的な気分にあたる

ことが出来る幸福な時だったのです。

あの日も家の裏の海が一目で見渡せる丘の上に座つて、去つて行く汽車を見送つて居りました。その時でした。

不図、家の庭から秋夫が何かさげんだ様な声が聞えたのです。如何うかしたのか知ら？と聞くともなく振返つて見ましたが、再度聞こえては来ません。気の故だったのかなと思つたのですが、私は立上り家の方へ足を向けました。

夏草が繁つた小道を通り、庭の木戸を開いて庭の中へ入つた私は急に棒立ちになつてしまつたのです。

廊下の柱に秋夫が麻縄で、ガンヂガラメに縛りつけられて、もがいて居るのです。そして秋夫の口にはタオルで猿ぐつれがして有るのです。そしてその前には阿津子が、さも楽しい遊びでもして居る様に微笑すら浮かべ、大きな目は今までに見られなかつた美しさをただよわせているのです。

二人共、まだ私が帰つて来たのを知らないのです。阿津子の手には別の麻縄がにぎられて、それを解きながら、

「どう？もうあんな悪口言わないか？」

と笑いながら言うと、秋夫は猿ぐつわのタオルの下から細い声で「ごめんよ。もう言わないよ」

必死でもがいて泣きそうな顔をして言つて居るのに阿津子は首を横に振り、

「駄目よ。うそと顔に書いてあるよ。よし、良いことが有る。」

とうなづくと、手の麻縄で秋夫の下半身を足首までを、まるで荷物にでも縄をかけるような手つきで素早く縛り上げてしまいました。秋夫は肉にくい込む縄の痛さに、本当に泣き出した様でした。阿津

子はなにかにつかれている様な声で笑つて

「弱虫！もう泣いた！」

手を打つて笑う声が、じーと見て居た私の胸にピンピンひびくのです。

「なにしてるの？馬鹿な真似して！」

と、そう言つてしまえば良かったのです。それが私にはどうしても言えなかつたのです。何故なのか、自分は良く判つて居るのです。私の夫にも夜寝床に入ると、私の両手両足を縛り上げ猿ぐつわをはめて喜ぶ変態的な所が有りました。でも小説にあるように叩いたり蹴つたりなどは一度もしたことがなく、唐だ私の縛られた姿を見て居るだけなのです。

最初は嫌でしたけれど、それだけのことで喜ぶ夫の顔を見ると、次第に進んで縛られたり、全裸体にさせて縛られて上げようと言う気持にもなり、二年三年とたつ間に私の方が縛られることによつて楽しさを味わい、こうふんを覚えてしまいました。

今、秋夫と阿津子を見た私は、急に病氣になり夫とはなれて転地生活の二ヶ月間、本当に忘れていた血が急に逆流し始めたのを知つたのです。胸は高鳴り、足はふるえ声を出すことすら忘れて居りました。

私の存在することさえ、罪悪でも有るかの様なサク覚をおこした程でした。

私自身どうすることも出来ない自分を良く知つて居たのです。見えてはいけないものでも見た様な気持の私は後を見ず、表へ走り出ると当もなく走りしました。ただすこしでも家から遠くまで離れ様として。

その日夕暮、びくびくして帰ると秋夫と阿津子は先刻のことも知らぬげに夕刊の漫画を読んでいた。

私はやつと夢からさめた人間の様に、大きく胸一杯に息をのみ、はき出して力のぬけた人形の様にベツクリ畳の上へ座つてしまいました。

2

九月に入ると里から妹が来て、秋夫を連れて帰ると広い貸別荘には私と阿津子だけが残されてしまいました。

ある日、押入れから布団を出そうとして居る阿津子の足元へ、何処に有つたのか布団包の白いローブが、東のままバサリツと音をたてて落ちたのをひろい上げた私は、阿津子に

「あら！こんな所に縄が入つてたわ。」

そう言つて、なにか大切なものでもみつけた様に両掌に持つと、麻縄よりスベスベとしなやかな綿ローブの感触が、胸に答えると体中がはてり出して、考えもなく不図口から

「盗棒ごつこに使えるわよ。秋夫が居たらおもちやねエー」

言つてしまつて、悪いことを言つたと気づきました。

「はア？まあ！本当に！」

始めて振向いた阿津子は、そのローブに気がついたらしく、あわてて答えると、なにか悪いことをした様に下を向いてしまつたのです。私はその阿津子の態度が可愛想になるより前に、からかつてやろうと言う気が、急に拡がり蚊帳を吊り終つた阿津子に

「廊下へいらつしやいな。良い風よ。」

と呼んで、雑誌の口絵をなんと言うことなしに開くと、時代小説の絵なのか、柱に腰巻一つの町娘が縛られ、姐御の様な女が、竹の

棒で町娘を責めて居る口絵が、出るともなく私と阿津子の前へ出たのです。私はそのなまめかしい口絵に見とれて

「岩田専太郎ね。」

阿津子も見て

「好きだわ。」

思わず二人は顔見合せて、なんと言うことなしにブーツと吹出して笑つてしまいました。

それが二人を大胆にし、二人の間に有つた垣を取除き、薄暗い電燈がそれに油をかける結果になりました。私の胸に好奇心がわき上つたのはこの時でした。私は本を置くくと

「あんたたち、探偵ごつこしない？」

「しますよ。ギャング遊びですわ。」

「どのギャングなの！面白？」

「ええ」

「どんなことするの？映画のまねするの？」

「ええ、いろんなまねよ。ギャングになつたり、探偵になつたり、

令嬢や女親分にもなるわ。」

「あんた、なにになるの？」

「私？」

「縛られる方？縛る方？どっちが好き？」

矢次早やの私の質問に、弱つて居る阿津子を見ると、面白くなつて

「私とギャングごつこしない？大丈夫誰れも見えてやしないから。じゃんけんして負けた方が令嬢、勝つたら女親分よ。女親分が令嬢をユウカイして来て身代金をとろうとして居るのは如何？ほら、こ

の前、町へ行つた時見た映画「都会のジャングル」で、浜田百々代がギャング団の首領で筑波早苗の令嬢が、地下室にとじこめられるの覚えて居る？」

今に思えばこれが七ツになる子の親がしやべる言葉でしようか。自分でも嫌になつてしまいます。あの夜の雰囲気私が私をあんなに野放ずにしべラベラ恥しさを忘れ、しやべらせたのだと思います。

私は阿津子をうなづかせて、ジャンケンすると、阿津子がギャングの女親分、私が令嬢と決まりました。

「さあ、貴女が思う様にして良いわ。」

阿津子のうなづいた顔に微笑が浮び、うるんだような大きな目から美しいかがやきを見た私は、突然、秋夫を縛つて居たこの微笑と目を想い出しました。私はドキリとして目を閉じてしまいました。

しばらくすると、阿津子の声が生々と強く命令する様に

「両手を後ろへ廻して！」

私は言われる通り、後へやると私の手首へ巻きついて行くのが先刻の縄ロープであることを知り、それがユカタの上から乳房へまわり、ギューと縛られた私は、夫と別れて二ヶ月間中断されて居た縄が体にくい込む心持良さ楽しさこうふんが、次第に早く私の体内を駆けめぐり始めました。

最後に口へタオルを当てられ結ばれた私の耳へ、阿津子の上ずつた声が

「物置部屋へ行くのよ。」

言うのが終ると、私の体を横抱きにした阿津子は玄関の横の物置部屋へ入り、スイッチを点けると私の体を、しまつて有る安楽椅子の上へ横たえました。

物置きとは言え、家具が入れて有るだけではこりが積つて居る以外はきたない部屋ではないのだけれど、私のタオルでおほわれた鼻にも、しつけくさいにほいがムツツとして、たまらない様な、しびれる様な感覚が私の頭から足先まで拡ろがつて行つたのでした。

「如何？足首も縛つて上げましょうか。」

とか、また

「フー！痛い？こんなに血管が張れ上つて。」

とか、また

「もつと、痛い方が良い？」

とか、しやべる阿津子の声が嫌に大人じみて、途切れ途切れに聞えて居る中に、突如！胸をしめつけた縄が急にしまり、痛みを覚えた瞬間！スーッと意識が遠くなつてしまいました。

3

その夜から、私は夫にせがむ様に阿津子にせがみました。その次の夜も次の夜も。

ある時は私が阿津子を縛り上げて、物置部屋で、阿津子の体から私の夫がするように着物をはぎ取り、ソファアのこわれた足木へ縛りつけ、朝まで放つておいたことも有りました。

すると次の夜は必ず阿津子は、先夜されたよりも一層変つた方法を考へて私を責めるようになり、私も同様に、前夜よりもつと阿津子を苦しめる方法を考へ始めました。

一度全快に向いつつ有つた体が再度逆もどりして居ることは私には良く判りました。でもそれ風間で夜になると、私の体は生気を取り戻し始めたのです。

そして日を追う毎に、ギャング遊びの域を脱して、変態になり、

アブノーマルな慾情だけの満足だけが残つてしまいました。

ある時は全裸で、半裸で、

ある時は部屋で、押入れで、納屋で、

ある時は庭で、林の中で、竹藪で、

ある時は風呂場で、湯舟の中で、

後手に縛られたり、前で縛られ、両足を高く吊り上げられたり、

または首にかけた縄を前へたらし、たれた縄を股の間から背へ通して両手首へ巻きつけしめ上げ、股深くくい込む縄の痛さに悲鳴を上げたこともありましたが、最初からこんなことを阿津子が知っていた訳はなく、前の日に私が夫からされた通りを阿津子にするとその次の日にはそれと同じ方法で私を縛り、それよりもはげしい責め方を考へては、私を苦しめ、遂には夜から朝、そして続けて夜中食事もせずに二人に次第により強いしげきを求めてもがきつづけました。

もう理性も恥も外聞も、そんななまやさしい言葉や表現では、どうにもならなくなつてしまつて居り、行き着く所まで行かねば、止まらなくなつてしまつた居たのです。だから、あの悲しい惨めな出来ごととも当然来るのは判つて居たし、当り前の話だったので。そう私も阿津子も知りながら、とうとう行く所まで行つてしまいました。

4

九月も半ばをすぎ、海から吹いて来る汐風にも、秋を告げる微風が通りすぎて行きました。でも私は毎日毎夜、日課の様にして続けられる阿津子との異常な遊びに身も心もつかれはてて、食事もすくなくなり、体中から次第に生気が無くなつて居りましたし、それで

も夜になると必ず迫る阿津子の責めに合つても、ただ縛られるだけで精一杯の、楽しさよりも先へ苦痛が私を捕え、嫌々ながら阿津子に強いられて居る有様でした。

私に嫌気がさして来れば来る程、阿津子は元気が良くなり、変に女びて来て私が嫌気になつて来たのが、さも面白い様に半死のねずみをもて遊ぶ猫の様な目つきになつて私のやせおとろえた体に迫つて来るのでした。

このまま後一ヶ月も続けば、私は死んでしまつたかも知れませんが幸か不幸か、この一ヶ月に渡る阿津子との遊びにも終止符がうてる日がやつて来たのです。

その日、里へ行つて居た秋夫が妹と共に歸つて来たのです。私には新しい喜びが生気がわき上り、秋夫を抱いていると希望が胸に満ちあふれて来たのです。

その夜、私は久しぶりに秋夫とそいねしてウトウトねむりにさそわれて居りました。秋夫と妹の健康な寝息をききながら、久しぶりで味あう安息の夜をすごそうとして居りました。あの時、あのまま一夜が明けて居たなら、私の心にこんな悲しい記録を残さなくとも良かったので。阿津子との遊びも、馬鹿げたひまつぶしで笑話に終れて居たのです。だけど、私が年がいも忘れて阿津子に教えた遊びは、身から出たさびとでも言うのか、そう安易なビリオッドをうつことは許してもらえませんでした。

誰かが私をゆり起こしているのに目を覚すと阿津子が顔一杯に冷笑をうかべて、無言でじーと私を見つめて居ます。阿津子がしやべるまでもなく、私にはその笑いが何を意味するものか、それが毎晩の日課が始まる合図であることも判つて居りました。でも不思議に

私は阿津子に応じられなく一瞬も秋夫のそばから離れるのが嫌でした。そんな気持の方がずっと阿津子の笑いより強くなつて居たのです。

私は秋夫が目覚ますのをおそれ、廊下まで阿津子を連れ出して「駄目、もう駄目よ秋夫が帰つて来たから。貴女も、もう学校が始まつて居るんですよ。良く眠つて、しつかり勉強しなくちや駄目よ。さあ静かにおやすみなさい。」

私はさとし様に、そしてまた阿津子の声をおそれる様に、たてつづけにしゃべりました。でも阿津子の顔から冷笑は消えず、表情にもなんの反響すら見られないのです。ただ阿津子の目がさけるかと思ふ程に見開かれたのが唯一つの反響だつたとも言えるでしょう。そして阿津子はこう答えました。

「如何うしても駄目ですか？」

「ええ、もう止しにしましょうね」

と、言つても阿津子の顔から冷笑は消えず、ますます静かに

「私は止さないわ」

と阿津子は答えたのです。

私も一寸はげしく

「私の言うこと判らないのなら、阿津子さん好きな様にすれば良い」

「本当に、好きな様にしますわよ。構いませんか？」

「良いわ」

阿津子の強迫がましい言葉に、私は部屋へ帰ろうとした時でした私の片手首を、阿津子がつかまえたのです。私はおどろいて振り返り「な、なによ！」

言う和阿津子は私の手をにぎりしめたまま、

「私の好きな様にするわ」

言うが早い、私より背の高い阿津子の体が私の背後へまわり、

持った私の手首を逆にねじ上げる痛さに私は

「アーツ」

悲鳴を上げ様とした私の口を、阿津子の細長い大きな掌が、びつたりふたをしてしまったのです。もがく私の体はそのまま嫌だなく阿津子に抱かれ引きずられて、例の物置部屋へ連れ込まれてしまいました。私はやつと口の掌を放して

「嫌、馬鹿なことしちやあー」

叱る様に言う私の体をおさえた阿津子が

「大声出すと秋夫ちゃんが目覚ましますわ。だから、私の言う通りにすればいいの」

私の急所を突いて笑うと床板の上にまるで昨日までのみだらな楽しみの名残りの如く散らばつて居る、麻縄や綿ロープの中から一本取り上げると、急に私の体を床板の上へおし倒したのです。

「な、なによ。放して」

さけびもがく私の体の上へ馬乗りになつて、両腕を後ろへねじ上げる痛さに

「痛ア！ア！」

私は顔を床板におしつけ、ねま着が乱れて肩からずりおち、両足をばたつかせて太腿がはみ出るのも知らずに、あばれましたが、阿津子の田舎育ちの体力と、病氣中の私の体力では勝負は決まっています。

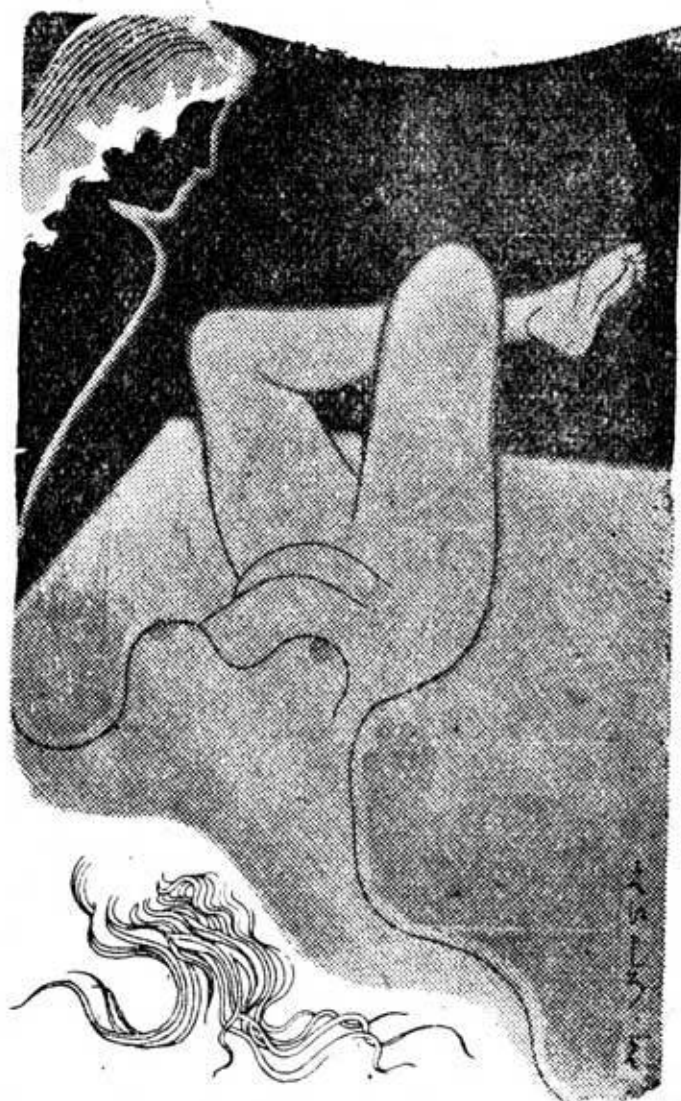
私の後手に廻された両手首には、固く麻縄がぐるぐる巻きつき縛

り上げられてしまいました。それでも阿津子は秋夫が目覚めると言うことは忘れず、馬乗りのまま自分の白の前かけをはずすと、細長く持つて私の鼻と口を息するのさえ苦しくなる程に強く前かけでふたをすると力一杯しぼつて、後で結んでしまいました。前かけの紐を、その上からぐるぐる顔へまきつけ、もうどんなにもがこうが、とれたり、ずりおちたりすることのない様に結ぶと、やつと安心して

て私の上から離れ、私を抱き上げて椅子へ腰かけさせ、自分も汗をぬぐいながらソファへぐつたり腰をおろしてしまいました。が私の太腿からむき出しになつてゐる私の両足が自由に居るのを見ると縄をひろい上げ、飛びかかる様にそばへ来て、椅子の足へ私の両足を充分に念を入れて椅子の足へ、別々にギッチリ縛りつけてしまいました。

全くの自由を私から奪い去つた阿津子はホッと一息ついて、ソファに腰かけました。そして、私の縛られた姿を上から下へ、静かに見下ろして行くのです。

私は穴のあく程に見つめる阿津子のギラギラする視線から、むき出しになつた体をわずかでもかくそうとしました。でも身動き一つ出来ない悲しさ、肩から両乳房までまる出しの上半身や、太腿までめくれ上つた下半身は椅子の足へ結えられて居るので両足はもがく



ければなりません。

頂点へたつした満足へ終止符をうつと言ふことは、今ではまつたくの別人の様になつた阿津子、顔形は少女でも、その体内にはアブノーマルな血が逆流して居る三十すぎの年増女にも似た阿津子が最後に求める最大の満足は死、この一字だけが残されたたつた一つのものであることを私は判つては居たのです。

私はでも、どうにもならない私を知ると目を閉じ、こみ上げて来る悲しさをこらえても涙にうるんだ目から、むき出しの太股へポタリと二滴三滴、流れおちる涙をぬぐいも出来ず、ただ閉ざされた口の奥で、夫と秋夫の名を呼びつづけました。

5

阿津子は私の顔をのぞき込む様に見て

「泣いてますの？体が痛い？猿ぐつわが苦しい？だけど良い氣持で

寸分の余地もなく、ただこれから始まる阿津子の責めが如何うで有ろうとも、悲鳴ももがきも出来ずに、ただ阿津子のなすがままにされなければならぬ自分の運命を私ははつきりと知りました。はつきり知つても判つても、もう時はすでにおそかつたのです。私は固く閉ざされた口の中で自分をのしりました。私はこのまま阿津子にここで、よし殺されても夫の名も秋夫の名もよべず死なな

しょう？私、もつともつと良い方法を思いついたのよ。ほら都会のジヤングル。今のおばさんの姿、とつてもあの時の筑波早苗の令嬢そっくりよ。あの令嬢も同様に椅子に縛られて居たわ。矢張り泣いて居たわ。でも私、あの映画よりもつともつと面白い方法を考えたのよ。おばさんにもきつと喜こんでいただけのわ。まあ変ね、ふるえてるわ。嫌ですか？こんなことされるの？でもこんな遊び私に教えたのはおばさんよ。フフ……」

言われれば一言もない私でした。自分で教えて自分で苦しんで居る浅はかさ、馬鹿さが口惜しくてたまりません。もう阿津子に謝まり許しを乞うだけが残された私にとつての最後の手段でした。

私は顔を上げ、縛られた体を縄目の痛さもよそに、もがかせて私の気持を阿津子に報せようとしたのです。そしてまた息も出来ない程固くかまされて居る猿ぐつわから、ほんの少しでも声を出そうと首を振りさけんでも見ましたが、矢張りそれさえ許されないことを縄目のくい込む痛さと、うめき声がわずかに自分の耳に入つたことで知ると、なにもかもあきらめ、観念してしまつたのです。

阿津子は私の気持など判らう筈もなく、もがく私の姿をさも楽しいものでも見て居る風に笑つて

「この前、理科の時に蛙の解剖が有つたの。まだ生きたビクビク動く蛙を解剖台に乗せ、あほむけて足をピンで止めてしまつたの。そうしたら今まで悲鳴を上げていた蛙も観念して動かなくなつてしまつたの。大の字に開いた蛙の胸はドキ／＼していたし、とても美しい皮膚の色今でも覚えてるわ。もしおばさんが、その蛙だとしたら ははは」

突如！デラデラ笑声を出した阿津子は、私の後へ廻り、縛つた縄

をほどき、足もほどいてしまうと、

「さあ裸になつてね」

私の寝間着に手をかけ引むしる様に脱がしてしまいました。私は裸にされるのも構わず阿津子の体を必死におしどけ逃げようともがきました。

でもそれもわずかな間でした。私の両腕を羽交じめにねじ上げてそのまま無理矢理そこに置かれた宴会用にでも使つたものか、大きな机の上へ連れて来ておし倒し私の上へ馬乗りになると、両腕を左右に開らかせて、片方の腕を膝でおさえ、片腕にロープを巻きつけ机の足へ縛りつけると、別の腕も同様に大きく大の字にされて机の足へ縛りつけてしまつたのです。

「これからよ。全てはこれからよ。まず両手は大丈夫。次は足だけど、その前にフッフ御免なさい。でも今夜は矢張り全部脱つてしまいますわ」

そして阿津子の指が私のズロースのゴム紐にかかつたのです。私は自由な両足をちじめ、腰を左右に曲げ、太腿の力に一層強く力を加えて阿津子の指から逃がれようとしてしまつた。だが次第に最後の衣はずり下げられ、とうとうはぎとられてしまいました。

阿津子は大声で笑う度毎に、阿津子の目は異様にキラキラ光り、顔は引きつり油汗でヌメヌメ光り、それはまるで狂人と思えないう姿で、私の周囲をまわりながら

「これから実験よ。解剖よ。蛙の様だわ。まあ、こんなにドキドキして居るわ」

私の左の乳房へ手をかけて言うと、部屋の隅から赤さびになつたはさみを持つて来て右手に握りしめ、左手で私の胸から下腹、そし

て太腿へと掌でさすり、

「ここからにしようか？」

と、私の下腹を、グーッとおさえて、右手のはさみを突き立て、もう一寸力を加えれば赤さびのはさみは、まっすぐに突き立つてしまふに違いなく、力を入れる私の腹の肉にチクリチクリする痛みを知ると、私は遠くなつて行く氣をやつとこらえて、全身の力を口へ集めて

「助けてー」

さけぼうとした時でした。ボタンと扉が開く音と同時に

「母アちゃんー」

飛込んで来たのは秋夫でした。

阿津子は振り返り、なにかわめき、私はこのみだらな姿を子供に見せまいと、体をもがき

「駄目、駄目、あつちへお行きー」

さけびました。猿ぐつわが有ることも忘れてさけびました。さけびつづけました。

「恐い！」

秋夫が私に走りようとした時でした。

阿津子の左手は秋夫を抱かえ込むと急に表へ走り出しました。

「秋夫、秋夫！」

その後ろへ私は出ない声をふりしぼつてさけびつづけて居る間に氣を失つてしまったのでした。

6

私は今、病院のベットの上で、あの日のことを想い出して居ますでも阿津子はなぜ連れ出した秋夫に危害を加えなかつたのでしょうか

村の漁師に阿津子と秋夫は発見されたのです。

右手にはさみを持ち、左手で秋夫の手をにぎり引張るようにして砂浜を歩いていったのだと言うことです。阿津子は微笑し大声で

「帰えろ帰えろ、蛙が鳴くから帰えろ」

と、さも楽しそうにしていたそうです。

狂人病院に送られた阿津子のことには全然知りません。でも今年もまた、蛙の鳴く時節になりました。あれから後、未だに全快しない私の体は、キツト天罰だと思います。

一人の女の生涯をふみにちつた人間への報いだと思つて居りますでも秋夫は丈夫に肥つて大きくなつて行くのを見て居ると、馬鹿な女でも母だけが知る幸福と希望が体の中からわき上つて参ります本当に私は馬鹿な女でした。

○ 読者の告白文を募る ○

本誌をお読み下さった読者の ます。形式は手紙、日記又は箇方で、夫婦生活を初め男女の性条書でも結構です。文章の巧拙生活に於ける異色ある体験、又は問いません故、出来るだけ詳細に性倒錯者に関係のある事柄にお書き願います。今後出来売淫、人身売買、性的風俗等について、の告白文をお書きになると思つております。

下さるようお待ちいたします。採用篇には薄謝を呈します。今迄予告を頂いた方は至急編集部宛へ御送付下さい。

用紙並に枚数は問いません。誌上匿名は御自由ですし、本名の秘密は責任を持つて厳守致し

(編集部)

夫婦愛の極致は、性愛の完全な満足にある世に謂う夫婦生活の倦怠期なるものゝ、その殆んど総ては、性生活の不満に起因しているといつても過言ではなく、夫婦間の虚飾なき赤裸々な愛情の交換が、倦怠期を円満に解決する最短距離であることは云う迄もない。

しかし有体に云えば、性愛の享樂には、往々にして、性愛による苦痛を伴う場合が多くその苦痛そのものが、愛の本質であるとすれば、苦痛に残酷性の加味せらるゝことのあるのも決して偶然ではない。

夫婦生活が一定の段階に達すると、その愛情の表示が、責めや残酷性によつて一層高め

られることは、江戸時代の情歌にも、「抓りや紫、咬みつきや紅よ。色で仕上げたこの体」と謳われているのを見ても明かである。

夫婦生活に於て、その夫から虐待、迫害を加えられて、却つて愛情が濃くなる例は、フランスのバラン、デュシャアトレーの記述にも見えている。それは酔つた夫から散々殴打された妻が、眼瞼は裂け、顔は血汐にまみれ

肉体は痛々しく掻きむしられて、引きむしられた頭髮や陰毛の毛穴からブツ／＼血汐がふき出た半死半生の姿で入院した妻が全治するや、再びいそ／＼と夫の許へ帰つたそうである。彼女は問われた時、「彼は私を傷つけました。それは真に私を愛しているからです」と答えたという事である。

動物の雄が、その体力によつて雌を獲得しその為雌に苦痛を与えることは、即ち体力の強さを示さんが為である。残酷は力である。

夫婦愛と緊縛の考察

辻村

隆

ルな残酷行為を伴うのは、通常の性愛所有者にも屢々見られる状態である、適度のサジズムは夫婦の単調なる性生活に刺戟を与え、歓喜を感じ、愛慾を増すものである。

赤裸々な夫婦生活に於て、単調なるノーマルな性生活を破る為、より新鮮なるものを探求するのは男性の本能である。夫は種々新しい刺戟と変化を希つてやまない。かくして愛する妻の身体の一部を抓り、咬み、さては性愛をより以上高める為、妻の肉体を緊縛することによつて、又は鞭達することによつて妻を征服し、妻は征服せらるゝ事によつて、より激しい興奮と満足とを覚えるのである。

強い力の持主である事を知らしめる為、之に暴力を加え、それが残酷行為となつて現われるのである。古代の掠奪結婚は即ちそれであり、民族伝承の昔から今にその遺風を伝えているのである。こうして考えると、サジズムもマソヒズムも、動物から人間に遺伝された性能と認むべきで、普通如何なる人間に於ても、両者の何れかの傾向を有していると云つて憚らない。夫婦生活に当然アブノーマ

これはなんら変態的な行為ではなく、夫婦愛の極致に至つて、当然起り得べくして起つたに過ぎぬ性愛のあらわれである。洋の東西を問えば、西洋は鞭答に征服慾を覚え、東洋は緊縛によつて愛の極致を覚えるこれは音の伴う鞭答が、日本始め東洋の住居に適せぬ為もありろし、緊縛の方法そのものに多種多様な変化があつて、鞭答に比べて遙かにバラエティに富んでいるせいもあるからであらう。

夫は鹿爪らしいつとめの反面、寛いだ夜の生活に、唯一人信頼するに足る妻に、アブノーマルな所業をさらけ出しても、夫婦である限り、誰もその行為を非難しはしないであろう。夫婦なればこそ、アブノーマルな行為が愉び自体であり、且つは又夫婦間に於てのみ許されるべき行為ではなからうか――

夫がフトした機会に緊縛の興味を覚え、それを妻に行つた処、妻は始めはそれを、夫の変態行為と厭がつていたが、いつしかに緊縛による激しい興奮を覚え、糸纏わぬ肉体に喰い込む縄目の苦痛に、人知れぬ悦びと感じ緊縛の行為によつて、一時は離婚話さえ持上つた倦怠期の夫婦が、円満によりを戻し、夜毎愉しく夫婦生活をたのしんでいる様な例もある。愛咬も搔傷も鞭達も緊縛も残酷行為の一種であるが、日本人に特別に多い緊縛について考えるに、夫が妻を緊縛する場合は大抵次の五つに分れていられると思われる。

(一) 純粹のサジズムによる場合

この時は必ずしも Coitus 自体が目的でなく、縛り方、責め方に激しい興奮と刺激を覚え、凡そ Coitus の遂行仕難い逆吊りや、全身を身動きの出来ぬ様緊縛する等の行為で妻に苦悶を与える事によつて嗜虐的な歡びを

感じ、且つこれには往々、咬傷、抓痛、鞭答を伴うものである。

(一) 緊縛によつて妻の肉体を自由にする。

通常な性生活にも大なり小なり見られるこの種の緊縛は、緊縛の儘 Coitus の態勢に入ることが多い。要するに妻を緊縛する事によつて盛上つた興奮を、その儘 Coitus へと移入するのであつて、こうした場合、性交態位に導入し易い縛り方が多い。両足を緊縛することなく、逆に両股を開いて棒に足首を縛つたり時には片足づゝ上へ吊し上げる等の縛り方を用いる。勿論、苦痛が本質でない為、妻の肉体の限界の範囲内で種々手加減を行う。性衝動から、Fellatio を行う場合も屢々ある。

(一) 妻のマソヒズムによる場合

妻の要求による場合は、常に激しさを求め且つ苦痛を欲求するが、夫が逆に受身的な存在になる為、性愛への享樂には乏しい。夫がサジズムの傾向を帯びた場合、生命の危険を伴う事がある。それは妻の要求による為、凡ゆる残酷性を伴う緊縛にも堪え、疼痛を快感に転換する為、行き過ぎを生じ、例の小口米体の妻矢作よねの如く、手足の指をバラ／＼に斬りとられ、肉体に烙印を押され、しかも尙死に至る瞬間迄、恍惚の境地を彷徨した、

極端な事実もあるからである。

(一) 性衝動による緊縛の場合

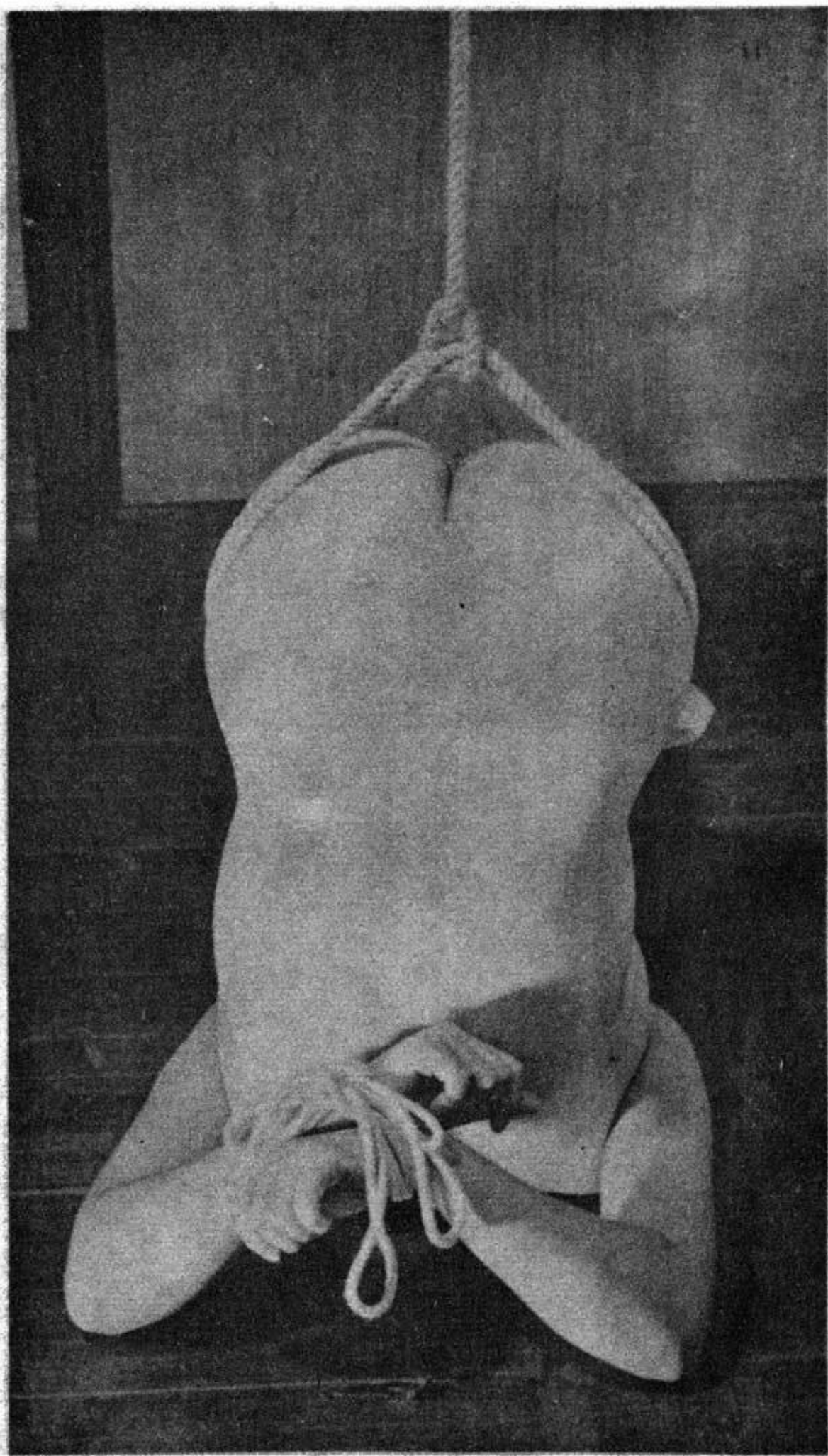
オルガスムスの頂点に達すると、知らず知らず、身に纏う腰紐、手拭の類で、妻の自由を奪い、性情を遂行する時があるが、これはコイツスの延長であつて、緊縛自体の興味によるものでなく、一途に性衝動にかられての行為である。併しこれによつて緊縛への興味を覚えて、遂には緊縛なくして性衝動の起らぬ様になることもある。

(一) 他よりの刺激による場合

雑誌小説の緊縛に関する記事を読み、或いは劇、映画、写真等の影響によつて、妻に試みる場合がある。妻の迎合によつて、これはサジズムに変わる場合が多い。縛る事自体に興味をもつからである。

右の如く、緊縛の残酷が夫の愛情をつなく唯一の技巧であると知つた時、妻は敢然と之を甘受し、何時しか疼痛が快感と変り、激しい性情に自ら没入した挙句、身を投げ出してその肉体のすべてを夫に提供する様になる緊縛は愛の苦痛である。緊縛に伴う残酷は愛の享樂である。

倦怠期の夫婦諸君は、敢然と試み給え。

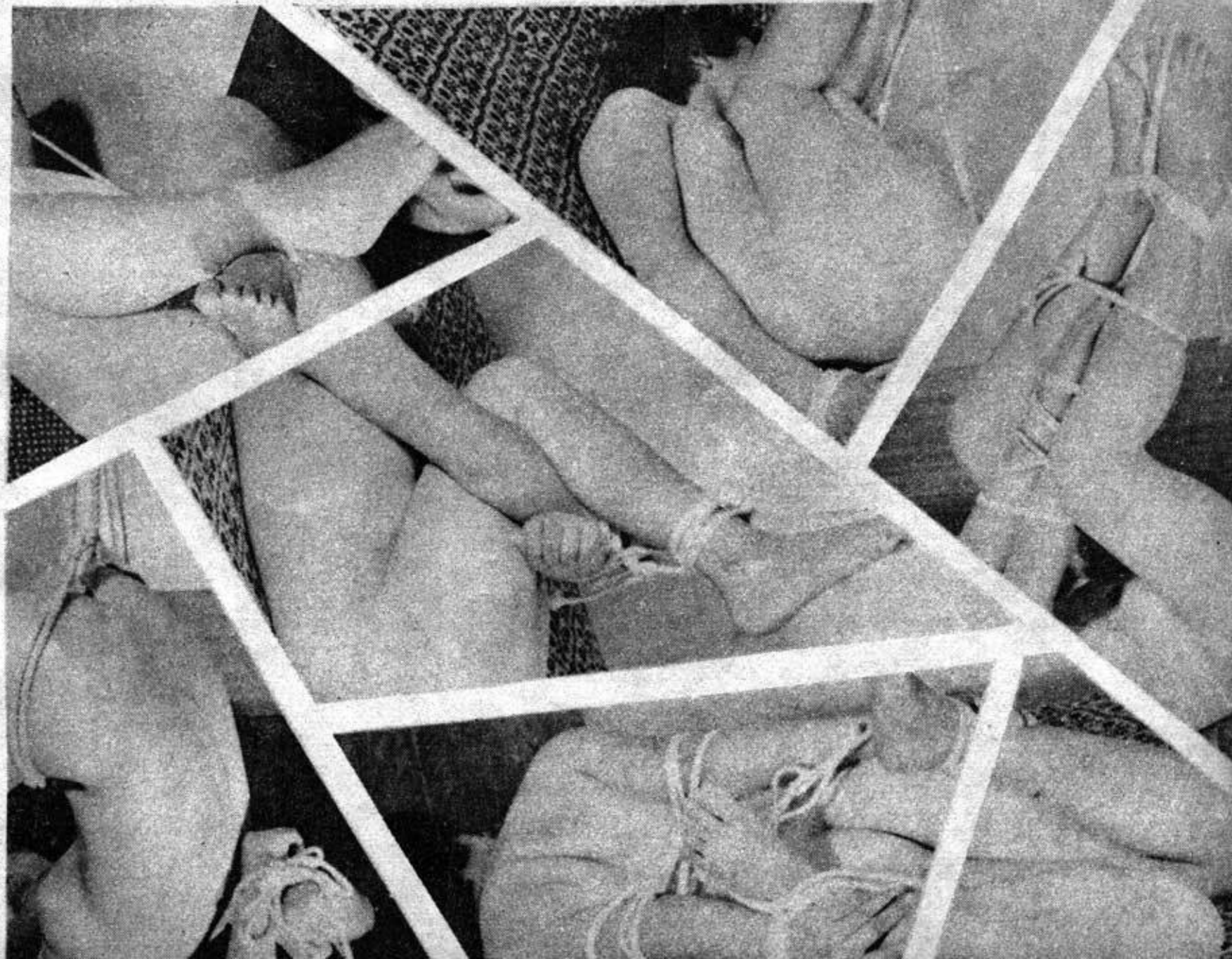


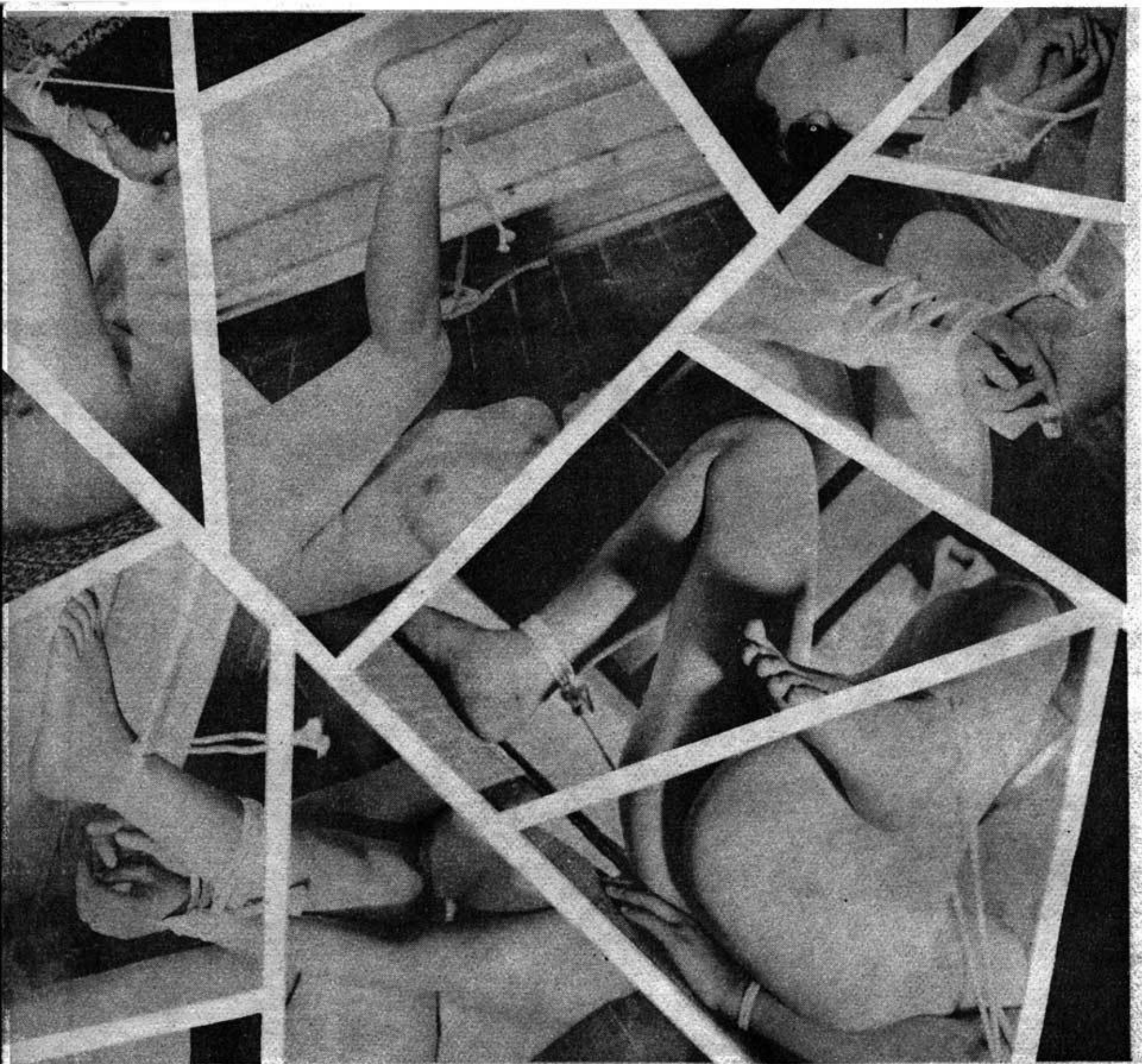
【足の表情、手の表情】

縛られた女

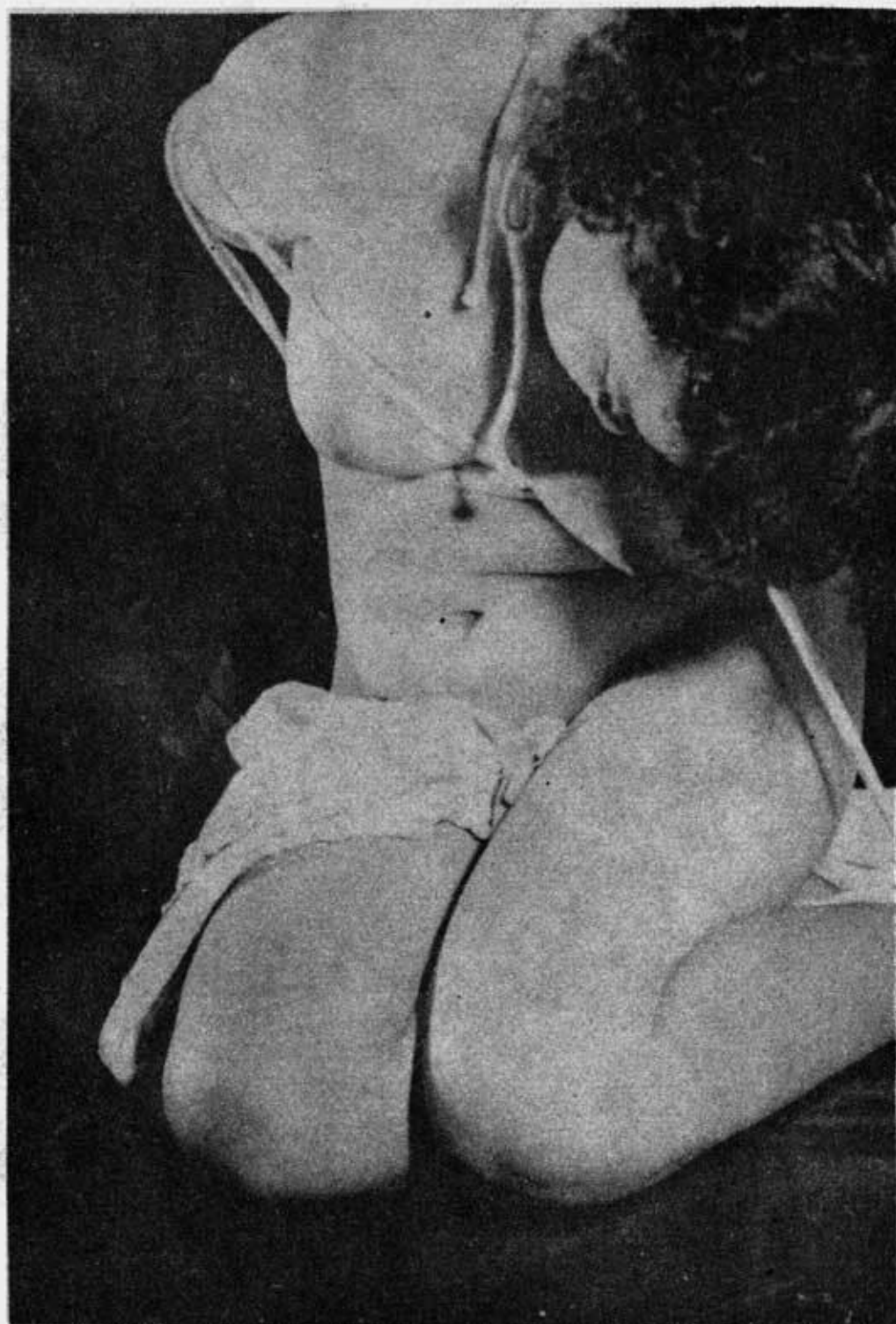


辻村
隆・構成





肉體的疼愛



読 者 通 信

八月号の読者通信欄で御云葉を拝見しました。私も貴方のように猿轡をはめられた女の姿に異常な興味を持つ者です。「すべて猿轡をはめて下さい」と云われる貴方の編集部への御註文は全く我が意を得たものです。

お話に依れば貴方は奥様に実行していらつしやるとの事、その御体験を是非承りたいと思います。私も妻を後手に縛り、その上で夫婦の営みを行います。猿轡だけではどうしても妻が承知しません。たゞ形式的に手拭で口を押える程度で特殊な縛り方や又それ以上の鞭打等の手段は実行出来ません。この点物足りないと思つています。貴方の場合は如何でしょうか。奥様に本格的に猿轡をはめておしまいになりますか、十分に口の中に布片をつめ込み呻めき声はおろか、呼吸もやつとという程度に迄徹底してなさいますか、そして奥様がそれに御協力なさいますか。

奥様をお縛りになるには、奥様の手足の自由を奪つてしまわれるには、普通の細引を用いられますか、それとも赤いしごきのようなものか或はその他の物をお使いになりますか

私は細引に細い犬の鎖を併用しています。

手首は細引で身体は鎖で縛るのです。犬の首輪と針金とを組み合せて、手製の手枷と足枷とを作つて使つていますが、これも一寸変つていて効果的です。妻も縄や鎖よりも此の方が喜びます。此の時は妻の素裸の上に直接羽二重ゴム引のレインコートを囚衣として着せ此の手枷を後手にはめ、鎖のついたやつと歩ける程度の足枷をかけこれも手製のゴムマスク(呼吸孔をつけたもの)をかけさせ雨中の樹に縛りつけ、フードを頭からすっぽりかぶせてその上から、犬の首輪をはめてそれに鎖をつないで樹に縛りつけるのです。こうして雨に打たしておくのですが、これは相当辛いらしく、私の所ではこれが最重刑です。結局一時間も雨に打たしておけば泣き声で許しを乞いますから。

私は少年の頃から猿轡の女の絵を見ると興奮しました。それから転じて普通に街で見かける女性の大きな厚いマスク姿は猿轡を連想さす点で私には魅力的でした。貴方が猿轡や責められる女に興味をお持ちになつた動機はどんなことからでしょうか、緋の長襦袢と緋の腰巻の乱れ、そして肉に喰い込む縄目、そんな女が無惨に猿轡をかまされて悶えている

姿は確かに私達にとって大きな魅力ですね、それを自由に奥様に実行なされているならば実際羨しいことだと存じます。尙その上、鞭打ちやあらゆる緊縛のポーズを奥様が承知され夫唱婦隨の楽しい遊戯を実行なさっているならば益々羨ましい限りです。私など妻をこゝ迄承知するのがせい一杯で本当のサディズムの極致などうかがうべくありません。千変一律でなるべく苦痛のないようにし、形式的で妻も多くは平気な顔をしているのですから。

尙一寸伺いたいのですが、猿轡の本格的なはめ方について、手拭程度の布片を口の中へ押し込んで、その上から別の手拭で余程嚴重にくくつても、少しもがくと手拭がはずれ中の布片を吐き出してしまうのが常なのです。手足を縛つて首だけが動ける程度で、どうもがいても絶対に猿轡がはずれないようにするにはどうしたらよいでしょう。布片を口につめた上、一度歯との間に別の手拭を廻して噛ませ頸のうしろで結び、その上から日本手拭で嚴重に口鼻を掩つてしまつたらどんなものでしょう。貴方の御体験をお聞かせ下さい。

金沢U生様

(仙台F生)

世界艶笑
文学紹介

アルチバーセフ作

「サーニン」

戸森 曉



日本では、アルチバーセフと云えば「サーニン」を思い出し、「サーニン」と云えばアルチバーセフを思い出す程、彼の小説「サーニン」は有名である。翻訳本が出版されてから可成になるが今以つて読者を失わない。何処に魅力があるのだろうか、恋愛作品の中でも勝れた作品であるからだろうか、同じ価値の中でも此の「サーニン」は或る特殊なものを持つてゐるからである。はつきり云えば、そこには若い男女の性生活が広汎に、赤裸々にそして興味深く描かれてゐるからである。しかし単に性生活ばかりを露骨に取扱つた小説でもない。

主人公サーニンを通じて人間は飽くまで自然であるべきだと強調してゐる。此のひどく虚無的な男は遂に美しい自分の妹まで犯して

しまふ。そして此の作品中に扱われている恋愛は、また實際ロマンチックで無政府主義的な代物である。

全巻を通じて妹に対する兄の抑え難い性慾が描かれてゐる。それはサーニンが都会から田舎へ歸つたその日、彼は母や妹と卓を囲んで茶を飲み、食事を済した後で、浮気な妹のリーダーを連れて庭園に出る。そこでサーニンは突然妹を抱いて妙に嬌めかしい声で「お前も美人になつたね、お前に初恋される男はどんなに幸福だろう」と云いながら妹に對して抑え難い異性の情を起す。流石に妹は驚いて兄の手を離れたので、その場はそれで済んだが納らないのは兄の情熱である。彼は其の後暫くは妹の後を追ひ廻して止まなかつた。――

此の小説「サーニン」の中には如何に春のように美しくなまめかしい自然や、息苦しいほど蒸し暑い夏の晩や、若い男女の心臓を焼き尽くさずにはいないように、赫灼とした太陽の光など巧みに描き出されてゐる事か。そして、一方には、恋を知る前の男女の初々しさ、かれらの怪しく沸ぎり立つ血潮、それから健やかな肉体の讚美などと云うものが、これ又巧みに描き出されてゐる。

だから、少くとも、革命前のロシアにおいては「サーニン」が若い男女の間で飛ぶように売れた。そればかりではない。専らこの小説の性的研究をしたものさえ出版されてゐるところで、作者自身は、何故これが性慾小説と銘打たれ、斯くまで一般社会の評判になつたか、それは寧ろ不思議だと云つてゐるのは

面白い。そして愛読者は日に日に増えて行くばかりか、お仕舞いには、その中にニヒリスチックな要素が多いため、自殺者を少からず出したと云うことである。

そこで、文芸批評家の間や、又いわゆる道学者の間からは、この小説「サーニン」にたいして「嵐のような」憤怒の聲が起つた。何故なら、それは芸術味のない通俗小説だとか、余りに技巧を弄び過ぎてゐるとか、又は飽くまで個人主義で、社会と云うものを少しも眼中に置いていない——とかと非難されたからだ。しかし革命前のロシアにはサーニンと云うような人間はいくらも有り得たであろういな存在しなければならなかつた。だがそういう議論めいたことを、ぬきにして考えて見ると、かれほど人間の赤裸々な姿を示したものは少いであろう。そこに、読者を否応なしにぐいぐいと引つ張つてゆく興味と強みがあると思う。

実際、サーニンは、非常な意志の力を与えよう／＼と思つて大いに努力する。しかし、それが不可能であると判ると、かれは常に絶望し、凡てのものをニヒリスチックに見ようとする。その果てには、刹那々々の快樂を追うようになり、それはやがていろ／＼な本能

に——走ろうとするようになってゐる。今それを作品について点検して見よう。

×

サーニンは、一言にしていえば、ニヒリストである。このニヒリスチックな地盤は、人間が先ず自分の性格を作ろうとしかける、その青年時代に出来上つてゐる。

「ウラジーミル・サーニンは、性格というものが、始めて接触する人間と自然との影響を受けて作られるという、かれの生涯のもつとも大切な時期を、両親の家にしないで過した誰もかれを監督しなかつた。いかなる手もかれを陶冶しなかつた。そして、かれの精神は野の中の一本杉のように自由に独立して育つて行つた。」

この作者の記述に見えるように、サーニンは永いこと家を外して遊んでいた。だから、久しぶりで我が家へ歸つて来ても、その母親も又妹も、彼の顔を思い出せない位であつたところで、御当人はさも「五分前に家を出たばかりだ」といつた調子で落ち着き払つて家の中へ入つて来たのだ。だから、かれは果して何年位家の外で暮したものやら判らないがそんな事はどうでもよい。考える奴が馬鹿だといった風な顔をしてゐる。で、一家揃つて

食事をすましたあとで、母親が、「ねえ、どうして暮して来たんですよ、私たちに話しておくれよ、お前が世の中でして来た事をさ」と訊くと。

「私がやつて来た事ですか」

と、かれは相変らずニコ／＼しながら、「食べたり、飲んだり、寝たりそれから時々仕事をしたり、又時々は何にもしないで居たりしてね」と答えた。しかし、その母親が「だが、お前はこれからどうして暮すつもり？」

という問いに対して

「どうにでもしてね」

と答えたかれの返事は、サーニンのニヒリズムの真諦を傾けてゐるように思う。

何故というに、サーニンは自分のしたい事をやつていけばいいのである。誰も自分を庇つてくれなくとも平氣である。ちつともうらんだり何かしない。そして死ねば死んでもいいと思つてゐる。だから、他人がどうしようとかうしようとか勝手である。そのいゝ例は、スワロジツチという男が死んだ時に云つた言葉でよく判る。

「何んのことはない。世の中に一人馬鹿が少くなつた切りじやないか」

ところでサーニンのこのスワロジツチにたいする態度は、あんまりだと云うのでロシアの批評家たちの中には、かれのことを「無頼漢」扱いする者もある。しかし当のサーニンはそんな事は一向に存じませんと云つた調子である事は、ザルデインという青年士官がリード（サーニンの妹と仲）良さそうに囁いていたのを発見した後に、かれがこう云つた事で想像される。

其晩は月夜であつた。サーニンとザルデインは歩きながら話した。先ずサーニンが口を切る。

「この世の中には悪漢というものがいる。いろいろ／＼な種類のな……」

「と云うと？」

ザルデインは眉を上げながら驚いて聞いた。「然し、それはだね……一般的にいうと……」

……僕はこう附け加えたい。悪漢というものは地球上で一番趣味のある人間だ」

「君は何を云つてゐるのですか？」

ザルデインは微笑しながら云つた。

「勿論さ。僕はね、天下で正直者程退屈な者はないという事を知つてゐる。正直者とは何だ正直とか徳義とかいうものは、昔から人の知つてゐることだから一向に珍しくない……」

そして、その古臭いものが人間のうちの凡ゆる人格を殺して了う。狭くるしい退屈な粹の中へ人間を押し込めるからだ……盗むなかれ、欺くなかれ、叛くなかれ姦淫するなかれとね……ところがそういう様々なことは元來人間の心の中にあるのだから面白いじゃないか。われ／＼は皆盗みをする。嘘つく。謀叛をする姦淫をする。しようと思えばそう出来るのだ」

「いや、然しながら、われ／＼は……」

とザルデインは漠然と反対した。

しかし、サーニンが

「われ／＼は人間というものが、苦しみのために創造されてゐないという事で、意見が一致してゐる。苦痛というものは、決して人間の理想ではないという事で意見が一致してゐる」

と云つた時、ザルデインは双手を上げて賛成した。

「そこでだ……歡樂は人生の目的である。

天国とは絶対的な歡樂につけた異名である。われ／＼は皆多少とも地上の天国を夢見てゐる……」

サーニンは、こゝまで云つてから一寸沈黙して、また続けた。

「謹厳などというのは人間の特色じゃあないもつとも真面目な人間は自己の情慾を隠さぬ人々である。すなわち、社会生活の中で悪漢と称せられる者どもである」

と、

ところで、この時、この悪漢と称せられる者は、

「たとえば君のようなものさ……」

と、サーニンが云つたので、ザルデインは吃驚したが、その次の云つた言葉が振つてゐる。

「君は世の中で最上の人間だ。そして、僕も無論同様に最上だ。然るに君も僕も虚偽、窃盗、姦淫、特に、その姦淫にたいして躊躇するような人間じゃあない」

で、ザルデインは一度びつくりして、

「それあ、不……思……議だ」

と、受けて。肩をゆすり乍ら口籠つたけれども、サーニンはこう云つた。

「君はそう思うかね。だが、僕はそうは思わない。そうだ、悪漢はもつとも真面目な人間で、且つもつとも趣味のある人間だ。何故と云うに、人間の卑陋などいうものはハッキリとした境界がないものだからね。そして、僕は特に一人の悪漢と握手することを愉快に思う……」

そこで二人は握手して別れた。

×

このサーニンとザルデインとの対話を聞いていると——読者の中には或は一驚する人があるかもしれぬが——そこに述べられた凡ては、少くともサーニンにとつては真実なのである。つまり、かれは世の正直者とか徳義のある人間とかを好まない。却つて自己の欲望を隠そうとしない、いわゆる無頼漢に頼っている。何故ならこの無頼漢と称する者は、泥棒をしたければ泥棒をするし、人に逆きたければ逆くし、姦淫したければそれも厭わ^{いと}ない凡て自由であればいいのだ。そして、

「あゝ……この世の中に生きていたい！」

と叫んでいるが、その叫びの中にかれの全人生の哲学がある。すなわち、サーニンにとつては、人生が漸く単純であるが故に世の中の凡てのものを享樂することが出来る。別言すれば「生の唯一の目的は享樂である」のだから、かれは何よりも先づ精神上の美を説くよりも、肉体美を好んでいる。かたぐ、常に美しい女を讚美し、自分の肉親者たる妹にも情慾を感じたりする。いや、お仕舞いには、彼女をも犯してしまふ。

若し、然らば、サーニンの妹——リーダと

は一体どんな女であつたろうか。と云えば、作者は彼女の風貌を次のように説明している「リーダはからだこそ兄よりも小さいが、ズット綺麗であつた。しなやかでなよくとした嬌態は、見る者をしてうつとりとさせずには置かなかつた。奥床しくて美しい瞳が勝ち誇るように人をチャームした。それから。透き通るような愛くるしい声、その声は彼女も自慢のものであつて、従つて歌をうたつて人に聞かせたがつた」

だから、その恋人ザルデインにはリーダがどんなに美しく見えたであらう。が、彼女の兄のサーニンにもリーダがそう見えない筈はなかつた。彼女がザルデインと別れてから、或る甘い疲れを覚えながら、自分の寢室へ入つた時のことを「サーニン」の読者は思い出して見よ。その時リーダは、ちやうど着物を脱ぎはじめたあとで、丸々とした肩や、なめらかな二の腕などに冷めたい風が当るのを心持よさそうに味つていた。そして、

思うがまゝに恋を得て

思うがまゝに恋を捨てん……

と低い声で歌つていた。

ところで、その時——何処から来たとも判らぬようなサーニンの声が室の外で聞えた。

「リーダお前はまだ寝なかつたのかい？」
そう聞いたリーダは無論驚いたにちがいない。彼女はギョツとして身慄いをしたが、すぐ我れに返つて、大きなハンケチであらわにした肩を蔽うた。そして、ニコ／＼しながら窓の方へ近よつた。

「吃驚させたわねえ……」

と彼女は云つた。

サーニンは近よつて、窓板のふちへ肘をついた。そして、眼をギョロ／＼光らせながらニヤリと笑つた。

「惜しいことをしたものだ」

と、かれは低い声でおもしろそうに云つたしかし、リーダにはその意味が読めないしなかつた。

「ハンケチのない方がずっと美しかつた」

とサーニンはやさしい声で意味ありげに云つた。だが、リーダはしばらくの間は呆れてものが云えなかつた。で、兄の顔をまぢ／＼と見詰めながら、ハンケチで身をつゝんだ。すると、サーニンは吹き出してつた。リーダはまご／＼して窓板の上に又肘をついた。と、兄の熱い呼吸が彼女の頬に触れたのである。

「お前は美しいよ」

とサーニンは云つた。

リーダはちりと兄の顔を見たが、その顔に現れた意味が何んだか判つた様な気がしてゾツとした。彼女は慌て、身を外の方へ向けたが、自分を見詰める兄の眼を体中に感じたそして、それが実に見苦しく、又、実に恐ろしく、彼女には思われた。同時に氷のような冷めたさが身内へ拡つて、彼女の心臓はドキ／＼と鳴つた。凡ての男はやはりソナ風に彼女を見詰めたものだが、それは彼女にとつて不快ではなかつた。しかし、その眼光が兄から向けられると、どうも有り得べからざるように思われた。でも、彼女はニコ／＼しながら云つた。

「私には判つていますよ……」

作者はこういう風に説明したあとで、サーニンがリーダに対してというよりは、かれ自身に対するように、次のごとく云わせている「人間はつねに自分と幸福との間へ万里の長城を築いている」

×

ロシアの小説の中でもサーニンの妹——リーダほど美しく、また艶めかしい女も少いであらう。作者の言葉にしたがえば——彼女は「たゞ春期発動期の力強いうつとした心

持が胸一杯に充ちていた」のだ。だから、ザルデインを始めとして、ノイコフをも悩殺したのだが、遂には自分の兄をも情炎のとりこにせずには居なかつたのである。

それは、黒々とした木のかげで折からの日の光をすつかり蔽うている、とある藪垣の上の事であつた。リーダは、つい先頃、そこでザルデインに身を任してからと云うのは、何んとなく自分のからだに汚れているような、そして生きていることが厭わしいようにも思つた。その果てには、一そ死んでしまつた方がと考へて、ふら／＼と歩いていたのであるが、さていよく此れまでだと観念して来ると、無量の感慨が浮んで

「神さま、私を助けて下さい神さま私を助けて下さい」

と叫んでしまつた。

ところで、そうしたリーダの哀れな姿を遠くから眺めている者があつた。サーニンなのだ。かれは最初の内彼女の為すがまゝにしておこうと考へた。しかし、可成りひどく激昂しているらしいのを目にとめると、もう一刻も愚図々々してはいられないと思つた風に、腰掛けや荊棘などを飛び越えて、その方へまっしぐらに駆け出した。そして、丁度川の傍

で彼女を掴めることが出来たのである。

サーニンはリーダを垣根の方へつれて行きその上に坐らせて、

「サア、此奴をどうして呉れよう？」

と思案した。そして、不安な眼をギョロ／＼させていると、その下で彼女はぼろ／＼と涙をおとしながら青ざめていた。

「神さま！神さま！」

と彼女は子供のようになり上げた。

「お前は馬鹿だね！」

と、サーニンは蔑むように、また慰めるように云つた。

リーダはその声を聞かなかつたけれども、だん／＼吸り上げて来て、兄の腕にしつかりと縋り付いた。で、かれは云つた。

「ねえ、何がそんなに辛いんだよ」

だが、サーニンは自分の妹が、どうして悲しんでいるのかを知らぬのではなかつた。

「僕は何もかも知つている……」

そして、

「お前は、ザルデインに身を委したことを白状しかねる程、そんなに悪い行為だと思つてゐるのかい……それがどうも僕には判らない」

と云つた。それから、

「若しもね、生涯にたつた一度しか愛するところが人間に与えられていないとすれば第二の試みは全く失敗するに定まつている。其奴はイヤな事だ。不快な事だ情けない事だ。ところが、それは本当ではないのだ。恋と同じように幾度だつて出来るよ。そして、いつだつて楽しいものだ、幸福なものだ」

とも云つた。しかしサーニンは、そういう難しい議論ばかりをしようと思つたのではない。

何故なら、その話のつゞきとして

「若し出来なければ、ねえ、リーダ僕と一緒にいようよ。人間は何処へ行つたつて暮らせるよ」

と云つたのにたいして、

「どんな事が起つたつて私は生きるのだわ」

と、彼女は熱烈に、そして勝ち誇るように答えた。すると、かれは

「宜しく生きるさ！生きるさ！」

と一寸おだてるように云つてから、彼女の愛くるしい手をさし出すように要求し、そして固く握つたのである。が、それを握りなおそうともせずに、彼女はニッコリと笑つたのであつた。この時の情景を、作者はこういう風に説明している「彼女の心を納得させたの

は、兄の言葉ばかりではなかつた。彼女の心には、執拗な、力強い、潑刺とした生が満ちていた」と。こうして、兄は妹に肉体を要求したが、妹はそれを拒まなかつた。そればかりでなく、兄の望むとおりに身体を委したのである。

×

このアルチバーセフの小説は、サーニンというニヒリストを主人公としてはいるが、決して彼の事ばかりを書こうとしたのではない。その妹リーダが美しく艶めかしいために、彼女の愛を得ようとして、ザルディンや、ノイコフなどが頻りに懊悩煩悶する。そして、ようやくザルディンはリーダの恋人になるが、或る時決斗をして傷付けられ、彼女は他の恋人ノイコフと結婚の約束をする。しかし、サーニンはすでにリーダを侵しているばかりでなく、カルサービナという女をも手に入れていた。この女の兄の社会主義者のことも述べなければならぬが、余り複雑になるので書くまい。

しかし、要するに作者はサーニンに重心を置いていたのであつて、その所謂「野の中の一本杉」のような性格を持つ人間が、いかに伸びて行くかを示そうとしているように思わ

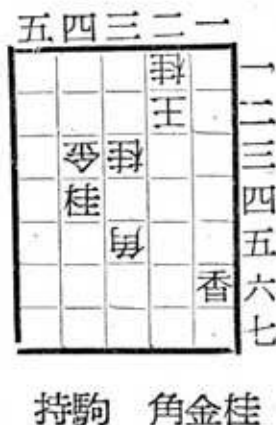
れる。かれの事はすべてに紹介したので、こゝに繰り返すまでもないが、その如何に自然に生きて行こうとし、そして自分のためには如何なるものを犠牲にしても厭わない態度は、とに角驚嘆に値いするもので無ければならぬ。中でもかれは女にたいしては非常な誘惑を感じ、自分の妹にさえ性愛を感じたのであつて、俗にいう「純潔」などは一文の値打も有しないのだ。それはこう云つたのでも判る「裸体の女を見て、どんな心をも動かさないなら、お前は純潔な人間であらう……だがそれが身内から外へ飛び出そうとする時、ちやうど犬を抑え付けるようにお前がそれを戸外で抑え付けているとするならば、お前の純潔は一文の価値もないのだ」そして、もつと真面目な人間は自分の情慾を隠さぬ者——という「悪漢」にかれは成り済している。そう云われることを耻であると思う所か、却つて名誉であると考えているのであつて、かれほど徹底したニヒリストも多くはあるまい。結局サーニンは貪婪なる現代的野人であつて、その凡ては小説の始めにある伝道者の言葉に尽きていると思う。曰く——

「……我が悟れるところは唯是れのみ。即ち神は人を正しき者を造りたまひしに、衆人多くの計略を考え出せしなり」——終——

詰将棋が解けるまで

大橋虚士

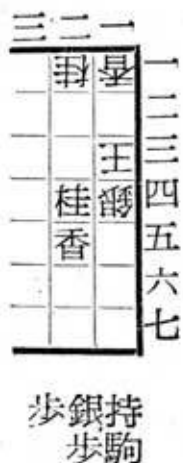
(1)



第一着手に三一角打、三二金打
一一角打等あり三一角打は二三
玉一三角成三四王で駄目ですし
三二金二三王一二角打二四五、
三六桂二五王となり、又一一角
打は二三玉一四金三四王で続き
ません。王を三四へ出して駄目
このヒントに基いて初手に三四
桂打が正着なのです。二三王と
かわす、一二角打にて二四王一
五金打一三王二五金迄にて詰み
ます。変化としては三四桂打同
金なら二三金打同王四一角打二
四王一四角成迄、四一角打が詰
手筋でありまして三二角打では
三二王で詰まないのです。一間

三二に空間を置いて四一へ打つ
のが好手、一三金打から四一角
打の狙い関連手筋と申ししまし
うか、さて本題の正着順をも一
度は研究願いましう三四桂打
二三王一二角打にて三四への脱
出をそ止し、二四王一五金打一
三王この時二五金と香を開くの
が妙着でありまして誠に興味深
い好手と申せましよう、この処
一四金なら一二王で詰みません
何でもない様な手段が(詰手の
中にある)案外気付かないもの
です、(前号で二筋で詰める、
となつていますが一筋の誤りで
した、お詫び申します。)

(口)



さて(口)図の解説を申し上げます

す。本題一見して二四桂が邪魔
駒である事はお判りでしょう一
二桂成(同香なら二二銀打で簡
単)次に第二ヒント歩の活用、
一三歩打(同桂なら二二銀迄故)
同王二二銀打一三王再度一三歩
打にて同桂となり二二銀不成で
解決しました。本題にて二枚歩
の活用に妙味ある事を感じ得せ
れた事と信じます。(以上)

研究問題

(1)



ヒント

王を一三へ出しては成功せず最
後に駒の打捨に依る。詰手筋あ
り二枚角の工作

(次号にて解説)

読者通信

九月号の読者通信に大阪中原氏
の責め場は特に女に限られている
ようだが男のリンチ的な場面、軍
隊生活、囚人云々は全く同感です
同じ趣味人は多数あると思います
からは是非このような記事は毎月あ
りたいものです。夢性の美少年、
陸軍中尉時代の思い出などは大変
よいものでした。近日私の体験記
を送ります。只今清書中です

(明石並男)

内容益々充実で大よろこびです
拷問特集といったものをやつて頂
けません。喜多玲子さんの画集
が出るそうですが大変楽しみです
毎月貴誌にのる習作のような責め
られる女だけでなく責める女や責
めの道具も揃ったのを描いて頂き
たいと思います。狂い咲くカンナ
の浣腸器や空気入れ等も大変面白
いと思います。(大崎Y生)



一

「夢におそ魔まわれた」或は「夢に呻うなされた」ということはよく聞くことであるが、一口に「おそ魔まわれた」「呻うなされた」と云つても、一々の場合によつてその様子が違う。鬼、蛇、猛獸怖しい人などに追いかけて一生懸命逃げてる場合もあるだろうし、或は断崖絶壁に立つてハツと思つて目が覚めることもあるだろうし、或は又、試験場で苦心惨憺、思わず声を発して人を驚かす夢もこの中に数えられるだろう。しかし私がこゝに述べようとする魔夢というのは、ドイツ語で云う *alptraum* 英語なら *nightmare* という現象である。恐らく之は、広義の魔夢中で、その現象から云つても頻繁さから云つても、代表的のものであらうと思われるから、単に「魔夢」という場合には、次に述べるものに限定し、その他の場合をも含む時は「アングストトラウム悪夢」と総称アルプすることにして筆を進めたい。所でその魔夢であるが、それが他の悪夢と異なる点は、夢の内容が、何か或るものに圧えつけられるということが主となつている点にある。怖おそしさ、苦しさ、救いを得られない感じ、呼吸困難。四肢の麻痺感、冷汗等は、何れにも共通

して悪夢の特性をなしている。漱石の「硝子戸の中」を読むと、次のような文が見える。「或時私は二階へ上つて、たつた一人で、風寝をしたことがある。其頃の私は風寝をするとはよく変なものに襲われがちであつた。……仰向に眺めている天井が段々上から下りて来て、私の胸を抑え付けたり、又は眼を開いて普通と変らない周囲を現に見ているのに、身体だけが睡魔の擒となつて、いくら藻掻いても、手足を動かす事が出来なかつたり、後で考えてさえ、夢だが正気だか訳の分らない場合が夜かつた。そうして其時も私は此変なものに襲われたのである。」と、之には怖しさに就いては書いていないが、私の述べようと思ふ魔夢の身体的症状がよく現れている。「おそ魔まわれ」の現象は古くから知られていたもので、古代の医伯ヒポクラテス既に之を目撃したという記録がある。我国に於ても「竹取物語」に四肢の麻痺した有様を「物におそわれ、うようにて」という言葉で現しているからどこの国でも、ずい分古くから知られている事実のようである。此様に古くから知られているものだけに、その起因に關しても色々なことが云われている。前述のセポクラテスは血液の事情から説明したようであるが、血液

運行の状態に關することは、今日も多くの人に信ぜられている所である。しかし所謂「^{アルプトラウム}魔夢」^{アプル}として、それが妖魔の仕業であるという風に考えられるに至つたのは、キリスト教が起つてからのことであつて、中古時代も之を邪神のなす所であると考えていた。蓋し、夢の間に怖い怪物が身体の上に乗つかつて咽喉をしめ、胸を圧す、それを払おうとすれば手が利かず救いを求めようとしても声が出ない、というような場合には、誰しも魔性のものに思い至らざるを得まい。さればこそ魔夢の妖魔として己れ以外の者の存在を仮定することは、文明の高低を問はず時の古今に係らず、各国その軌を一にしている。ドイツ語の *alp* 英語の *nightmare* は前記の通りとして、中世期一般に用いられた *incub* *eincubo* スロットランの *Leamain-Sith* 古代ドイツの *marra* ロシアの *Kikimarw* ギリシャの *Erh ia-ites* アッシリアの *ardat* オーストラリアの *mrt* ボルネオの *hantu* 等々の言葉が之を証明している。しかしながら、我等もとよりかゝる説明に満足することができない。然らば今日、多くの人に信ぜられている説明は如何なるものかというに、それには先づ夢の生成に就いて一般を

知らねばならぬ。

凡そ夢というものは、中枢的精神的刺戟によつて起る。例えば前者としては、その日乃至前日に経験したこと、若しくは以前に経験したがもはや忘れてしまつていたことが、錯覚的に或觀念を作り上げ出鱈目な何等の秩序無き夢を結ばせる。後者としては、大体外物の刺戟による場合と、体内に発する刺戟による場合とに區別できるが、外物の刺戟による夢という、「所謂斬られたる夢は誠か蚤のあと」で、睡眠中に外から何か刺戟が加わると、その錯覚から夢が生ずる場合である。体内に発する刺戟というのは、小便が溜つた時に便所に行く夢を見る類で、之亦普く人の知る所である。

夢の生成をかく考え来れば、魔夢乃至悪夢も亦同一機転によつて説明されねばならぬ先づ夢に於ては針小の刺戟も棒大の夢を結ぶを常とするという事から、胸に手を当て、眠るというが如き僅かの圧迫から、大入道に圧えつけられるような夢となり、布団から片足を出した位で絶壁からブラ下つた夢を見るに至るといふことは直ぐ考えられることである。その他胃腸に不消化物が残つているとか、或は食後直ちに床に就く時には、胃腸に於け

る僅かの刺戟から悪夢を生ずるに至るといふ多くの人の経験する所も、どうやら説明がつくようである。心臓に故障がある時、高熱がある時の悪夢も亦然りである。更に悪夢に於ける恐怖の対象、即ち亡霊であるとか、猛獸毒蛇等は、本人の常に怖れているものでありそういう精神的刺戟から蛇を怖れている人は蛇に追われ、亡霊を怖れている人は亡霊にのみしかゝられ、狼を怖れている人は狼に咬まれる夢をみるものであるとの説明も一応は肯けるものである。

しかしながら、魔う者がその人の常に愛しているもの、或は一般に誰でもが内心は好きであろうものである場合にも、此の説明を用いねばならぬとすると、そこに非常な不満の湧くを禁じ得ない。

二

一九〇〇年ウキーンのプロイド教授は、その著 *Traumdichtung* (邦訳、春陽堂発行、大槻憲二氏訳「夢の註釈」)。アルス社発行、新関良三氏訳「夢判断」に於て、夢の生成過程に關し、彼の創めし精神分析学の見地から、劃期的の新説を唱へ出した。その後一九一二年、ロンドンのジョーンス教授は、

aeptraun なる著^{おおよけ}を公にし、同じく精神分析学の立場から、魔夢に新解釈を試みた。之等によれば、愛好する者に魔われる場合の刺戟説による説明に対する不満が、一掃されるようであるから、それらの説く所と、少いながらも私自身の精神分析上の経験とを参照しつつ、魔夢に就いて考える所を述べて行きたいと思う。

精神分析学では、夢を或願望の実現であると説く。願望が実現されれば、誰だつて快感を感じないが、事実としては、不快な夢が沢山ある。殊にも夢悪乃至魔夢と称せられるものはその最なるものと云うことができる。之をも願望の実現というか、然りとすれば、それを如何にして説明するか。之は誰しもの持つ最初の疑問であらう。

之に対しフロイドは実に巧^{たくみ}な説明をしている。曰く「願望実現は確かに快感を齎^{もたら}すものである。しかし誰に^{誰に}ということが問題だ。それは勿論願望を持った人にといいことは判り切っているが、こゝに見落してはならぬ要素がある、今、夢をみる人の場合を考えてみると、彼は自分の願望に対して特殊な態度をとるものと云わねばならぬ。即ち彼は、自分の願望を排斥する、それを検閲する。一言にし

て云えば彼はそれを欲しないのだ。従つてその実現は彼にとつては全く有難迷惑であり、快感どころかむしろその反対のものを齎すばかりである。経験の示す型によると、この反対のものは苦^{アングスト}悶^{モント}の形に於て現れる。そこで夢をみる人と、その願望との関係は、二人の人間が一つの大きな共有物によつて合体しているものに喩えることができる。この関係をも更に具体的に説明する代りに、余は諸君もよく御存知のお伽噺を紹介することにしよう。

或所に貧乏な夫婦者があつた。或時一人の親切な魔法使が来て、この二人に願ひ事を三つだけ何でも叶えてやろうと約束した。二人は大喜びで、この三つの願ひを撰^{えら}ぶべく慎重な話を始めた。所がその時隣の家から美味^{チーズ}な腸詰を焼く匂^{ニオイ}が漂つて来た。その匂に誘惑された女房は、腸詰を二つばかり欲しいと思つたすると忽ちそれが目の前に現れた。之で第一の願望が実現されたわけである。之を見た亭主は、立腹の余り、そんなに腸詰^{チーズ}が欲しいならお前の鼻の先に腸詰^{チーズ}がブラ下つてるといふと云つた。之もたちどころに実現された。そして腸詰は彼女の鼻に新しい位置を占めどんなことをしても離れなかつた。之が願望実現の第二。所でこの第二の願望は亭主のもの

のであり、しかもその実現は女房にとつては実に苦痛極まるものである。このお伽噺の結末はどうなるか。それは諸君もよく御存じの筈だ。二人は亭主と女房という、元をたゞせば一体の間柄であるから、第三の願望は腸詰を女房の鼻の先からとつて貰うことであるにちがいない。このお伽噺は色々他の方面にも利用されるものだろうが、こゝでは両者の望む所が一致しなかつた場合、甲の願望実現は乙に対しては不快を齎すことがあるといふことの解説として役立たせておく。」と。

之によつて願望の実現が却つて苦しみをもたらす場合の説明が見事に果されたわけだ。夢及び神経症^{ノイローゼ}の心理学に於てこの噺の亭主と女房とに相当するものを「自我」及び「エス」と名づけ、「エス」の欲求即ち単に「願望」と称し来つた所のものを「自我」が斥けることを「抑圧」という。「エス」は本能生活の代表者であり「自我」は良心の命によつて活動する現実の主体である。而して、吾人の人格は「自我」と「エス」とより成り、両者は多くの場合鎗を削つて相争い、抑圧は常に多大の心的エネルギーを費して行われている。

睡眠は「エス」の跳梁する世界だ。睡眠中



には、「自我」はエネルギーの配給を中止され、その結果抑圧は変調を来すから従つて睡眠中には神経症的即ち何等原因と思われものが直ちには考えられない苦悶が發生する機会がより多く供えられる。所が事実には、悪夢は、楽しい夢、或は何でもない夢に比し

て多いとは思われる。之をどう説明するか。

これが悪夢の機構に関する第二の疑問であらう。之に對しては、かゝる夢に於ては、自我と「エス」とが、うまく妥協していると答えることができる。この事實は詳しく論ぜられねばならぬ。しかしそれをなす代りに、私は私の分析し得た一つの夢を報告することにす。それを夢みた人は、二十七才の男、一年程前に妻を失つて、今新に愛人を得ているが、或事情の為に結婚し得ないのみか自らその慾望を抑えているという事情の下に置かれている。

夢はこうである「天の橋立のような海がある。海の形は楕円形で、その真中に半島が長く突出している海を二等分している。私はその岸に立つて泳ごうとした。すると一所に行つた女の人(彼の愛人。女の人は三人連だつたが後の二人は何も関係なし)が、それを止めた私はそれに従つたが、折角裸になつたのだからと思つて、片足だけ水に入れてやつたすると足の裏にザラ／＼と藻のようなものが触つた。」としてその夢に就いての情緒としては「何でもない」というのであつた。

この夢をどう解釈するか。二つに割られてある楕円形の海で、触るとザラ／＼する藻が

生えていたのいうのは、夢に於ける象徵化といふことを知つてゐる人には容易に理解できることだらう。従つてその水で泳ぐ全身の筋肉を動かすのを止めたといふことも、何を現しているかは直ちに解釈できる。片足を水に突込んだといふことは、醒めている間に為し得なかつた行為を、彼は夢に於て敢て為し遂げていることになる。三人の女が夢に出てゐるが、その晩に彼はその三人の訪問を受けてゐるから、後の二人はたゞお相伴に過ぎないものだらう。かくしてこの夢は、彼の禁断の慾望を、一部抑制し、一部満足させているといふことを、象徴の仮面を借りて巧みに現すものである。禁断の慾望であるが故にその満足は苦悶を伴うべきである。然るに事實としては何等の苦しさ、何等の怖しさが無かつたこの理由を考えるに、この夢に於ては、願望の内容が巧みに変装され、為に「自我」が何等咎むること無しに夢の関門を通してやつたと解釈すべきではなからうか。即ちこゝに願望と自我との巧なる妥協が見出される。願望は変装という譲歩をなし、「自我」は願望の実現を許可してやつたわけだからこの妥協によつて「自我」は苦悶を發すること無く、夢は円滑に運ばれたのである。

苦悶を免ずると妥協が成功するとを問わず
それらの夢に於て実現される願望は「抑圧」
された願望である。しかしながら、悪夢若
しくは妥協の痕の認められる夢に於ては願望
も亦、たとえ睡眠中の「自我」の麻痺に乗ずる
とはいえ、「自我」の反駁を押し切つて現れる
だけの強さを持つものであらねばならぬ。か
ゝる願望を求めて来ると、我々は遂に本能の
力に支持される願望に達する先に「自我」に抑
圧される。「エス」と云つたのはこの本能生
活の、人格内に於ける代表者に他ならぬ。扱
て人間の二大本能中性慾によつて代表される
方の本能は運命的に「自我」に撞着する機会
が多い。従つて性的願望が抑圧の危険に、よ
り多く曝されることになる。前記の例が性的
願望に関していることも宜^{むべ}なるかなである。

三

こゝでもう一度魔夢の状態を見直してみる
重い物で圧しつけられる。喘ぎが起る、動悸
がする、汗が出る、手足が麻痺したかの如く
になる。(文献によれば、それらの症状の挙
句には、射精或は腺液分泌が起ることがある
という)……之に苦しさの代りに、快感を
置き換えるならば、我々の想像は常に一つの

行為に達せざるを得まい。この想像は更に他
の事実から表書される。

先づ、この文の最初にも書いたような、か
ゝる夢の中に現れる妖魔の正体が、一般にコ
ケツチツシユ、エロチツシユな魔物として云
い伝えられていることである。誠に *incubus*
をとつてみると、之は女性を襲う男性の魔物
であつて、人の上に乗つて性交を行うと信ぜ
られている。之に対し、人の下敷になつて同
様のことをなす女性の妖魔を *Succuba* とい
う。何れも魔夢の正体であるとされてること
は同じである。我国の伝説にある飛縁魔^{ひのえんま}——
眠っている男の懷にとびこんで生血を吸う象
徴化?という、美女の姿に見えるが実は蝙蝠
に似た魔物——もこの類ではなからうか。

次に、かゝる魔夢と性夢との間には色々の
移行があり、又、願望の対象が許されている
人ならば性夢となり、禁ぜられている人なら
ば、抑圧の結果、魔夢となるという事実があ
る。

私は、二十五才の未婚の婦人に於て、正し
くこの通りである例を経験している
彼女の夢というのは次の如きものである。
睡りに入ろうとする時か、或は醒めようとし
て半眠半睡の状態にある時、上から何か重い

物で圧えつけられるようになる。その圧えつ
けるものは、何か判らないことが多いが、或
時は男の大入道のような化物であつたことも
あり、或時は彼女の、総てを許し合つた愛人
であつたことも二度ばかりあつた。圧えられ
るのも、足の方から胸の方に上つて来て、丁
度帯をしめる辺がしめつけられるような、重
い物で圧されるような苦しい感じで、そう
なると呼吸が止まる、動悸が起る、汗が出る、
手足が動かなくなる、救いを求めようとして
も声が出ない、等々の現象を呈す、というの
であつた。この夢は怖しさと苦悶とに充ちて
いるが、その内容が、曾ては極めて快感に充
ちた行為の反復でない誰が云えよう。大入
道と見えたのも、抑圧が表象内容にまでも及
んだものであると考えられる。

性的欲求と苦悶との間には如何なる機縁が
あるかというに、之に対してはフロイドの言
葉を借りることにする。「リビドー性的欲求
から如何にして苦悶が生ずるか。それは当分
不明のことに属する。唯我々はリビドーが去
り、その代りに苦悶が現れたという事実を確
認するだけである。」ギリシヤ人が、恐怖の
神フオボスとデイモスとを、恋愛の女神アフ
ロダイトの子と考へたのも満更偶然ではな

い。

かくして魘夢は、最も露骨な性的願望の實現であり、余りに、露骨であるが故に「我」と願望との妥協が成功せず、遂に苦悶発生を禁じ得なかつたものである、と云いたくなる。魘夢をかく解釈することから起る当然の疑問の一つは、童貞の者或は性交の事実を知らぬ小児がこの夢をみる場合をどう説明するか、も一つは、男性の場合に上から乗りかゝられる夢をどう説明するかということであろう。童貞の者がかゝる夢をみたとして何の矛盾も無い。夢にとつては、實現された行為も、行為への意欲も同じことだから。たゞ實現されたと否とでは夢の強さと頻度とがちがうかも知れぬ。

無邪気な小児が魘夢をみたらという疑問に對しては、唯今それを解くだけの材料を持ち合せて居ないことを遺憾とする。しかし、子供というものは案外早熟であるということは、小学校の便所の楽書を見れば判る」と、それから、幼児の「夜泣き（夜驚症）」は、両親その他の者の行為を目撃することが原因となつていと称する説があるということを手挙げて埋め合せしておく。

そして又、本当に無知の子供には他の種類

の悪夢はあつても、魘夢があるかどうかというところに多くの疑点を残しておく。男性の場合の説明としては、人の性的心理中には、多分の両性的傾向が含まれているとの仮定で充分であらう。恰もワイニングルが、人の性格事に両性的要素を仮定したかの如く、に。

四

胸に手をおいて寝ると悪夢に襲われるという。それは事実であらう。従つて胸に於ける刺激が錯覚的に誇張されて、魘物に圧えつけられる夢となるという説明も生れてくる。

しかしながら、胸に手をあてたということから愛人に圧されるといふことの説明としては不満足之感を禁じ得ない。将又言ひ伝えられてゐるそれらの魘物が、共通して性的な意味を持つものであることも胸部の刺激からは説明しにくい。

或る人は皮肉つてゐる。「美しい女が雨戸の隙から入つて来る夢は、決して消化機能の障礙からは説明されぬ」と。夢を語ることは癡人の謗を免れぬかも知れぬが、こゝに性慾説を試みて、それらの不安を充たすものが見つかるとすれば、それは甚だ興味深いこと、云わねばならぬ。

筆を擱くに當つて一言、一般悪夢の説明に關して、ジョーンズの言葉を引証しておこう。魘夢が他の種類の悪夢（お化の夢、試験の夢、追いかけられる夢等）と異なる点は、魘夢の潜在の内容が全く特殊のものであり、又反復性のものであることに存する。

あらゆる夢の潜在内容は、抑圧せられたる性的願望の満足を現すものであるが、魘夢に於ては常に常態の性行為が模倣されるのに反し、他の悪夢に於ては、種々の性的願望変態性慾が現れる。例えば人を襲撃することの好きな猛獸の夢は、兇暴性或は残忍性と快感との結合（疼痛性淫乱症）を象徴するものであると、

讀者からの便り

私は悩ましい愛欲の中に生きる女性ですがうるさい世間体の中に居ります故落ませんが本名は出せません、只御誌のファンでいつも読んでいます。変態の資料だの写真だの私の所にはあります。私の友人にお金持の変人がいて応接間の隣りに変つた部屋を作り拷問の写真ばかり撮つています。私もモデルとなつて門外不出のを随分とりました。もつと色々構想してとつて貰うつもりです。——後略——

（鈴木美代子）

刑罰としての入墨

三 瀬 淑 朗

黥（いれずみ）は刑罰としての入墨である。犯罪者が罪の軽重によつて処分される。比較的軽い方に属するもので、此の刑は身体の一部を傷つけて墨を入れるのである。多くは額であつたらしいが、後には腕にも入れた。

履中天皇の元年四月に阿雲連^{あぐのむらじ}浜子と仲王子等が謀反を企て、露われ、捕れて刑に処せられる段になつて死一等を減じられて墨に許された。（入墨の刑に処せられた）

此れが我が国に於ける最初の入墨刑であらうと考えられる。これは軽罪者の処罰に用いて、今後悪事をさせぬ用意と、一般人に対する注意のために施した。

降つて徳川時代に至つて、詐欺、窃盗、強請等の中軽微な犯罪者には、この入墨の刑を行つた。最初は額にされていた入墨が腕に転じたので腕まくりするか、或は裸体にでもならない限り前科者であることがわからなくな

つた。それも土地や罪名によつて仕方が異つた。今入墨の刑に処せられた者が何処に墨を入れられたかを見ると、

江戸——肘の処へ幅三分程のを二筋

京都——長さ三四寸幅三分を上膊に縦二筋

大阪——肘の上より五分幅に二筋

長崎——長さ五分、幅五分手首に近く横に

駿府——大体京都に同じ

非人——心中失敗のため非人の列に加える者には右肩先より三寸下げて長さ

二寸幅三分を縦に入れる

欠落者——肘の辺りに入れる

窃盗——手首に近く入れる

甲府——幅四分肘近くへ八分間隔に二筋

郡代——幅三分で片仮名のユの字形

伏見——両肘近くへ長さ一寸三分幅三分横

堺——肘より一寸下へ幅三分で腕をまく

佐渡——片仮名のサの字形に入れる。

以上で累犯になると一線宛増すのである。増入墨の上は死刑なのである。これと呼ぶには江戸入墨何某、伏見入墨何某という。

扱て此等の入墨者は前科者としていろいろ迫害されたので、此れを隠すために大きな刺青をした者が沢山出てきた。義賊として大衆小説のネタになつてゐる鼠小僧次郎吉が最初捕れたのが文政八年二月三日、土屋相模守の局屋敷の板塀を乗越した処を取押えられたが、その時は一物も盗んでいなかったもので、博奕をしたとだけ申立、二月十四日吟味中に入牢し、時の町奉行、筒井伊賀守を巧に欺き五月二日、入墨の上中追放となり、又々盗み続け、天保三年五月八日に、浜町松平宮内少輔の屋敷へ忍込んだ時捕われ、同年八月十九日二十七才で品川で獄門になつた。

この次郎吉は最初入墨の上中追放に処せられるや、入墨を消すために腕に大きな雲龍の刺青をした事が彼の判決文に書いてある。

入墨者は前科者としていろいろ迫害される反面、普通人や或は同じ仲間に対しても入墨をしてゐるということが、威嚇や自慢となり最初犯罪者と普通人との区別のために入れられた入墨が却つて彼等に利用されるようになったのも否定出来ない。

或る醫師の告白

亀岡恭二

「疲れた？」

と聞けば、必ず軽く首を左右に動かす。然し眼元にも動作にも、蔽い切れない暗さがあった。細い肉体の奥に燃え熾る欲望の焰が、充分燃え上る迄持ち堪えられない、ひ弱さである。慾情の為だけでなく、蝕まれた肺の故に、彼女の呼吸は荒くなるのであつた。

私は憐れう度に、美江子のやつれを計測するように、医師の眼で見た。それは殊に月経期に激しく変動した。週期的に激しく男を求め肉体の疼きが、病体には過労なの。

勿論美江子は処女では無かつたし、私も経験が無くはない。然し体力に劣る彼女は、女性の役割とされている受動性が身に泌み付いていた。お互いに感覚の総てを夫々一と所に集中して、極点に達したあと、私が仰臥して

歎ひのあとの虚ろな哀しみに身を委ねている時、彼女は背を向けて軽く咳く。その軽い咳を耳にすると、私はもう一度抱き緊めたくなる。骨がぼき／＼と鳴る程抱きたいのだ。細い頸に唇を接けると、彼女は軽く息を吐く。窓の外を吹く秋風のように佗びしい彼女の呼吸を、私は一層刺激される思いで聞くのであつた。

「なぜ妾なんかを好きになつたの？」

ぼつりと女が云う。

「美しいから——。」

月並な私の返事に、女の虚ろな表情に苦笑いが浮かび、肉の薄い頬が歪むだ。

「輕蔑して、憎んでらつしやる癖に、」

厳しい言葉が、諦めの柔かい口調で吐かれると逆な効果を生み、何んな甘い囁きよりも

私を昂奮させた。

「本当だ、底が深い、それでいて透き通つた美しさなんだ。」

「貴方の女の妾は一人、貴方は妾の一人の男……ふふ、哀れなのは妾ね。」

「遊戯とすれば互いに生命すれ／＼であつた美江子は今も桃色の痰を吐き、その胸に鳴るラッセルを、私は直接耳を彼女の乳房の間に押し当て、昂奮の絶頂で聞いている。彼女の呼吸の中に、結核菌は生きて動く。」

「違う、君は初めて会つた時から僕の総てだつた。初めての人なんだ。」

「お医者様は嘘つきよ、可愛い看護婦が、貴方の室にもいたわね。あゝ、貴方は何故、妾を苦しめるの、」

深い眼差である。私は瞳を逸らし、彼女の

薄い乳房をまさぐる。静かな微笑が彼女の唇に漂い、ゆつくり眼を閉じる。睫が長い。私は、その耳許でくり返すのだった。

「愛している、愛している。」

其の日美江子が入つて来た時、私は思わず胸が弾んだ。それ程美しく又、似ていた。世間並な美しさではなかつた。結核に蝕まれている事は予診のカルテを見る必要もない。広い額の下で眼は力無く、頬は肉が薄かつた。丸い顔立ちが頃の細さで単調さを破られ、却つて異常な美しさであつた。

毎日病人を診ていながら、私は健康な女に慾情を感じない。例えば看護婦の三谷は、確かに私を好いている。よく動き廻る彼女は、いつも小麦色の頬を紅潮させて、診察室と受付や予診室の間を走っている。全体に細つそりして見えるが、裸にすれば肉付きのよい、よく締つた弾力性の肉体である事が、乏しいながら医師としての経験から判るのだ、然し無人の廊下で行逢う時など、私の腕に縋り付く程に近寄つては、さつと離れ笑顔を閃かして行く彼女を、私は恐れていた。彼女の充実した肉体が想像に浮かんだだけでも、私は圧倒されるのだつた。

そういう私の弱さは、遠い医学生時代に由

来している。青年の総てがそうであるように私も早く自慰を覚えた。それは未だ、その部分が摩擦によつて充血怒張し、やがて白く重い液体が迸る現象に、驚きと不安と、それらを凌ぐ肉体的な快感に浸つていた、極く少年の頃からであつた。その意味を悟つてからは節制を知り、更に効果的な刺激の緩急度を覚えた。節慾は時折の人為的排泄——射精——を快いものにし、私は女体を知らずに過せた女性を潜在意識にさえ置かない幼稚な段階から、性行為を知識としてのみ理解し、その際の感覚を想像して出来るだけ近づけようとする年齢に達していた。医者が誘惑に負け易い職業だと意識して、私は、現実の女性を快楽の対象として見まいと努めた。勿論、独り寝の下宿の一と間で、私は、さまざまな滑剤の助けを借りて肉体的快楽を追い、真暗な闇に据えた眼で、剃き出された豊満な女体を幻に描いていたのである。滑剤は射精を遅らせ、快楽を長引かせるのに役立つた。

インクーンで耳鼻咽喉科に廻っている時だつた。私は初めて女を、女の体を知つた。女はタイピストだつた。私は女の大きすぎる程美しく瞠つた瞳を、眩しくさえ感じながら、予診のカルテを記入した。診察衣のポケット

に彼女の名刺を見出したのは、その日の昼休みであつた。鳥尾友子、と刷つた裏側に、細い筆蹟で明日午後三時K茶房、とあつた。あの女なら、と私は心を躍らせ、土曜日の午後町へ出て行つた。

友子は五分遅れて入つて来た。暗い茶房が明るくなつた程の華やかな雰囲気、彼女の水色のスーツから発散し、形の良い唇が、私に笑いかけていた。その日は映画を見て別れた。彼女自身の分を払わせなかつた。

他愛ない嬌^{あじびき}曳^ひが二三度続き、私は彼女の冷たい美貌の虜になつて行つた。私は何時の間にか、裸体写真の女達の映像の代りに、友子を幻想の中で裸にしていた。美しく取り澄ました女ほど、女である部分は素晴らしく貧^{さんらん}乏^ふで、豊^{とよ}麗^{れい}な表情を堪えている。そんな事を私は婦人科の先輩から聞き、自分でも、インクーン中に感じていた。その上私は友子の鼻孔を診察した。軽い鼻カタルだつたのが、軟かく薄桃色に湿りを帯びた鼻孔の内壁は、強烈な連想作用を私に残したのである。友子の、咲き乱れた大輪の花のような恥部を想像し、その部分の触感を幻覚しながら、私は独り昂奮するのだつた。物狂ほしい程の恋情に、彼女と会つた夜など、二度も消耗をくり返さね

ば眠れないのである。

インターンの期間が、あと半年程になった頃だったので、国家試験の準備も必要だった私は進むか退くか、友子の焦らし気味な態度に居たたまらなかつた。

映画館の暗がりでは彼女の左手を握り、拒まれるどころか、逆に右手を重ねられた時、私は有頂天になつていた。その夜現実に見た友子の肉体は、予想通り見事な発達で、既に薄紅く色づかされた谷間の奥で、女の若芽が、馴れた表情で私の愛撫を待つていた。

その夜は末だよかつた。始めての経験で気怖れもあつて、私の頂点は遅れて彼女のそれと同じペースで進んだ。

次の機会、私は湯槽の中での戯れに疲らされた。狭いバス一杯に泡立つた石鹸の香りの中で、彼女は私を焦らして逃げ廻り、体と体が打突かつては、つるりと滑るのだ。奇妙な鬼ごっこは何十度と続き、やがて彼女は小刻みに震えた。……然し彼女の慾情は疲れ切つた私をベッドに横たわらせてはおかなかつた。びつたり寄り添つても私の体は力を失つたのだ、と気付くと、彼女は恐ろしい程美しく冷たい嗤いを浮かべながら、無理に私の体を昂奮させようと、白い指を絡ませて来る。抗い

ながらも、哀れな男の本能故に、幾度か機械的に最後の一滴まで吸い取られた私は、もう意志の力も判断力も無くなつていた。友子の命ずるまゝに、彼女の体の或る部分に唇を着けさえした。

女は結局男より強い。イギリスの性心理学者は言つてゐる。私は身を以て此の言葉を裏書きした。男の快楽に耽る能力には限度がある。貯えた精力を放射し尽した時が終りである。然し女は無限に男のものを受け入れる許りなのだ。

友子は私の衰えた身体を罵つた。

「あの時、変な気を一人前に起したのが嗤わせるわ、よく知つてゝよ。」

此の罵言が最も私の骨身に徹した。友子に私に鼻孔を診察させていた時、私は不意に緊張を下腹に覚えた。焦る程それは意地悪く友子の大腿に尖端を擦り付けた。彼女は気付き充分弄べると知つて私に誘いをかけたのだつた。散々弄んだ末、彼女は私を顧りみなくなつた。私は国家試験を一期断念する程、心身を消耗し尽していた。

友子の豊満な肉体を思い浮かべるだけで吐気を感じる程、私は恐怖した。医師として有るまじい気弱さは、此の時に始つたのである。

少女歌劇から映画に転じたKM子の映画など一度で懲りた。それ程、KM子は豊麗だつた。私は同じ少女歌劇出身でも、か細く弱々しいON子の倅を愛し、彼女をスクリーンに見ては、独り寝の淋しさに、そのデリケートな裸身を想像しながら、自慰に慾情を満たした。三谷も念頭に無いではなかつたが、精神的に輝く彼女の瞳に会うと、私は友子を思出すのだつた。

然し美江子を見た日、私は美江子に友子の傍を見出して驚いた。カルテには木島美江子二十二才、タイピスト……

面長だつた友子と顔の形は似ていない。何故友子を感じたか、胸を開かせながら私は自問自答した、体の形であつた。肉が薄いだけで、全体の感じが似ていた。それにもまして唇であつた。薄く小さい唇。そして口付きの相似は、女の持つもう一つの口の相似を考えさせた。私は美江子の体に興味を感じ、友子に弄れた怨みを、よく似た、然し弱々しい此の女に打ちまけたような感情に駆られていた。胸の打診も終え、寝台に横えて、紺のスカートの内側へ手を滑り込ませた。女は結核に蝕まれていても、腹部だけは皮下脂肪を貯えて厚く大きい。私の指は自然な調子で滑ら

かな腹の上を滑り、軟かな体毛の並ぶ辺りへ届いた。無意識を装って彼女の陰裂を静かに撫で、そこで診察を終えた。椅子に戻って早口で所見を述べると、インターン生が、かつて私のしたように、カルテに書き込む。私はゆつくり彼女を振り返った。美江子は白いブラウスを着け終って、激しい眼で私を見た。怒っているな、と思いながら

「左上葉浸潤中等度、注意を要します。気管支に炎症が有る。安静ですね。」

此の女を逃すな、私は私の心の声を聞いた一つの策が浮かんだ。是が大学附属病院内科医員の所業かとの自省を私は踏迷った。

晴れた九月の日曜、彼女を夕暮のホテルで抱く迄、私は医師としての全能力を尽した。

少女時代は健康だったせいか、病人に有り勝ちな畸形的な貧弱さはない。肉付きこそ薄い、一応何の部分も伸々と成長した事を、彼女の肉体は示している。

あの日、余り近くはない彼女の家を、私の家に近いから、と偽って、私は薬局で薬を待つ彼女に、時々寄つて上げるからと恩に着せ、安静を守るように命じた。その瞬間、私は医師の職務を逸脱していた。私が密かに感じたように、過労続きの所へ、上役と関係して妊

娠した後始末が、彼女を結核にしたのだ。何度か往き来する内に、私の愛情——実は、美江子を通じて、友子への復讐的なサディズムを満たしたい慾情なのだが、——を彼女も感じていた。三ヶ月の努力でやゝ血色もよくなつた彼女を、私は自分のものにした。昂奮が一度過ぎ去り、ぐつたりと沈み込んだ彼女を、温めるような形で掌をおいた。軟く弾力を保つ触感が私の掌から脳髓に伝わり今満たされた許りの慾情は、再生され沸騰し続けた。

その日以来、会う度に一度しか接触を許されぬ程の彼女の脆さが、一層私の慾情を醗酵させた。彼女の虚ろな表情は、病氣と戦い愛慾と戦い、総てを透明にしてしまう不思議な魅力であつた。彼女の身に浸みた愛慾と、彼女の身边に漂う暗さが、私を魅き付けたのだ。彼女の体内で苛立たしいほど快い感覚に溺れる瞬間でさえ、私は彼女の骨張つた体をより深く虐げたい倒錯的な愛情に震えた。

初冬が近ずき空から霧のような雨が注いだ少し快つた美江子は、又覆せて行つた。体を合せた時、薄い脛は黝み、最も深く接触する部分で、私は彼女の骨の尖りを感じていた。彼女が衰える程、彼女との接触は欲び

であり、喘ぎながら私の愛撫に悶える熱ばんだ女体を、私は折れる程緊め付けて満足するのだつた。

私は彼女をじりりと衰えさせながらも、死なせたくなかつた。その彼女が、妊娠を告げた時、私の驚きは普通ではなかつたのである。

「あの時だな、然し次の準備が有つた筈だ」私は呟いた。美江子は無言であつた。

初冬の或る日、薄い楯は無惨に破れ、私の肉体から迸つた液は、彼女の奥深く進入して行つた事がある。然し彼女は、大丈夫よ、と第二の防壁が、彼女自身の内に有る事を告げたのだつたが……尤もそれは、私の示唆に基くものだつた。——

忽ち熱型は乱れた。衰弱は無かつたが、体力の目に見えぬ消費を、私は経験上知つていゝる、処置、それは、三ヶ月目の直前が安全確実である。私は父親のあとを継いで産科を開業した友人を思い浮かべていた。

彼女の健康の危機にも拘らず、私は彼女を愛撫し続けた。此の女が人工流産に耐え得るか、と考えると、答えは否であつた。結核は急速に増悪し、肺以外の部位に移る可能性が大きかつた。然し手術は為されねばならな

い。私は友人に会った。

「左肺は相当悪い。心臓も弱っている。」

私は隠さずに症状を告げた。友人は、万の際の責任を考えて一時ためらった。

手術は行われ、予想通り増悪した。

「貴方は何故、妾を苦しめるの？」

彼女の其の言葉に、「愛している」は返事にはならなかった。

「貴方は妾を去り、妾は死ぬ、貴方の為に」

私は愕然として跳び起き、彼女を見た。

深く開いた瞳の奥に、更に深い淵が有るように見える。私は始めて気付いた。真相だ。

妊娠は彼女の故意であつたと。

一夜、ゴムの小さい袋は彼女の手によつて

見えぬ程の針の穴が穿たれる。幾つか彼女の

ハンドバッグに入っている其の小悪魔は、必

ず私によつて使われるのだ。何時か、穴の有

る一つが使用される。私が撒いた種子は、し

つかりと畑に根を下し、彼女は妊娠する。そ

して当然墮胎そして当然病氣は昂進する。や

がて死。それは彼女が計劃し、私が始動した

一連の自殺計劃ではないか。彼女の今の一言

が私にそれを感じさせた。それは、私の為に

肉体を弄れ尽した彼女の、復讐では無いの

か。声の無い叫びが私の耳に囁く、妾を殺す

のは医師の貴方、と。

医師は職業上、よく人を殺した、と言われ

る。それは誤診許りでなく、不可抗的な手遅

れの場合でもだ。然し私の此の場合は違う私

は彼女に加虐的な慾情を打突けていた。衰え

た体を慾情の対象にする事で、肉体的のみな

らず精神的満足を味つていた。その私の盲点

を衝いて、彼女は生命を賭けて迄、私に思い

知らせようとするのだ。

私はサディスティックな慾情の在り方を、

友子によつて教えられ、それを美江子に打ち

返そうとした。少くとも、そうしたと信じて

いる。然し今又苦しめられるのは、遂に私自

身ではないのか。

美江子は恐らく半年保たないであろう。喉

頭の結核性腫瘍らしいものを、私は昨日の診

察で発見していた。ここから先は、坂を転が

る石のような勢で病氣が進行する。石を置い

たのは彼女自身だ。然し其の石を転がしたの

は、此の女なのだ。

私は寒さの故ではなく身内の冷えて行くの

を感じた。私は女を殺すのだ。いや、今殺し

つつあるのだ。愛して来た此の女を――。

美江子は熱に美しく頬を火熱らせながら、

静かに微笑している。その唇許が冷たい嗤い

を浮かべているように見えた時、私は、友子の残忍な迄に美しい嗤いを思出した。それは美しい程効果があるのだ。是が女なのだ、と心の中で呻いた。私は一つの真理を発見していた。美しく取澄ました女ほど、その嗤いは邪悪と奸計と呪いに満ちている、そしてそんな女ほど、女である部分は貧乏で豊麗である。――と、

女は永遠に男より強いのだ、こんな弱々しい女でも男よりは強いのだ。そう思つて彼女を見た時、彼女は依然として瞳で誘うように微笑して見せながら、唇元には、輕蔑と呪いの嗤いを浮かべているのだつた。

次号予告！

乞御期待

「悲戀の答刑」 松井籟子

此れは作者がロマンチックで美しい責めの小説を作りたいという意欲から物された野心作で従来の類型を脱した劃期的な作品であります。喜多玲子さんの挿絵で次号の巻頭を飾りたいと思っております。

読 者 通 信

小生は貴誌の愛読者です。特に岡田咲子さんの作品と喜多玲子さんの習作挿絵等大好きです。この二人の方の作品がなければ小生にとつては貴誌の魅力は半減です。就中、先頃発表されたお二人の間の往復書簡は大変興味をもつて拝見しました。そこで是非あの書簡の如く会見し数日を過す場面を続篇として発表して下さい。そして喜多さんの腕をふるつた挿絵を同時に期待します。(田口生)

私は貴女と同じく女の責めに関心を持つて
いる一人です。出来ますれば次号にでもよろ
しいから女の縛り方を色々図解にして発表し
て戴きたく御願ひ致します。七月号八月号の
挿絵興味深く拝見しました。貴女とお呼びす
るのは一寸失礼かも知れませんが御許し下
さい。(八尾市の愛読者)

喜多玲子様

サジストの男より

私も奇譚クラブの愛読者ですが、八月号の
一四二頁に掲載されている「マゾヒズムの男

より」喜多玲子様への書信を見て約十年前より私の探し求めていた青い鳥を発見した歓喜に思わず此の手紙を書いてしまいました。それは私も貴方と同年の二十五才の男子ですが私はサジストであり、貴方と私とは好一對ではないかと思うからです。私はふとした演劇によりサド的になつたのですが、異性を縛る事等には何の興味も快感も覚え、むしろ哀れさが先立つのですが、同性である男子に對しては興味以上に快く感じるのです。万一貴方が許して下さいなれば、貴方を縛らして頂きたく伏してお願いする次第でございます。若し又貴方がモデルにでもなつて下さるなれば、私のこれ以上の喜びはありません、貴方もきつと満足して下さいる自信を持っています。然しお願いが許して頂けなければ、せめてお手紙なりとも下さいませんか、住所氏名等は編集部へ届けて置きます。(紅井 良)

奇譚クラブは他の雑誌に見られない面白い記事が満載されており、一度読んだらやめられないのです。八月号の男性的女子の記事は大胆な告白で、あれが本当なのでしょう。愛読者の皆様どうぞお便り下さい。

(新潟県 宮下 輝)

ハ、ナ、ヲ、カ、ク、ス、ル、

問、私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があるものでしょうか。

答、先づ特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙薬入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最近材料がよくなり使用され出しました。肉質法は少しづつ高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

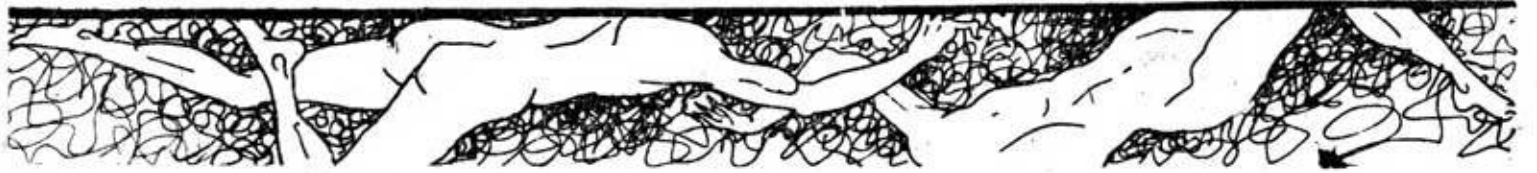
更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては如何なる方法も追従を許しません。従来の象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なる人も皆この方法で行うべき運命をもっているのです。費用は八千円以上です。

大阪市北区梅田新道交叉点

東一丁電車通

三山整形外科内

三山隆鼻法研究所長談



男 色 の 海

井 口 正 憲



生れながらにして数奇さくきな運命に弄れた私の半生記の中、こゝに少年時代に至る過渡期の或る挿話を記してみました。これは男色の海と題した私の一生の転換期となつた一時期の実話であります。私は此の外に此の前後に該当する少年時代及び青年時代の事を記した告白記がありますが、それは又改めて本誌上に発表させて頂くつもりであります。とにかく此の文章は何の飾り気もない私の赤裸々な過去であると同時に現在の姿でもあるわけであります。

一、男色生活を教えた手

私の中学生時代に伊集院中学の男色決闘事件の発生したほどの中学生間の男色黄金時代であつて、稚児王国の薩摩の事だから他の地方の人達がお聞きになりましたら、びつ

くりするような珍奇な中学生時代を過して居るのですが、次に私の少年時代の数奇な運命を記してみよう。

私は中学四年から高校を受験するつもりだつたのに、父は早過ぎると云い、祖父のみか祖母までが止めるので、その時から何か変だなと思つていたのだつたが、いざ中学卒業となつてから、

一、正憲は次男であつても井口家の相続人だから、家に居て貰わなくてはならない、それには高等学校や大学の教育は正規に受ける必要はない。お祖父さんも年だから後見をして欲しい。」

と祖父母と父と三人でとうとう私を説き伏せてしまつて向学の野心に燃える私の胸の炎を消してしまつた。

泣く泣く諦めた私は農業の手伝いやら、祖父の政治運動の下働きやらで、四月と五月を過ごしたが、驚いた事には祖父母は私に嫁を持たせると云うのだ。象をつなく女の髪



の毛。十七才の私は中学を卒業してから男色の美酒に酔いしれていて、世の中に異性と云う者が存在していると云う事も考えて見ていなかった。あまり早過ぎるもう二年か三年、せめて兵隊検査まで待つて下さい。私に今無理に嫁を持たせるなら家を飛び出すぞと暗にはめかしたのでそれに驚いて話は中止になったが、飛んでもない方面から横槍が入った。私より中学で三年上級の在学時代に柔道部の主将をしていて、私の被護者であつた男が大阪で柔道の道場の師範をしていたが、思いがけなく帰郷して来て私を尋ねて来たが、僕の妹が何で気に入らないんだ。僕と君とは離れても同一の肉躰だと約束を結んだ仲じゃないか、その僕の妹を嫌つて縁談を破つて泣かせるとはけしからん。こう云つて怒りまくるのだつた。私には全く藪から棒だつた縁談の相手が彼の妹とは夢にも知らなかつた。

祖父母に話を元に戻して貰うように顔から火の出る様な思いで頼むと、祖父母は大喜びで、一日も早く結婚式を云う事になり、六月十五日にと日も定め結納も無事にすんで式を旬日後に控えて祖父が突然脳溢血で二日三夜を睡り続けた後に、一言の遺言もなくあの世の人となつてしまつたが、その葬儀の最中に父が悪質の急性虫様突起炎を起して、手術も間に会わずに、祖父の死と二日あいを置いたのみで、空しくなつてしまつた。

二本の大黒柱を一度に失つた私の家が旧家であるだけにその痛手は大きかつたが、父の葬儀も終らない内に後目の問題で大騒ぎになつてしまつた。誰が父の位牌を持つて葬

儀の祭主となるか、祖母を囲んで私を立てる祖父や父の遺志を云い張る親戚。母を筆頭に兄に家を相続せしめてその間に利を得ようとする代言人。

少しばかりの財産があるが故に、血を血で洗う一家のみにくい争い、〃僕が居なければ事は丸く納るんだ〃と二十円あまりの小遣金をポケットに、中学時代の他所行だつたサージの学生服に、中学の帽子。何一つ持たずに家を飛び出した私は、あまりにも世間知らずだつた。

大阪へ出て来たのは前記した先輩を尋ねるつもりだつたのだが、私が家出して来たのと知つたなら、妹の幸福をのみ願う彼はきつと私を無理にでも連れ戻して、どんな運動をしても井口家の相続人として座らしてしまふだろう。彼を頼れないとすれば私の行く可き処はなかつた。

広い。あまりにも広い大阪市。本当にあの時は都会の広さと云うのをしみ〴〵と味つたが、又都会の淋しさと云うものも合せて感じさせられた。

自動車で、電車で、バスで歩道を、何千何万の人達が動いている。だが、その人達は村の路傍の雑草や石よりもまだ冷たい血の通つていないような感じがする者ばかりだつた。トボ〴〵と何処と云う目当もなしに梅田駅から私は足にまかせて、足の向くままに電車道路を歩いていった。

「ポー」と云う耳慣れない汽笛の音に私は何時間歩いたかやつと我に返つた。〃オヤ、汽車の汽笛にしては変だぞ〃こう思つてあたりを見廻すと、私の居る処はその時には判然と場所は知らなかつたのだが、天保山の棧橋を目の前に



した単線の電車道路だった。耳慣れない汽笛と思つたのも道理。それは別府航路の汽船のものでした。私が生れて始めて耳にした船の汽笛。

あゝ、その汽笛の音と、波の音とにそれからの私の一生が過ぎて行くとは。……………

船を眺め、対岸の桜島の大きなクレンに驚きの眸を注いでいる私の背を誰かポンと打つた者が居た。

その私を叩いた手が、私を船乗り生活に引入れ、あくなき男色生活を教えた手だった。

二、貴方の見張番を

赤ナツパ服に大きな徽章の着いた船員帽。世慣れた者になら一目で知れる四十過ぎの逞しい体軀の機帆船乗り。だが、悲しいかな山だしの私には彼は他の人達と同じにか写らなかった。

「坊や、行く処がないんだろう」

彼は船員らしく短刀直入に突込んで来たし、受ける私も「うん」と、正直に答えた。

「一緒に来いよ。お天道と米の飯は付いて廻るんだ心配するな」

大都会の真中で西も東も知らない私は、きつとその時に泣き出しそうな顔でいたのだらう。彼はニツコリ笑つて見せて云うのだった。

川口岸壁の帆船や団平船の群の中に、その頃としてはス

マートな船体を見せて停泊していた。法的には十九屯九と云われるが、三十屯あまりの機帆船の商運丸に彼が私を連れて来た時には、流石に日長の六月末の陽もかぎつて、薄暗くなつて来た時分だった。

無人のように静かな船の艙の上甲板の船室へ私を残して船室から出て行つた彼は大きな皿に飯と佃煮を持つて来た「今夜の処は何もないよ。飯が残つて居て炊かずにすんだ不味いだろうが空腹には喰えるだらう」

彼が云つた通りだった。早朝梅田駅で下車した私は、食事と云う事をすっかり忘れてしまつていたのだつたが、目の前に飯を見ると一度に空腹を感じて、黙つて彼の手から皿を受け取ると、ガツ／＼と食い出したが彼は私のその様子を見ると、スツとドアから甲板へ出て行つたが、甲板で彼の声と別な声が聞えた。

「船長。それじゃ全員で遊びに行つて来ますからお願いします」

「まあ、ゆっくり行つて来な」

彼の返事に、お願いします、行つて参ります。四五人の声が聞える。あの男が船長だ。それで私は知る事が出来た。

「疲れてるだらう、布団を仕度してやるから、甲板へ出て川の中へ小便でもして来て寝たらよいよ」

大きな皿の飯に私がすっかり満腹したときに入つて来た彼が、私の胸の中を知っているように云つて呉れた。

三尺に六尺の畳が二枚の船室に一杯の敷布団。毛布を冠



つて丸窓から入る涼しい海風に頬を撫でられながら、良かつた。あの船長が使つて呉れる〃地獄に仏。私はやつと自分の立場が安定した事に足を伸してから気付いたのだつた。

「どらわしも寝るとするか」

こう云いながら船長が入つて来て、ナツパ服を脱ぐと下帯一枚になつて毛布も冠らず私の傍に横になつたが、

「おや、服を着て寝てるじゃないか、暑いのにみんな脱げよ。遠い処から来たんだらう。何日も着ていたと見えて汗くさいよ」

丸窓から街の電燈の灯が流れ入つて来て、灯のない船室も薄明るいので、彼は私が着たままで寝ているのに気付いたらしい。「ハイ」素直に答えて起上ると私が全部を脱いで全裸になり、彼がナツパ服を掛けた壁板の釘の隣りの釘に掛けると、再び体を横にしようしたときに、彼の逞しい両腕がサツと延びて来て、アツと思う間に私は彼の広いそしてかたい胸毛の濃い胸に抱かれてしまつていた。

大人達の世男にも男色があるとは其の時まで私は思つても居なかつたが、成人の男色は、中学生のもののような単純なものではなかつた。

「坊やは知つてゐるんだな。そうかそれなら何も云う事はないさ」

黙つて彼の唇を受ける私に対して彼は、唇を離してからこう云うなり行動に移つて来たが、その精力の強さ烈しさを抱き合つて五分か十分で満足する中学生同志のようなもの

と思つていた私は、早い夏の夜の白く明け初るまで彼にもみにもまれて、満足した彼の手が弛むと同時に、身も心も疲れ切つて死んだような睡りの中に入つてしまつていた。

深い〳〵睡りから私が目覚めた時には、丸窓から陽が入つて来ていて、舷腹を切る浪の音と、タン〳〵と機関の音が聞えていた。私が睡つている間に船は出帆していらしいのだ。

一睡りした事であれだけの疲れが若い私にはすっかり取れてしまつていた。布団と毛布をたたむとロッカーに入れて、甲板へ出て見ると、港内を出離れた船は白いみさをを引ながら、波もない夏の海を滑るように進んでいて、鷗が何十羽、白い船体にたわむれるように舞つている、〃海、海。海はよいなあ〃その時に生れて始めて経験する航海だつたが、海はよいなあとその後も私は何時も思う。

何もかも忘れて潮の香に浸つていた私の背後で、
「もうお目覚めになられたんですか。皆さん御飯は終りましたから、後は貴方と僕だけです。部屋の中よりここで喰べましようか」

私よりまだ幼い声がこう云つたので、グルリとふり返ると、十五か十六だろう、半ズボン一枚の、顔も丸い目も丸い。鼻も口も、そして、体までが丸い半裸の少年が立つてゐるのだつた。

海風に吹かれながら船の甲板で飯を食う。海もない村に生れて、こうした生活を味あうとは。飯のうまさ。そして眺めのよさ。箸を動かしながら、私は自分の前に私と同じ



様に甲板へ胡座になつた少年が、右左と海や海岸を見る事に夢中になつて、無意識に箸を動かしている私を熱心に観察しているとは気付かなかつた。

「昨夜は驚いたでしょう」

少年に突然に云われて、私はそれが何を意味するか判じかねて、丸い少年の瞳を見返していると、

「船長とても精力が強いから大変だつたでしょう」

「ああ、あの事か」私は気付くと顔が恥しさにポツと火照つて来たが、少年は更に言葉を続けるのだつた。

「僕は炊夫の山田つて云うんです。昨夜までは僕が毎晩船長に抱かれていたんですが、今度から炊夫だけでよさそうですが、その代りに貴方の見張番を船長に命令されたんです。あんな事をされるのは嫌でしょうけど、僕を助けると思つて逃げないで下さい。船長はとても貴方が気に入つたらしく、仕事はしてもしなくてもよいから貴方に注意してろつて云つてゐるんです。万一、貴方が逃げたりしたら、僕はきつとこの船から追い出されるでしょう。僕はこの船から貰う月給で母や弟妹の生活を助けているので、そうなつたら今の世に外に仕事は減多にあるものでなし、皆で餓え死です。お願いです僕を助けて下さい」

真剣な眸が泪さえ浮べて私をみつめているのだつた。

「大丈夫だよ逃げたりしてはしないよ。僕だつてこの船を出たなら、どこにも行先の目当がないんだ。さあそんな顔してないで飯を喰つてしまおうや」

「本当に／＼お願いしますよ。その代り僕で出来る事なら

貴方の身の廻りは何でもしますから」

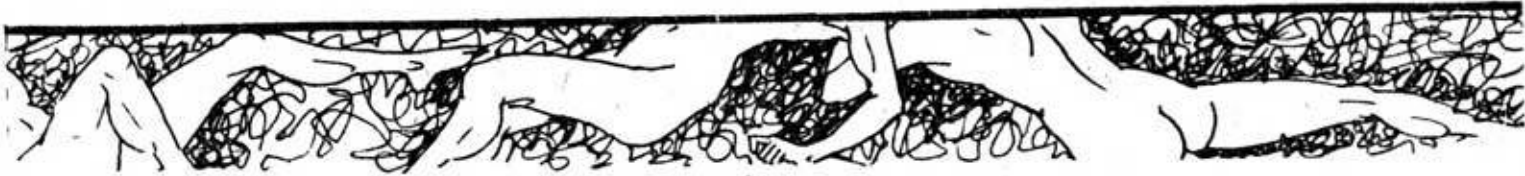
「心配しないでよいんだ。ああうまかつた。御馳走様」

箸を置いて昨夜寝た船長室と背中合せにある操舵室を覗くと、船長は舵輪を握つて立つていた。

「おや、もう起きたんか、まだ寝てりや良かつたのに、御飯は、そうかい。うまい物がなかつたらう。漁船を見付けて魚の意気の好いのを買つてやろうと思つて居たんだが、今朝は目に付かないんだ。夕方には入港するから肉をうんと喰わしてやるさ」

コースから目を離して私に笑いかけた船長は、越中一本の全裸だつたが、昨夜私の肉躰を抱きしめた彼の四脚が、欲望の歡喜の絶頂に烈しく痙攣した肉躰が、まばゆいような真夏の強い光線の中で私の瞳に映つた。西洋美術史の挿絵代りの写真で見た、ローマの裸体彫刻に優るとも劣らぬ筋骨の盛り上つた仁王様のような立派さ。そして今落ち付いて見る船長の眉毛の濃い高い鼻を持つた顔は、何と云う男らしさ。私は目をパチ／＼とさせて、答えもせずに船長の裸体を見詰めていたが、船長は船の甲板でロツプの整理をしていた水夫を呼ぶと、舵を代らせてから私を目で促して船長室へ歸つて来たが、ロツカーに頭を入れてゴト／＼云わせてシャツと白ズボンを出すと、

「坊やの着ている物は何もかも汚れているんだらう。これと着かえて山田に洗わせたらよいよ。下帯の新らしいがないがこれは洗濯してあるからパンツを脱いでこれを付けな」



新品の開襟シャツ。白ズボンも船長自身の上陸用にでも買つて来たのだからまだ一度も使っていないらしい。それにそう云われて見ると、長い汽車の旅と昨日一日歩き廻つた事で、私の着ている物は上衣もズボンも汗に汚れ、下着類はジツトリして気持の悪いほどで、朝起きて着た事が悔やまれるほどだった。昨夜一晚中牀の隅から隅まで撫で擦られて知られてしまつてゐる船長の前で、全裸になる事を恥しがる必要もなかった。

着更えるために私は躊躇なく全裸になつたが、ほんの四時間ほど前までに何時間も私の肉牀で快楽を貪つた彼が、私の全裸になるのを待つていたようにしつかり私を抱きしめて、そのまま押し伏せて愛撫を始めたのには、私は驚くよりもあきれてしまつてゐた。

「坊や驚いたかい。こうしなくては満足出来ない自分自身が、わしにも困りものなんだ。わしだつてもとくがこうした男ではなかつたんだよ。山田などは無学で話しても仕方がないが、坊やはわしが話したならきつとわかつて呉れると思う。そうして、可愛想なわしを心から慰めて呉れそうな気持がするんだ。坊や、わしがこう云うふうに少年を抱き度くてたまらないようになり、そして、こんなに坊やがフラ／＼になるほどの強い刺戟がなくては満足出来なくなつた原因を聞いてくれないか。わしも十年前までは普通の性欲を持った幸福な家庭の主人だつたんだが――」

三、女牀では満足出来ない

「わしがどうして失業したか、そんな事をくどくど話したつて仕方がないが、美しい妻と二人の子供と親子四人の幸福な家庭も、失業故に一度に真暗なものになつてしまつた今もまだ不景気だが、その頃の不景気さはとてもお話になるもんじやなかつた。仕事はなし、質草になりそうな品物も何一つ無くなつて、そうだつたわしは北九州のある都会に生れて、そこで職を得、そこで家庭を持つたのだが、一人子で両親はわしが失業する三年ほど前に、二人とも亡くなつてしまつてゐたんだ。こうなつたらもう一家四人で心中するより仕方がないとわし達夫婦は覚悟をきめて、大古丸と云う五百屯あまりの客船。博多から長崎までの間を、唐津や呼子、平戸などに行く船の客となると、夕方博多を出帆したのを幸に、玄海の三月の潮の中に、わしは五つの長男を抱いて、妻は二つの長女を背負つて飛込んだが、幸か不幸か、通り合せた帆船に助け上げられた。だが、二人の子供も妻も死んでわし一人が命を全うして、その帆船で働かして貰う事になつたが、その帆船の船長はもう六十に近い中村歌エ門のような上品な老人だつたが、自分を女の位置に置いて、男が欲しいと云う変つた性欲の持主で、わしはそれからの七年間をその老人の相手になつて生活した。老船長の烈しい性欲を老人らしくない強い欲望を、命の恩人の為に満足させたいとつとめた事が、わしの性格をこんな風にしてしまつたのだ。そしてその老船長はわしが助け



られて七年目、四年前にわしの手に抱かれて満足して死んで行つた。彼はそうした性欲の持主だったからもちろん妻も子もなかった。それでその帆船はわしの物となつたが、老船長の死を機会に、わしは通常の生活に帰ろうと帆船を売つてこの商運丸という機帆船を買つて、他の船主船長がそうしているように女を入れたが、坊や聞いてくれ、わしは女の肉牀では心から満足する事が出来なくなつて居たのだ。その女の肉牀が悪いのだと思つて、一年余りの間に女を三人も入れ代らした。その結果が、同性でなかつたらあまりにも刺戟が少な過ぎるのだと知る事がやつと出来たのだ。老船長との七年近い生活が、もう四十を越して、以前には妻もあつたわしの性欲を、こんなに變えてしまつたのだつたんだ。だが、わしは、歡樂の最高頂点をわしに教えてくれた老船長を、ありがたいと思つている。通常の男女の性生活は出来なくても、わしはそれ以上の快樂があると云う事を知る事が、老船長に依つて教えて貰う事が出来たのだから。それからのわしは、少年を乗船させてわしの相手をさせる事にした。少年の肉牀は老船長のもの以上にわしを樂しませて呉れたが、その少年が少しでも美しい事がやはりその快樂を更に大きくしてくれる。それで昨日天保山で目に付いた坊やが、わしの心も体も引付けてしまつてわしはあんな風にしてはとも見知らぬ者に言葉をかけられる性質ではないのだが、夢中で言葉をかけてしまつたんだそして、昨夜、今。坊やの肉体を味つて、わしは、わしは今迄にない物を得る事が出来た。決して離さない。坊

やが逃げたなら、月の世界までも地獄へでもわしは追つて行く。坊や見込れたのが災難だ。いつまでもく、わしの胸に抱かれていてくれ」

肌寒いまでの執念のこもつた口調で、長い物語りの最後を切ると、船長は三度、烈しい性欲を以つて私の肉体をおおい侵して来るのだつた。

その日からの一ヶ月あまり、私は船長の烈しい性欲の相手をするだけで、全精力を使い切つてしまつて、何を考える事も何を見ようと思ふ力もなかつたが、若いと云う事と健康だと云ふ事は有難いもので、私自身までが船長の烈しい欲望を快感を以つて迎えるようになり、肉体もさほど疲れないようになつて来た。余力が生れて来た私は子供の頃から機械が好きだったので、船長の愛撫の間々に、少しの暇でもあると機関室へ降りて行つて、機械を見ていたが商運丸に乗つて三ヶ月もしない内に、焼玉機関をすっかり自分の物にする事が出来た。

処がそれを待つていたように機関長が、外に良い仕事口があるから下船させてくれと云い出したのだつた。

「この船では機関長には免状が要ると云ふ訳でなく、私の免状もいわば遊んでいるんですが井口さんが十分に機関長の仕事をやつて下さいますよ。僕なぞよりも此の頃では腕が上のようです」

人の好い三十を少し前の機関長は笑いながらこういふのだつた。

そんな事で私は機関長をするようになり、水夫が下船し



て山田が水夫に繰上り、油差も代ると、船中が機関長く
と若い私を立ててくれ、船長の愛は更に深くなつて、私は
居心地のよいままに、二年近い月日を船長の烈しい愛撫の
中に浸つて過してしまつたが、船長は私の為にならば金銭
を惜しまずに何でも買つて呉れた。

四季の背広も二着づゝ、下着類は絹物で、装身具も上等
ずくめで、上流の青年紳士でも顔負けするほどの物をそろ
えて呉れたし、機械好の私が頼みもしないのに、参考書を
上陸する度に買つて来て呉れる。かゆい処に手のとどくよ
うにという言葉が、船長が私に対する行動にびつたりとよ
くあてはまつていたが、そんなにしてくれながらも彼は現
金となると一銭も私に持たせて呉れなかつた。私がにげだ
しはしないか、そのみを恐れていた彼だつたのだ。だが
私は満ち足りた生活に心から満足して、船長の腕に抱かれ
て平和な毎日をそのまゝ送るつもりで居た。

四、出世欲に燃えて

その私が大きなショックを受け、商運丸の船長の被護の
暖い手から飛立つて、七つの海を外国船で巡り歩くようにな
る原因を作つた日は、私が商運丸に乗船して満二年にな
ろうとする五月だつた。

少女歌劇と云うものを一度も見た事がないから見たいな
と私が油差の買つて来た雑誌の口絵にある少女歌劇の写真
を見て云うと山田を付けて船長が大劇を見に上陸させてく
れたが、千日前の雑踏の中で大学の正服正帽の早田さんを

私は見出したのだつた。私の小学校五年生の時に、同性を
愛する事を始めて教えてくれた彼は、重い病気だつたはず
だがすつかり健康になつていて、同学一心に燃ゆる彼の清
らかな瞳が私の胸を打つた。私もそのまま進めば今頃は角
帽を冠つていたはずだつたのだ。いぶかる山田の手を引く
ようにして、早田さんに顔が合わないように私は横丁へそ
れてしまつたが、その為に面白かるべきはずの華やかなレ
ビューも、耳を楽しませる音楽も、ただ味気ない物になつ
てしまつて、山田は大喜びだつたが、私は不気嫌を表情に
まで出して大劇を出て、心配して色々と問う山田に物も云
わずに御堂筋の広い道路を、どこと云う目当もなく、北へ
向けて歩き始めたが、車道を走つて来た自動車。あちら物
らしい高級車に乗つたりユーとした背広姿の青年紳士の顔
がふと目に付いたが、私が「アッ」と声を上げると向うで
も気付いたらしく運転手に自動車を止めさせようと物を云
つたので、私は自動車の止るのも見ずに、細い露路へ向つ
て驚きあわてる山田に、「走れ〜」叫びながら無我夢中
で走り込んで、どこまでも〜息を切らして走りながら逃
げたが、十分ばかり走つて見かえると追つて来る様子もな
かつたので、やつと安心して歩き出したが、その青年紳士
は私が中学に入学したばかりの頃、村長の家からどこか都
会へ出て行つたと聞いた私に男色の快感を始めて教えた良
どんだつたのだ。私は一流の青い純毛の春背広こそ身に着
ていたが、どこに居るのかと現在の生活を問われるが嫌だ
つたのだつた。



誰れも彼も立派になつてゐる。それなのに僕だけが……天才、神童と云われた僕が、このままで終つてよいのか

出世欲が何もかも燃え切らせて私の心の中に吹き上つて来たのだつた。

海技試験を受けたいと船長に云うと、もつと大きな二百五十屯位の船を買い度いと思つていたんだが、免状持の機関長を負わなければならないのでどうしようかと思つてゐた。免状を受けて来てうかれれば好都合だと許してくれた。

六月の定期試験を受験する私に、海員ホームに一航海だけ山田を付けて、船長は心を残しながら出帆して行つたが私はその費用を最少ですます事に苦心して、会計を握つてゐた山田から残金全部を取り上げて、船長には全部使つたと嘘の報告をさせた。

商運丸から逃出して私は上京する覚悟だつたから、その旅費が入用だつたのだ。

一週間目に大阪へ帰港した船に、合格の報を持つて私と山田が帰船すると、船長は大喜びで合格祝に全員でどこかへ呑みに行こうと云い出したが、それでは船に当番に残る者が可愛想だから、船でその費用だけの酒を皆が潰れるまで呑もうじやないか、私がそう云つたのは全員を酔払わし

て置いて、上陸する者は上陸してしまい、アルコールに弱い船長や炊夫、それから山田が酔い潰れてしまつてから、手離したくない洋服や参考書などを持出そうと計画してゐたのだつた。

私の策略は案外に簡単に計画通りに行つて、翌朝はもう私は東京の土を踏んで居た。その私がどうして外国船に乗組むようになったかは次編でお話しする事にして、私に逃亡された商運丸の船長は気の狂つたようになって、私を発見する事に夢中になつてゐたが、船も何もかえり見ずに呑めもせぬ酒をあびるように呑んで、舷側のレールから海中へ下ちて心臓麻痺で、その夜から一ヶ月ほど後に死んだと云う事を、太平洋戦争の最中の昭和十八年に偶然に南方で会つた山田から聞いたが、その船長の死んだ頃には私は世界を一周する貨物船で、西へくともうスエズ運河へ近付いて居た頃だつたと云う事を、本編の最後に付記して置きます。

(此の稿終り)

八月号の「男色殺人事件」は本当によく書いておりました。小生は山下汽船の一船員ですが他の方々と同じ悩みを持ち日夜苦んでいる者です。一度小生の半生記を是非書いてみたいと思つております。「男色殺人事件」の作者に敬意を表します。

「一愛読者、中田生馬男」



アブニストの記

へ
ぼ
き
う
り

鬼 山 絢 策

私がアブノーマルな性向に興味を持つて、金と暇にあかせて二十六年間も全国を放浪して得た収獲は、たつた六人の男女の仲間だけだつた。その六人の性友も今では、三人は死に、一人は行方不明、現在交際して居るのは二人きりになつてしまつた。然もその六人のうち二人は私が馴育して成長せしめたアブニストなのである。

そうして見ると私の好む性向の人間はそんなに稀なのであろうか？

いや／＼そんな筈はない。それは今迄の私の探し方が悪かつたのだ。それともう一つは時世が悪かつたのだ。戦前の風俗はあまりにもいんぺい的であつた。如何にアブノーマル

な性向を持つて居ても、深く隠して露わさなかつたからだ。それをストリップの着物を一枚々々剥ぐように、その人の心の奥の奥に秘して居るものに接見するのには、容易ならぬ努力を要した。

アブノーマルな性慾は危険である。殊に進性性のものは身を亡ぼす基となる。

これを救うには、勿論ノーマルな性慾に立直る事が出来ればこれに越した事はないのだが、そしてその方法も種々あるが、病こうもろに入つた人達には、この泥沼から浮び上る事は容易でない。あらゆる転向手段も永続せず、いつしか又元の泥沼に我から足を踏入れてしまふ。

私もこの泥沼から這い上ろうと努力し、悩んだ一人だが、二十六年の間には、この泥沼に胸迄入り、首迄浸り、更に頭から、口から鼻迄潜り込んだ事もあつた。もう少しで溺れ死んでしまふところだつたが、辛うじて首だけ出す事を得た。溺れもせず、浮び上りもせず遊弋状態である。私の現在はこのでよいのではないかと自ら甘んじて居る。

アブニストにとつてこの泥沼から這上る事は喜悅と同時に一抹の寂寥を禁じ得ぬであらう。此の耽美の世界の門を出る事を惜しむ人は遊泳術を体得して、この泥沼の中を溺れぬように泳ぎ廻ればよい。

その泳法もいろいろあるであらうが私の泳法を一言にして言えば「奥行きを深めずに間口を拡げる事である」

彼は二十二歳で肺結核で死んだ。その死因は病死と自殺の境をゆくものであつた。彼の幼年時代の出来事や心理を私に話したことがあつたが、彼の手記には更に刻明に記されてあつた。以下彼の手記に依る。

私の記憶は五歳頃から始まる。当時父は会社の下級外交員で、風間は居ないし、出張も

多いので、私は顔を合わせる事が慚なかつた。母は父と二十も年の違う三十一歳の小肥りに肥つた綺麗なひとだつた。(私がこのひとが生みの母親でない事を知つたのはずつと後の事だ)

父の留守中、市田と言う三十七八のおじさんがよくやつて来た。父の出張の時には泊つて行く事もあると見えて、朝私が眼を覚すと「坊やお早う、ホラお土産」

と言つて玩具をくれたりしたので、私はこのおじさんが大好きだつた。母は私に

「お父ちゃんにおじさんが来たつて言うんぢやないよ。玩具はお母ちゃんが買つてくれたと言ふんだよ」といつも言聞かせた。

私は三、四年間は、この母の命令を忠実に守つて来た。

市田のおじさんが来て暫らくすると

「坊や、いゝ子だから彼方へ行つておいで」

と別室へ追いやられたり「お錢をあげるから遊んどいて」と外に出されたりした。

だが私は飽きると母とおじさんの居る部屋へ入つて行つた。昼間でも蒲団を敷いて、母が横になつて寝ていた。

「此処へ来るんぢやないよつ！」

母は怖い顔をして私を睨めつける。私は叱られると出て行くが、直ぐ又入つて行つた。二度も三度も重なると母は長襦袢のまゝ起きて来て私の頬に横びんたをくれた。私がワン／＼泣くと

「この餓鬼！。うるさい餓鬼だ」

と言つて猶ひどく叩かれた。

「まあ／＼そんなに手荒にするなよ」

とおじさんが起きて来て

「坊や、いゝ子だからもう少し外で遊んで居な。」

と猫撫声で十錢玉をくれた。

私は母の折かんを忘れて、叩かれても打たれても二人の室へ行つた。一つはおじさんのくれる十錢玉がほしかつた故もあるのだ。

表で遊べと言われても、夏の暑い日などはそう日向に長くも居られないので、直ぐ家中へ入つて来ると、二間しかない小さな家だからどうしても二人の居る部屋へ入つて行く事になつた。私は十錢玉を楽しみに、母に殴られるのを承知で入つて行つた。すると二人が真つ裸で抱き合つて寝て居たのには一寸びっくりした。

「又来やがつた！」

母はとび起きて、私を張り倒した。例に依

つて私は思いきりの声を張上げて泣き出した。すると全裸の母が私を押倒して私の顔の上に馬乗りに跨がつて来た。私の口と鼻は母の湿つた肉体で一度に塞がれてしまった。

「このがきサア泣いて見ろ、もつと泣け！」

私の顔はヌル／＼した母の肌に圧迫されて息もつけぬ苦しきだつた。

私が母にこう言う目にあつたのは、これが始めてではなかつた。家で風呂を立てた時、私は母と一緒に入つて身体を洗つて貰うのだが、母は垢すりで手加減もなくキュツ／＼と擦るので、痛いから私は逃げ廻つた。すると母は私を捕えて、両手を膝の下に敷いて顔を両股にはさんで私の背中を洗つた。その時私の顔は母のだぶ／＼とした股の肉の間に埋まつて苦しかつたが、お湯から出ると母は決つてお菓子くれたので、それが楽しみだつた。

そんな事がチョイ／＼あつたから、母に真つ裸で跨がられても恐くはなかつたが、今日の母はいつもよりも、もつと激しく私の顔を圧迫して来たので、私は息が詰つて死んでしまふかと思つた位苦しかつた。もう少しで気が遠くなりかけた時、母は尻を持上げて上から私を見下して「フ、ン」と笑つた。

「お母ちゃんの言う事ちつとも聞かない悪い子だ。これからお母ちゃんの言う事聞くか」
私はボーツとかすんだ腫に始めて下から見
る奇妙な肉体の構造に氣をとられて返事も出
来なかった。

「此奴、黙つてやがるなッ」

母は再び尻をのせて来た。私は母の汗と猛
烈な匂いにまぶされて意識を失いかけた。

おじさんが留めてくれたと見えて母は私の
上から退いた。私の期待通り、おじさんは十
銭玉を出したが、母は

「いゝわよ。そうチョイゝやらなくたつて
癖になるからだめよ」

と横から取上げてしまった。私は「オヤ
ゝ馬鹿を見た」とは思つたが、母が恨めし
いとは思わなかった。

私は甘いものなら何でも好きだったが餅菓
子とか餡ものはあまり好きではなかった。キ
ヤラメルとかキャンデーとか飴類が大好物だ
つた。中にも私の一番特別に好きなのはチュ
ーインガムだつた。おじさんから十銭貰うと
直ぐリグリーのチューインガムを買つて来
て、あの五枚入ったガムを直ぐ食べてしま
うのが惜しいので、甘味がなくなつても、薄荷

の味が残つて居るのでいつまでもクチャク
と二日ばかりで噛んで居た。

私は時々ガムがほしくて堪らなくなる時が
あつた。母はおじさんが来ない時には滅多に
お金をくれなかった。たまに貰つても一銭か
二銭だつた。だがお風呂から一緒に上つた時
にねだると母は五銭奮発してくれる事があつ
た。だから私はこの頃では風呂場でおとなし
く、母に身体を委せて洗わせるようになった
背中を洗つて貰う時は、自分から母の股ぐら
の中へ首を突込んで行つた。

「オツパイ飲みたいかい」

風呂場での母は、私に実の子のような愛情
と親しみをみせることがあつた。私を膝の上
に抱き上げて、お椀形の恰好のいゝ乳房を吸
わせたりした。私はもう乳の吸い方は忘れて
しまつていたが、母のうす赤い乳首を口に含
んでも乳は出て来なかった。だが母のあたゝ
かい肌に全身を抱擁されて、この時ばかりは
いつも遠慮勝ちの私が当然の権利のように母
の背中に手を廻して弾力のある皮膚を撫でま
わし、片手で空いてる乳房を掴んで、母の肉
体を独占したような気持ちになつて、その柔
らかな触感の快味に浸る時、私は幸福だつた
成長してから親子の愛情と言う事では直ぐ

この光景が頭に浮んで来た。それ程私には母
性愛、父性愛に乏しく餓えて居たのだ。無理
もない。父と名乗る人も母と呼んだ人も共に
真の両親ではなかったのだから。

風呂場では慈母の愛情を示す母も、市田の
おじさんの前では恐しい魔女に化した。

私は叩かれても抓ねられても、性懲りもな
く二人の密会の部屋へ入つて行く。それが度
重なる間に私は色んな要領を覚えた。

A 殴られずに十銭玉を貰う方法

B 叩かれたり締められたりして貰う方法

G 叩かれ損で何も貰えない場合

この三つの場合だつた

「A」の場合は、母とおじさんとが部屋へ入
つてから十分位経つた時

「B」の場合二人が寝ようとする場合

「C」の場合 おじさんが帰る間際になつた
時。

だが私は一番要領のいゝAの時期を知るよ
うになつても、Bの場合、又今入ればCだ
なと思いつゝも入つて行く事があつた。

私は母の折かきを苦にしないばかりか、母
の裸身を前にしてその素肌に触れる時、却つ
て愛情を受けて居るように感じられたからだ
母もおじさんも時々念を押すように「お父ち

やんに喋るんじゃないよ」と言い聞かせた。

私が七歳位になった時、母は父にかくれて悪い事をして居るのではないかしら、とすれば市田のおじさんと一緒に寝る事が悪い事なのだなと思うようになった。そう思うといつもニコ／＼して何かしらくれるあのやさしい感じの良い顔をしたおじさんが悪人のように思われた。だが市田のおじさんを憎む気にはなれなかつたし、父にソツと知らせてやろうとも思わなかつた。私は叩かれても打たれても母の方が父より好きだつた。それに私が父に話したら、私は母にひどいめに合うだろうそれはいゝとしても母が父に叩かれたりしたら可愛想だと思つた。

私は市田のおじさんが来てる時、奇妙な事を覚えた。これは或は五歳以前からかも知れない、私の記憶よりもその方が先だつたかも知れない。

それを行うには、いら／＼した時とか瀧り／＼した時に限られて居た。時間は二三分、或は五分位だつただろうか。それが恥かしい事だとは知らなかつたから、人前でも平氣で行つた。その方法は、指を全然使わずに腹這いになつて、両足をびんと力一杯伸ばすのであつたが、何をしてるか皆知らないだろうと

思つていた。母はそれを見ても笑いながら「フ、フ、そんな変な腰つきするもんじやないよ」と言うのが関の山だつたが父に見られた時は、

「静坊や、そうやるのおよし、そうやるとオチン／＼の先からバイキンが入つて、病気になるよ。もうやつてはだめだよ」と懇々とさとされた。その顔が恐いと言うよりあまり真剣だつたので、これは悪い事だ人の前ではやれない事だと思ふようになった

そして父の言う通り、朝顔の蕾のように、先端が薄赤くただれて痛みを感じる事があつたが二、三日止めて居ると、治つた。勿論未だ性的に何も目覚めて居た訳ではなかつたから慾情などと言うものは起きる筈がなかつたが焦燥を感じた時にはよく行つた。

だが私は早熟だつた。八歳位の時にはおぼろ氣ながら子供がどうして生れてくるかを知つて居た。

母はだらしない女だつたので、家の中はいつも取散らかされて居るし、そういつた本や画など頁をひらいたまま座敷の真中に投出されてある事も始終だつたので、自然この方面への興味が早く誘発されたのだろう。母は

私を低能に近い子だと思つて居たようだ。叱つても叩いてもさつぱり言う事を聞かないで直ぐ忘れてしまうからだつた。そうなる私はわざと母の前で低能児のような振舞いをして見せた。その頃から母に打たれたり叩かれたりする事に快感を感じるようになった。

母と市田は私が入つて行つても平氣でいるようになった。私は二人の傍で玩具を弄び、歌を唄い、寝転んで本を見たりして居たが、注意力は秘かに二人の行為に注がれて居た。

私は春本の画を開いて「母ちゃん／＼、これが母ちゃん、これおじさん。」

と指さして見せた。母と市田は顔を見合せて笑つて居たが、突然母親がはね起きて本を奪い取り、私の頭を小突いて転がすと、「コラ、そんな事言うもんつやない、悪い子だ。ひとにそんな事喋べつたら承知しないよ」

と私の胸の上に跨がつて、太腿で両頬を締めつけた。私は阿呆面をして母の二つの顔を見上げて居た。

「いゝかい。誰にもそんな事言うんじゃないよ。分つたかい返事をおしよ。」

私は返事をしたくも、出来ない状態にあつた。

市田はこの頃では止めようとせずに、床の中で面白そうに笑いながら眺めて居るのだつた。私は母に虐められるのは好きでも、市田がとめないのが腹立たしかつた。

「ほんとにこの子つたらバカなんだからね。いっどこで誰に喋らないとも限らないからうんと懲りるようにしてやらなきゃ。……」

私はこの気の遠くなるような苦痛の喜びと楽しみを複雑な感情で味つた。

そうだ、確かに大人になつてからよりも、当時の方が複雑な感情を持つて居た。大人になつてからは本能の陶醉のみだつたが、その頃は、

(あゝこの苦しみが過ぎればガムが貰える、市田が十銭よこすかしら?)

などと考へて居たのだから。

母は一しきり私を責めると、又蒲団の中へ入つてきた。私は十銭を貰うためにいつ迄も部屋で遊んで居たが、市田はとうとう十銭くれずに帰つて行つてしまつた。

それから市田はあまり私にお土産も買つて来なくなつたし、十銭玉もくれないようになつた。

そのくせ母が私を虐めるのは、市田のために虐めて居るのだと言う事が分つて来た。

母は私の上で絶えず市田の顔色、眼の色を伺いながら虐めて居たからだ。

(無報酬でこんな苦しいめに会うなんて馬鹿々々しい事だ)

私の反感は市田に対して向けられた。

そうかと言つて、「十銭頂戴」とねだるのは、私の弱い性格から言えなかつた。只心の中で市田を憎んで居た。母に対しては何とも思つて居なかつた。

やがて父と母の別れる日がやつて来た。

その因は私が作つたのだ。私が九歳の時だつた。私は市田に反感を持ち始めてから、いつか父に市田の事を知らせてやろうと思つて居た。だが母と市田の行為が恥かしい行為であり、それを露骨に喋るのは何だか恥かしかつたし、又、母に悟られると、ひどいめに会ふ、いつも会う程度のひどいめならよいけどあれ程きつく口止めされて居るのを喋つたら母は私を殺してしまふかも知れないと思つたので私が喋つたと思わせないように父に知らせる必要があつた。

私は或る日、放り出されてあつた春本をソ

ツとしまつておいた。そして父の居る日に、私は何気なくそれをひらいて、一人で見えて居る振りをして、

「これお母ちゃん、これ市田のおじちゃん」

と言うと、バツと本を投げ出して、表へ遊びに出てしまつた。父から根掘り葉振りされちやかなわなと思つたからだ。私は母が歸つてくる迄表で待つて居た。

そして母と一緒に家へ入つた。きつと一騒動起きるだろうと思つて居たところが、父は平気な顔をして居るので拍子抜けがしてしまつた。私は私の声が父に聞えなかつたのかしらと思つた。

だがその晩も、翌朝も、父と母の言い合う声に眼をさました。

(あゝやつぱり聞えたんだな)と思うと市田の顔が直ぐ浮んで来た。

(あんな奴、もう来なくてもいい)

来なくなつて、母は何か叱る口実を設けて私を可愛がつてくれるだろう。

ところが、父にこれが知れると、母が居なくなつてしまふようになるとは考へて居なかつた。

私は九歳にして母親を失つてしまつた。

(未完)

或る處女のノートより

遺書

小峰登美子



(一)

私はいまI温泉の、ホテルの一室でこの物語を書いています。物語などというのは些か大げさな表現かも知れませんが。別にこれと云つた小説風のストーリーがあるわけではなく、私が今日の日まで辿つてきた運命を平凡に書き綴っているだけなのですから……。それに小説、詩の類はこれまでも随分よみふけりましたが、自分で文章を書いた経験はないので、とかく文意が乱れ勝ちでたとどしく、前後不揃いの点も多く、読みにくい事と思います。しかし私としては俗に謂う一世一代のつもりで「遺書」をかいているわけで、戦災のため近親知人の者と別れてしまった私にとっては「遺書」と云つても親兄弟にのこす為の書き置きではなく、世の中の多くの方に、殊に

若い女性の方々に読んで頂いて、私という愚かな女の歩んできた経過を批判して頂き、できる事なら私のような馬鹿な女にさせたくないための——柄にもない教訓の気持ちもふくめた懺悔話であり、偽らぬ告白の記録でもあります。それにいま一つ別の意味もふくまれているのですが、それはまた後に書き添えるとして……すぐ本題にかゝりましょう。

私は十八才の春、女K学校を卒業しました。自分で云うのもおかしい事ですが、学校時代から容姿が美しいので級友たちにさわがれ、上級生から手紙を貰つた事は数えきれぬくらいでした。もし私が寄宿舎生活でもしたら、同性愛事件の中心人物になつたかも知れませんが、しつけの八釜しい両親の膝下から通学していましたので

或る処女のノートより 遺書

私が伊香保温泉の岸松旅館に滞在したのは本年の六月であつた。何故私がこんな時期はずれたにたつた一人でこんな所へ来たかという、東京の或る平和促進連盟の依頼によつて戦争反対再軍備反対運動に資する宣伝的な読物の依頼を受けてそれを執筆するためであつた。時は丁度破防法実施の直前でもあつたし報酬は別として此の仕事は私の情熱を大いに馳り立てるものがあつた。というのは軍人や警官、所謂ユニホームの大嫌いな私としては反軍的な思想は今日や昨日に始つたものではなかつたからである。

たいした問題もおこさずにすんだのだと思います。高学年になつてからは、若い先生方や付近の大学生の間で私の事はいつも話題に上つてゐたらしく、その頃、フランス映画のスターとして知られていたダニエル・ドリユーに似ているといふので、ダニエルという綽名をつけられ、級友たちもダニエルちゃんとか、ダニエルさんとか呼ぶ人が多かつたようです。その上、学校の水泳部の選手として、高等女学校の対抗試合にも毎年出場しましたので、小峰登美という名前、社会的にもすこしばかり有名でした。水泳は子供の時、千葉

それはそれとして、私は此の旅館の物入れで妙な日記を発見したのである。散歩や執筆に倦いた私が女中に頼んで古雑誌でも見せて貰おうとしたところ、廊下の突き当りの物入れに道具等と一緒に入れてあるから自由に好きな物を探してくれとの事なので、早速その物入れに頭を突込んでかきまわして見たところこわれた玩具の下から、「遺書」と鉛筆書きした手垢に汚れた一冊の大学ノートが現れたのであつた。丁度退屈しきつていた最中であつたので、そのノートの文字をバラバラと拾い読みしていた私は、扉を閉めるのも忘れて思わず部屋へとつて返えすと、畳の上にあるのを向けになりながらその一冊のノートに刻明に書かれた字文を一気に読破してしまつた。ここにお送りするのがそれです。筆者は私ではなく最後に記してあつた小峰登美子という人です。よろしく。
(杉本喜代治)

県の海岸に育つた事があつたので好きになつたのわけ。選手としての成績はあまり自慢になりませんでした、いつも六人出の四着か五着で決勝に残つたのです。たゞ顔や身体が美しくエキゾチックだつたために人気がありました。私に声援を送る青年たちは、水着姿の私に好色的な感じをもっている大学生やサラリーマンが多く、真の意味のスポーツファンではなかつたのです。

ですから、私に送られたラブレターの中には、美辞麗句をつらねたものが多かつたようですが、中には私の身体のこと——例えば乳房の形や足の線の事や、あるいは腋の下の毛の剃り跡などに憧れをよせて、それを露骨に書いてよこす人もありました。両親とも行儀の正しい昔風の人物だつたので、私宛に届けられる艶書の事を気にして水泳選手をやめさせようとしたましたが身体のためになる運動だからという理由と、学校側の希望もあつたので卒業するまで選手の仲間になつておりました。斯うした憧れの的になつた私の態度はと申しますと、いつもツンとすまして全然相手になりませんでした。中にはレターなどを用いず、私の通りがゝりを待ちぶせして直接云い寄るような不躰な勇士もおりましたが、そんな時、私は必ず憎悪にみちたはげしい眼付でその男をにらみかえし、一言も云わずにツと側をはな

れてしまふのでした、その怒つた顔が素晴らしいといつて感激する男性もあつたので、一部には高慢だとか、すましているとか陰口をきく人もありましたが、人気はなか／＼落ちる事ありませんでした。私が異性に對して不愛相であり、高慢ちきだつたのは、自分の美貌に自信をもつていたためと、もう一つは家庭が厳格だつたせいでもあります。だから、私自身が異性や恋愛行為に全然関心をもつていなかったか、といひますと、それは全く反對で、常に男の肉体を恋慕つていたのです。もともと性格的には淫蕩な方だつたかも知れませんが、好んで耽読する小説類も性慾や戀愛を扱つた翻譯ものが多く、その中のきわどい描写などを胸をはづませてむさぼり読みました。従つて生活の上でも相手欲しやの氣持は人一倍さかんだつたのです。家庭のしつけと氣位の高さが墮落の危険をセーブしていたとも云えましょう、水泳選手のはしくれただけに、同じ水泳の男子選手やその他のスポーツ關係の男性にも相当知り合いがありましたけれども、彼等は多くの人が単純で教養の程度が低く、趣味の点などでも私の好みに合う者は一人もいませんでした。その癖、私はプールで出逢う男子選手の肩のより上りや部原い胸の逞ましさや、胸毛の猛々しさにはげしい愛着と憧れを感じたのです。堪えきれぬ慾情が身のうちをかげめぐりました。

こんな時、私は家に帰ると必ずすぐにお風呂に入りました。そして浴室の内側から鍵をかけてドレスを脱ぎすて、一糸もまとわぬ裸になつて大きな鏡に自分の裸身をうつしみるのでした。自分の肉体を鏡にうつしてみる癖は十三四才の思春期の頃からはじまつていました。早熟の方だつたので、その頃にもうスツカリ發育した身体からは匂やかな女の香を放つていて、乳房の盛り上りも、腰部の発達

も、そして腋の下の黒味も一人前の女だつたのです。十八才という学校の卒業期にはうれ切つた果物の様な新鮮さと、脂ののつたしなやかさと、運動できたえ上げた強靱性が加つて、我ながら惚々するような青春の美しさがみなぎりあふれていました。

五尺二寸、十四貫、そして胸囲三尺というのが学校の身体検査の時の記録で、体格の上でも級の首位をしめていたのです。浴室の姿見にうつされる肉体は、その五尺二寸、十四貫の……姿態のすべてです。すこし怒り氣味の肩、双つの半球型の盛り上り、ピンク色のたをぼかし乳首暈、胴のくびれ、腰の肉の丸い逞ましい肉付、腰から下へ長くX字型に伸びた股と脚、そしてあの、たの象徴である三角洲の黒い森林……。私はいつもこの豊かに發育した自分の裸身をつめて微笑み、悩しく身を悶えました、乳房を撫でさすり、握りしめ、乳首をもみ、双の腕を交互にさしあげてふつさりと繁茂した腋毛を撫でました……。そして、遂には恍惚とし、すこしぐつたりして果しない自己陶醉の境に浸るのです。斯うする事によつて、いくらか異性への慾情は抑制され、同時に常日頃の自尊心が愈々身の内へひろがる様な氣がして、安心し、満足するのです。

この私の妙な癖と関連のある事で、ある男性から貰つた手紙は甚だしく私の心をうちました。前にも書いた様に私は男からも女からも沢山のファンレターや恋文と思われるものしを受けましたが、この女性から貰つた手紙に内容がたいへん肉体的であるのに関らず、表現は文学的香氣が高く、教養に富み、字も勝れて巧いものでした。文面は私の顔や肉体讚美に終始しているのですが、その描写は私の裸をみた事があるような実感が現れていました。

クリーム色の肌、乳房の型、体毛の豊かな事など、鏡にうつされ

る私とすこしのちがいはないのです。差出人は山本千代美とありましたが住所は書いてありません、ほかの手紙は破つたり捨てたりしてしまふのですが、この手紙だけはたいせつにとつておいて時にだして読み、読んでしまふと鏡の裸身をみた時と同じような満足感をおぼえました。

この手紙は、今でもたいせつに持っています。この拙い物語にも大いに関係のある結果になる事は後でお判りになる事と思います……。

(二)

さて、このお話もたいへん前置きが長くなつてしまいました。物語らしい形はこれから始まるのですが、くだらない事件の経過はなるべく簡単に書いて、主題になつてゐる私の身体と心の一点にだけ力を入れて拙い筆を綴つてゆきたいと思ひます。

前の章ではK女学校を卒業した事を一番はじめに書きましたが、学校を出るとすぐ先方から申込みのあつたのは、ある映画会社からの勧誘でした。私の容姿を知つていて女優として売りだそうとした映画人の感覚は正しかつたのですが、これは物堅い両親が許すはずがありません。父の知辺をたよつて有名なM合資会社の経理課にとめる事になりました。母は手許において家庭の修業をさせたかつたらしいのですが、すこしは世間をみなくてはという父の配慮と私自身の希望もと入れられて就職という事になつたのです。会社でも私の名はすでに知られていて、若い社員の間ではたちまち評判になり、学校時代と同じ様な異性の包围をうけましたが、相変ずの表面的な無関心と気位の高さで、超然とした態度が続きました。そし

て、入社した翌年の春、偶然の機会から同じ会社の秘書課につとめてゐる山岡俊夫という青年と婚約の間柄になりました。これは山岡の方も私も全く寝耳に水で、同じ社でも課がちがうので、お互に名前位は知つていましたが、口をきいた事もなく、私の方としては顔もよくおぼえていない位の存在でした。それが何故この様な関係になつたかといひますと、私をめぐる大勢の男たちの騒ぎがあまり大きいので、両親が心配のあまり、秘書課長と父が旧友であつた縁故を利用して、聲さがしを依頼した結果と判りました。私は母からこの話をきいた時、相手がどんな人物だか判らないからという理由で縁談の取消しを主張したのですが、その後、この山岡という青年に逢い、二三度言葉をかわしていますと、万更でもないという氣になりました。「実直な青年だから」という秘書課長の推薦の言葉通り彼は口数のすくないまじめそうな人物でした。眉目秀麗という程の男ぶりではありませんが、M大学でサッカーの補欠だつたという履歴が物語るかのように、骨組みのガツシリした肉付きのよい、堂々たる体格でした。特に私が惹かれたのは夫い眉毛としまつた口元でした。そして広い肩幅と部厚い胸でした。

斯うした寡黙な青年がイザとなると物凄い情熱家になる事を多くの小説などの例で知つていました。ですから彼のようなタイプは私の肉慾を満足させるに一番ふさわしい男性であると信じ、内心有頂点になつていました。正式の見合と二三回の交際を重ねるうちに、私は万更でないどころか山岡ならでは……の積極的な氣持に変わりハツキリと承諾の意を表しましたので、両親もたいへんに喜び、結納……という形式的な儀礼も行われ、縁組は正式にきまり、挙式も秋の十一月ときめられました。どうしても私は淫婦の型だつたの

でしようか、彼との結婚後の生活の設計とか、式の準備とかには全く無関心で、頭に描きだされるのは、新婚旅行の時の、温泉ホテルでの彼と私。二人だけの浴室の場面やベッドシーンばかりでした。こんな事を想像すると、私は愉しさともどかしさで乳房の芯がうづき、乳首が固くしこるのを感じ、例の鏡の前の癖を行つて身を悶えたのしみ、微笑むのでした。ところが、山岡の方はといえば、彼も結婚を承知したのですから、特別に私が嫌いだったわけではないでしょうが、私に対する態度はあくまでも消極的でひかえ目でした。お互いの両親がさきだちになつてまとめた縁談ですから、私たちは誰に憚るところなく交際し、場合によつては接吻を交したつて、あるいはそれ以上の行為があつたとしたつて差支えないぐらいの考を私はもつていたのです。それなのに彼はひたすら寡黙一点張り、彼の方から進んで口をきくなどという事は一度もありませんでした。私の家へ訪ねてきた事も二、三度ありました。これは多分、媒酌人である秘書課長の入れ智恵なのでしようが、たづねてきても橡側の籐椅子に腰かけたゞけでキッチンと身を崩さず、接待に出た母に何かきかれてもハアとかイ、エとか返事をするだけで、すこしもうちとけた様子がありませんでした。

両親は斯うした態度を好ましく思い、私は物足りぬ思にとゞまれながらも彼の逞ましい腕に抱かれ、毛深かそうな胸に素肌の乳房を押しつける夜のことばかりをたのしみに平凡な交際をつゞけました。彼と私の婚約はいつの間にか会社の内部へも知れ渡つて、朋輩たちは嫉妬半分でいろいろと私をひやかし、ある人は二人の遠慮勝ちな、つましやかな交際を齒がゆく思つて、もつと積極的な恋愛行為をすすめる人もありました。肉慾的な反面に上面はいつでも冷

静な態度をみせる私のいつもの癖で、微笑してみせたり、すみせたり……友達の言葉なんか問題でないような様子をしていました。一方山岡の友人は彼に対して、私の肉体をはやく征服する事をすゝめたり、男女相愛の歓びは肉の交歓にある事などを話しかけたりして、彼の心を動かそうと試みたそうです。その上、私の肉体を細かく描写して彼にきかせたこともあるそうですが、彼はニツコリともせず、また怒るでもなく、無表情な顔でもの憂氣にアクビをする位だつた——と、これは後で女の友達にきいたのですが、噂話の中の彼も張り合ひのない事夥しい男でした。それでも私は彼の男性美に信^{しん}倚^きし、秋の婚礼の夜をたのしみにしていました。

私は会社に入つてからも水泳選手として、社会人の競泳に出た事がありました。ですから会社のプールで練習する時にも多くの友達が応援の意味で見物にきてくれました。その中に男の社員が数名入つてゐるのは、私の泳ぎぶりをみるというよりは、私の水着姿を眺めにくるといった方が適當だつたかも知れません。しかし婚約の間柄だつたにも関わらず、山岡は一度もプールへ姿をみせた事がなく、競技の応援にきたこともありませんでした。私の気持からいえば勿論、彼がプールの見物席にいて間近く私の泳ぎをみってくれる事をのぞきました。好色的な面白半分の態度でプールへ押かける男社員に水着姿をみられる位なら、婚約者である彼に、やがてはすべてを許し互に肉体をたのしむべき彼に、思う存分肢体をみせたい、また私の練習や競技に応援を送つてもらいたい感情があつたのです。だから一度は

「今日プールで練習するのよ、みにきてくだらない……？」
と、甘えた態度でたのんだ事もあるのですが、

「生憎、今日は午後からいそがしいので……」

と口ごもりながら、私の願いをきいてくれませんでした。

ある日、会社のトイレットにいる時です。隣の男子用手洗所で二人の社員があたりかまわず大きな声でしゃべり合っている会話が耳に入りました。話題は彼と私の事なので、思わず身を固くして、ジツとその会話をきき入りました。

「山岡の奴、相変らず登美子嬢とは……なしかね」

「……らしいね」

「馬鹿な奴さ、据え膳の箸をとらねえなんて気が知らねえな」

「だけど、真相はなんとも判らないぞ」

「イヤ、本当にノータッチらしいね」

「もしかすると、奴インポぢアねえのかな……」

「まさか、奴だつて、ダニエルの、あの身体をみちア堪るまいよ」

「そうさ、凄いやつだな、どうだいあのオッパイ、水着の上からみえるところが乳首、あれを、奴が……と思うとワシヤやけるよ、本当に……」

「それにさ、あの腋の下みたかい、水に濡れた毛がベツトリ肌にくつついたところをよ、おれはアレだけでも堪らないぜ」

「そう……剃つてないんだナ彼女、此頃は……。とても毛深いんだね」

「アレぢア、あそこも……」

「オイ夢中になるなよ、水がだしばなしぢアねえか」

話の後半は私の身体の詳細だつたので、頬があつくなり、いくらか羞しいような口惜しいような気もしましたが、それより気になったのは男たちの会話の中にあつた「インポ」という言葉でした。こ

の言葉は、女友達の中にも口にする発展家がありましたし、私もその意味はよく知っていましたので、その言葉をきいた時は、胸をつかれたような気がしました。

もし山岡が不能だつたら……。イヤそんな事は絶対にない、彼はただ真面目な純情家であるだけなんだ、きつとあの時は、物凄い情熱の力で私を抱擁し愛撫してくれるにちがいない、彼が不能者だなんて……絶対に……

私は胸の中で、幾度かはしたくない男社員の戯言をうち消そうとしましたが、万一彼が……と、また悪い場合の想念が頭の中にひろがってくるのでした……。それにこの頃はもう一つの心配があつたのです。

(三)

その頃、日本はお隣の中華民国と戦争をしていました。そのため大勢の男たちが相次いで軍隊に召集されていました。山岡は前の年の夏、脚氣を患つて現役解除になつてかえされた身分なので、婚姻した当時から兵役関係は割合に縁がうすいように両親は考え、周囲の人もそのように思っていました。私はまた国家の事なんか至極関心な少女でしたので、学校などの軍国儀式や勤労奉仕などは水泳の練習を口実にサボっていた組でしたから、戦局の状態などは全く知らなかったのです。ところが、この年の夏頃、中国だけでなく他の国とも雲行があやしくなつたというので、一時下火だつた応召騒ぎがまたさかんになり、会社の男社員も大勢の人が召集され、行き所も判らないようなところへ出征してゆきました。もう一つの心配というのはこれでした。彼が万一召集されたら……ということでは

した。

しかも、嗚呼……その杞憂^{きゆう}は実現しました、あと二ヶ月で結婚すると予定されていた九月のはじめ、遂に彼のところへも召集令がきたのです。しかも令状がきてから入隊まで僅か三日間、準備やら挨拶まわりやらにいそがしく、シンミリとした別れの一刻さえも許るされぬあわただしさでしたが、入隊という前の晩、漸く僅かの時間をさいて彼は私に逢つてくれました。婚約時代を通じて二人きりになつたのは、この最後の夜を入れて三回位のものだつたでしょう……この時だけは、彼もすこしばかりシンミリした調子で、愛情をこめた態度がみえました。しかし真面目一方で、斯んな場合には極端な国家主義的の態度になるらしい彼は、私の事なんかより、国の事、戦争の事で頭が一杯だつたようです。だから彼はいつもよりはるかに元気で、ハリ切つた態度がみえました。

彼は云いました。

「僕はおそらく生きて帰らないと思う、また生きて帰ることをのぞんでいないのだ、国の為に死ぬ事は男子の本懐だからね、僕は去年脚気でかえされた時くやくして、涙が出た。それから一年、物をいうのもイヤだつた、だから僕は君にもあまり口を利かなかつたろう、それは軍隊からかえされた事がつらくて、口を利く元氣もなかつたんだ」

斯う云つてから、私の顔をじつとみつめて

「君には本当に申訳けないと思う、はじめにお断りすればよかつたんだが、その氣力も僕にはなかつたんだよ。それでこの十一月には結婚ときめた。だけど今度の召集で全て解消になつた。僕は死ぬんだからね。お国のために命を捧げるんだからね。悪く思わないでく

れ給え、僕は君を愛していなかつたわけぢやない、今でも愛している。だけど国のためには愛も情もすべてを捨て去らなければならぬ。しかし本当に結婚前でよかつた。幸に君は処女だ。僕は今日あると思つて君と婚約以上の関係にならなかつたんだ。君も僕の氣持を判つてくれると思う、君が僕を愛してくれたのは、この僕の氣持だと信じる。会社の友達に随分いろんな事を云つて僕をけしかけたり、からかつたりしたけど、僕は固く決心して結婚するまでは君を完全に僕のものにしなかつたんだ。この氣持、判つてくれるね、だから、二人の間は今夜限りと思つて諦めてくれ給え、君の氣持を裏切つた点はお詫びします。だが、ホカの理由ぢやない、お国のためだからね……」

彼がこれだけ長く口をきいたのは私にとつてはじめてであり、諄々とさとする様な口調の中にはたしかに愛情が感じられましたし、彼が私の肉体を得ようとしなかつた理由も、彼一流のモラルとして判つたような氣がしましたが、女の感情はそんな事で割りきれるものではない、殊にもとく肉情的な私にとつては、彼のしみじみとした言葉がかえつて女の感情と慾情をそより煽ぐ結果となりました。私には彼の言葉を批判したり、噛みしめたりする暇なんかとてもありませんでした。彼の言葉が終らないうちに、彼の胸にしがみつきました。

「イヤ……、イヤヨ!!死んぢアイヤヨ!!あなたは私のものよ、絶対に、誰がなんて云つたつて私のものよ、ねえ、死んぢア駄目よ……」

こんな言葉は小説にもよく出てきますし、終戦後の映画などのセリフでもよくきゝますが、その時の私は本当にとりとめもなく、激

しく嗚咽しながら口走つたのでした。そして

「ねえキッスして、キッス、キッスよ」

といふながら、いきなり彼の手をとつて、単衣の襟の間へ無理にひつぱりこんで乳房に触らせました。

「ねえ、よう、もんで頂戴、お乳をもんで……」

唇を彼の唇に近付けはげしく喘ぎました。

私も彼に対してこんな態度を示したのはこの時がはじめてだったので、彼は狼狽し、激情に襲われたような表情に面をこわばらせたが、同時に全く困却した様子で襟元から手をひっこませ、私の肩へ両手をかけ押し戻すようにして、またいゝました。

「結婚は駄目なんだよ、結婚は、本当に……」

弱々しいつぶやくような口調でした。そしてくるりと背を向けて家の方へあるきだしました。

そこは彼の家の近くの川端で、月の明るく美しい夜でした。

「待つて……」

と云つて、追いつがろうとしましたが、橋を渡つて人の来る気配に、それ以上のはしたない行動だけは辛うじて我慢しましたが、訝し気に私の姿をすかし見て通りすがった知らぬ人をやりすごすと、



私は橋の欄干に身をすがらせて泣きました。そして、着物の入っ口から胸の中に手をさし入れて乳房を撫で、固くしこつた乳首をグリ／＼ともみほぐして喘ぎました……。婚約の人を戦争に送りだす悲しみと、激情に昂つた肉の悶えが交々私に襲いかゝつてきたのです。その翌日、私は大勢の歓送の群の後の方から彼の出征を見送りしました。しかしその時はもう大きな感激も悲しみをとりすぎていまい無言で佇んでいたのです。そこには激情の後のうつろな気持と、みち足りぬ淋しさがのこされているばかりでした。

(四)

出征した彼からは簡単なハガキが一枚来ただけでした。「粉骨碎身以つて君国に報ずる……」といったキマリ文句を、荒っぽい字体でなぐり書きにした味もソツケもないたよりでした。彼の気持はもう完全に私からはなれてしまつて、その頃から流行りだした「撃ちてしやまん」とやらの軍国精神にこりかたまつていたのでしやう。私にとつても、最早何の興味も関心もない男でしたが、戦争を口実にあつさり捨て去られた淋しさはどうする事もできませんでした。

私は彼を憎みました。そして戦争を恨みました。彼のいう通り、彼は私の肉体をふみにじつたわけではなかつたのです……。といつてまた純情を裏切つたなど、立派な事は申しません。肉体的には処女であつても、屢々云つた通り女の欲していたのは彼の肉体だつたのです。肉体的の愉悦を憶れてやまなかつたのです。むしろ、彼が私を肉体的に征服していたのだつたら、これほどまでに彼を憎むような事はなく、心の底から彼の出陣を惜み、場合によつたら戦争に協力

する軍国乙女にしていたかも知れませんが、彼は終始、私の肉の希望をふみにじつたのです。だから私は身を悶えて悩み、恨み、憎み怒り、呪いました。

しかも、社会の動きは無力な一少女の怒りや憎みを頭から無視するように、愈々ぬきさしのならない泥沼の中へ突入してゆきました。彼が出征して三ヶ月後の十二月には、彼の呪うべき大戦争が開幕されました。相継いで来る勝利のニュースも私には一文の価値もありませんでした。会社の男社員も一人へり二人へり……その度毎に氣狂い沙汰と思われる歓送会が行われましたが、私は冷い眼でこの狂燥ぶりを眺めていました。

「彼女、山岡さんが出掛けてからすこし変だワね」

「多分憂鬱症なんでしょう、誰か逞ましい騎士が慰めてやればいゝのに……」

「でも、すこしひどすぎるワ、完全な戦争傍観よ、にくらしいつたらありやしない!!」

斯んな友達の陰口も耳に入らないわけではありませんでしたが、私は愈々意地になつて戦争を白眼視しました。

この様な私の態度は上役の人に睨まれるものになり、何回かお説教を喰つたり、工場詰にまわすなどというおどし文句もきかされましたが人手不足が幸しか、勤めの上にはたいした変化もなく一年すぎ、二年たち、私もまた鬱陶しい牙えぬ氣分で無為な年月をすごしました。お義理でモンペをはき、氣の進まぬ防空訓練に加わり、時々思ひだしたように泣いたり怒つたりして両親を困らせました。使いたれた化粧品がなくなり、洋服の生地が姿をけし、おいしいチョコレートもたべられなくなつた世の中、私は疳癪をおこして死ん

でやろうかと思つた事もありましたが、そのような感情では律しきれない生活のきびしさが、必然的に私の日常を追いまわしはじめました。それは食糧難がひどくなつた事と、本物の空襲がはじまつた事です。あのみじめな、そしてめまぐるしい空襲下の体験を今こゝでくどくどしくならべたてる事は馬鹿げた事ですし、このお話の目的でもありませんから一切省略いたします。

たゞ簡単に次の事だけを書いておきましょう。それはA区にあつた私の家が夜間爆撃で焼けてしまつた事、おまけに父も母も、中学生であつた二人の弟も焼け死んでしまつた事です。幸か不幸か、私は会社の特設防護団に属する看護班として宿直していたのでいきのこつたのでした。翌日、自分の家の焼跡へ行き、防空壕の中で窒息死している弟の一人を発見しました。両親やもう一人の弟の死体はみつかりませんでした。みるも無惨な死に方をして、死体は警防団の人がトラックでどこかへ持ち去り焼いてしまつたとの事、私はあまりの事に今更悲しいとも恨めしいとも思いませんでした。会社の警備がいそがしいというのを口実に弟の死体の処理を出入商人だつた魚屋にたのみ、涙一つこぼさずに黙つて翌日からまた会社につとめ、おなかのへるのをかこちつゝ只機械的にうごいていました。そしてやがて、戦争が終りました。

天皇陛下のお勅語放送をきいて私はホツとしました。格別に嬉しいともまた口惜しいとも思いませんでした。友達の中には敗戦を知つてヒイ／＼声を放つて泣く人もいましたが、私は相変らずだまつて、いつも詰所に指定されていた地下室の部屋へおりて行きました。

そして久しぶりに鏡をだして自分の顔をうつしてみました……。その時、私は急に悲しくなつて、涙がポロ／＼頬をつたりました

意識的にツクツくと自分の顔を鏡にうつしてみた事は本当に何年にもない事でした。

頬はこけて陽に焼けて眼だけが大きく光り、眼尻や鼻の脇には垢やゴミが黒くたまっていました。肌は荒れてツヤがなくなり、束ね髪が乱れて……それに最もイヤらしく思つた事は、唇の上にうす黒い生毛がモヤ／＼と生えている事と、鼻の穴から何本かの黒い鼻毛がのぞいている事でした。はげしい自己嫌悪の感情が胸にせまり、鏡を投げだし声をあげて泣きましたが……フト、ある事を思いだし隣のバス・ルームに入つて錠をおろしました。そこには水銀のところにどころはげおちた姿見がかゝっていました。私はその大鏡の前にたち、モンペのヒモをほどき、上着を脱ぎ垢じみた下着も脱ぎました。そして遂に一糸もまとわぬ全裸となつて鏡の中の自分の肉体をじつとみつめました。

私にとつて愉楽と安堵の心をもたらず、この鏡の前の秘密にも何年遠ざかつていた事でしよう……。顔のやつれとよこれにくらべて身体はそれほどにおとろえてはいませんでした。光沢とうるおいこそすこし落ちていましたが、クリーム色の素肌はなめらかで、肉付にも、均斉にも変化はなかつたのです。半球型に盛り上つた乳房も女学校卒業の頃より更に大きくムッチリと固たそうで、ピンク色だつた乳首も鳶色の暈をぼかして息づいています。

私は脇腹をさすり、両手で乳房をそつとかゝえました。それから腕を思いきり高くさしあげて首の後ろに組むポーズをしました。しなやかに筋肉の伸びた腕の付け根の凹みには矢張普通通りに房々と渦をまいたような漆黒の腋毛が密生しています。双方の腋の下を毛を交る／＼撫で、私ははじめて微笑みました。何年ぶりの笑顔だつ

たでしょう!!心なしか、つかれ果てた顔にもいくらか生気が蘇り、ダニエル・ダリユーに譬えられた魅力が生き返つたように思われたのです。私は満足しました……と同時に、今迄忘れていたあの情慾が身体の中を駆けめぐつて、血が熱く湧きたちました。私は鼠色に濁り垢がういたまゝに冷えている浴槽の水にとびこみ、異臭のするその水で身体をひやし、よごれた顔をこし／＼こすりはじめたのでした。

(五)

勤め先のM合資会社は有名な財閥に關係のある商事会社だつたので、占領軍の命令により解体を命じられましたが、私たち雇員はそのまゝ新たに発足したO会社に吸収され、従前通りつとめる様になりました。敗戦後の社会もしばらくは戦争中と変らぬ、それ以上の不自由と不足と不潔がつきまといいましたが、翌年の秋にはよほど落着きを取り戻し、物の不足も相当に緩和されてきました。

戦争傍觀者という理由で、戦時中にはいぢめられ通してきた私もM会社以来の六ヶ年という経験年数が物を云つて、経理課の係長に抜擢されました。男女平等という事がやかましく云われたので、私のような者も四、五人の社員の上にたつポストを与えられたのでしようか、俸給も女としては多い方でしたし、系累のない独身者として、郊外にある会社の女子寮を預る身分にもなりました。私のような淫蕩的な女が二十前の娘さんたちを監督する立場になつたのも皮肉な運命ですが、どちらにしても気安い境遇におかれましたので、戦災で失つた身のまわりのものを買いそろえ、出来るだけ念入りなお化粧とぜいたくな衣裳で容姿をととのえ、たしかに昔以上の

美貌と姿態をとりもどしたような気がしました。それに二十四才という、^{としまさかり}年増盛りの年令にもなりましたので、豊艶とか妖麗とかいふべき形容にあてはまる美しさが加わり、人を魅惑するに充分な資格ができたのでした。しかし、いつになつても、充ち足りぬ淋しさがつきまとう事——それは、この年になつても、彼の婚約者の出征の時以来のまゝの処女だつたことでしょうか……、私はもう完全にオールドミスでした。

私にとつて、相手があれば誰でもよい——というのが偽らぬ肉体的慾求でした。しかしその激しい慾求をセーブするのは、学生時代も同じの、生れつきの氣位の高さです。美しい容姿をとり戻し、脂の乗つた女体美を誇らしげにふりまく私のまわりにはいろ／＼の男性が群をなして集りました。勤め先の重役、取引先の社長、アブレゲールの青年社員等々、正面切つて求婚を申込む騎士もあつたし、露骨な二号契約の好条件を示す老紳士もあつたのですが、私は静かな謎のような微笑をうかべるだけで相手になりませんでした。その癖、男を撃退した後にはいつでも譬えようのない寂寥感と焦燥感と苦痛がのこりました……そのたびに、私は女学校時代からの、あの習癖をくりかえしました。一条もまとわぬ裸身を鏡にうつして自己陶醉に浸る自瀆行為で、昔とすこしも変らなかつたのです。

斯うした割り切れぬ優越感と肉慾の矛盾は破れそうに破れないものです。私は女子寮にいる年若い女社員を、この悩みのハケ口の対象にしようとした事もありました。私の艶麗な容姿は彼女たちにとつても渴仰の的だつたので——それはむしろ男たちより強烈な憧れでもありましたので、彼女たちの誰かを虜にする事はわけのない仕事でした。ですから私はある時、Sという十八才になる女学校を出

たばかりのニューフェイスと一緒にお風呂に入り、誇らし氣に私の全裸を彼女にみせるような姿態をしたり、彼女と身体の流れつことをしたり、できるだけ相手の氣分をそゝるようにした後で、彼女と乳房の大きさをくらべあつたり、腋毛の多さをみせあつたり、遂には乳房を撫でてくれたのんだのですが、Sは私の若い時とはちがつて、全くこんな性愛技巧を知らなかつたとみえ、乳房をくらべ合う頃から全く恥しがり、こわがり、ふるえだしてしまつたのです。そして激情のあまり私が彼女を抱きしめようとした時、遂に大きな叫び声をあげましたので、私の同性愛による情慾の解決方法は失敗に終つてしまいました。

そこで私も愈々男性を相手に乱倫の生活に溺れようと決心して、今までの男に対するとりすました態度を捨て、接近するようにつとめました。これは相手にとつては願つてもない事なので、恋の虜は数えきれぬ位でしたが、私はまた失望しなければなりませんでしたそれは多くの男たちの私に対する行動が何の感激も情緒もない事でした。彼等はいつの場合にもイキナリ私を押し倒そうとしたり、スカートをまくり上げたりするのです。もともと歓楽の中心点があの下半身の一部に在る事は私も否定はいたしません、義理のように唇を合せ、機械的にドレスの上から乳房をさわつて、すぐに犬のような動作に移ろうとする単純な行為が、私には物足りなかつたのです。ですから、いつでも際どい場面になつて私は満足感を覚える事なく、相手をつきはなして構曳の部屋を逃げだしました。

男つて、なんてつまらない動物なんだろう……と思いました。多くの男と、アワヤ……と思われる時になつても、処女と袂別できないのは、その男たちが知性と情感に富む、真の性愛技術をわき

まえていない事でした。私の望むような騎士に出逢ったことのないのがなんとしても不幸だったのですが、とにかく私は男性に対して極端な嫌悪感をもつようになりました。最早逞ましい肉体も、剃り跡の青い頬の直線も問題ではありませんでした。斯うなると、サツカー選手の成り上りを婚約者にもつた過去の自分の愚さがかえりみられていよくもどかしくなりました。

真に私を愛撫してくれる人はいないのでしょうか……。

ある夜、私は会社の常務に名を連ねているヤミ屋の親分にさそわれて、イヤ／＼ながら夕飯を共にしましたが、酔余、その男が私のスカートの手をかけた時、突然私はあぶらぎつて酒焼けのした常務の横面に思ふ存分の平手打をくらわしてその席をとびだすと、それきり辞表も何も出さずに翌日から勤め先をやめ、女子寮もとびだして、S区の安ホテルへとまりこみました。

多少の貯えはありましたが、インフレのひどい世の中では永持ちがしそうもなく、不安だったので、翌日からすぐに職をさがしました。その頃から流行りだしたストリップ・ガールになろうと思つた事もあり、モデルという事も考え、外人専門の街娼になろうとも思いましたが……、男に愛想をつかしている今では、彼等の野卑な感



情の対象にはなりたくありませんでした。一週間の求職生活の後、あまり柄でもなかったのですが、派出婦人会の家政婦の口をみつけたしました。

派出先での、私をめぐる男の行動などはこの物語にとつてあまり興味はないので省くことにいたしますが、しかし、とにかく、私は遂に幸運をさがす事ができました。

(六)

B区のある邸宅でした。その家の門札には藤木宏子と女名前がかけられていて、広荘な洋式住宅に住んでいるのは、その女主人ともう一人の家政婦だけでした。

そこへ私はつとめることになったのです。

女主人の藤木宏子さんは私と同年輩の未亡人でした。私より少し小柄でしたが、肉体は豊かでいかにも豊満という形容にふさわしい体格を紫と白のアライ綿になつたワンピースにつつんでいました。眼がはつきりと美しく、鼻筋が高く通つてハート型の唇はいつも微笑んでいるようにみえます。黒褐色の髪を長目にセットしてありましたが、私が最も魅力を感じたのはムッチリと盛り上つた乳房が、乳首の形までもハッキリとワンピースの胸にとがつている事でした。もう一人の家政婦と思われたのは、本当は看護婦さんでした。女主人宏子さんの御主人が病床にある頃からこの邸に派出され働いていた——山田千代子というのがその名です。御主人のなくなられた後もこの邸に住つていて宏子さんの相談相手になつていふのだとききました。骨組のしつかりした私よりまだ背丈が高いと思われる立派な体格をした女性でしたが、容貌は純日本式というのでしょうか

恰度映画女優の花井蘭子さんに似た顔でしたが、男の様に太く濃い眉毛だけが細面のやさしい顔にこの人の意志の強そうなたくましさをあらわしていました。

主人の宏子さんも、看護婦の千代子さんも、はじめて私がこの家を訪ねた時から、心安く親しげに、俗に謂う百年の知己の如くむかえてくれました。よほど経済的にめぐまれた家とみえて、すべての生活が派手で、贅美をつくしたものでした。住みこんで二、三日たつても私にはこれと云つた用もなく、部屋の掃除などは二日に一度づつ近所に住んでいる耳の遠いお婆さんがやつてくれましたし、また炊事の方も宏子さんが贅沢な材料を買いこんで洋式調理をやります。私達は之等のお手伝いをしたり、庭のお掃除をするのですが、之も義務的というような事ではなく、千代子さんの話では氣に向いた時だけやればいいのだというのです。

日本の経済界はその頃、例の封鎖騒ぎのあつた後で、新円という物に特別の魅力と価値のあつた時代ですが、この邸ではお金に不自由をする様な氣配は少しも感じられませんでした。私は何がなんだかすこしも判りません。一体この邸はなんだろう……男と名のつくものはオス犬一匹いない。また出入りもしないのですからナイト・クラブの類でない事は明らかです。ただ主人の宏子さんは一日置き位にどこかへ出掛けます。時には山田さんも一緒にあります。その様なとき私は留守番をたのまれるのですが、広い邸に一人ボツチで残される不安と淋しさをすこし感じるだけで門や玄関の戸締りは厳重にしてありますから風寝をしたり本を読んだりブラ／＼と呑気な一日をおくつていればよいのです。宏子さんは外出の度毎に、どこで雇つてくるのか、この頃の街では滅多にみる事のできぬハイ

ヤーにのつて帰ってきました。そして必ず持ちきれぬような土産物を買つてくるのです。山田さんや私のための衣類や装身具、化粧品食糧……。ある時には私たち三人揃いの和服——それも絶対に手の入らぬお召の着物と単衣帯を特別あつらえにした事もありました。またある時、何かの機会に私が会社をやめた事情や女子寮に荷物をおいたまゝとびだしてきた事をはなしますと、宏子さんも山田さんも手を打つて愉快そうに笑いましたが、それから二三日後には、どこであつらえてきたのか、宏子さんは姿見の鏡や化粧戸棚、簞笥の類まで邸へはこばせて、私の部屋にと指定した二階の間へかざりつけました。

ある日、宏子さんは、すこしあらたまつた口調で、「今日は登美子さんに折入つていたのがあるのよ……」といふました。いまゝで、あまり呑気にしていた私は、いよく何か特別の事がおこるナ……と思つて、いくらか表情を緊張させて「どんな御用でございましょう……」

と、切口上で申しますと宏子さんはいかにも可笑しそうに笑つて「何もそんなに緊張しなくてもいいよ、ちよつと買物に行つて貰うだけよ」

と云つて、私に一枚の封筒をわたしました。封筒は糊づけをしないう開封のまゝで、レターペーパーが一枚入つていただけでした。

「中をみてもいいわ、買い物用の件はその中に書いてあるだけ、それを先方へ行つてわたせばいいよ」

先方というのは銀座にある商社でした。M百貨店の裏のYビルの三階だということですから、場所はすぐ判りました。Yビルは貧相な焼けのこりの木造建築で、階段や廊下の床もいたんで陰気な感

じのする建物でした。指定された事務所へ行つて受付の少女に封筒をわたしますと、十六、七歳のまだおさげ髪の少女が、私の目の前で封筒の中の便箋とだしてチラと目を通した後、奥の方のデスクにいる五十位の貧弱な老人に大きな声でいゝました。

「命令——A、B、L、S、V。お願いします」

そして私の方へ挨拶して

「すこしお待ちくださいませ……」

と云つたかと思うと、また受付の椅子に腰をおろし、読みかけの小説本をよみふけりはじめました。

「ナニ／＼A、B、L、S、V……か、命令は一四五号になるな、承知しました、只今すぐ……」

奥の方の老人は口ごもるように云しながら複写式の用箋に何か書き込み、そばにいた兵隊服の青年にその用箋をわたしますと、青年はその用箋を持つて部屋を出て行きましたが、十分もたつと、すぐ歸つてきて、

「藤木さん、お仕度ができました、どうぞ玄関の方へおいでください」

とていねいに頭を下げました。

私が玄関に出てみると、このキタない建物とは凡そつり合いのつれない立派な高級車がもうエンジンをかけて待つていました。

「どうぞ……。お邸までお送りいたします。運転手はよく知つておりますから御心配なく。それから之を御主人にお渡しくださいませし、御苦勞様でした」

といゝながら、私に部厚い角封筒を手渡し、背中をおすようにして車にのせました。さつぱりわけが判らぬまゝに、自動車に乗りま

すと、スグ青年は後から扉をしめ、またていねいにお辞儀をするのと同時に、車はすべりだしました。

自動車の補助椅子には大きな袋が二つと、六〇センチ立方位の箱型のつゝみが二つのせてありました。袋はどややお米と粉らしく思われましたし、手渡された角封筒は紙幣のタバラしく感じました。二十分ほどで自動車は邸の門に着き、運転手は万事心得ているかのようにくぐりを明け、荷物を台所の方にはこびました。

「まア御苦勞様でした、でもすぐ判つたでしょう……つまらないおつかいでお気の毒だつたわねえ、お風呂がわいていゝからすぐ入つて頂戴、それでゆくり休んでね……」

宏子さんはいつもとすこしも変らない態度でしたが、私は狐につまゝれたような気持で、だまつて微笑みながら頭を下げ、例の角封筒をわたしました。

この日のお使いで、宏子さんが豪奢な生活をしている理由が大体は判りました。宏子さんは彼の商事会社の有力な出資者であるか株主であるか、とにかく会社の事務長らしい老人が「命令第一四五号……」とか云つたのをみても、絶対権力をもつてゐる事は見当がつきました。そしてABCの符号で命令を発するれば、宏子さんの希望する品物と云わず現金と云わず、いかなる物でも手に入るらしいのです。但しその会社がどんな性格をもつてゐるのかは依然疑問です。おそらく流行のヤミ会社である事は明らかですが余程大規模な組織網があるのでしょう。山田千代子さんも時々おつかいに行く事があるらしいのですが、ハッキリした事は全然判らないと云つていました。株主の仲間には内閣に名を連ねる政界の大立物や新興財閥の大物を持つてゐるという事でした。

宏子さんが一日置きに出掛るのはこの会社の用務らしく、物資運搬の役目はその後も山田さんと私が交替で、使に行きましたが、すこし面倒な註文のときには御主人自身が交渉に行くようでした。そのようなわけで、派出婦と云つても家の用足しや台所仕事は全然といつてよい位なく、びまにあかしてドレスのデザインをしたり、裁縫をしたり、編物に日を送つたり……、主人が在宅の時は三人集つて映画や劇のはなしをしたり、文学、美術を語つたり、山田さんがひくピアノをきいたり、私がアコーディオンを鳴らしてみたり……三人揃つて銀座へ御飯をたべに行く時や、映画をみに行く時は例の耳の遠い婆さんに留守番をたのみました。一週に一度の美容院通いも三人一緒に、お互の身体や顔立ちに似合うはでなお化粧や髪形を研究してお洒落に憂身をやつすのでした。

この様なわけで藤木邸の生活は貴族の令嬢を及ばぬ有閑ぶりで、この窮乏の世の中としてこれ以上の幸せは絶対にないといつても差支えなかつたでしょう。

ある日の午後、相変ず三人集つてお茶をのみながら雑談を交している時、宏子さんは私の方を向いて

「登美子さん、私のうち墮分変でしょう。あんな、気味が悪い様でしよう……だけど、いつまでもいて頂戴ね、決して不自由や御迷惑はかけないワ。千代子さんだつて派出看護婦をやめてわたしのうちの人になつたのよ、あんなもそうなさいよ、婦人会なんてやめちやつた方がいゝわ、登利さんみたいな奇麗な人が派出婦だなんて、全然イミないわねえ……」

と云つて、意味ありげに、そばにいた山田さんの方へ笑いかけて軽くウインクしてみせました。

「そうよ小峯さん御厄介になつた方がいゝわ、こんなひどい社会で派出婦なんかやるの、とても無理よ、それにマダム、とてもあんなのいらした事、喜んでいらつしやるのよ、是非そうしなさいよ。今にととても素敵な事があるのよ」

と言つて、矢張秘密らしい笑を浮べました。

二人の美しい女を相手に、贅沢この上もない呑気な毎日をくらしている事は何としても幸福でしたが、胸の底には何か割りきれないわだかまりがあり、それに折に思ひだした様に乳房のあたりにうづくやるせない思ひに悩み、宏子さんの好意で備えつけられた鏡の前で例の恍惚とした自己陶醉に陥り、どうしてよいかわからない情慾の処理と今の境遇について考えたりしました。

(七)

ある夜の事です。

六月も末に近い、むし暑い晩でした。

屋間外出した疲れに三人共、早寝にしようといめいの部屋にひときとつたのですが、私はなんとなく気が昂つて寝られないまゝにベッドの上へ横になつてサルトルの詩集をよんでいましたが、それも倦きてスタンドの灯を消しもせず、例の如く現在の不思議な生活を考へるともなく考え、淡い疑惑と焦燥にとらわれながらウツラウツラしはじめました。

……未亡人の女主人宏子さん、そして私よりは一つ二つ年上だと思われる千代子さん、二人とも男との関係はどうなんだろう……など思いつゝ眠りの底へ意識がおちこんでゆくとした時です。一間お

いてその隣の千代子さんの部屋からはげしい喘ぎ声がきこえました……私のぼやけた意識が中断して、ハッとした時、また何か囁くような声に続いて女の短い呼び声と喘ぐ声がハッキリと耳に入りました。私はハッとしてベッドの上におきあがりました。宏子さんか千代子さんか、どちらの声か判りませんでした。たしかに情慾の波に溺れる、あの時特有の女性の喘ぎ声でした。

押しつぶすようなしのび笑いの声と、囁きと、そしてまた悩ましい喘ぎと……。

私は大体判りました。すべてを了解しました……と同時に、はげしい性感が身体中を駆けめぐって、血が逆流し、いてもたってもいられない感情に襲われ、ベッドをとびおり部屋のまん中に立つたまま身を固くし息をつめてきき耳をたてましたが、やがて千代子さんの部屋は静かになつて、あたりは物音一つきこえない……夜のししまにかえつています。

私は鏡の前に立ちました。鏡に映つた顔は紅潮して眼も血走り、髪は乱れて浴衣の襟元ははだかり狂女のようにでした。やがて鏡の中の私が口を歪めて妖しく微笑しました。腰ヒモをほどいて肩口をおとすと浴衣の寝巻はサラツと後ろへおちて、私は全裸の姿になりま



した。二歩、三歩……鏡のそばへ進み寄つて、ふるえおのゝく双の乳房をみつめました。鳶色の乳暈のヒダが秒……一秒をきざんで乳首がブツクリふくれ上つた時、私は嗚呼……とため息をついて、額に垂れ下つた髪をかき上げ、頭をかきむしりました……と、その時部屋の扉があいたのです。

「呀!と軽く叫んで、ふり向きざまに股をすぼめて両手で乳房を蔽い、扉の方をみた時、そこに立っていたのはマダム、宏子さんでした。」

宏子さんは後手に扉をしめて、立つたまま裸の私をじつとみつめました。宏子さんは、はげしい怒の様な表情に眼を輝かせ、はげしく肩で息をしながら、静かに私の方へ受け寄りしました。

「あゝ、奥様……」

思わず私が狼狽と羞恥の思に身を崩し、その場にうづくまろうとした時、宏子さんは、はじめて眉間にせまつた眉をとぎ、微笑みを浮べました。

「登美子さん、いゝのよ、いゝのよ、心配しなくてもいゝの、あなた可哀そうだったわね、あなたの気持、私にはよく判るの、本当に可哀想な人……」

といゝながら、全裸の私をたすけおこしてベッドの方へ連れもどしました。そしてベッドにならんで腰をおろし、うつむいている私の襟のところにそつと唇をおしつけ囁きました。

「いま、わたし、千代子さんと一緒にいたのよ、そしてあんたを私たちの仲間に入れる相談したの、千代子さんもくる筈だったんだけど彼女……つかれてねちやつたのよ、で、わたし一人できたの、ね、あんた今日から私たちの本当のお友達よ。絶対にはなれないのよ……」

「……」
宏子さんの囁きはだん／＼声が上わづつてふるえてきました。そして

「あたしとても嬉しいのよ、あんたみたいに素晴らしい人と完全なお友達になるんですもの……あんたも嬉しいでしょう、ね、うれしくて云つてよ!!」

私も宏子さんの言葉をきいているうちにだん／＼胸がときめき、先刻とはちがつた欲情が身のうちにもえ上つてきました。そして羞恥の思いはいつか消え去つて、全裸の身体を軽く悶えながら「うれしいわ、とてもうれしいわ、こんなたいゝ事、わたしはじめてなんですもの、うれしくつてうれしくつて……」

と、宏子さんの方へ向き直つた時、宏子さんの顔はまた真剣な表情に眼が輝き、イキなり私を抱きしめました。

長い長い接吻……こんな情熱のこもつた愛の交歓は私にとつてはじめてでした。二十五才にしてはじめて味う体験でした。これだけで私の身体は歓喜にとろけました。その上に宏子さんは尙も私を有頂点にさせようとするのです。唇をはなして、ホツとため息をつきうつとりして俯向く私の襟首から肩のあたりに次々と情熱のこもつた唇を押しあてながら、宏子さんは腕の下から手をおして双方の乳房を愛撫しはじめたのです。静かに撫でさすり、下の方のふくみを軽るくもみ、そして乳暈のあたりを指にはさんでぐりぐりと弄り、乳首の尖を爪で刺戟する……その快さ。私は思わず悦びの声をあげ、腕をのばして後向きに宏子さんの首へ手をまきつけました。すると、宏子さんは

「まア……素敵!」

と叫びながら、モヂヤ／＼とした腋毛の中へ鼻と口を埋めてはげしく接吻しながら更に乳房への愛撫に力をこめました。私はもう恍惚として口もきけず、悦楽の境に陥ろうとしました……、しかし、宏子さんは突然、私をつきはなし、眉根を八の字にして、美しく端正な顔を泣顔にゆがめて叫びました。

「もう駄目よ、我慢できないわ、今度はわたし、今度はわたしを……ね。わたしをやつて、……」

といゝながら、はだかりかゝつた浴衣の襟元をぐつとひろげて豊かな胸を露わにしました。

おゝ、宏子さんの乳房!!、固いゴムまりのように大きく盛り上りセピアがゝつたピンク色の乳暈が浮き上つて葡萄の実のような乳首ははげしく息づいていました。

私はうつとりしてこの美しさに見惚れていましたが、

「ねえ登美子、なにしてんのよう、はやくしてよ、はやく!!」

という上わづつた声にハツとして、この艶美溢るゝ双つの丘にすがりついて、右の乳房にはげしく接吻すると同時に、乳首を口にくわえてと吸いながら、左の乳房を手で愛撫しました。

「あゝ登美さん……あんた、うまいわねえ、なんて上手なんだろうあゝもうわたし……」

宏子さんはとぎれ／＼に悦びの声を発し、喘ぎ、身を悶えました。が、いつのまにか伊達巻がゆるみ、着物はぬげ落ちて私と同じような全裸の姿になつていたのでした。

「今度はこゝへキツスして……」

宏子さんはスツカリ露わになつた上半身の腕を上げて腋の下をみせました。そこには、房々とちぢれた漆黒の毛が波を打つて密生し

ていました。私はこの美しい肌を飾った腋毛の魅惑にまたも胸の躍きを新しくし、殆ど夢中でこの森林に唇をつけたのでした……。

これから後の愛撫の交歓と素晴らしい攻撃の展開は私を充分に堪能させ、掬めども尽きぬ相愛の泉に身も心も溺れる思に浸りました。

宏子さんこそは私の真の恋人でした。これまで幾度か接触しかけた男性が、宏子さんのような愛のエチケットと技巧を知っていたならば……私は喜んで処女を捧げ、また肉の相愛をたのしむ事ができたでしょうに……。とにかく、私は生れて二十五年にして、憧れ慕つてやまなかつた愉楽を味わうことができたのでした。

それから後も宏子さんとの、愛のたのしみは毎夜の如く続きました。

(八)

七月の中頃、マダム宏子は大阪に用ができて一週間ほど旅行される事になりました。用というのは、あの銀座にある商社に關係のある事らしく、その一週間ほど前に珍らしくこの邸へ男の訪問客がありました。訪問客といつても、商社にいる貧弱な事務長で、宏子さんは老人を応接間に通して何か報告をうけていました。

「そんなわけで、是非一度奥様にお出掛け願いますと万事好都合で例の方の融通は自由自在になりますのでございます、ハイ。」

私が応接間へお紅茶をはこんで行った時、老事務長はテーブルの上に書類をひろげてペコ／＼頭をさげながら、もみ手をしたり、襟首のあたりを掻いたりしていました。

宏子さんは煙草を指の間にはさみ、ツンとした表情で傍見をしな

「そうね」とか「うん」とか軽い返事をしていました。およそいつものマダムとはちがつた無愛相な冷やかな態度で、夜の生態を共にしている私にはおかしく思われるほどでした。

結局、この事務長の訪問によつて関西行きがきまつたらしく、今日の夜行で出発するというその夕方、しばらくの別れを惜むために千代子さんと私は、マダムの為の送別会をひらきました。

ジンジャエールの酔に眼の縁をホンノリとさせた宏子さんは、千代子さんと私を等分に眺めながら

「今夜から当分悩しいわ……わたし。千代さん、登美さんをあまりいじめちゃ駄目よ」

「ア、ラ、わたくし登美子さんとは何にもありませんわ、マダムこそ、さんざいぢめたんでしよう、わたし妬けてしようがなかつたのよ。ねえ登美子さん」

「今度はわたしの妬ける番よ、でもいいわ、三人の間ですもの……わたしの留守中は二人ともできるつだけ仲良くしてね、一週間たてばわたしも帰ってくるし、三人で素晴らしい事をしましょうよ。お土産もうんと買ってくるわ……」

「でもマダム、あちらへ行つたら氣をつけてね、関西は誘惑が多いのよ」

私はこんな時、たゞ顔を赭らめてうつむいているだけでしたが、宏子さんと千代子さんはお互にきわどい軽口を叩きながら快い酔に陶然としていました。

やがて時間がきて宏子さんは千代子さんと私の額に軽い接吻を与えてグレイ地に朱の格子を織つたワンピースの軽装で、シヨルダー・バッグを肩にかけて元氣よく手をふりながら出掛て行きました。

玄関まで送り出した千代子さんと私は、マダムの姿がみえなくなると、顔を見合せて微笑みましたが、千代子さんはすぐ真面目な顔になつて、私をみつめながら

「あんた、マダムと凄かつたでしょう、だつて、マダム言つてたわ登美さんとてもすばらしい……つて。わたしみんな知つてるのよ……」

「あら、千代子さんだつて……」

「そりやわたしだつて愛し合つたわ、マダムときたらとても凄いですもの、あたしがのびちやうと、あんたのところへ行つたり、あんなところを訪ねてからわたしとこへきたり……、それで、いつでもあんたとの恋愛を語るのよ、そして感激してんのよ、にくらしいつたらありやしない」

といふながらドレスの上から私の乳首をギュツとつめました。

「ア、ラ、痛い……やだわ」

「その位我慢なさい!!マダムにはうんと弄らせるくせに……でもいいわ。今夜はあんた、わたしのもものよ、本当よ。今夜、お風呂から上つたら私の部屋へきてね、約束してね、きつとよ」

それから二人は食卓の後かたづけをしたり簡単なお掃除をして戸締りをしました。それから千代子さんがお風呂に入り、私も入浴をすませると、特に念入りなお化粧をしました。はじめて千代子さんの部屋を訪れる好奇的な憧れに駆られて胸のときめきを覚えたからです。その反面に未知の相手に接する何かおそろしい予感もしておちつかぬ気持ちにそわ／＼した時をすごしましたが、私の訪問を催促する様な大きなあくびの声が千代子さんのお部屋からきこえてきましたので、とう／＼思いきつてその部屋の扉を叩きました。

「ハイッ、はやくはいつて……」

と、浮き／＼した千代子さんの声。

千代子さんはベッドのそばのアームチェアに深々と腰をおろして、楽譜をひらきシューマンのメロディを口ずさんでいました。ゆつたりとしたタオルのナイトガウンを着て、短くカットした髪をカールして、額の上にたらしめた夜化粧の顔は如何にも魅惑的でした。

「そこへかけて……御馳走するワ、とても甘いのよ」

と云つてテーブルの上のグラスに注いでくれたフランス製の林檎酒は本当に口当りのよい芳醇な味でした。そして二盃三盃……とのむにしたがつて私の心は軽くなり、身体までのび／＼とする心地がしました。と同時に、胸のあたりに例のほのかなときめきをおぼえてきました。千代子さんも頬のあたりをポツとさせ、マダム宏子の噂話などをしているうちに突然、手をのばして私の手首をとり眼を輝かせて、こんな事をききました。

「あんた、山本千代美つて人知つてる?……」

「山本……あゝ知てるわ、知つてると云つたつて、レターを頂いた事があるの、どんな方かお目にかゝつた事ないのよ」

山本千代美というのは、前にも書きましたように、女学生時代の私に手紙をくれた人の名です。その文章のうまい肉体描写は私の心をウワトリさせ、鏡の前の自己陶醉と同じような満足感を与えてくれた事はみなさんも御存知の事と思います。

「その山本千代美さんがどうしたの」

私はもう古くなつてしまつたその手紙を七年後の今でもたいせつにとつてある事は一言もいわないで、そうきゝかえました。

千代子さんはイキナリはじける様な声をたてゝ笑いました。

白く美しい咽喉をのけぞらせて思う存分笑つてしまうと、私の手を握りしめ握手をするようにふりながらいゝました。

「その山本千代美つて、わたしよ、山田千代子の変名よ……」

といつてまた笑いながら

「わたし、昔からあんたを知つてゐるのよ。あんたがGプールで泳いでいた頃からあんたのファンだったのよ、だから、あんたの身体わたくしよく知つてゐるの、知つてゐるばかりぢやない、とても懂れてんだわ、それであのレターあげたの、ゆるしてね……」

話しているうちに千代子さんの顔は段々真剣味を帯びて、声までうわづつてきました。

「許すどころぢやないわ、わたしあのお手紙頂いたとき嬉しくつて嬉しくつて、毎晩読んでばかりいたのよ、お返事あげようと思つただけけど、アドレスが書いてないでしょう……とても残念で。けどあんまり素ばらしいレターだったんで、実は今でもアレ持つてゐるのよ」

「まあ本当。うれしい、その恋人が今わたしと一緒にいるなんて、なんて幸福なんでしょう……本当に素晴らしいわ」

千代子さんは、チェイアから立ち上つてベッドの端に腰を下して



いた私のそばにピッタリと寄り添い、肩をそつと抱きました。

「ね、いゝでしょう、マダムとだつてたのしんだんでしよう……だからわたしだつていゝわねえ、わたしだつて……」

その声はふるえを帯びていました。

「もちろん、いゝわ、わたしだつて、とてもうれしいのよ」

千代子さんのふるえおのゝく手は私の腰ヒモをもどかしそうに解きはなしはじめましたが、私は彼女の手をかりる事なく、我と我が襟元を左右に押しひろげ、胸を露わにして先刻から千代子さんの愛撫を待ちこがれてやまぬ張り切つた乳房をつきつけました。

「あゝ……」

千代子さんは感に堪えぬような歎声をもらして、静かに双の乳房へ愛撫の手をのぼのすでした。宏子さんの愛し方ともまたちがう猛烈な感情をこめた技巧です……私はたちまちウツトリとしてかすかに喘ぎ

「うれしいわ……」

と囁きました。

乳房のつけ根から乳暈の方へクルクルともしり上げる様な指の感触！そして左右の乳首へ交るゝに押しつける接吻のはげしさ！

私ははやくも身のとろけるような恍惚境に渡り、胸や腰をよじらせて身を悶えたのでした。ところが、千代子さんは火の様に熱い息を吐きながら

「あゝもう……、わたしをみて、ね、わたしをみて頂戴」

と叫ぶや、スツと立ち上つて私の方を向きナイトガウンの寛衣をサラツと脱いで一糸もまとわぬ白哲の裸身となつて、眼を半眼にしました。

おゝ、千代子さんの肉体、それは白いブロンズでした。骨格の美事な均育のとれた姿態、そして胸も腕も足も隆々とした筋肉がもり上つて、着衣の時のやせ形では想像も及ばぬ豊かな脂ぎつた肉付がみられるのでした。大きな乳房は片手で蔽いきれぬ位の立派さで半球型にムツチリと盛り上つて、クツキリと栗色のヒダをうきあがらせた乳量のさきには、胸貨大の乳首がとがつて、はげしく息づいていました。その美事さは恰度あの門を飾る乳鉢でした。乳鉢のかたさ逞ましきでした。胸のくびれのしなやかなカーヴの下にはまたシツカリと横へひろがつた力強い腰の線が美しい均育を保つて、股から足のさきへ長いメ字型の直線と曲線を交叉させていました。それにもまして下腹から股のつけ根へかけて、秘密の門を蔽つた黒褐色の大森林の美事さは譬えようもなく、大きな三角型をなしてアストラカンのように渦を巻いているのです。

そして腋毛の豊かさは、腕をおろしていても、腕のつけ根へはみだした美観によつても想像できるのですが、千代子さんが腕を高くさしあげて首の後ろへ手を組んだ姿勢になつて胸をそらせ体を伸ばした時に、姿態の美しさは頂点に達しました。乳房の半球型がぐつとひろがつて胸と腕の筋肉のつながるところ、深くくびれた腋壺にはところせましと繁茂する腋毛が大きな菱形となつて叢生しているのです。私は思わず息をのみ、身体中をふるわせました。そして浴衣をうしろへ脱ぎすて、我亦一糸もまとわぬ全裸となつて立ち上りました。そして千代子さんのブロンズへ………

こうして二人は、………おのゝく乳房を押し合い、乳首をこすり合せ、全身をピッタリ体当りをするように抱きつきました。………

………出来
………ただ長く息をつめる………接吻を交したのです。それから二人は唇をはなしてホツとため息をつき、新らたな刺激を求めてベッドの上に倒れかゝりました。

千代子さんの乳房の固さ、乳首のしこり、そして腋の下に毛に接吻した時の、体臭と香料のまざつた気の遠くなるような匂………、私への倦く事を知らぬ愛撫！身体中のしびれる様な快美悦楽の境に時の移るのを忘れる二人でした。

その翌日も、次の日も、千代子さんと私の悦楽の夜はつゞきました。そして二人共に、マダムの肉体への恋慕の情をもやしはじめた頃、宏子さんも関西旅行から帰つてきたのです。

「どうだった、二人、猛烈だったんでしよう………、今夜から私も仲間入りよ」

秘密らしい笑を含んだ宏子さんを囲んで歓迎の宴を張ると、その夜から三人の肉体が正となつて秘戯のたのしみを繰りかえし、私たちの歓楽は何時尽きるとも果しがなかつたのです。しかし、この歓楽にも、二人の愛する女友達の生命も、またこの私の生命をも、すべてを絶ちきらねばならぬ時が、突然やつてきました。

それは、私にとつては究極の歓びに到達する事が出来る事にもなるのですが、何れにしてもこの物語にピリオドを打つべき時が到来したのだと云えましょう。

(九)

それは九月のはじめでした。

朝からシケ気味の風が雨を呼んで、夜には本物の嵐になつていました。早目の夕食を終つて、いつものようにママムの部屋に三人が集り、全裸の肉体が蠢めきました。

私たち三人の痴戯の集いも回を重ねるにつれて、あたり前の愛撫の交歓では刺激を感じなくなつてしまいました。ですから此頃はいろ／＼の薬品や道具を利用してお互の性感を満足させるようになっていたのです。

三人の女性がまんじとなつて、相手の身体を讚美したり自分の肉体を誇らしげにしたりする事も、たしかに変態的な情欲であり、それが激しい愛の感情となつていろ／＼の技巧が加えられ、世間一般からみて同性愛という特殊な名称で呼ばれ、異端的な眼で見られる事もやむを得ないのですが、その対象が乳房や一部の体毛にのみがれているうちは、あくまでも唯美主義で、異性との接触にはみられない女性だけの繊細な感情からおこる性慾の雰囲気を感じていようように思われてならないのです。これは自己弁護でなく、他目にみられても決して獸的な汚らしさを感じさせるものでなく、道徳ではないにしても耽美的であつたことには間違いない思つていました。ところが、此頃の戯れは乳房でもなく腋毛でなく、すぐにそこへの行動であり、動物のような身振りでした。元来、私が男性を忌み嫌つたのは、美的感情がなく、すぐに直接的に行爲にうつる獸的心理でした——これは前にも書いたから私の氣振を判つて頂けると思いますが、茲々数日間の私たちは、はじめから終りまで、私の最も嫌うけもののような恰好そのものでした。而も、一度覚えたら忘れられない肉体の慾望は、嫌惡の感情を押しきつて、毎夜の痴戯の世界へ誘ひこむのです……ですから、慾望を満足した後には必

ず不愉快な疲労と悔恨の感情が心にひろがつてきました。これは宏子さんも千代子さんもそうであつたにちがひありません。行為の後のエクスタシーを味う時間はだんだんみじかくなり、用がすむと、三人とも申し合せたようにガウンを羽織つてテーブルを囲み、水を飲んだり、生あくびをしたり、白けきつた氣分でつまらなそうに顔を見合せました。

その夜も、戯れ終つた後は三人各様の倦怠感に促されてボンヤリテーブルを囲んでいました。そしてみんな無言でした。千代子さんが大きなアクビをして腕を伸ばしながら

「この頃つく／＼いやになつちやつた……何をしても面白くないのね」

といふと、宏子さんは

「本当につまらないわね、倦怠期ね、どうにも仕様がなないけど……」

「わたし此頃、男がほしくなつたわ、女同志ぢや矢張り駄目ね、ママム、会社の人、誰か世話してよ、逞しい男性いない……?」

「それは駄目よ、絶対に……。こゝは男子禁制だし会社とこゝは没交渉よ」

「わたしたちに会社のこと知らせたくないの、何か都合が悪いことがあるの?……」

「大いにあるわ、わたし一人の会社ぢやないんですもの、会社のグループ以外の人に内情を知らせる事は断然困るの」

「……水臭いのね、これまでの関係になりながら、仕事の内情が教えられないなんて……。ぢや仕方がないから自分でさがすかな、だけどママム、銀座のあの事務所の事は、わたしも登知子さんも知ってるんだから、その積りでいてよ。ABCの命令で、なんでも手に入

るうまい仕掛……あれも一度おぼえたら忘れられないわ、あの味は色事以上、お互のアゴに関係のある事なんですもの……」

宏子さんと千代子さんの会話は、倦怠の焦燥がもとになつて、あらぬ方へ発展し、険悪な気分を作りはじめました。

「なにをいうの！ 一体あなたは……」

と、マダムが憎悪の感情を顔一ぱいに漂せて千代子さんに言いかけそうとした時でした。

ガタンと……手荒く扉をあける音がして、一人の男がズイと部屋の中に入つてました。

強盗！

私は一目みた時そう思いました。宏子さんの顔からも一瞬血がひき去つて、表情をこわばらせました。千代子さんは立ち上つてベッドの柱の後にまわり蒼白になりました。私は一瞬、直感したまゝガタ／＼とふるえて椅子に腰かけたまゝ眼を見据えました。

その男は、復員者と思われる汚れた軍服姿で、外の嵐に濡れたまゝの雨のしづくをポタ／＼床の上にたらししたまゝ、鼻から下を鼠色の布で蔽つた覆面姿で、鋭い眼が私たちをにらんでいます。手には戦時中に軍隊で使つて午薙剣といわれた刃物を握っているのです。

「あんた……誰。なんの用があつてきたの……」

宏子さんの声はふるえを帯びながらも案外しつかりしてました「金、その他だ」

強盗の声はサビのあるしずんだ声でした。

「まアお金、お金ならいくらでも……といゝたいけど、今いくらもないの、あるだけはみんなあげるわ……その他に時計でも、指輪でも、持てるものはみんな持つて行つていゝわ、家さがして頂戴、自

由よ」

宏子さんの応待はすつかり落ちついて、もう恐怖の感じはすこしもみえません。しかし、男はせゝら笑うように肩をゆすつて

「金、その他。その他の中にはお前らの命も入つてゐるんだぞ……」生命ときいて、私たちはまた新たな恐怖におのゝきました。

「お前らは不倫の女だ。おれは、おれは世の中の不倫の奴らを片つぱしから抹殺してあるいてゐるんだ天罰をくだすんだ！」

「命、命だけは助けて、ね、ゆるして。そかの物ならなんでもあげるわ、命をとる事だけはよして頂戴……」

声をふるわせながら進み出たのは、千代子さんでした。彼女には彼女らしい考えがあつたのしよう。千代子さんは前へでると、イキなりガウンを脱ぎすてゝ一糸もまとわぬ全裸の姿を、男の前へたちはだかせて……腕をさし上げ、恐怖硬直した表情を無理に微笑ませて悩殺しようとしたのです。

男は……一瞬たろろいだような姿勢をみせましたが、

「それが不倫なんだ社会の敵、祖国の敵なんだ、ようし貴様から……」

と声をはげますようにして午薙剣を逆手にもつた時、

「さア、命をとるんならとつてみなさい、動いたら最後よ！」

とさしせまつた声で叫んだのはマダムでした。いつとりだしたのか、おそらくテーブルの抽出しにあつたのを夢中で手にしたのでしよう。右手に握つたコルトを男の眼の前に示しながら、ゆつくりと後づさりをはじめました。緊張の一刻、わたしもおのゝきふるえつゝ立ち上つた時、男は

「畜生！」

と叫んで、宏子さんの手元にとびこもうとしました……

「呀！」

と云つて、我知らず、私が男を阻止しようと前へ出て、男の腕力にはねとばされたのと、ダーン……とピストルが発射されたのは同時でした。しかし、私は男にはねとばされた時、ベッドの腕木にイヤというほど耳の後ろを強打して、はげしい痛みを感じると共に、そのまゝ気が遠くなつてしまいました。……

「登美子さん……登美子さん……登美子さん……」

私は夢幻のうちに、幾度か名前を呼ばれ、体をゆりおこされたのをおぼえています、そして、意識はそのたびに明く目ざめて、耳のあたりの軽い痛みが頭にひびいてきました。

「登美子さん……気がついたかね、登美子さん」

薄目をあけた私の網膜に映されたのは、髪だらけの汚れた男の顔でした。

ハツと思うと同時に、私の意識は完全に目覚めました。

アッ！いけない……なんという事でしよう、私はそのおそろしい男、強盗の腕に抱かれているのでした。私が夢中で身をもがき、立



ち上つて、またフラ／＼とうづくまつた肩を軽く叩いたのも、その男です。

「登美子さん、自分だよ、僕だよ」

私はこわ／＼その男の顔をみて、思わず、

「おゝ」

と驚きの声をたてました。

山岡俊夫——。

彼、婚約者、今から恰度六年前に別れた婚約の人の、変りはてた姿、それが今夜のおそろべき訪問だつたのです。

しかし、私は復員姿の、下精髯をはやした彼の顔をつく／＼みるひまもなく、次の恐怖の場面に魂消える思にうたれ、悲鳴をあげなければなりませんでした。

そこには朱に塗つて倒れたマダム宏子と、千代子さんの凄惨な死体がころがつているのでした。このおそろべき殺人は、私が気絶している間に行われたのでしよう……二人は白臘色の裸体を横えていたのです。

感覚にみぎみた私は、はじめて血なまぐさい匂いを鼻に感じ、またフラ／＼とその場に腰をついてしまいました。

マダムは午夢剣の一刺しに息がたえたのでしよう。剣は左の乳房の、乳首のあたりから心臓部へつき立つて、背中まで通されたのか、床へ縫いつけられたように仰向けになっていました。夥しい血が胸一杯に彩つて床に流れ、蒼白の顔は苦悶にゆがんで眼は半眼にひらかれ、唇の端にも血がにじみでていました。宏子さんの凄惨な死体にくらべて、千代子さんの死さまは、生前の潑刺とした立派な姿態とは全くかけはなれた姿でした。山岡の力まかせの腕で扼殺された

のでしよう、首をガツクリ右へまげて拳を握った腕を蛙のようにひらき、足を折りまげて倒れていました。しかもドンヨリと眼をみひらき、口をだらしなくあけて舌のさきをみせた顔は白痴のようでした。殊に両方の鼻腔から膿のような色をした涙がたれて唇の上の方へながれている表情はおよそだらしないもので、私は先刻まではげしくマダムと口論していた千代子さんの変り果てた姿に、恐怖とは別の感慨とおぼえると共に、一種のおかしさゝえ感じました。そして、この二つの死体がかつては私の愛慾の相互対象として、夢中にならせた場面を思いおこし、物悲しい気持ちにもなりました。ひらかれた腕の奥に溢れて出ている腋毛のアストラカンもはかない追憶の彼方においてやられた死骸を飾る弔旗のようでもありました。

私は胸をわく／＼させ、二つの死体をみているうちに、いくらか心の落着きをとり戻したようでした。

そして漸く、男の顔をじつと見つめる余裕ができました。私は疑惑と非難と、まだいくらかのこつている恐怖と、多少の憐愍の情をもつて彼をみました。

彼には六年前のハリ切った青春の逞しさは失われていましたが、髯に蔽われ汚れた顔にはまた別の野性的な猛々しさがみなぎっているのです。

(十)

私はすっかり落着きをとりかえしました。そこで二人の友達の死体に毛布とシーツをかけて蔽いかくしました。それから、ベッドの片隅に腰を下して腕組みをしている山岡に相対して椅子に腰かけました。

「あんた随分変ったわね、そして、とてもひどい事をする恐ろしい男になったのね……」

彼の行為を非難しはじめると私はまた恐怖の思にとらわれて背筋のあたりを寒いものが通りました。

「うむ、ひどい事をしてしまった今日は」

「あんた人を殺したの今日がはじめて？」

「イヤ、人殺しなんか幾度したか判らない、戦争中の事を考えれば帰つてきてからの殺人なんか物の数ぢやないよ」

「それで落着いているのね、あんた。悪い事をしたと思わないの……」

「悪いとは思わない、自分は正当な理由があつて人を殺すんだ、戦争中から今まで不正の行為を働いて、祖国を敗戦に導き、尙それでも、あきたらないで滅亡のドン底へおとし入れようとする奴等は片っぱしから殺してやるんだ！」

彼の言葉は熱を帯びてきて、血にまみれた手をひろげふりながら私と説得するようなポーズまでしてみせました。しかし、すぐ弱々しい態度になつて

「……だが、君にだけは悪い事をしたと思つてゐる。いかに祖国のためとはいふながら、婚約者の純情をふみにじり、而もこの様な不倫な者の仲間入りをさせ、変態的な遊戯までする様にさせた……その罪はみんな自分にある。実は自分は今夜一時間も前から隣の部屋で、君等のやる事をきいていたんだ、そして、その仲間の一人に君がいる事を知つて堪えられぬ侮辱を感じた……その場へとびだしてまづ君を刺し殺してやろうとも思つた。しかし、考えてみると、自分が今夜この邸へしのびこんだのは、かねて噂をきいていた大ヤミ

会社の、女将^{おかみ}を抹殺する事にあつた事に気がついた。決しい君に罪のない事が判つた。イヤ罪はむしろ自分に在るのだと信じた。だから君はどんな事があつても助けよう、けがをさせまいと決心した。しかし女将の奴、とんでもない、パチンコをぶつばなそうとしやがつたんで、カーツとして手許にとびこもうとした時、君がヨロ／＼と出てきたんで、遂、つきとばしたんだそれから奴を一刺しにやつて、自分を色仕掛でたらそうとした、あの体の大きい女が窓をあけて大きな声をだそうとしたので、後からとびかゝつてしめあげたら、あの通りおちちやつたんだ。有金を引渡つてその場から消えようと思つたが、氣絶している君に一言だけお詫びをして、あやまつた上で帰ろうと思つて……君を呼び生したんだ。君にだけは、なんと云つてあやまつていゝか判らない。本当に、あやまります……ゆるしてくれ給え……」

彼の眼からは涙が流れ出て、きたない髯面を濡しました。

更に彼が出征してから今日までの話をきくと――。

はじめ満洲へ、それから北中支へ、更に南方の戦線へ移動して、終戦を迎えたのはスマトラ島のある街であつた事。意気はり込んで出征したゞけに至るところで軍のために手柄をたて、途中で一度満洲の将校訓練所に入つて任官するとすぐまた前線の小隊長になつて、彼の所謂君国の為に命を捨てる信念で戦つたそうです。何回か危い目に逢い負傷する事の回も重ねたのですが、祖国に捧げた筈の生命を皮肉にも永らえて敗戦と迎え、ある時は口惜しさに自殺しようとしたところを戦友にとめられ、昨年の暮、復員船で帰つてきたのですが、母国の家はやかれ親も兄弟も死んだとき、婚約の間柄であつた私の行方も判らぬまゝに、上野の地下道に巢を喰うルンペン

になつた事もあつたそうですが、フト知り合いになつた現地時代の戦友が組織している結社の仲間入りをしたというのです。

その結社の名前などは彼も明らかにしませんでした。大体の様子では、復員軍人を中心とする極右団体で戦争成金やヤミ会社、戦後派の利権組などを専門に襲撃する殺人強盗の秘密団体らしく思われました。奪つた金は後日の旗挙げに備える資金として蓄積してあり、直接人を殺したり金を奪つたりする彼のような男も二、三人を下らぬそうで、某有力者によつて保護をうけているので、絶対につかまる事がないのだというのです。

「ぢア、わたしがこれから警察へ訴えてもあんた平氣なのね……」
「あゝ大丈夫だ。現行をおさえられぬ限り、あらゆる証拠が自分にとつてはすべて零に等しい。それに第一山岡俊夫……という名はすでに現地へ捨てゝきてしまつたんだ……今の名は石崎五郎……というのだが、訴えるならすぐ訴えてくれ給え……だが、君が訴えるまでもなく、今日は、自分、自首して出るつもりだ。君の顔をみたら、俄然、僕の氣持は變つたんだね、殺人や強盗は決して悪いと思わないしかし君を墮落の底に沈めた責任は絶対に自分……僕にある。それに対する悔恨の氣持は、僕の勇氣と自信をすつかり崩してしまつたんだ。自分だけは神かけて悪事を働らかぬ、悪い奴らに天誅を与えているのだ……と確信していた氣持がぐらついたんだ、僕も矢張、罪をおかしていた……」

彼のこの心境は私には判りませんでした。私がこの藤木邸に住みこんで、安子さんや千代子さんと乱倫の遊びにふけつたのは偶然の機会がそうさせたとも云えるし、生来、耽美的、淫蕩的で変態的な性格をもっている私が好んでその道にふけこんだのだとも云えます

しかし、私が終戦後以来、自由奔放な恋愛遊戯や変態な性生活を送りながらも、肉体的には処女である事を彼に語りますと、彼は痛く心をうごかされた如く、愈々慚愧に堪えぬかの様に両手で顔を蔽いました。けれども私にはこの慚愧の心が判らないのです。たゞ、彼が正直ひとすじに私の事を思い、今の警察力を以てしては逮捕困難な身の上であるに關らず、自首して出る……とまでつきつめた心になつた、純情は私としてまた格別の感情をもつて迎えなければならぬのでした。

顔を蔽つて、泣く彼の姿をみると、私は愈々心弱く、彼をいとおしいものに思えてきました。そればかりでなく、彼の純情にこたえるものは……、男性を対象として考える場合純潔を失つていない肉体である。それを彼に捧げよう……と思ひめぐらしてくると、今度は同時に、進んで彼の戦地できたえた力強い肉体を享有しよう……あの腕にしつかり抱かれない……というような欲情にまで發展してくるのでした。私の心はまた妖しくときめき身体があつくなりました。

嗚呼……しかし、それは矢張駄目でした。

私は彼との結婚を再びせまる言葉を口走り、遂にはガウンを脱いで、先刻千代子さんが示したのと同じ全裸のポーズで彼を惹きつけようとして、乳房を手の平にのせて饗応する姿態になり、腰をよじらせ、腋毛をひけらかせて、かつての婚約者にすべてを示し結婚を強要するのですが、彼は手を横にふり、陰鬱な眼で私の全裸を眺めながら弱々しくいうのです。

「あゝ駄目だ。僕はもう殺人犯、イヤ殺人鬼なんだ。K工業の専務を殺したのも、N会社の重役を殺つたのも自分だ、新聞に出ている

あの殺人事件の、まだ捕らない犯人がこの僕なんだ。君が殺人犯と結婚なんて、とても、とても駄目だ。これ以上、僕は君の純潔もふみにじる事はできない……よし、断然、僕はこれから自首するよ、今日は金は持つて行かない、自首するのに金なんかいらぬからね君は……、君はかゝり合いになるといけないから、すぐにこの邸を出た方がいゝ、君の事は一言も云わない積りだ。二人の女を殺したと、こう云つて自首するつもりだ」

もういくらとめても駄目でした。

「待つて……」

今から六年前の九月、彼の家の近くの川端で、叫んだ言葉、そして私の心。しかも彼の態度もあの時と同じでした。

「また怪我をするよ、早く逃げ給え」

私を軽くつきはなした彼は、汚れた戦闘帽をかぶり直して、静かに出て行きました。

「さようなら、今度こそ本当に生きてはかえらないよ……」と云つて……。

私は泣きました。胸をかきむしつて泣きました。

(十一)

しかし、私はいゝ温泉のホテルにいます。そして朝から幾度も温泉につかり、風頃からこの遺書をかいています。もう終りに近付いたようです。

彼の惨劇のあつた夜、彼と別れてからすぐに支度をして藤木邸を出ました。二人の死骸に形ばかりの別れの黙礼をして、若干の金と千代子さんのハンド・バックの中にあつた劇薬とをもつて逃げる様

に邸を出たのです。

殺人事件のかゝり合いになることを厭う気持よりも、どこか静かな場所で乱れた考えをまとめたかったからです。そのT駅の待合室で夜を明し、翌朝の一番でこの温泉場に痛み傷いた心と身体を休めました。

その夜、ホテルに配達された夕刊新聞には社会面のトップにデカく藤木邸の惨劇が扱われていました。

美女二名を惨殺！

新興階級をねらう

兇悪犯、遂に自首

といったみだしで、現場の惨状や兇悪犯石崎五郎のこれまでに犯した殺人の数々を詳しく述べ、更に藤木宏子という女性の経営しているB商事会社の内情も暴露されていました。

はじめて知った事は、宏子さんが邸では私たちと同性間の秘戯を行いつつ、外部では社会的に有名な名士と情交を結んでいた事で、幸か不幸か、私たちに関する事実にはすこしも触れてありません。千代子さんが殺されたのも偶々被害者と同席していて不慮の難に逢ったと書いてあるだけです。最も俊夫さんにとつて気の毒な事は二人とも裸体であつた為に痴漢的行為も行つたように判断されている事でした。そして、掲載禁止になつているのか、最も重大と思われる彼の背後関係——例の極右団体の事などはまだ一行も記されていませんでした。

宏子さんの写真、犯人の写真ばやけた映像ですが、私にとつてはなつかしく悲しい顔でした。

私は新聞をよんでいるうちに、いつその事これからすぐに東京へ

戻つて、犯人に関するすべての事実と、そしてその夜の経過をあらにざらい供述してやろうかとも思いましたが、またすぐ思い返してはじめの予定通りの行動をとる事にきめました。

はじめの子定……とは、この遺書をかき終つたらもう一度温泉に入つて身体を浄め、千代子さんのハンドバッグの中にあつた劇薬をのんで、裸体のまゝ寢床の中へ仰臥する事です。やがて私は深い眠におちて、明日の朝は、純白に冷たくなつた美しい裸身がホテルの人々によつて発見されるでしょう。

私の死ぬ理由は簡単です。希望を失つたからです。完全に、愉楽の道がなくなつたからです。いづれ、捜査当局の手は、私をも参考人として召喚すべき段階に達するまで調査を行きとどかせることでしょう。その時にこの遺書をみて頂けば、私の知っている事だけは正直に書いてあります。それによつて俊夫さんの罪が軽くなるような事は勿論ないでしょう。大勢の人の生命を掠奪しているのですから極刑はまぬがれないと思います。そしてあの復讐者たちによつて組織された危険な極右団体も一網打尽の連命になるでしょう。

私は俊夫さん、かつての婚約者との先駆け心中の意味で死ぬのではありません。

処女として、処女を提供し、共に相たのしむべき相手とめぐり逢わなかつた事が私を不幸にし、今の運命へ流転させたのだと思います。

しかし、今はもう悔いませぬ。歎きもしませぬ。これで物語風の長い遺書を終ります。

これから温泉に入つて……

薬をのんで……そして……みなさん、さようなら……。

◎縛られた女の写真集◎

光沢面焼付 五枚一組（一集分）二百円
印画紙焼付 五枚一組（一集分）二百円

（密送料共）

◎目下分譲中のもの◎

（第四篇（第三十一集より第四十集迄）十集）
（第五篇（第四十一集より第五十集迄）十集）

第一篇、第二篇、第三篇、（計三十集分）
は予告しました通り分譲を中止しました。
◇以上各集共一集分は各々五枚一組です◇
愛好好者の要望によりまして特に変わった姿

原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望む
- 一、内容は本誌に適當すると思われるものでしたら如何なものでも結構です
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
- 一、発表作品には相当の謝礼を差上げます
- 一、原稿は原則として返戻申し上げません
- 一、締切は特に定めません
- 一、挿絵、口絵、写真、漫画、小話、笑話等も募っております。奮て御応募下さい。

（奇譚クラブ編集部）

態のもの、切実感のあるもの、猿轡や道具を用いたもの等を加えました。多少に拘らず御申込下さい。きつと御氣に召すことゝ存じます。尚新作品を漸次追加の上、旧作品の分譲を中止する方針ですから御承知願います。

（代理部）

◇玲子画帖分譲◇

豫約募集

前号にて玲子画集についての発表をいたしましたところ、多数の方々から予約を頂きました。何れ詳細につきましましては御案内申し上げます。でございしますが、まだ御申込下さらない方々は至急葉書にて御照会下さい。絶対市販致しませんし、御申越頂いた数によつて僅少部数限定作成致したいと思つております故、予定数に達しました時は打切る予定であります。

K・K通信

発送開始！

本誌愛読者を中心とした楽しいグループの肩の凝らない自由な集いのパンフレットとしてKK通信を始めました。誌上に発表しなかつた読者通信をはじめ或は蒐集品の紹介、研究発表、会員相互の文通斡旋、ニュース、分譲品案内等を満載の上同好者間に配布致します。本誌直接購読会員には毎号発送致します。其の他の方々でKK通信御入用の方は実費概算半年分百円御送付下さい。第一号より漸次お送りします。見本は切手十円にて急送します。

☆旧号は送料共一冊九十円にて御送付申し上げます。本年一月号以降より毎号若干保有しております。御申込下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊（送料共）二百七十円
半年分六冊（送料共）五百四十円
一年分十二冊（送料共）壹千八十円

毎月品切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真三枚一組一年分御申込の方にはヌード・アルバム一冊サービスピ品として贈呈申し上げます。外KK通信贈呈

奇譚クラブ

第六巻 第十号
毎月一回一日発行

十月号

定価 九十円

昭和二十七年九月三十日印刷
昭和二十七年十月一日発行

編集人 箕田 京二

印刷人 上田 庄之助

発行人 吉田 稔

発行所

曙・書房

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。